

ゼロから始める瀟洒な異世界生活

チクタク×2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

くあらすじく

日本のどこかにあると噂される、世界から忘れられた存在たちが暮らす場所、幻想郷。その幻想郷には、吸血鬼が主として住む、血のように紅い洋館の建物、紅魔館があった。そしてその屋敷の吸血鬼の主人の元で働く忠実なメイド、十六夜咲夜。

『完璧で瀟洒なメイド』と言われる彼女がいつものように働いていると、紅魔館の図書館でパチュリーがある魔法の実験を行おうとしている姿を見かける。

パチュリーの魔法の事件に興味を抱いた咲夜がパチュリーに話かけた結果、実験を手伝うことになる。しかし、その実験の途中で事故が起きてしまう……。

そして、事故に巻き込まれた咲夜は気が付くと、見知らぬ狭い路地裏の通路に一人、立っていた。

……これは、リゼロの世界に迷い込んだ紅魔館の十六夜咲夜の物語。

●第2章開始

※最新話の投稿と並行して、これまでの投稿話の改訂作業開始

※詳細は、活動報告にて

※この小説は「RE:ゼロから始める異世界生活」を原作として、東方Projectのキャラクターである「十六夜咲夜」が主人公

の物語の二次創作小説です。

※「R.E.ゼロから始める異世界生活」にはWEB版と、アニメ、文庫本があります。

(漫画もありますが、ここでは置いておきます。)

WEB版と文庫本では話の展開が少し違う部分がありますが、

どちらか一方をしらなくても話が分かるような小説にしていければ、と思っています。

※設定に関してはWEB版だけでなく、既に発刊済みの文庫本版(外伝本や月刊コミックアライブも含む)も参考にしようと思います。
WEB版や文庫本版でも設定が矛盾する箇所に関しては、作者がどちらか一方を採用したいと思います。

勿論、未読者でも分かるよう、上記でも記載した通りどちらかを知らない人でも分かるよう後書きなどで解説を入れるなど補完もしたいと思いますので宜しくお願いします。

設定に矛盾や間違いがあれば、指摘していただけると助かります。
※基本的には原作キャラを意識して話を作っているつもりですが、もし小説を読んでいただくうちに、原作キャラの性格とは違う!と言った場合が出てくるかもしれません。その場合はあくまでも作者の考えた二次創作品として温かく見守っていただけると幸いです。

目次

第1章

第一話：ことの始まり	1
第二話：さて、どうしたものかしら……	9
第三話：——そこまでよ、悪党	19
第四話：男の名前は菜月スバル	23
第五話：魔女教徒	29
第六話：ご主人様	38
第七話：コンポタージュ味	42
第八話：門番	47
第九話：黒い影	50
第十話：剣聖	57
第十一話：クソツタレ	65
第十二話：交渉	71
第十三話：プレゼント	77
第十四話：誤解	86
第十五話：覚悟	95
第十六話：良い案	106
第十七話：剣聖の戦い	120
第十八話：決着	129

第2章

第一話：最悪の目覚め	141
第二話：鼻息荒さ	146
第三話：同郷の者	155
第四話：真の従者とは	161

第五話：食堂での団欒	166
第六話：恋路	173
第七話：要求	181
第八話：部下の不始末は上司の責任	187
第九話：アストレア家	198
第十話：剣聖は伊達ではない	210
第十一話：魔法の適性	224
第十二話：咲夜さんの相談教室	232
第十三話：フェルトの思い	244
第十四話：探し人	259
第十五話：王の資質	268
第十六話：繰り返される日常	279
第十七話：カルステン公爵	286

第1章

第一話：ことの始まり

「……………ここはどこかしら。」

気が付けば、十六夜咲夜は両脇に背の高い建物が立ち並ぶ狭い通路にただ一人、立っていた。

見慣れない場所……、先ほどまでは紅魔館の図書館にいたはず。

そう咲夜が思案するも、当たりの風景は明らかに紅魔館の図書館とはかけ離れている場所。

それでも何か手がかりになるものでも見つければと、周りに視線を巡らせるが、咲夜の疑問の答えに繋がりそうなものは何も見つからない。

分かったことと言えば、その場所は咲夜の記憶の中にある幻想郷の、どの場所にも一致する場所ではなく、見知らぬ場所だということだけだった。

「ここがどこかはわからないけど、原因は間違いなくアレよね……」

全く知らない場所。分かった事実に愕然とし、途方に暮れる。

しかし、咲夜にはこの状況に陥った原因に対して一つ心当たりがあった。

ほんの少し前の出来事について思い出す——

日本のどこかにある、世界から忘れられた存在のみが集まる場所、幻想郷。

そんな存在が不確かな、まことしやかに語られる場所でもある幻想郷には、吸血鬼が主として住む紅い洋館の建物がある。

血のように鮮血な色をさせた建物の名前は、紅魔館。

その屋敷には吸血鬼を初めとして、様々な人外の住人がいて、十六夜咲夜は紅魔館、唯一の人間の存在であった。

咲夜はその紅魔館で、屋敷の主である吸血鬼——レミリア・スカールットに仕えるメイド長として働いていた。

咲夜は主であるレミリアに高い忠誠を誓っており、職務に対しても真面目で、また、非常に優秀なメイドでもあった。

彼女の優秀さは、紅魔館の管理がほとんど咲夜の手によって行われているといっても過言では無いほど。

勿論、咲夜の他にも紅魔館で働いているものもいる。紅魔館には少ない数の妖精メイドが働いていた。

しかし、実際には彼らはあまり役に立つことはなく、メイドとして優秀な咲夜がほとんど一人で館の管理を担っていた。そんな彼女が忙しく働く毎日。

そして、事件が起きたのはそんな咲夜がいつものように忙しく屋敷で働いていたある日のこと——。

その日も妖精メイドたちに作業の指示を出しながら、自身の仕事も並行して行なう咲夜。

そして、館の掃除作業がひと段落したところで、主のレミリアから順番に、屋敷の住人や働く者たちの元へと咲夜が淹れた紅茶とお手製自慢のお菓子をトレーに乗せ届けていく。

「レミリアお嬢様とフラン様には、届けたから……次は、パチュリー様ね。パチュリー様なら、きつとあそこにいるはず……」

紅魔館には、様々な蔵書が収められた本棚が無数に立ち並ぶ図書館がある。

図書館の中は広大で、その場所に納められている蔵書の数は、紅魔館で働く咲夜でさえも把握できてほど。

そんな場所にはいつも引きこもるようにそこで過ごしている魔女がいた。

その魔女の名は、パチュリー・ノーレッジ。

パチュリィは使い魔として従えた小悪魔に本の整理を行わせ、自身は一日のほとんどを図書館の本を読みふけて、その部屋で過ごす。

当然、その日も図書館にいるだろうと予測が着いた咲夜は、図書館に行き、暫く本棚の間を縫うように歩いてパチュリィの姿を探す。

そして、予想した通りこちらに背を向けるパチュリィの姿を見つかることが出来た咲夜はその魔女の背に近づいていく。

「さて、そろそろ始めようかしら」

咲夜がパチュリィの傍まで近づき声をかけようとしたところで、何かを始めようとする言葉をパチュリィの口から発されたのを耳にする。

「あの、パチュリィ様は、一体何をしているのでしょうか？」

「あら、咲夜いたの？」

パチュリィの言葉に、咲夜は声をかけ質問する。声をかけられたパチュリィは、以外にも作業に集中していたのか、そこで初めて咲夜の存在に気付く。

「ええ、たった今来たばかりですが。パチュリィ様へ紅茶と洋菓子ををお持ちしました」

咲夜は、仄かに香る甘い匂いを湯気とともに漂わせる、紅茶が入ったポットとティーカップを洋菓子を乗せたトレイを、手にしていた。「ありがとう。後でいただくわ。そのテーブルの上にも置いといて」

それをちらりと見たパチュリィは、咲夜に礼を言い、指でそばにあるテーブルを指して、そこに置くよう指示すると、すぐに視線を反らしてしまう。

「かしこまりました」

パチュリィが指で指した方向には、少し大きめな横長のテーブルがあり、上には実験で使用するような様々な色の液体が入ったフラスコが置いてあった。

咲夜は机の位置を確認すると、パチュリィの言葉に了承する。そして、テーブルの空いたスペースにトレイを静かに音を立てないように

置く。

「パチュリー様はいったい何を始めるつもりで？」

咲夜は、パチュリーの作業に疑問を抱いて質問をした。

「そうね……、ちようどいいわ。咲夜も見ていきなさい。今から魔法のテストを行うところだったのよ」

「魔法のテスト……ですか？ それは一体、どのような魔法を行うつもりで？」

パチュリーの行う魔法に、少し興味が沸いた咲夜は、これから実験しようとする魔法の内容を尋ねた。

「今朝、小悪魔が図書館に見たことのない黒い本を持ってきてね。その本には見たこともない読めない文字で書かれていたの。それで興味が出たから今からその本を触媒に、この本に縁がある存在を呼び出してみようと思ったのよ」

見つけた本がそんなにも珍しいものだったのか、いつものパチュリーと比べ、やや興奮した声を上げて、咲夜に説明してくれた。

パチュリーの向ける視線の先には、床にかかれた魔法陣が存在し、その魔法陣の中心には彼女の言う通り、黒い本が置かれていた。

陣の中心に置かれた本は、何の変哲も無い普通の本に見えるが、その吸い込まれそうな黒い色のせいか、どこか不気味な雰囲気がある本だと、咲夜は感じてしまう。

「呼び出す……、召喚というものでしょうか？ もし呼び出されるものが良くないものだった場合、危険じゃないですか？」

件の本の不気味な気配に、少し不安を覚えた咲夜は魔法のテストの最後の確認を行っているのか、手に持っている魔法書を開きページをめくりながら着々と準備を進めているパチュリーに、その場で思いついた懸念を伝える。

「大丈夫よ。その為にいろいろな薬品を集めて入念に準備をしたのだから。これらは決められた手順で使用することで、召喚されるものを抑える強い働きをするのよ」

「ああ、テーブルの上にあった様々な色をした液体が入ったフラスコはそのためだったのですね」

咲夜の懸念した事は、既にこの長年生きた魔女も考慮済みだったよ
うで、そんな心配は無用かのような心強いよいよ彼女の返事がすぐに
返ってきたことで、咲夜の不安は払拭される。

「そう。ただし、魔法の詠唱をしながら正しい手順で使用しなきゃい
けないから、少し手間がかかるけどね。でも効果は保証するわ。さ
て、それじゃ始めようかしら。せっかくだし咲夜もサポートして」
「え!? わたしは魔法については知識がないのですが……」

突如、お願いされた魔法のサポート。

魔法について知識が深くなく、素人同然の咲夜は、自分に手伝える
ことなんてあるのだろうか、心配する。

「大丈夫、簡単な作業をお願いするだけだから大丈夫よ。薬品が必要
となったタイミングでわたしが声をかけるから、咲夜は言われた色の
薬品が入ったフラスコをわたしに渡してくれるだけでいいわ」

「それくらいなら、わたしでも大丈夫そうですね」
パチュリーは咲夜の了承の返事を聞くとすぐに、魔法の詠唱を始め
ていく。

パチュリーの口から朗々と詠唱の音が紡ぎ出されると、魔法陣に変
化が起きる。

詠唱とともに、魔法陣から虹色の光が漏れ始め、光の輝きは徐々に
強くなっていく。

「よし！ じゃあ咲夜、緑色の液体が入ったフラスコを持ってきて！」
「かしこまりました」

薬品を持つてくるように指示された咲夜は、パチュリーの指示した
色の薬品をテーブルから持っていき、魔法陣から目を離さず、集中し
た様子で詠唱を行い続けてながらパチュリーがこちらに差し出す
ようにの出された手に渡す。

その後も、咲夜とパチュリーは同様のやり取りを何度か繰り返し、
たくさんの薬品があったテーブルには薬品が2つ残るだけとなる。
「じゃあ、あとはその残りの2つの薬品を使用するだけだから2つと
も持つてきて」

何度も繰り返し返され慣れた作業に、咲夜もパチュリーの声に反応し

て、すぐにテーブルから残り2つとなった薬品が入ったフラスコを手にする。そして、パチュリーに渡そうと近づいたとき、

「最後の詰めね。最後の薬品を使用するタイミングは重要だから気をつけなきゃ」

そう、パチュリーが独り言をつぶやいたとき、二人の思いもよらぬところから第三者が現れる。

「さくくやつ!!」

パチュリーと同様に、光り輝く魔法陣の方に集中していた咲夜は背後から近づく存在に気付くことが出来なかった。

咲夜は後ろから腰あたりにぶつかるとして金髪の髪をした小柄の少女——屋敷の住人からはフランと愛称で呼ばれ、親しまれている、に飛び付くように抱き着かれる。

抱き着いたフランは咲夜を驚かせたかったのか、気配を消して咲夜に近づいてきていたのだった。

しかし、そんな彼女のいたずらが思いもよらぬ結果を齎すことになる。

「えっ!!?」

咲夜はフランに抱き着かれた衝撃で、思わず両手にそれぞれ一つずつ持っていた薬品を魔法陣の上に落としてしまう。

——パリン!

咲夜はその時、何か壊れたような音を聞いた気がした。

それはフラスコが割れた音だっただろうか、それとも召喚されようとしていた何かを抑えていた薬品の効果が、正しいタイミングでない薬品の使用によって阻害され、破壊された音だったろうか、あるいは両方か……。

その音は、何か取り返しのないような音のように咲夜は感じた。

薬品を落とすと同時に、先ほどまできれいな虹色の光を放っていた魔法陣が、突如、深い闇のような黒い光を放ちだす。

そのどんな眩しい光でされも包み込んでしまうかのような、深い底の見えないような闇を感じられるような光は、魔法の知識に乏しい咲

夜の目から見ても、危険を感じさせるのに十分だった。

「まずい！ 魔法陣が暴走する!?!」

その光景を見て、慌ててすぐにパチュリーが魔法陣を抑えつけようと、魔法人に注ぐ魔力を強めようとする。

しかし、黒い闇を放つ魔法陣から突如、同じく闇のような色をした黒い手が飛び出し、パチュリーへとその腕を伸ばし、襲い掛かっている。

パチュリーはその突然の出来事に、驚きから一瞬、体を硬直させてしまう。

「パチュリー様!」

危ない!?!、そう感じた咲夜は、咄嗟に自分にしがみついていたフランを自分から引き離し、すぐにパチュリーをその場から突き飛ばす。

咲夜に突き飛ばされたことにより、パチュリーは黒い手から逃がれることに成功する。

ただし、咲夜自身と引き換えに。

パチュリーを突き飛ばし、代わりに黒い手の進む斜線上にいた咲夜は、すぐに自身の時を止めて離脱しようとするも、すでに遅く、黒い手は咲夜の腕をしっかりと逃がさないように掴んでいた。

「つく！ 振りほどけない!」

咲夜はすぐに腕を振り払って、引きはがそうとしたが、黒い腕の掴む力は、まるで鬼に掴まれているかのように力強く、引きはがすことができなかった。

咲夜が黒い手を引きはがすのに苦戦している間に、魔法陣からはさらに3つの腕が伸び、次々と咲夜を体を掴んでいく。

そして、合計4本の腕に掴まれ、今度は、黒い腕は魔法陣の方へと咲夜を引っ張っていかうとする。必死に咲夜も抵抗するが、力の差に簡単に魔法陣の中心へと咲夜は引き攣られていく。

「咲夜!」

パチュリーが魔法で咲夜を掴むその黒い手を撃退しようとするよりも、咲夜が魔法陣の中心に到達する方が早かった。

咲夜が魔法陣の中心に着くと、先ほどの闇のような黒い光とは真逆

に、魔法陣からは白い光りが溢れだし、部屋全体をまるで太陽のように照らす。

「うっ、眩しいー！」

そのままその白い光は数秒間もの間、部屋を照らし続けた。

その間パチュリーは目を開けられずにいた。

光が消え、パチュリーが目が眩しさに眩んだ視界が落ち着き、周囲を確認すると、そこには咲夜の姿は無かった。

さらに言えば、咲夜だけでなく魔法陣の中心にあつた黒い本の存在も見当たらなかった。

「そんな……」

「え……」

図書館には、起きた出来事を理解し、小さく口を開けて呆然とするパチュリーと、何が起きたのか全く理解できず、小さく首を傾げるフランだけが取り残されていた。

第二話：さて、どうしたものかしら……

「さて、どうしたものかしら」

そこは人通りが少ない路地裏。

路地裏の通路の両脇には背の高い建物の壁が続いており、太陽の光もあまり差し込まない、そんな少し薄暗い場所だった。

そのような場所に人がいるとすれば、それは貧民街に住む浮浪者やあまり人に言えないような裏の世界の住人がほとんど。しかし、現在そんな場所とは不釣り合いな美しい若い一人の少女が佇んでいた。

その少女の年齢は10代後半くらい。綺麗な生地をしたメイド服に身を包んでおり、顔立ちは端麗。少女の髪色は珍しくも銀。

彼女の髪は路地裏に僅かに差し込む光を反射させ、キラキラしそれがより少女のどこか幻想的な美しさをさらに際立たせていた。

その美しい少女は顔をやや俯かせ、難しい表情で何かを考え込んでいた。凜とした表情で考え込むその少女の姿はとても理知的で美しく見え、大抵の男性はそんな様子の彼女を見れば見惚れるに違いない。

そんな少女の名は、十六夜咲夜。

「まずはここがどこか、それを知ることが先決ね。人がどこかにいるといいんだけど……」

咲夜はこのまま考え込んでも現状の問題の打開に繋がらないと考え、一先ずその場を移動することに決める。

今いる場所を知るために人を探す。

そう目標を定め、その場を移動しようとしたとき、咲夜は自分の足元に落ちているものに気付く。

「……これはパチュリー様が魔法の触媒に使用していた黒い本ね」

落ちていたものは、召喚魔法で触媒に使用されていたあの黒い本。

図書館で見た時と同様にどこか不気味な気配を漂わせていたが、現状でこの場所にいる原因として考えられる一番の手がかり。

捨ておくことはできず、咲夜は腰をかがめ地面に落ちていた本を拾い、埃を少し払うとスカートのポケットに入れる。

そして今度こそ通路を進んでいく。

咲夜が通路を歩いて進んでいくと、通路の先からなにやら人の話し声が聞こえてくる。

聞こえてくる声は小さく、話の内容まではよく聞き取れない。しかし、どうやら声の主は咲夜が進んでいた通路の突き当りを曲がった先から聞こえてきていた。

「人の声？ 幸先いいわね。この先に誰かいるらしいわね」

咲夜は声が聞こえる方向へと足を早めていく。

「くそ、なんでこんな所に俺はいるんだよ！ 携帯も繋がらねえ。俺様を召喚してくれた可愛い女の子ともいねえ。チートな能力ももらった気配もねえ。こんな状態でどーしろってんだよ!!」

不満を爆発させ叫んでいるのは、高校生くらいの少年。彼の名は菜月スバル。

年齢は十八で平和な時代の現代の日本から異世界召喚された、という点を除けば、現代日本のどこにでもいるごくごく普通の少年。

彼は日本の学生でありながら、とある理由から学校には行かなくなり、引きこもり生活を送っていた。

ある日の夜中、家で寝ずにぶっ続けでしていたゲームに疲れ、休憩ついでに立ち寄ったコンビニ。その帰りに気が付けば、異世界のどこかの街の真ん中にワープ。

初めは突然の状況に戸惑うが、すぐに異世界召喚という非現実的なファンタジーな状況に興奮し、はしゃぐ。そうして早速と街を散策しだす彼だが、小説や映画などの主人公のように自分に特別な能力を与えられたわけでもなく、かと言って特別な出会いもなく、異世界にた

ただ放り投げられた状況に気づき、期待していた自分の異世界像との違いに不満を抱き始める。

目的もなく街を歩き周り、歩き疲れて路地裏で休憩。そうして、彼は休憩しながらこうして愚痴をこぼしていた。

「持ちもんは、コンビニに行っただけだから大したもん持ってねー。……終わったな、俺。こういう場合……、RPGのセオリーで考えればまずは、情報収集からだな。現状必要な情報を集めるためにはそれが――」

ふと、スバルは声を止めた。自分がいる路地裏から大通りへ出る出口を遮る形で三人の人影が現れたからだ。

スバルが目を凝らして現れた三人組を見ると、薄汚い身なりをした三人の男たちがこちらをギラギラとした目つきで見えてきており、どう考えても友好的な感じではない。

「やべえ!? 強制イベント発生! これは負けイベントか! はたまた、俺様の覚醒イベント!」

スバルは慌てて立ち上がり近づいてくる男たちに身構える。

いやいや、見かけはああ見えて、以外と優しい人かもしれない。

スバルは能天気にもそう考え、

「やあ、この俺様に何かようかい?」

さりと髪をかき上げ、心の中で描くイケメンをイメージし、ウインクを一つ。

よし! 友好的に会話できたぜ。何事もまずはコミュニケーションから。

ラブ&ピース、だぜ!

「なんだあ? こいつ、ムカつく動きしやがって」

「どうも状況が分かってねえみたいだな」

「嘗めやがって! ぶち殺す!」

結果として、それは全員の怒りを買うことに成功しただけだった。

「うぎゃあ!? そういえば、俺コミュニケーション能力ゼロだった! 小学校から通信簿の先生のコメント欄に、『もつと空気を読みましょう』っていつも書かれてた!……あちらさんがヤル気になったの

なら仕方ねえな。なら、先手必勝！……ぶち殺すつて、そりや……こつちのセリフだ！」

スバルはまくし立てるように言葉を吐く。そして、男たちよりも駆け寄り一気に攻撃を仕掛ける。

やけくそ気味に繰り出されたパンチは大柄の男の顔のど真ん中に綺麗に吸い込まれていく。そして、殴られた男は勢いよく吹き飛ばされ倒れる。

「いってー!! 初めて人殴ったけど手がいてー!!」

スバルのいきなりの攻撃によつて仲間の一人が倒されたことに男たちに動揺が走る。

スバルはその隙を見逃さず、今度は小男に向けて蹴りを放つ。

「どっせーいー!」

今度の攻撃も当たり、相手を壁まで吹き飛ばし壁に背中からぶつかりそのまま倒すことに成功する。

「ぐえっ!!」

「おおー!! 俺つてやっぱ、この世界では強くなってる!? よーし、このまま残りも……」

スバルは相手を立て続けに二人倒せたことで、自分の意外な成果にテンションをあげる。調子に乗り、そのまま残りの男に殴りかかって打ち倒そうと考える。

しかし、彼の調子の良さは長続きしなかった。

「すみません、すみません! 調子に乗りました! 俺が悪かったですから、命だけはご勘弁を!!」

スバルは恥も外聞も捨てて、頭をこすり付け、土下座をして許しを請う。

最後の相手が、状況の悪さから背中に隠していたククリナイフを取り出し、両手に構えたのだ。平和な日本で育ったスバルにとって、刃物を見た瞬間に恐怖を襲われ、全面降伏する。死の恐怖を感じてしまつては、彼はひたすらに命乞いをする事しか出来なかった。

「つぐ、いてえ……」

「この野郎、やりやがったな」

「あれ!? 俺無双の攻撃でダメージ小つてどゆこと!? 召喚もののお約束は!?!」

「なにわけわかんねえこと言ってる! それよりもよくもやってくれやがったな!」

スバルが先ほど倒したと思った二人の男が立ち上がってくる。

マジかよ…。俺、パワーアップしたんじゃないのかよ?!

そう胸の中で虚しく叫ぶスバルだが 現実には残酷にも敵は再び復活し、三人になる。

さらに言えば、相手は先ほどの攻撃で怒りを買っている分、状況は先ほどよりも悪化している状態だった。

そして、…:スバルは復活した二人も含めて、三人の男たちによって蹴られ、煽られ始める。スバルは、ただ体を丸めて相手の攻撃を耐えるしか出来なかった。

蹴られ続け、いつまでこんな状態が続くのかと、スバルの意識が少し朦朧としてきた時、ふと自身への蹴りが止まっていることに気付く。

スバルがどうしたのかと、よろよろと顔を少し上げ、男たちの方へと視線を向ける。

先ほどまでスバルを蹴っていた男たちは、スバルの後方に誰かいるのか、そちらに声をかけ話しかけていた。

自分の他に人がいる。

そう理解したスバルは、誰かが助けに来たのかと期待を込めて視線を後方に向ける。すると、そこには美しい銀髪をした少女がいた。

少女の顔立ちは人形のように整っており、彼女の凜とした目は女性の意思の強さを表していた。

彼女の来ている服はメイド服。まるで彼女のために存在していたのではないか、そう思わざるをえないほど彼女に、見事に調和しており、それが彼女の美しさを一層引き立てている。

スバルはその少女の美しさに目を奪われる。見惚れ、今まで襲われていた恐怖や体の痛みも忘れ、思わず叫んでいた。

「おお!! 銀髪美少女メイドキターー! これぞ異世界ファンタジー。やっぱ異世界ファンタジーにメイドは必須だよな! ああ、きつとこれから彼女と俺とで長い冒険の旅が始まるに違いない!」

突然のスバルの叫びに驚いたのか、メイドの少女は、驚いた表情で目を丸くしてこちらを見てきて視線が一瞬会う。それが、スバルと咲夜の初めて出会った瞬間だった。

「やべえ、驚いた表情も可愛い……」

「うるせえ!! 静かにしてろ!!」

「ひでぶっ!!」

スバルは早々に無様な姿を晒してしまうが。

「——そりや……こっちのセリフだ!」

通路の先を曲がった咲夜が目にしたのは、グレーのジャージを着た男——菜月スバルが叫びながら男に殴りかかっている光景だった。

通路を曲がった先にいたのは、スバルも含め4人の男がいた。

咲夜に対して背を向けているスバルの表情は確認できなかったが、彼に対峙する形で立っていた残りの3人の風貌は確認することができた。

三人組はそれぞれの身長や体格は見事にバラバラだった。小男、身長が大きく太った男、身長が咲夜と同じくらいで少しやせた男の3人。

共通しているのは、鋭い目つきと少し汚れた服装をしているくらい

だった。

彼らから醸し出される雰囲気から、あまり堅気の人間には見えな
い。

人通りの少ない路地裏の場所、そして状況から察するにジャージを
来た男は、三人組、チンピラたちに絶賛絡まれ中つてところだろうか
？

咲夜はその場をそのように推察する。咲夜が思考している間にも、
状況は進行していく。殴りかかったスバルの攻撃は一人の大男に見
事命中し、相手を倒す。

殴りかかった男は喧嘩は意外にも強かったのか、その後も立て続け
に小男を蹴り倒してしまふ。残っている相手は中背の男だけ。

そのまま調子に乗ったスバルがそのまま最後の一人も倒してしま
われると思ったが、最後の男が武器を取り出すと一転して形勢は逆転
していた。

先ほどまでの勢いはどこへ行ったのか、スバルは相手が刃物を持っ
ているのを見るや、情けなくも土下座し全面降伏をしたのだった。

スバルは相手に許してもらえよう、恥を捨てて頭を地面に擦りつ
けて全力で謝罪する。しかし、チンピラたちの怒りは当然収まらな
い。それどころか、さらに先ほど倒した男たちが復活したのを見て、

「あれ!? 俺無双の攻撃でダメージ小つてどゆこと!? 召喚もののお
約束は!」

「なにわけわかんねえこと言つてやがる! それよりもよくもやってく
れやがったな!」

相手を刺激し、さらに怒りを買う始末。そしてスバルは状況を悪化
させ三人の男から蹴られ続けるはめに。

咲夜は、その状況を静かに見ていた。

咲夜には、特にその状況をどうにかしようという気は無かった。

蹴られている男を助ける気もなく、首を突っ込むこと気もない。面
倒ごとに巻き込まれるのを嫌がり、そのまま男たちの諍いが収まるま
で眺めているつもりだった。

しかし、先ほどスバルの口から漏れた言葉は、咲夜にとって無視で

きるものでなかった。スバルの発した『召喚』。

咲夜はスバルのその言葉を発したことから、スバルが召喚魔法と何か関係のある人物ではないかと考えた。

パチュリーの召喚魔法が原因で見知らぬ地に来てしまった咲夜にとつて、その単語は聞き逃せるものではなかった。

初めに遭遇した人物からその言葉が出てきたのだ。自身とも無関係とも思えない。

そう思考を巡らし、咲夜はひとまずスバルを助けてやることに決める。何故、彼から『召喚』という言葉が出て来たのか、確認する必要があった。

「お!! なんかもう一人いるじゃねえか」

しかし、咲夜がスバルの助ける行動に移すよりも先にチンピラたちが咲夜の存在に気付く方が早かった。

スバルをさんざん蹴り続け、ある程度のうっぷんを晴らし、一息つくチンピラたち。

少しは怒りが収まったのか、周りに目が向いたとき、スバルの後方の離れた場所に静かに立っていた咲夜の存在に気付いたのだった。

「銀髪!? ……なんだ、人間か。メイド服を着ているな。どこかの貴族で働いているメイドか？」

「よく見ると、か、かわいいじゃねえか……」

新たな人物の発見に、チンピラたちの意識が完全に咲夜に向く。

彼らは相手が女性で、それも美しい少女だと分かると色めき立ち、嫌らしい笑みを浮かべながら咲夜に話しかけてくる。

「なあ、お嬢さん。この転がっている男のお友達かい？」

「いいえ、知らない人ね」

先ほどまで自分たちが翩っていた男の関係者だと事態がややこしくなると考えたのか、まず指でスバルを指して、知り合いかどうか確認してくる。

関係者であることを咲夜が否定すると、笑みをさらに深くし下心満載な表情をするチンピラたち。男たちの表情から彼らが考えていることが容易に想像できてしまい、咲夜は嫌そうに顔をしかめる。

「なら、お嬢さん、俺たちと一緒に——」

「おお!! 銀髪美少女メイドキターー!! これぞ異世界ファンタジー。やっぱ異世界ファンタジーにメイドは必須だよな! ああ、きつとこれから彼女と俺とで長い冒険の旅が始まるに違いない!」

チンピラのうちの一人が咲夜をナンパしようと思をかけるが、それはスバルの叫び声で遮られる。突然の叫び声に咲夜は驚き、声を主に目を向ける。

先ほどまでじつと固まって蹴られ続けていたスバルは、こちらを見て興奮している様子だった。

咲夜と同様にチンピラたちも急に大声を上げたスバルに驚ろく。しかし、咲夜の驚きとチンピラたちの驚きの意味は異なっていた。

咲夜が驚いたのは叫び声を上げたことだけでなく、スバルの発言に對してもだった。

『異世界』。

スバルの放った言葉は、先ほどの『召喚』という言葉の疑惑も合わせ、ますます咲夜はスバルに対して関係者である疑いを強める。

「うるせえ!! 静かにしてろ!!」

「ひびぶっ!!」

チンピラは自分のナンパが邪魔されたことに気分を害し、土下座をしたままのスバルに蹴りを入れた。蹴りによりスバルが静かになったことを確認すると、チンピラが再度、咲夜をナンパしようと挑戦しようとする。しかし、哀れにもまたも邪魔が入ることとなる。

「ごほん。……お嬢さん、俺たちと一緒に——」

「ちよつとどけどけどけ! その奴ら、ホントに邪魔!」

切羽詰まった声を上げて、誰かが路地裏に駆け込んでくる。その声に反応して路地裏にいた全員がその声を上げた方向へと目を向ける。

視線を向けた先にはこちらに向かつて走ってくる小柄のセミロングの金髪の少女がいた。

走り込んできた少女はチンピラたちの存在を無視し、そのまま横切っていく。横切る途中、土下座をしたスバルと目を合わせたが、

「なんかスゴイ現場だけど、ゴメンな! アタシ忙しいんだ! 強く

生きてくれ！」

「つて、ええ!? マジで?！」

その少女は現われるのも早かったが、去るのも早かった。特にボロボロなスバルを助けようとするのもなく、そのまま嵐のように通り過ぎていく。突然の出来事にその場の全員が呆気に取られ固まっていたが、咲夜はいち早く、我に返る。

驚いている場合じゃない。

スバルを助けようとしたことを思い出し、咲夜は慣れた手つきでナイフを取り出そうとしたとき――。

「――そこまでよ、悪党」

その場に一人の少女が乱入してきた。

「今度は一体誰よ……。」

咲夜は思わず文句を口に出してしまった。それは、この場にいる全員が共通して胸の内に抱いていた言葉でもあった。

第三話：——そこまでよ、悪党

「——そこまでよ、悪党」

路地裏でチンピラに絡まれ、土下座をしていたスバルを助けようとしていた咲夜は、突如聞こえてきた第三者の声に動きを止める。

声の主に目を向ければ、そこには咲夜と同じ長い銀髪を靡かせ、鋭い瞳でこちらを見てる美しい少女がいた。

「それ以上の狼藉は見過ごせないわ。そこまでよ！」

白いコートを着たそのどこか幻想的な美しさを持つ少女の存在感到、その場にいた男たちは圧倒される。彼女から敵意を向けられたチンピラたちは、表情を青ざめさせ後ずさる。

「待て待て待て！ 待ってくれ！ な、なんだかわからねえが、こいつは見逃す！ だから俺たちのことは勘弁して……」

「潔くて助かるわ。今ならまだ取り返しがつくから、私から盗った物を返して」

「だから悪かったって……へ？ 盗った物？」

「お願い。あれは大切なものなの。あれ以外のものなら諦めもつくけど、あれだけは絶対にダメ。——今なら、命まで取ろうとは思わないわ」

立て続きに現れた乱入者に咲夜はまたもや出鼻をくじかれ、じつとして行動を移す機会を窺う。

しかし、新たに現れた少女とチンピラたちの間で誤解が生じていることを感じた咲夜はこの場を早期収拾させるために、会話に口を挟む。

「そのあなた。あなたはそこに転がっている男を助けに来たんじゃないのかしら？」

チンピラたちの後方から声をかけられ、白いコートを着た少女はその時初めて咲夜の存在に気付く。少女は咲夜の質問を受け、咲夜を含めた5人の状況を改めて確認する。そして少しの間考え込んで、

「……変な格好をした人ね。そこに転がっている男はあなたの恋人？ 恋人を守るために三対一という状況であっても戦おうとした。そ

んな状況？ 当たり前でしょ？」

咲夜の質問には答えず、ローブを着た少女のどこか自信ありげな態度で、逆に質問が返ってくる。

まずは誤解を解くことを先だ。

少女の傍から少女とは別の只者でない気配も感じるし、少女に無用な警戒を抱かせない方が良い。

そう考え、咲夜は少女の頭が痛くなりそうなひどい勘違いにすぐにこの場から逃げ出したくなるのを、ぐっと堪え、

「あなたが何を盗まれたかは知らないけど、私たちは無関係よ。おそらくあなたの探している盗人は先ほど通路の壁を越えていった少女だと思うわ」

咲夜の言葉が本当かと、ローブの少女が残りの男たち4人に視線を向けると、チンピラたちとスバルは仲良くぶんぶんと首を縦に振り肯定する。

「嘘じゃ、ないみたい。それじゃ盗った人は路地の向こう？ 急がないと」

咲夜の言葉に嘘が無いと納得し、ローブの少女はこちらに背を向け路地の外に向かっていく。チンピラたちと咲夜がそれを見て安堵し、スバルはまたも助かるチャンスを逃したのではないかと、焦ったとき

「それはそれとして、見逃せる状況じゃないのよ」

少女は振り向き、こちらに向けられた掌の先から数多の氷の結晶が放たれる。

突然の氷の魔法による強襲にチンピラたちは反応することも出来ず、撃ち抜かれ受け身もとれずに吹き飛ばされていく。

「――魔法」

その光景を見て、言葉が漏れる。奇しくも咲夜と同じことを思ったスバルと声が重なる。

魔法は幻想郷では別に珍しくないものであったため、スバルと違い咲夜にとってさほど驚くものでは無かった。

それでも無詠唱からタイムラグなく苦も無さげに放たれた氷の魔

法により、少女がそれなりに熟達した魔法使いであることが分かり、咲夜は警戒する。

「やってくれやがったな。こうなりや相手が魔法使いだろうがなんだろうが、知ったことかよ。二人で囲んでぶっ殺してやる・・・二対一で勝てっと思ってるのか、ああ！」

魔法によつて小男は気絶したようだが、吹き飛ばされた全員を完全に倒すことは出来なかった。残りの二人のチンピラが闘志を瞳に燃え上がらせながら立ち上がってくる。

「じゃ、二対二なら対等な条件かな？」

突然、この場にいた人間以外の声が聞こえ、魔法使いと思われる少女を除く全員が戸惑う。声は魔法を放った少女の方から聞こえた。

しかし、そこには少女以外の存在がない。ローブの少女によつて掌が差し出され、その掌に全員の視線が集まる。

「あんまり期待を込めて見られると、なんだね。照れちゃう」

すると、ローブの少女が差し出した掌に乗るサイズの直立する猫が現れる。

そこで咲夜は先ほどからローブの少女の傍から感じていた気配が、その猫のような生物であったことに気付く。

しかし、その猫の正体は咲夜には分からなかった。その答えは、以外にもチンピラから教えられることになった。

「——精霊使いか！」

「ご名答。今すぐ引き下がるなら追わない。すぐ決断して！ 急いでるの」

チンピラたちは相手の正体を知り、分が悪いと感じたのか、途中で気絶した仲間を回収して、「覚えてろ！」と捨て台詞を吐きながら足早に去っていく。

チンピラたちが完全に遠くに去ったと分かると、スバルは安心したような表情をする。スバルが魔法を放った少女に礼を言いながら、足をふらつかせながらも立ち上がろうとする。

「あー、無理して立ち上がらない方がー、……って遅かったね」

謎の猫がそう忠告するが、スバルは体をふらつかせたあと、そのま

ま倒れ気絶してしまった。

「——で、どうするの?」

「関係ないでしょ。死ぬほどじゃないもの、放っておくわよ」

猫のような生き物の質問に、ローブの少女はそんな冷たい言葉を返す。

しかし、言葉とは裏腹に心配気な表情は隠せていなかった。

それを見て気絶したスバルだけに用があった咲夜は、助け舟を出してやる。

「その男なら私が見ておくから行っていいわよ。あまりもたもたしてると、泥棒さんに逃げられちゃうわよ?」

咲夜がそう言われるが、それでもローブの少女はまだ迷いがあるのか、なかなか踏ん切りがつかない様子。

他の人がいる前で異世界の話をすれば、頭のおかしい人と思われるかもしれない。

出来れば他の人がいない場所で質問がしたかった咲夜は、少女にさつさと立ち去って欲しかった。

しかし、その少女は咲夜の思惑を裏切るほど人一倍、お人よしであった。

「やっぱり、放っておけないわ!」

ローブの少女はそう言い、この場を去ろうとした足を止めこちらに戻ってくる。

それを見た咲夜は、一先ず少女がいる間、倒れている男——スバルから情報を聞き出すことは諦める。

代わりに少女から情報を聞き出すことにしよう。

咲夜はそう前向きに考えることにした。

しかし、咲夜は情報を聞き出すよりも先に、ローブの少女には言うておかなければならないことがあった。

「あ、それと言っておくけど、私とその男は恋人関係じゃないから」

「ええ!! 嘘!? 結構名推理だったと思ってたのに!」

信じられないと心底驚いている表情をした魔法使いの少女を見て、咲夜は不満顔をするのであった。

第四話：男の名前は菜月スバル

スバルはその少女の美しさに息を呑む。

銀に輝く髪色と透きとおった宝石のアメジストのような紫色の瞳。どちらも日本ではあまり見かけない、特徴的な綺麗な色合いであったが、彼女の纏う何色でもない純白のローブと調和している。それだけで十分に彼女を魅力的に見せていたが、整った顔立ちがさらに美しさを引き立てていた。

先ほど会ったメイドの少女とも負けず劣らずの美しさ。その彼女のどこか幻想的な美しさはスバルの目を捉えて離さない。先に会ったメイドの少女もそうだが、彼女を見てみると、どこか胸が高鳴る感じがする。

異世界に来てから会う女性がみな美しい少女ばかり。

「俺って異世界に来て、女運は上がったかも……」

どこか高揚した気持ちでそんなことを考えていると、浮遊感を感じることに気付く。

それは毎日、日常的に感じているもの。故にその正体を察するのも早かった。

「ああ、これ夢か」

心底残念だとスバルは思う。

さつきまで出会った美しい少女たちもきつと夢に違いない。

異世界に来たことも、ゲームのやり過ぎで見た夢だったのだと。

「夢でも良いからまた、あの子たちに会いたいな」

眩きながら、徐々に自分の意識が覚醒していく。

寝ている男——スバルの治癒が終わり、咲夜とローブの少女は彼が目覚めるのを待っていた。とはいえ、そのまま何もしないで待ち続けるのも無駄なので、咲夜はその少女に話しかける。

「ねえ、貴方」

「なに？」

「お互いに自己紹介でもしない？ わたしの名前は十六夜咲夜。貴方の名前は？」

咲夜は異世界の情報を少しでも得れば、そんな思惑もあつて少女に話しかける。咲夜に話しかけられた少女は、すぐに返事を返さず、やや逡巡ののち、

「……わたしの名前は、エミリア。ただのエミリアよ」

そうして自己紹介から始まったエミリアとの会話の中で、咲夜は以下のことを知った。

一つは、エミリアの使用した魔法について。

エミリアは精霊使いであり、先ほどチンピラたちを追い払った魔法は、精霊魔法というものらしい。

魔法使いは通常、自身のマナを使用して魔法を行使する。しかし、精霊使いはそれだけでなく、彼女が従えているようなパックをはじめとした、精霊たちに力を貸してもらうことで魔法が使用することも出来るらしい。精霊から力を借り、周囲のマナを集めて魔法を行使する。これにより、精霊使いは魔力切れ、ということが基本的になく戦場であれば警戒される存在とのこと。

エミリアは特に魔法についての資質が非凡らしい。そこは猫、もとい。パックが自慢げに、その小さな体を一杯に胸を張って語ってくれた。

二つ目は、現在いる場所について。

親竜王国と呼ばれ、王族と竜の間で盟約が結ばれているルグニカ王国の王都。

自分たちがいる場所はそこらしい。ルグニカ王国は元の世界では聞いたことが無い。

やはりここは異世界なのか、そう思うも一応、念のために、幻想郷

という場所を知っているか聞いてみるが、彼女は知らなかった。長年この世界に生きていると自称する、妖精のパックにも聞くも、同じ答えが返ってきた。これにより咲夜は異世界なのだと確信したのだ。た。

三つ目は、エミリアについて。

会話の最中、咲夜がエミリアのやや尖った耳が気になり、しばしば視線を向けていたことにエミリアが気付くと、僅かに逡巡を見せるも、エミリアは自身がハーフエルフであることを告げる。

彼女が口にするのを躊躇う態度を見れば、何かしら重要なことを告白されたのだろうと咲夜は察することは出来たが、あいにくこの世界について何も知らない咲夜にとってみれば、さして興味を引くものではなく、思わず「ふーん」と、ただ淡泊な反応を返してしまった。

しかし、それがエミリアにとって逆に良かったのか、何故かその後のエミリアの態度はいくらか柔らかくなった。

咲夜としては、他にも色々聞きたいことがあったが、話しているうち咲夜にすっかり気を許したエミリアからも、咲夜が質問をしたのと同じくらい質問をするので、あまり多くの話を聞くことができなかった。

現時点で言えば、エミリアとの会話で咲夜が得た大きな情報は、ここは異世界だと、確信できたことくらいだった。

そうしているうちに、「うう……」と言うような小さな声を漏らしながら、やっとスバルが目覚めます。

「あら、目が覚めたようね？」

「まだ動かないで。頭も打ってるから、安心できないの」

気絶していたスバルの目が覚めたと分かるなり、エミリアは起き上がろうとする彼に声をかけて静止させる。

「この声は……そつか夢じゃなかったのか。そして、おお、この頭に感じる感触……。これが夢にまでみた美少女の膝枕……ってこんな毛深いわけあるか!!？」

「起きて良かったですわ（裏声）」

「まさか、人間サイズの猫に膝枕されるとは思わなかったぜ」

目覚めてすぐ聞こえたエミリアの声に、自分を膝枕している人物がエミリアと勘違いしていたスバルは、人間サイズの猫——パツクに膝枕されてることに驚き、跳ね起きる。

咲夜は幻想郷で人外に見慣れていたため驚くことはなかったが、人間サイズに大きくなった猫に、スバルはとても驚いていた。

「ん、そのメイド服を着た君は……。そうか、俺が目覚めるまでいてくれたんだな。二人ともあり——」

「別に感謝する必要はないわ。私は聞きたいことがあなたにあったから待つてただけ」

「そうね、私もあなたに聞きたいことがあるから、傷の治療をただけだもの」

「……おおう、優しい銀髪美少女達の優しさからの行動と思いきや、意外とちゃんとした見返りを求めるその強かさな回答にビックリ。でも現実はそのなもんですよ。でも俺はちゃんと礼を言うぜ！ センキュー、サンクス、ありがとう！」

起きたスバルはにべもなく二人の少女から礼はいらないと拒否されるが、それでも、テンション高く、大声で二人に感謝を告げる。

そして、同時に美少女たちから自分に聞きたいことがあると言われ、そのハイテンションのまままで親指を立てウイंकをする。

「俺に聞きたいこと？ なんでも聞いてくれ。俺のスリーサイズ？」

恥ずかしい趣味から、好きな女性のタイプまで何でも答えるぜ！

随分とハイテンションなスバルに、咲夜は嫌そうな顔をするが、何でもペラペラと話してくれそうなスバルに、どう話を聞くべきかと少し警戒していた咲夜にとってはむしろ都合だと感じる。そして、それならばと、咲夜は質問しようとするが、咲夜よりもエミリアの方が質問するのが早かった。

「わたしは盗まれた徽章を探しているの。何か情報を持っていないかしら？」

エミリアは、真剣な顔を、そして少し切実な表情を浮かべながらスバルに聞く。

その質問は、スバルが寝ている間にも咲夜もされた。勿論、知らな

いと答えたが。

「……悪いけど、何も情報を持つてないよ。徽章なんて知らないし」
「そう。なら仕方ないわね。咲夜からも同じ答えが返ってきたから、あまり期待はしてなかったけど……。じゃあ、もう行くわね。悪いけど急いでるの。ケガは一通り治ってるはずだし、脅したから連中ももう関わってこないと思うけど、こんな時間に人気のない路地にひとりで入るなんて自殺志願者と一緒だから。あ、これは心配じゃなくて忠告よ。次に同じような現場に出くわしても、私があなただけを助けるメリットがないから助けなんて期待されても困るから」
「ゴメンね。素直じゃないんだよ、うちの子。変に思わないであげて」
エミリアの早口でまくし立てるような言葉に少し面食らうスバルにパックはフオローするように言った。
そしてスバルが呆然としているうちに、エミリアとパックは路地裏の出口の方まで行ってしまふ。

咲夜は、エミリアの立ち去る後ろ姿を見届け、
「随分とお人よしな人間なのね。急いでいるなら、あそこまで他人にかまっている余裕なんてないハズなのに」

スバルは隣の咲夜のその眩きに、はっと我に返る。

「じゃあ、今度はわたしのしつ——」

「——おい、待つてくれよ！」

「ちよっ!! ちよっと待ちなさい!!」

咲夜の言葉を聞き終える前に、スバルはエミリアを走って追いかけてようとし、咲夜は慌ててスバルの腕を掴んで止める。

「うわっ! ……つなんだよ!」

「ちよっと! わたしも質問があるって言うていたじゃない。質問に答えてもらおうわよ」

「でも、俺も急いでいて。……いや、分かった。あとで質問に答えるから、今はあの女の子を追わせてくれないか?」

「絶対でしようね?」

「……ああ、絶対にあとで答える。」

咲夜からじつと目を見詰められてあまり女の子に免疫がないスバ

ルは顔を赤くして照れながらも、質問に肯定で返す。

「分かった。行きなさい。わたしの名前は十六夜咲夜。用事がすんだら、この路地裏の入口あたりで待っているから、日が暮れる前くらいには戻って来なさい。もし、それでも現れなくても、一時間は待つてあげるわ。それでダメなら翌日また同じ時間に。あなたの名前は？」

「きみは……。いや、俺の名前は菜月スバル」

咲夜の言葉に何か思うことがあったのか、スバルは咲夜に何か言葉を言いかける。

しかし時間がないことに気付いたのか、自分の名前だけ名乗り返すと、エミリアを追って走り去っていく。

「菜月、スバル……ね。名前からして日本人の可能性が高いわね」

走り去るスバルの後ろ姿を見ながら咲夜はそう呟く。

「もし、あの男、スバルが日本人だしたら、わたしと同じく召喚された人間かもしれない。そのようなことを何度も漏らしていたし……、もしそうなら、あの様子からしてそれほど期待した情報を得られないかもしれないわね」

咲夜の目からはスバルは平凡そのものの男に見え、とうてい召喚魔法を扱えるような人間に見えず、また咲夜を知らなかったことから自分をこちらに召喚したのも無関係だと判断する。

咲夜の名前を聞いたあと、スバルが言いかけたのは、おそらく同じ日本人のような名前に反応したからだろう。

「さて、一人になったわけだけど。まずはわたしもこの路地裏から出ないとね」

咲夜は、路地裏への出口に向かって歩いて行く。

第五話：魔女教徒

路地裏を出ると大通りにつながっていたようで、そこには幻想郷では見れない、賑やかな光景が広がっていた。

さすが王都と呼ばれる場所といったところか。

道を行きかう人は多く、大通りを歩く人は咲夜みたいな普通の人間もいれば、ネコ、イヌ、うさぎ、トカゲといった、見るからに獣人といった普通の人間でないものもたくさんいた。

幻想郷で人外に見慣れていた咲夜にとって、それは左程驚くことではなかったが、人の多さには驚きを感じざるをえなかった。

また、この街には幻想郷と大きく異なる点も咲夜を驚かせた。

「こちらの世界では、人間と人間以外が、ごく普通に一緒に暮らしているのね……」

幻想郷では人間と共存している妖怪も一部はいるが、基本的に人間にとつて、妖怪とは恐れるものであった。

しかし、この世界ではそのような気配はなく、人間とそうでないものも等しく同じ住人として生活していた。

王都の住人に驚いていた咲夜は、気持ちを切り替え、王都を散策しながら情報収集をしていく。

しかし、情報収集をすることで咲夜は現在の自分の置かれた状況が決して良いものでないことが分かっていく。

結果として、咲夜は自分が以下の5つの点において、厳しい状況に置かれていることに気付かされることとなる。

一つ目が、こちらで使用できるお金を持っていないこと。

通りでリングという、見た目がリングのような果物を売っている、いかつい男がいたので、咲夜はいくらか持っていた幻想郷での貨幣が、使用できるか試してみた。

しかし、やはりこちらの世界では、幻想郷のお金は使用できず、文無しと見られ、追ひ払われてしまう。

咲夜はこちらの世界に来て、一文無しになってしまったのだった。もし長い間、この世界に滞在する必要がある場合、生活を送る

ための資金が必要になる。

そのためにもどこかで働き口を見つけ、お金を得る必要がある。二つ目が、文字が読めないこと。

通りで様々なお店が立ち並んでいたが、どの看板の文字も咲夜には読めなかった。

元の世界の文字が通じない。これは書物からは情報を得られないことを意味している。

幸いにも会話はできるようなので、働き場所が見つからない、という事にはならないだろうが、仕事探しの際に、大いに不利に繋がることは否めなかった。

三つ目が、土地勘がないこと。

ここ王都と呼ばれる場所は想像以上に広く、また似たような通りも多く、何度も迷子になりかけた。

この王都がどれほどの広さがあるか、把握するのは難しい。

無論、空を飛ばば迷子になることもなくなるだろうが、この世界で人が空を飛ぶことは珍しいことかもしれない。

目立つ行為は避けるべきと、咲夜はそう判断し、空を飛ぶことは控える。

四つ目が、知り合いがないこと。

咲夜はエミリアたちと別れたことを今になって後悔していた。

咲夜は、当然だがこの地での知り合いがないため、辺り前の常識を簡単に聞くこともできず、また異世界文化の違いも知らなかったため、迂闊な行動も取れない。

もし、ガイドしてくれる知人がいれば、先ほど入った亜人専門店に変に怒られるといったようなこともなかっただろう。

五つ目は、上記の四つよりも咲夜自身にとって重大な問題であった。

咲夜の時止めの能力が使用することが非常に難しくなっていたことである。

正確には、能力を使用させてもらえない、ことであった。

一人になった咲夜は、まず最初に時止め能力を使用してみようとした。

結果、いつも通り時を止めることはできたのだが、咲夜自身も時が止まったように体が動かず、そしてどこからともなく、あの時に見た黒い手が現れ、咲夜の心臓を握りつぶそうとしてきたのだ。

黒い手が自身の心臓に手が届く前に、能力を解除することで難を逃れるが、服は冷汗でびっしょりと湿っていた。

恐ろしい経験をした咲夜は、少し休憩を挟み、やや憔悴しつつも気持ちを落ち着かせる。

そして、今度は召喚魔法について知っている者がいないか、様々な人間に聞いて回ることにする。

しかし、その試みはそう上手くいかなかった。

そもそも魔法自体使える者が多くないようで、魔法に関して深い知識を持っている者はさらに絞られるらしい。

そして、有力な人間は、大抵、王都で働く者か、どこかの貴族に召し抱えられていると、いう話。

こうして、咲夜は召喚魔法について有力な情報を得ることは出来ずにいた。

中々上手く情報収集が進まない　咲夜は焦りを感じていた。

「この分だと、異世界から幻想郷に戻るのは当分先になりかもしれないわね。いづれレミリアお嬢様が、八雲紫に掛け合ってくれるかもしれないけど、何の情報も無い世界になると、わたしの搜索は難航するかもしてない……」

問題は山積み。

簡単には元の世界に帰れないことを悟った咲夜は、今は、魔法の情報よりも差し当って、生活拠点を築くことの方が優先するべきだと思っただ。

咲夜はそう考えつつも、もう少しだけ情報収集に時間を割くことにした。

今度は召喚魔法についてではなく、咲夜がこの場所に来るようになった原因である黒い本について知っている人がいないか、聞いてみ

ることにしたのだった。

もし黒い本を知っている人がいれば、真実に少しは近づけるかもしれないと、期待して。

「すみません。少しお尋ねしたいことがあるのですが、お時間を少し頂けないでしょうか？」

咲夜はちょうど視界に入った、道を歩いていた若い男の二人組に話しかけた。

男たちは話しかけてきた人物が、銀髪であることに一瞬、顔をしかめるが、相手が美少女の人間であることが分かると、態度を変え、気分良く相手をしてくれた。

「はいはい、どうしたの？」

「実は、この本について何か知っていることがあれば、お話を聞きたいのですが……」

「本？ ……何か流行りの本かな？」

「流行っているかはわかりませんが、この本です」

男は質問してまで聞きたいことが、ただの本であることに男たちは一瞬眉を寄せるが、相手は美少女、特に断る理由もないので、すぐに態度を取り繕い、愛想よく咲夜の相手をする。

そして咲夜が本を差し出すと、男のうちの一人が徐々に顔を青くしていく。

「こ、これって……」

「っ、何かしっているのですか!？」

男のうちの一人が声を震わせながらも、知っているような反応を見せたので、咲夜は今まで情報集めに成果が出ず、気持ちに焦りがあり、男に詰め寄る。

「ひっ！ ……く、来るな——！」

咲夜に詰め寄せられた男は、辺りに響き渡るくらいに大声で叫びをあげる。

咲夜と叫んだ男の横にいた友人は、その大きな叫びに驚く。

その大きな声は、人通りが多い場所にいたこともあって、周りの人の注目を集めてしまう。

男の友人は周りの目を気にしながらも、叫んだ男に理由を聞く。

「おい！ 急に叫んでどうしたんだよ。お前らしくない」

「ば、ばか、お前、あの黒い本は……」

叫んだ男は、咲夜のことをまるで化け物でも見るかのような目で見つめ、咲夜の持つ本を震える指で指し、ゆっくりと話し出す。

「すみません、何か気に障ることもしたでしょう？」

咲夜は怖がられるようなことをした覚えが全く無かったため、困惑する。

場所が異世界で、異なる文化を持つ世界であるが故に、何か叫ばれることでもしてしまったのだろうか、震える男に一歩足を踏み出す。

しかし、その行動は逆に相手を刺激してしまい、

「やめろ！ 近づくな。魔女教徒め！」

「魔女教徒？ いったい、それはどういう……」

男の『魔女教徒』という言葉の意味が分からず、咲夜は質問を返そうとするが、そこで周りの様子がおかしいことに気付く。

先ほどまで人による話し声で賑やかだった通りの音が、消えている。

いや、正確には男のそばにいた友人、咲夜たちに注目して目を向けていた周りにいた人間は、その言葉を聞いて、シンと静まりかえっていた。

「おい、この子が魔女教徒って証拠は？」

「……彼女の持っている黒い本だ。魔女教徒は『福音書』を持っている。以前、魔女教徒になってしまった友人が、その子のもつ同じ本を持っていた。そして言ったんだ。これは『福音書』だって」

魔女教徒とが何を示すのか、咲夜は分からなかった。しかし、相手の反応を見るに良い意味を持つ言葉では無いことは察せられた。

そして、男の言葉により周りにいた人間たちも騒ぎ始める。

「お、おい、衛兵を呼んだ方がいいんじゃないか？」

「そうだな、だれか、だれか衛兵を！」

（まずいわね。まさか衛兵を呼ばれるほど、この本が有名だったとは

ね。しかも最悪な方向で……)

周りの人間が騒ぎ、衛兵を呼ぶかどうかの騒ぎになったとき、異世界で自分の身元を保証できるものが何もない咲夜は捕まると面倒だと思い、その場を走って逃走を図る。

「あつ、逃げたぞー！ やっぱり魔女教徒だったんだ！ 早く衛兵に通報を！」

「だ、誰か、捕まえろ！」

咲夜が逃げ出したことで、いよいよ辺りにいた人間たちは、パニックになる。

咲夜が話しかけた男たちやその周り一帯の騒ぎが大きくなると、そこに声をかける者がいた。

「そのきみ、何か事件でもあったのかい？」

「あー！ え、衛兵さんですか？」

「え、まあ、今日は非番だったのだけれど、そうだね。何か問題があったのなら、話を聞かせていただけないだろうか？」

「よかった。実は——」

話しかけた人物は、落ち着いた声で、聞いていて心地の良いはつきりとした声は、話しかけられた男を落ち着かせた。

そして話しかけられた男は、その場であつた出来事を説明する。

既にその場を走り出していた咲夜は、遠く離れた場所において、そんな会話が繰り広げられていることに気付く事は無かつた。

咲夜はその場を離れることを最優先に、暫く走り続け、周りに人氣が完全に無い場所に着いたことを確認できると、立ち止まり息を着く。

「ふう。ここまでくれば、ひとまず大丈夫そうね……。あまり良くないものだろうとは思っていたけど、騒ぎになるほど悪いものだったなんて」

咲夜は、騒ぎの原因となった黒い本を手にとって、それを眺め、苦々し気に言う。

本来なら、災いを招いた黒い本は、すぐにでも捨ててしまいたいところだったが、現状召喚魔法についての一番の手がかりでもあるため、捨てられず、仕方なくポケットにしまい、持ち続けることにする。そして、咲夜は自身が逃げ込んだ場所を見渡す。辺りはすっかり日が暮れていた。

咲夜は知らなかったが、そこは貧民街という場所であった。貧民街の人間は貧しく、窃盗や強盗は当たり前まゑな、治安の悪い場所であったが、そこに住む人間はみんな後ろ暗い過去を持つものが多い場所であり、人通りが少なく、人の目が付きにくい、ということもあって、凶らずも咲夜は最適な場所に逃げ込んだようだった。

「さて、こうなった以上、この王都には長居できないわね。早いところ……！」

落ち着ける場所に着いたことで、一度、現状を整理しようとした咲夜だったが、急に背後の何かに悪寒に襲われ、そこから逃げるように横に全力で飛ぶ。

「おや、避けられてしまったようだ。」

「……いきなり現れて女性に襲い掛かるなんて、女性への扱いがなっていないんじゃないかしら？」

先ほどまで咲夜がいた場所の後ろには一人の男がいつの間にか立っていた。

男は赤い髪髪し、整った顔立ちをしながらも、凜とした表情で、咲夜を見ており、その男の右手で刀を作っていた。

「どうやら、それで咲夜を背後から気絶させようとしたようだ。」

「すまないね。できるだけ穏便に済ませるつもりだったのだけれども、事が事だったのでね」

「あなたは何者かしら？」

「これは失礼、自己紹介が遅れたね。僕の名前はラインハルト。先ほど大通りで銀髪のメイドの魔女教徒が現れた、なんて騒ぎがあったね。悪いけど、事情聴取に付き合ってもらいたい。抵抗をしないでただけるとこちらとしても助かるのだけれども……」

咲夜は、ラインハルトと名乗った男を見て、その放たれる圧倒的な

存在感に、首筋に冷汗をかく。

男から放たれるオーラにより、否応なしに自分よりも格上の存在だと感じさせられる。

あのまま立っていたら、確実にそのまま気絶させられていたであろう。

(ラインハルトという男、かなりの実力者ね。まだまだ余裕がありそうに見えるし、底が見えない……。こちらが能力を使えない以上、このままやりあうのも下策ね。なんとかスキをつけて逃げるほうがよさそうね)

咲夜は相手が悪いことを悟り、ひとまず抵抗の意思を見せず、油断をしたところで逃げることを決め、会話に応じることにした。

「事情聴取……ね。悪いけど、ひどい誤解だわ。わたしはその魔女教徒という存在ではないわよ」

「なら、そのことを証明をするためにも、是非事情聴取に協力してもらいたい。誤解なら、誤解を解く必要がるだろうし、穏便にことを進められるなら、その方がお互いにとつてもいいことだろうしね」

「分かったわ。協力しましょう。質問には何でも答えるわ」

(ひとまず、ここは従順な振りを見せて——っ!? この感覚は!)

咲夜はラインハルトとの会話中に、突如、世界に変化が起きたことを知覚する。

それは、咲夜が時止めの能力を使用した時の感覚に似ていた。

そして、咲夜は周りの時が止まっていることに気付く。

(誰かが時を止めた? この世界にはわたしと同じ能力を持ったものがある?)

咲夜は時が止まっていることは認識ができたが、体を動かすことはできなかった。

どうやら、時間の巻き戻りが起き始めている。

咲夜の周りの光景が目まぐるしく変わり、過去に起きた出来事が流れ過ぎ去っていくのを見て、咲夜はその事に気付く。

そうして時間の巻き戻りが終わると、咲夜はこの世界に来た時にいた場所に立っていることに気付く。

咲夜は、この先何度も時間の繰り返しに巻き込まれることになることとはこの時、気付く由も無かった。

第六話：ご主人様

時間の巻き戻しが終わると、咲夜はこの世界に来た時と同じ路地裏の道に立っていた。

(どうやら、わたしがちょうどこの世界にきたタイミングまで戻されたらしいわね。……もしかしたらこの世界に来る前までの時間に戻れるかもって、少し期待しちゃったけど、そこまで上手い展開にはならなかったか)

咲夜は前回と同じように足元に転がっていた黒い本を拾い、男たちが喧嘩しているであろう道の方向へと足を進める。

前回と同じように、通りの曲がり角から人の声が聞こえる。

咲夜は、道を曲がれば、スバルがチンピラに絡まれているところだろうと、思い返ししながら、歩き、道を曲がるが前回とは少し異なる光景が広がっていた。

道を曲がった先の道は、前回に見た三人のチンピラが地面に倒れ、スバル一人が立っていた。

「調子乗んなや、コラア——ツ!!」

どうやらスバルは一人で、チンピラ三人を倒してしまったようだ。

(前回の時もそうだったけど、スバルは意外に運動神経がいいのね。……って、呑気に感想を考えている場合じゃないわね)

咲夜は、意外な運動神経の良さを見せたスバルに感心しながらも、前回と展開が異なることに気付いていた。

もし、時間逆行した場合、前回と同じ展開で全ての出来事は進むはずだ。

しかし、今回は異なった。

そのようなことを出来る人物は咲夜を除けば、時間逆行を行使した人物しかいない。

咲夜はスバルを警戒しながら、ひとまず話しかけることにした。

「そのチンピラ三人に絡まれていたようだけど、大丈夫だったかしら?」

「え?……あ、あんたは?!十六夜咲夜?」

咲夜に話しかけられたスバルは驚き、振り向く。

そして咲夜を見ると、戸惑いの表情をしながらも咲夜の名前を口に
する。

（わたしのことを覚えている!?……やっぱりこの男が時間逆行の犯人
ね。今はわたしも時間逆行していることがバレないよう振る舞うの
が正解かしらね）

「ごめんなさい。わたしはあなたのことを知らないのだけど、どこか
で会ったことがあるかしら?」

「え!?だって、ここの道で会っただろ?ほら、俺がチンピラに絡まれて
いた時に!」

（うくん、本当にこの男が時間逆行を行使したのかしら? あまりに
も間抜けすぎて。もしかしたら、自分が時間逆行をしたことに気付い
ていない? 無意識に発動したのかしら?それとも行使したのは別
の人物?）

咲夜はスバルの見せる反応に、スバルが時間逆行の犯人だという確
信が持てない。

しかし、それでも疑いがある以上、気を抜くわけにもいかない。

咲夜は、素知らぬふりをしてスバルに対応する。

「残念ながら、覚えがないわ。それにチンピラに絡まれているのは今
さつきではなくて?それとも以前も同じようにチンピラに絡まれた
ことがあるのかしら?」

「咲夜もサテラも俺のことは覚えていないって言うのかよ……」

スバルは咲夜の返事を聞いて、呆然としてそう呟いた。

それは、どこかもの悲しさを感じさせるような声だった。

「サテラ?……見たところ、ケガはないようだけど、本当にあなた大丈
夫?」

咲夜は本当に聞き覚えのない、名前に少し疑問を抱くも、心配そう
な声をしてスバルに話しかけるが、スバルはどこか上の空をした表情
で「……ああ、大丈夫だよ。ありがとうよ」と答える。

「ひとまず、自己紹介をしましょう。わたしの自己紹介の意味はあま
りないかもしれないけど、あなたの名前は知らないからね。わたしの

名前は十六夜咲夜。あなたの名前は？」

前回到、互いの自己紹介は済ませていたが、咄嗟に名前を呼んでしまふと困ることになるため、咲夜は名乗っておく。

スバルはいまだにどこか納得のしていない表情をしていたが、ひとまず話に応じる気になったようだ。

「……俺の名前は菜月スバル。そうだな……ご主人様とでも呼んでくれ！」

「ではスバルと呼ばせてもらおうわ。」

「そんな……」

スバルはメイド姿の咲夜から、ご主人様と呼ばれたがったようだが、咲夜にそれを無視し、それにスバルはがっかりして肩を落とす。

「つて、こんなことしてる場合じゃない！盗品蔵に行かないと」

「盗品蔵？」

「あ！ 気にしないでくれ。俺はもう行かないと。心配してくれてありがとうな。咲夜。じゃあ、俺はこれで……」

「待ちなさい。」

スバルは急ぎの用を急に思い出したのか、すぐにその場を去ろうとする。

しかしそんなスバルを咲夜は呼び止める。

折角、また出会えたというのに、別れてしまつては意味がない。

「何か困っているようなら、わたしも付き合おうわ。盗品蔵とやらに用があるのでしょうか？」

「い、いや、そうだけど。これは咲夜に関係ないことだし、付き合わせるのも悪いし……」

「実はスバルに聞きたいことがあるのよ。急いでるようだし、先に用事が済んだらでいいから、聞いてくれないかしら？」

「うーん、でも危ないし……」

「大丈夫。こう見えて、ある程度の護身術は身に付けているから。それにもう断られても勝手に着いていくわよ」

「……仕方ない。わかったよ」

スバルの用は、それほど安全ではないらしい。

咲夜を危険に巻き込みたくないのか、咲夜の同行を断ろうとするスバルだが、咲夜の頑な姿勢に折れ、スバルは渋々了承をする。

「さて、行きましようか」

「盗品蔵への道はこつちだ。……それにしても咲夜の奴、やけに強情だな。……もしかして俺に一目惚れでも？　ぐふふ、楽しくなってきたぜ！」

「??？」

咲夜はスバルの後半のセリフが聞こえなかったため、急にテンションを上げたことに困惑の表情を浮かべながらも、先導にするスバルの後ろをついていく。

第七話：コンポタージュ味

咲夜は、スバルに盗品蔵へ向かうことに自分も同行することを認めさせた。

そして、道を知っているとと言うスバルが先導し、ともに盗品蔵へ向かうことになった。

盗品蔵に辿り着くまで、幾ばくかの時間はあつたので、その間に咲夜はスバルからできるだけ「異世界」について情報を聞き出そうと考えを巡らせていた。

しかし、咲夜は話を中々切り出せませんでした。

(前回のスバルが口にした『召喚』について、今回は初対面のわたしが、そのことについて質問したら不自然よね……。一先ず、盗品蔵へ向かう目的だけでも聞いときましようか)

「スバルは、盗品蔵という場所に向かうつもりのようにだけど、どうしてそんな場所に行こうとしているの?」

「フェルトっていう小さな金髪の女の子が、徽章ってやつを盗んだんだ。それを取り返して持ち主に返してやりてえんだ」

「自分の持ち物でもないのにわざわざ取り返そうとするの? 持ち主はあなたにとつてそんなにも大切な人なのかしら?」

咲夜は、前回の経験からその持ち主がエミリアだと知っていたが、知らないふりをして聞いた。

スバルは、エミリアとは前回、初めて知り合いになった。

二人で行動していたみたいだが、それも僅かの間だけだったはず。そんなほとんど知らない相手に対して、わざわざ労力を払おうとするスバルの行動の理由が、咲夜には理解できなかった。

「いや、……向こうは俺のことは知らない。俺も相手のことをあまり知らないけど、俺はあの子に助けられたから。だから……うん、俺はあの子の助けになってやりてえ!」

「相手はあなたを知らないって。……もしかしてあなたストーカーと
いうやつかしら?」

「ちよっ?!?違う! いや違わないのか? うわ、そこはかとなく否定でき

ないかも!？」

咲夜はひよつとして、自分が協力しようとしている相手が実はストーカーで、自分はそんな危険な相手の手助けをしようとしているのではないかと考える。

しかし、迷惑を被るのはエミリアだし、まあ良いかと思いつし、「まあ、愛の形は人それぞれだから……いいんじゃないかしら？」

「優しい言葉とは裏腹にそんな、哀れな人見るような目でこつちを見ないで！めっちゃ心が痛いから！それにフオローするようなことを言つて、少しづつ距離を取らないで!!傷つくから!」

「応援はできないけど、邪魔はしないから……。でも相手の迷惑になるようなことをしちやダメよ?」

「分かつてない!この人分かつてないよ!」

咲夜はその後は、「ところでその手に持っている袋は?」「これはコンビニの買い物袋」「ふーん、……コンビニ?」というような、なんでもない会話をしながら、時折スバルをからかい、ともに盗品蔵へと向かい、やがて盗品蔵の前に着く。

「ふう、やつと着いたぜ。盗品蔵のくせにこの俺をここまで苦戦させるとは、やるな!」

「……あなたが道が分かるというからついて行っただけど、ここまで来るのに大分迷つてたわよね。着くまで二時間もかかったじゃないの。日も少し暮れてきたし……」

「う、冷たい視線で見るのは止めて!お願いします! 俺の繊細な心にグサグサと突き刺さる!……でも、相手が銀髪美少女メイドに見つめられていると考えると悪くはないかも?」

スバルは、自身満々に先導していたので、咲夜は土地勘がなかったので、道を完全にスバルに任せていた。

しかし、それがいけなかったらしい。肝心のスバルが、盗品蔵までの道をうる覚えで スバル自身それを認識してはいたらしいが、なんとかなるだろうと楽観的に考えていたらしい。

似たような通りが多く立ち並ぶ王都において、スバルも同様に土地勘がなく、また地名や店名の表記も読むことができず、結果、記憶を

再現しながら道を総当たりすることになった。

そのことを咲夜に責めらるスバル。

「まあ、着いたんだからいいじゃないか！結果オーライだ。さあ、中に入るか」

スバルは場を誤魔化すように言い、盗品蔵の扉の前に立つ。咲夜は、スバルの気軽さのため息を付き、スバルと一緒に扉に近づくが――

「咲夜は、外で待っていてくれないか？すぐに用事を済ませるからさ」「別に遠慮しなくてもいいわよ。ここまで来たんだから最後まで付き合うわよ？」

「いや、……ここは俺一人に任せてほしい」

先ほどまで能天気だったスバルだが、一転して真面目な顔をして咲夜を見つめる。

スバルの目は、咲夜に迷惑はかけまいとする気持ちの他に、どこか咲夜の身を案じているようにも見えた。

流星に咲夜も自分を案じる視線を押しついで、介入する気にはならず、

「……分かったわ。外で待つてる。でも、何かあったら呼びなさい。一応、駆けつけてあげるから」

「一応、かよ。そりゃ、心強いことで」

そういうとスバルは、咲夜に背を向け、盗品蔵の前につた。

咲夜は、盗品蔵から少し離れ、通りからスバルの背中を見つめる。

（スバルの手、震えていたわね……。あの盗品蔵の中で一体なにがあったのかしらね。一応、警戒していつでも中に飛び込めるようにしておくべきかしら。……我ながら人間に対して、少し甘くなつたかしらね。昔はもつと人間に対して、冷たかつたと思うけれど。これもあいつらの影響かもね）

「ビビんな、ビビんな、ビビんなよ、俺。バカか……いや、バカだ、俺は。ここまでできて答えを見ないでなんて帰れるかよ」

スバルは、扉をすぐに開けず、扉の前で少し離れた場所にいる咲夜には聞こえないような小さな声で呟く。

そしてスバルは、おもむろに扉をノックする。
反応が返ってこない。ノックする。

しかし反応が返ってこない。

スバルは反応が返ってこないことに焦りを感じてきたのか、徐々に扉を激しく叩き出す。

「誰か……誰かいるだろ！ 頼むよ、返事してくれ……頼む！」

「——やっかましいわあ!! 合図と合言葉も知らんで何度もドンドンと、扉をぶっ壊す気か!!」

突如勢いよく開かれた扉が、目の前にいたスバルを吹っ飛ばす。

スバルが吹き飛ばされていく光景を咲夜は見ていた。

(人間って扉でも結構吹っ飛ばのね……)

スバルは盗品蔵の入口から五メートル近く後ろに飛ばされ、地面を無様に転がった。

そしてその原因となった扉を開いた人物——顔を真っ赤にさせた大柄な禿頭をした老人がスバルを睨んでいる。

(老人にしては随分と筋肉質なのね。見た目通りのパワータイプって感じかしら)

咲夜は、吹き飛んだスバルを見届けた後、扉の前にいる老人に視線を移して、そう思った。

「なんじゃお前！ 見覚えのない面ぶら下げて、何しにきたんじゃ！」

「どうやってここを知った、どうやってここに辿り着いた！ 誰の紹介じゃ！」

「——お、お近づきの印に、おひとつどうぞ」

スバルは老人の剣幕にすっかりビビり、スバルは咄嗟に、コンビニ袋の中から、ある袋を差し出す。

その袋にはコーンポタージュ味と書かれていた。

「なんじゃ、お前さんは。こやつ仲間か？」

「いえ、わたしは通りすがりですので。その男はお好きにどうぞ」「なあ!？」

大柄の老人は、盗品蔵の近くではないが、見える位置にいた咲夜に気付き、扉を激しく叩き自分の盗品蔵の扉を壊そうとしていたスバル

の仲間かと尋ねられる。

しかし、咲夜はすぐに否定の言葉を返す。

先ほどまで、親身に相手をしてくれた咲夜に内心とても感謝していたスバルだったが、咲夜の一瞬の手の平返しに変な声を出して、驚嘆する。

その後、スバルは、老人に襟首を掴まれ、盗品蔵に引きずられていった。スバルは引きずられながら、咲夜の方へと目を向けたが、咲夜はそんなスバルに口パクで言葉を贈った。

「がんばって」

そして無情にもスバルが盗品蔵の入口をくぐると、その扉は大きな音を立てて、固く閉じられてしまう。

……余談だが、引きずられている時、スバルは悲し気な目をして、「ドナドナ子牛をのくせくて」と歌を口ずさんでいたが、それを見た咲夜は、無性に牛が食べたくなくなったとか。

第八話：門番

咲夜は、盗品蔵にスバルが引きずられて行ったのを見届けた後、暫く盗品蔵の近くで静かに待つ。

しかし、十数分経っても、スバルが盗品蔵から出てくる様子は無かった。

「暇ね。日が随分と暮れてきているから、今日は仕事探しは無理そうね……。どこか寝る場所を見つけれればいいのだけど。最悪、野宿も考えておいた方がいいわね。もし、スバルが宿をとっているのなら、そこに押しかけるのもありね」

咲夜が今の後、どうしようかと考えていると、盗品蔵に一人の少女が近づいてくる。

そして盗品蔵に近くまで来た少女は、少し離れた場所から盗品蔵の方を見ている咲夜に気付いて声をかけてくる。

「あん、なんだ？盗品蔵の方を見て。あんた、ロム爺とこのお客さんか？」

「あなたは……。いえ、わたしはお客さんではないわよ。わたしの連れがお客さんになるかしらね」

咲夜は現れた少女、フェルトの金髪と赤い色をした瞳を見て、紅魔館にいた同じ色の髪と瞳をした吸血鬼の少女の姿を少し思い出しながらも答えを返す。

「ふくん。その連れはどこに？」

「もう中に入っているわ」

「中に入れたのか。ロム爺のやつ、今日はあたしの大口のお客がくるから誰も中に入れなくなって言っておいたのに……」

フェルトは、既に自分とロム爺以外の人間が盗品蔵に入っていることを知ると、文句を言いながら扉の前に立ち、何かの合図なのか、独特の符丁で扉をノックする。

「大ネズミに」

「毒」

「スケルトンに」

「落とし穴」

「我らが貴きドラゴン様に」

「クソつたれ」

合言葉だったのだろうか、フェルトと扉の向こうから聞こえる声が交互に言葉を数回交わし、その後、扉が開かれる。

そしてフェルトは開かれた扉から中に入っていった。

その後も、中で徽章を取り戻すのに手間取っているのか、なかなかスバルは出てこない。

日もすっかり落ち始め、咲夜が空腹を感じ始めた頃、通りから女が一人こちらに近づいてくる。

その女は咲夜よりも少し身長が高く、黒い外套を羽織り、そこから覗き出されている顔立ちは美人のもので年齢は若い。

「あら、あなたが今回の依頼の請負人かしら。出迎えに来てくれたのかしら？」

「いえ、何のことでしょうか？あなたは、この盗品蔵に用が？」

「ええ、少し待ち合わせを置いてね」

咲夜は、現れた女から感じる雰囲気はどこか親近感を抱かされる。

女から醸し出される雰囲気、親しみ慣れた雰囲気に似ているように感じたためだった。

女は、咲夜は無関係の人物と分かると、咲夜から視線を外し、盗品蔵の扉に近づきノックする。

すると扉が開き、中からフェルトが出てきて、その女と二言三言言葉を交わすと、盗品蔵へ女と一緒に入っていった。

その後も暫く咲夜は待たされ続け、疲れを感じ、盗品蔵の真正面にある建物の前にあった樽の上に座り、少し休む。

（ずっと立っているのは、退屈で疲れるわね。美鈴は、毎日門番をしているけど、退屈でないのかしら？何ごともなく時間をただ過ごしていると眠くなるものね。今後はもう少し優しくしてあげようかしら……）

そんなことを考えていると、咲夜は眠気を感じ始め、いつの間にか目を閉じて寝てしまっていた。

しかし、突如、盗品蔵の方から大きな音が響き渡り、また怒声が聞こえ、飛び起きるように目が覚める。

「抜かせ、小娘。——挽肉にして、大ネズミの餌にしてやるわ!」
先ほどの老人の大声が、盗品蔵の中から聞こえる。

木材が壊れるような音や衝撃音も響き渡る。

咲夜は中何が起こっているのか確かめるため、盗品蔵の扉に急いで近づき、扉を開けようとした。

しかし、扉を引いても鍵が掛かっているようで、開かない。

「つく!!鍵か……仕方ない、ぶち破るしかないわね」

咲夜は、鍵で扉が開かないと分かると、強行突入することにした。

第九話：黒い影

咲夜は盗品蔵の扉を体当たりで壊そうとしたが、古びている割に、以外にも頑丈で、一度では壊れず、何度目か体当たりで、扉を破る。

そして壊れた扉から咲夜が中に飛び込むと、スバルとフェルトの姿が視界に入った。

咲夜はスバルの無事な姿を確認し、安堵する。

「あんたは……ああ、そういやこのにいちやんの連れだったけな？」

フェルトは、扉を壊して入ってきた咲夜に驚き、こちらに目を向けるが、入ってきた人物が咲夜と分かるとすぐに、咲夜から視線を外して別の方向に視線を向ける。

スバルに至っては、咲夜に目を向ける余裕もないほど、体を震わせ、目の前の光景に目を離せない様子だった。

そんな2人の様子に疑問を抱いた咲夜は、2人の視線の先に目を向けると、そこには惨たらしい光景があった。

そこには先ほど盗品蔵にスバルを引きずっていった大柄の老人が、血だまりの上に倒れていた。

大柄の老人のその太く逞しかったその片腕は、肘から先がなく、そこから血があふれ出るように噴き出しており、老人の喉にはガラスの割れた破片が、突き刺さっていた。

(死んでいる……わね)

見るものを威圧するほどの大柄で筋肉質の老人は、今や目から光を失っていた。

咲夜はその状況を見て、老人の息が既にないことを悟る。

(一体誰が……)

「あなたは、さつき外で会ったメイドさんね」

咲夜は老人を殺したのは誰だろうか、と考えようとしたとき、女性の声がしたことで、老人の死体の傍に一人の女がいることに気付き、思考を止める。

その女は盗品蔵に、フェルトよりも遅れてやってきた、黒いマント

を羽織った女だった。

女も盗品蔵に入ってきた人物が、外で会った咲夜だと気付いたようだ。

フェルトはその女に対し、敵意をむき出しにした表情で立っており、スバルは、フェルトの後ろで恐怖に怯えたように、震えている。その状況を見て、老人を殺した犯人が誰であるのか咲夜は理解した。

（状況を見るに、老人を殺したのはあの二人ではないわね。殺したのはこの2人でないとするなら、犯人は……）

「よくも、やってくれやがったな……」

「余計に手向かうと痛い思いをするかもしれないわよ」

「反撃しなくても殺す気だろーが、クソサディストめ」

「動かれると手元が狂うかもしれないの。私、刃物の扱いが下手だから」

この状況を招いた原因であろう女とフェルトは、新たに盗品蔵に入ってきた咲夜をそっちのけで口論をし始める。

「……悪かったな、巻き込んで」

フェルトは激高しながらも周りを気遣うほどの冷静さはあったのか、ふと、自身の後ろに震えるスバルに目を向けそう謝罪する。

「……お、おれは」

そのフェルトの言葉に、スバルは恐怖に震えながらも返答を返そうとするが、その返答を最後まで聞く前に、フェルトは突風の如く女に向かって飛び出す。

フェルトはまるで羽のように軽いかのごとく、重力を感じさせないような圧倒的なスピードで、女に向かって走駆する。

普通の人間では、突如彼女が消えたように見えただろう。しかし、「風の加護。ああ、素敵。世界に愛されているのね、あなた。——嫉まっし」

「——あ」

黒いマントを纏った女が、持っていたククリナイフを一閃。

フェルトは、肩を切切り裂かれ、地面を勢いよく転がっていく。

そして、フェルトの体が壁にぶつかり転がる体が止まる。
そしてその後、彼女の体は動くことがなかった。

「紹介が遅れたわね。私の名前はエルザ。新しいお客さん？」

フェルトをいとも簡単に殺した女は、既に物言わぬ死体になったフェルトには興味を失ったのか、咲夜の目を向けると、まるで人に朝の挨拶をするような気軽さで、笑みを浮かべそう挨拶する。

「随分と楽しそうに人を殺すのね、あなた」

「ふふ。わたし、人を切り裂くのが好きなのよ。人のお腹を切り裂いて綺麗な腸を見るのが好きなの。お腹からどろどろと内臓が飛び出てきて、赤いきれいな宝石のような色をした血で染まっっていてきれいなよ。それに切った時に広がる血の匂いは格別ね」

「随分な趣味をしているのね……」

咲夜もいざとなれば人を殺すことに躊躇いを持たないだろうが、あくまでも必要な場合の時だけであって、好んで行うような趣味はない。

「そこのお兄さんもそうだけど、あなたも随分ときれいな腸をしてそうだね。お腹を裂く時が楽しみだね」

咲夜は、盗品蔵前でエルザと会った時と同様に、エルザから感じる気配により、エルザの正体に気付く。

それに似た気配を咲夜は毎日感じてきたのだから――。

「――あなた、吸血鬼ね？」

「あら、よく分かったわね。どうして分かったのかしら？」

「それは――」

「ちよ、ちよっと待てよ！エルザが吸血鬼だって？嘘だろ？」

スバルは瞬く間に2つの死体が出来上がった状況に、恐怖し体を震わせていたが、エルザと咲夜の会話に『吸血鬼』という突拍子もない言葉が耳に入ったことで我に返る。

「わたしの主は吸血鬼で、いつもわたしはその方の傍で仕える者。あなたからは、主と同じような人間からは発せられない気配を感じたのよ」

「へえ。私以外の吸血鬼を知っているのね。なるほどね。あなたに興

味を持ったわ。それとあなたのその主とやらにも会ってみたいものね」

「咲夜の主が吸血鬼だって?……もしかして咲夜も吸血鬼なのか?」

咲夜の回答を受けた2人の反応は対称的で、エルザは他の吸血鬼の存在を知っていることで納得し、興味深そうにする一方で、スバルは咲夜が吸血鬼に仕えているという驚きの事実から、混乱し、咲夜も実は吸血鬼なのではないかと不安に駆られる。

しかし、スバルの不安は杞憂であった。

「いいえ、わたしは普通の人間よ」

「……そっか。咲夜も吸血鬼なのか。そうだよな、話の流れから……って違うのかよ!」

「あら?わたしも吸血鬼の方が良かった?あなた吸血鬼のフエチなの?血を吸われるのが好きなのかしら?……変態ね」

咲夜は、相対しているのが吸血鬼で、状況は悪いものだと感じていたが、焦りを表に出さず、平静を装い、スバルに冗談交じりの軽口を叩く。

「ぐっは!美少女のメイドさんから言われると、の刃が心に突き刺さる。……でもなんか目覚めそうグサツとくるぜ!そんな性癖はしていないつもりだけど、その冷たい眼差しをして口から放たれるその鋭い言葉」

スバルも恐怖から目を反らすために咲夜の冗談に言葉を返す。

しかし、咲夜とふざけた会話は、少しは緊張を解くのに良かったようで、スバルの体の震えは収まる。

「ふふ、わたしもメイドさんと楽しく語っていたいけど、仕事の都合があるから、あまり悠長にしていられないの。だから、——」

エルザは突如、スバルに向かって駆ける。女性にしては長身な彼女であったが、その体のスピードは速く、あっという間にスバルの懐まで到達する。

「——先にお兄さんから切らせてもらおうわ!」

「スバル!」

会話途中で、いきなりスバルに襲い掛かるエルザに、咲夜は反応が

遅れ、スバルに呼びかけるので精一杯だった。

咲夜はスバルがそのままエルザに切られるの光景を想像したが、――

「――なめるんじゃ、ねえ!!」

「ぐっ!!」

スバルはエルザが腹に向かってククリナイフで攻撃してくることを予測していたかのような動きで、後ろに飛びながら腹を引っ込めることで、エルザの攻撃を躲した。

そして回避した勢いそのまま体を回転させ、回し蹴りをエルザに向かって放ち、エルザの顔面に打ち当てたのだった。

スバルから蹴られたエルザは、攻撃された衝撃で弾かれるようにスバルから距離をとる。

「ああ、――今のはとても、感じたわ」

「スバル!無事のようなね……少し見直し――」

咲夜はスバルの傍に駆け寄り、無事であることに安心しかける。

しかし、一拍遅れ、スバルの腹から血と内臓が飛び出す。

血は勢いよく飛びちり、駆け寄った咲夜の顔にも少し付着したほどだった。

『えっ?』

無事だったと考えていた2人は、スバルの体から血が噴き出たことに驚く。

スバルは、自分の体からこぼれる血を、信じられないような表情で見ながら、体をふらつかせ、そのまま体を後ろに倒れそうになるが、咲夜にその体を支えられる。

「驚いた? すれ違いざまにお腹を開いたのよ。これだけは私、得意なの。それにしてもやっぱりあなたの腸は、とてもきれいな色をしていたわ」

エルザは笑みを交えて、得意げに言ったあと、スバルの体からこぼれた内臓を見て、恋をする少女のようにうっとりとしてその顔を赤らめる。

その彼女の表情はどこか妖艶で、男が見たらさぞ色気を漂わせた彼

咲夜は、時間の巻き戻しを行っていた犯人が、スバルではなく黒い影の存在によるものであると理解する。

そして咲夜は時間の巻き戻りに伴い、周りの光景が変わっていくのを眺めていたが、スバルの傍にいる黒い影は未だに消えず、咲夜の方に向き、何か言葉を呟く。

「スバル・、た・けて」

とどこどころ途切れた言葉を呟かれたあと黒い影は消え去る。

そして、気付くと咲夜は前回のスタート地点であった路地裏の道に立っていた。

「はあ。またここに戻ってきてしまったのね。一からやり直しね」

（でも、収穫はあったわね。時間の巻き戻しを行っている犯人が分かった。……人かどうかも怪しいけどね。それに——）

咲夜は、あの黒い女の影の存在が、悪意のある存在には感じられなかった。

少なくともスバルにとっては。

「スバルをたすけて……か。問題は何一つ解決していないし、謎は深まるばかりね……。元の世界に戻る手立てもなし。ひとまずは、スバルを助けることから始めましょうか」

咲夜はそう呟くと、前回と同じように足元に落ちていた黒い本を拾い、ポケットに入れ、スバルと出会った道の方へと足を進める。

第十話：劍聖

「え!!?」

前回と同じように路地裏の道を曲がると、咲夜の目にしたのは、スバルが血を流し倒れていた姿だった。

その光景を見て、咲夜はすぐに状況が理解できず、驚ろきの声を上げる。

「誰だ!?!」

「・・・女?」

スバルの近くには3人の男の姿があり、それは咲夜がこれまでに2度も見たことのあるチンピラの男達であった。

咲夜は、男たちの内の1人が血が滴ったナイフを持っているのを見て、スバルがその男達に刺されたのだと、悟った。

(まずいーすぐに手当てをしないとスバルが死ぬ――)

スバルが死んでしまうことを懸念した咲夜だが、あの盗品蔵で見たことのある黒い影が、スバルの近くに纏わり付いており、時間が停止し、周りの景色が変わり始めるのを見て、また時間が戻されていることに気付く。

どうやら、前回予想した通り、スバルの死を発動条件として、時間が戻されるらしい。

(……遅かったか。それにしてもいきなり死ぬなんて……。スバルは死神にでも愛されているのかしら? 幻想郷とは違い、こちらの死神はなんて働き者なのかしらね。少しは幻想郷を見習って欲しいものだわ)

咲夜はスバルの死に安さから、まるで死神に呪われているのかと、三途の水先案内人の死神を思い出す。

そして時間の停止している状態が終わり、元の場所に戻されていることを確認すると、咲夜はすぐに行動に移る。

スバルにまたすぐ死なれると困るからだ。

「衛兵さーさーさーさーさーん!!! 誰かさーさーさー! 男の人呼んでさーさーさーさーさー!!!」

(これはスバルの声。助けを呼ぶなんて、少しは学習したようね)

足元の黒い本を忘れずに回収すると、咲夜はすぐにスバルの元へと走る。

「やっぱ、失敗か……」

「おどかしやがって……ほんの少しばかりだが、ビビっちまったじゃねえか」

「ほんの少しだけな！」

「ほんのちよびつとだけだけどな！」

路地裏にはチンピラの男達3人とスバルが向かい合っていた。

スバルが大声で助けを呼ぼうとしたことに焦った男達だが、しばらくしても誰も人が現われず、スバルの試みが失敗したと、チンピラ達は安心して、各々の武器を取り出し構える。ナイフ、錆びた鉞。そして、「ひとりだけ無手つてなんなの。武器買うお金がなかったの？」

「うるっせえな！ 俺は武器ない方が強いんだよ！ あんま舐めた口きいてつと、本気で殴り殺すぞクソがッ！」

「残念だけど、それが叶うことはないわ」

突如、その場に女の声が聞こえ、それと同時に2つの物体が、スバルの横を過ぎ去り、チンピラの元へ飛んでいく。

それは、武器を持っていた2人のチンピラたちの手に当たり、男たちは衝撃で、それぞれが持つ武器を落とす。

「いてえー！」

「ぐっ……誰だ!!」

その場の全員が、物体が飛んできた方向に目を向けると、そこには美しい銀髪をした少女がいた。

「……サテラ?」

スバルは思わず、目に飛び込んできた銀髪から、美しい銀髪のハーフェルフの少女を想像したが、目の前の少女がメイド服を着ており、よく見ると徽章を探していた少女ではないことに気付く。

「いや、違う。あれは……」

「今はわざと柄の方をぶつけてあげたけど、それ以上やるならあなたの頭からナイフが生えることになるわよ?」

「なっ?!?あの距離から当てたのか!!」

咲夜からチンピラ達からの距離は、10メートル以上の距離はあった。

咲夜はそこから2つのナイフを同時に狙った場所に当てたのだ。

ナイフ投げに対してそうとうの技量の持ち主であることをその場にいる者たちに知らしめるのに充分であった。

「おい、どうする?」

「だ、大丈夫だ。こっちは3人いるんだ。一斉に飛びかかれば、なんとかなるだろ」

「でも、あの女、ここから少し距離があるぜ。それまでに誰か、頭からナイフを生やすかも……」

チンピラたちは急に咲夜が現れたことで、状況が変わったことに動揺する。

チンピラたちは、人数差があるので、戦うか、逃げるか判断に迷い始める。

「——そこまでだ」

その場の人間以外の、凜とした男の声が、路地裏に唐突に響きわたる。

声に反応し、全員の視線を集めた先には、ひとりの青年が立っていた。

炎のように赤い頭髮した、青い瞳をし整った顔立ちをした、騎士剣を下げている男だった。

「たとえばどんな事情があらうと、それ以上、彼らへの狼藉は認めない。そこまでだ」

言いながら、チンピラたちの後ろの方から現れた青年は、堂々とチンピラ達の隣を抜け、スバルと咲夜を背中にする形で間に割って入り、彼らと相對する。

咲夜は、その男には見覚えがあった。

初めてこの世界にやってきた時に、黒い本の騒ぎで敵対することになった男だ。

名前はラインハルトといったか。

「ま、まさか……」

「燃える赤髪に空色の瞳……それと、鞆に竜爪の刻まれた騎士剣」

「ラインハルト……『剣聖』ラインハルトか!？」

「自己紹介の必要はなさそうだ。……もつとも、その二つ名は僕にはまだ重すぎる。逃げるのならこの場は見逃す。そのまま通りへ向かうといい。もしも強硬手段に出るといふのなら、相手になる」

「これで三対三ね。人数で優っていたあなたたちだけど、これで五分五分ね。いや、剣聖さんとやらがいるから、こっちは圧倒的に有利な状況になったのかしら？」

チンピラ達がラインハルトが現れ、狼狽しているところに、咲夜に不利な状況にあるのはお前たちだと、明言した言葉は、男たちを完全に怖気づかせ、逃走へと行動を移させる。

「じよ、冗談っ！ わりに合わねーよ！」

チンピラ達は、咲夜たちに背を向けると、その場を、足を纏れさせながらも走って逃げていく。

逃げていくチンピラたちの背が完全に見えなくなったことを確認すると、ラインハルトはこちらに向き直り、声をかけてくる。

「無事でよかった。ケガはないかい？」

「あんだけのこととしてこの爽やかさ……イケメンってレベルじゃねえぞ」

「このたびは命を救っていただき、心からお礼申し上げます。このナツキ・スバル、その御心の清廉さに感服いたしますれば……」

「そんなに堅く考えなくても構わないよ。向こうも三対三になって、優位性を確保できなくなつてのことだ。僕がひとりならこうはいかなかった」

「いや、あのビビりようからしたら三対一どころか十対一でも逃げてそうだったけど……なんだ、このイケメン。本気で身も心もイケメンか。俺ルートのフラグが立つわ!」

スバルとラインハルトは、お互いの性格が合ったのかすぐに仲良く会話を始める。

ラインハルトは、スバルの元気そうな姿を見ると、今度は咲夜の方

へ振り向き、無事がどうか聞いてきた。

「君も大丈夫だったかい？」

「ええ、おかげさまで問題なく」

「いや、スバルにも言ったけど、僕一人ではこう上手くいかなかった。君が僕の発言を後押しするような発言で、あの男たちが逃走を図るよう誘導してくれたからね」

「そうそう、さく……メイドさんもありがとうな！あのナイフ投げの腕には痺れたぜ！やっぱり異世界の美少女メイドは戦闘力も持ち合わせているのな！」

咲夜は相変わらず調子の良いスバルにため息を尽きたくなるも、我慢し、スバルに忠告する。

「あまり、人通りの少ない路地裏には行かない方がいいわよ。あなた弱そうで、いいカモに見えそうだし」

「うう……。確かに引きこもりであんま運動していなかったけど、これでも毎日欠かさず筋トレして鍛えているんだけど……」

美少女の咲夜に弱そうだと言われ、少し男のプライドが傷ついたスバルは、言い訳がましくそう呟く。

「えーっと、ラインハルトさん……でいいんスカ？」

「呼び捨てで構わないよ、スバル」

「さらっと距離縮めてくるな……えっと、改めてありがとう、ラインハルト、それと……メイドさん」

「どういたしました。衛兵を呼んだ君の判断は正しかったよ」

「わたしのことは咲夜でいいわ。ふふ、あんな叫びを聞いたら気になっちゃうわよ。あなた、微妙に女の声を真似て叫んでたでしょ？なかなか面白かったわよ？」

「うげーどうかそれは忘れてください。俺の黒歴史がまた一つ増えて……。あ、あとラインハルトって衛兵なの？そうは見えないけど」

新たに黒歴史を作ってしまったことを自覚したスバルは、その話題から逃げるように、ラインハルトに質問し、話を強引に変える。

咲夜はそれが話を逸らすための質問であることは分かっていたが、咲夜も気になったことでもあったため、追及しなかった。

「よく言われるよ。まあ、今日は非番だから制服を着ていないのも理由だろうけど」

『剣聖』とか呼ばれていたわね」

「家が少しだけ特殊だね。かけられた期待の重さに潰れそうな日々だよ」

ラインハルトは苦笑しながらもそう答えた。

咲夜は剣聖と聞き、やはり只者ではなかったか、と納得する。

以前に対峙した時の迫力は並みの者では出せない迫力であったからだ。

「そうだ！2人には聞きたいことはあるんだけど、このあたりで白いローブ着た銀髪の女の子って見てない？」

「白いローブに、銀髪……」

「付け加えると超絶美少女。で、猫……は別に見せびらかしてるわけじゃないか。情報的にはそんなもんなんだけど、心当たりとかってない？」

「ううん、すまない。ちよつと心当たりはないな。もしよければ探すのを手伝うけど」

「そこまで面倒はかけられねえよ。大丈夫、あとはどうとでも探すさ。咲夜の方は何か知らないか？」

「残念だけど、わたしも心当たりはないわ」

スバルに問われている人物が、エミリアのことであることは咲夜には分かっていたが、今回は、エミリアには遭遇していないため、スバルに見てないと、返す。

「そつか。情報なしか……。じゃあ、2人には世話になったな。この礼はいずれ。ラインハルトには衛兵の詰所とか行けば会えるのかな？」

「そうだね、名前を出してもらえればわかると思う。もしくは今日みたいな非番の日は、王都をうろうろしてるから」

「わざわざ男を探して町をうろつき回る趣味はねえなあ……乙女ゲーじゃあるまいし。あ、咲夜さんはどこにいても探し出して——」

「その咲夜さんはやめなさい」

「……イ、イエス、ママ」

スバルは絶対零度の目をした咲夜に首元にどこから出したのか、その手に持つナイフを突きつけられ、首元に冷汗を流しながらそう答えた。

「じゃ、じゃあ、俺はこれで……」

そうスバルはいうと、そそくさと逃げるように路地裏から通りに出ていった。

ラインハルトは、そのスバルの背中を見届けたあと、まだその場に残っている咲夜の方に目を向けると、咲夜は路地裏の地面に手を伸ばしていた。

「何をしているんだい？」

「ナイフを拾っているのよ。いちいち投げたものを回収するのは面倒だけど、数に限りがあるから」

「スバルが言っていた、投げナイフだったかな。僕はその時には居なかったけど、すごかったんだって？」

「……ただの一芸よ。」

咲夜はラインハルトの値踏みするような視線にから逃れるように2本のナイフを素早くナイフホルスターに回収していく。

そして、ラインハルトが去ろうとしていたスバルに気を取られている間に隠れて拾った、チンピラの落としていったククリナイフも、空間を広げたポケット内にあることを確認すると、その場をすぐに立ち去ろうとした。

「じゃあ、わたしも行くわ。ナイトさん」

「ああ、今のルグニカは平時よりややこしい状態にある。気を悪くしてほしくないんだけど、その銀髪の髪はいたずらに目立つだろうから気を付けて」

「……忠告ありがとう。一応、注意しておくわ」

ラインハルトの言葉にいくつか疑問が沸くものがあつたが、今はスバルの後を追いかける方が先決のため、その場をすぐに去ることにした。

そして咲夜はスバルが出ていった方向と同じ道から路地裏から出

て
い
っ
た。
。

第十一話：クソツタレ

咲夜はラインハルトと別れ路地裏を抜けると、スバルの姿を探した。

しかし、辺りを見回してもスバルの姿を見つけることはできなかった。

どうやらラインハルトに呼び止められている間に、スバルは遠くに離れてしまっていたようだった。

（まあ、いいわ。どうせ目的地は盗品蔵だろうし、そちらに直接行けばいいか）

スバルの姿を完全に見失ってしまった咲夜だが、スバルの目的地が盗品蔵で、スバルと道に迷いながらではあるが、一度盗品蔵には行ったことがあるので、だいたいの位置も分かるため、咲夜が焦ることはなかった。

そして、念のため、もう一度辺りを見回しスバルが近くにいないことを確かめると、咲夜は盗品蔵へと足を進めることにした。

咲夜は辺りに視線を巡らし、気がないことを確認する。

そこは高い建物に囲まれた細い路地だった。

咲夜の足は地面から離れ、そのまま垂直に浮かび上がっていく。

そのまま浮かび続け、建物の高さを超えると、建物の屋上に着地する。

「進む方向はあっちね」

——盗品蔵へと向かう咲夜は、道を思い出しては進み、時折、人が辺りにいないことを確認すると、こうして空を飛んで建物の屋上から現在地と進んでいる方向が合っているか、確認していた。

この方法により、王都の入り組んだ道を、比較的迷うことなく、無事咲夜は盗品蔵前に着くことができたのだった。

空を飛んでそのまま直接盗品蔵に向かえばもっと早くに着けただ

ろうが、まだこの異世界の知識をあまり持たない咲夜にとって、うかつに目立つことは避けるべきと考え、空を飛ぶのは、付近に人がいないことが確認できたときと決め、道が合っているかの確認だけに留めた。

「着いたわね。辺りにはスバルの姿は見えないけど、まだ着いていないのか、それとも既に中に入ったのか……。いづれにしても中を確認する方が良さそうね。スバルが居ればよし。居なければ、中で待つか」

以前の時と同様、古ぼけた建物である盗品蔵の前に着き、咲夜はスバルが近くに居ないことを確認すると、建物の中に入ることにした。

盗品蔵に入るためには、合図や暗号が必要であったが、咲夜は前回フェルトが建物に入った時のことを覚えていたため、フェルトの動作を真似ることで盗品蔵に入れるのではないかと思い、試すことにした。

咲夜が盗品蔵の扉前に行くと、フェルトが行っていたように独特の符丁でノックをする。見様見真似で試してみたが、中から返事が返ってくる。どうやら上手くいったようだ。

「大ネズミに」

「毒」

「スケルトンに」

「落とし穴」

「我らが貴きドラゴン様に」

「クソつたれ」

その後、合言葉のやり取りを終わらせると、扉が開き、中から大柄の老人が顔を出す。

咲夜は老人の顔を見て、すぐには誰だか分からなかったが、前にエルザに殺されたであろう老人と同じ人物であることに気付く。

（まだこの老人が生きているってことは、まだことは起こっていないよね）

老人は合言葉を返してくる声から相手がフェルトではないことに気付いていたため、咲夜を訝し気な眼差しで見ってくる。

「盗品蔵の合言葉を知っておるといふことは、客だろうが、お主、何用でこの盗品蔵に来た？」

「フェルトって子が盗んだものについて、用があるの」

「フェルトの……。なるほどのう、今晚フェルトが持ち込む品物があると聞いたつたが、その依頼主がお主だな？」

「厳密には違うわね。わたしの知り合いがソレに用があるだけで、わたしはその付き添い。先に盗品蔵に来ただけよ」

「ううむ……。分かった。なら中に入つとれ。そのうちフェルトとお前さんの知り合いとやらも訪れよう」

老人は、フェルトに前もって言い含まれていたのか、盗品蔵で依頼主との交渉も行うことを知っていた。

ここまで来ると咲夜にも経緯が読めてきた。

おそらくエルザがフェルトにエミリアの徽章を盗むように依頼したのだろう。

咲夜は老人がその依頼主との関係者と勘違いしているようだが、中に入るには都合が良かったのでそのまま訂正せず、老人に続いて盗品蔵に入る。

「中は酒場のようになってるのね」

「表向きは、じゃがな。裏では今回のように盗品蔵の取引を行う場所としても使用することがある」

咲夜は前回は余裕がなかったので、落ち着いて建物内を見回し、観察する。

(少し狭いけど、いざとなれば相手から距離をとって、ナイフを投げながら戦うこともなんとか可能そうね)

咲夜はカウンターにある一つの席に座り、フェルトとスバルを待つことにした。

理想としては、エルザが来る前にスバルが徽章を手に入れ、スバルとともに盗品蔵を立ち去ることだ。

「それにしても、合言葉のクソツタレって、もう少しい言葉はなかったのかしら？ 女性に言わせる言葉ではないわよ？」

「そんなもん、こっちの勝手じやろうが。それにこんな場所に来る奴

なんて、どうせ碌な奴しかおらん」

老人の言いようはひどいものだったが、一理あると咲夜は納得し、それ以上の文句は言わなかった。

貧民街の盗品蔵に来るような人は大抵、後ろ暗い人物しかいないだろう。

「一応聞いておくが、お前さん、メイド服を着て綺麗な身なりをしているが、お前さんの知り合いとやらは金はあるんじゃないかな？」

「知らないわ。でも、あまりお金を持ってそうには見えないわね。持っていないんじゃない？」

「……それじゃ、話にならないだろうが」

咲夜はニツコリと笑みを浮かべながら堂々と言い、思わず老人はその綺麗な笑顔に見とれ、呆然する。

しかし、その後、咲夜の発言の意味を理解したのか、呆れてため息を付く。

「実際にお金を用意してくるかは、知り合いに直接聞かないと分からないわね。暫く待っていれば来ると思うのだけれども……」

「お前さんの知り合いとやらはどんなやつじゃ？」

「わたしくらいの年齢の男で、目つきの悪い幸薄そうな顔をしてる奴ね」

「幸が薄いつて……。まだその男には会っていないが、なんじやか同情しちゃいそうじゃの。まあ、せいぜいフェルトにふんだくられないよう気を付けることじゃな」

「忠告ありがとう」

咲夜に幸が薄いと言われた男に一瞬同情してしまった老人だが、咲夜に最後に忠告すると、酒瓶を取り出しラッパ飲みしはじめた。

「そういえば、これを拾ったのだけれど、値段にすればいくらくらいになるかしら？」

「ん？なんじや？何か鑑定してほしいのか？」

「鑑定ってほどでもないけど、一応どれくらいの価値があるかぐらいは知っておこうかと思ってね。ああ、後これは私物なのだけれどこちらも鑑定してくれるとありがたいわ」

咲夜は先ほどチンピラから回収したククリナイフと自身の愛用の銀のナイフを1本取り出し、老人に見せる。

老人は咲夜の言葉を聞き、ナイフとククリナイフを手に取り、眺め始めた。

老人は暇だったこともあり、文句も言わずに鑑定をしてくれるよう。

老人は暫く眺め鑑定が終わったのか、ククリナイフと銀のナイフをカウンターに置き言った。

「お前さんなかなか物騒なもん持つてるの。……こちらの銀のナイフはよく手入れがされておる。それに銀製でしっかり作られていて、なかなかの価値がありそうじゃわい。しかし、ものはただのナイフ。質が良いから好事家相手なら銀貨40枚くらいってところじゃろう。反対にこつちのククリナイフは手入れがされていない上に、安物じゃな。少し錆もあるし、ククリナイフは銅貨15枚ってところじゃな」
「その銅貨15枚ではリングって果物はいくつくらい買えそうかしら？」

「なんじゃ、お前さんリングが好きなのか？……そうじゃな、大通りのリング売りなら銅貨2枚で1個ってところじゃな。つまり……」

「8個ね」

「いや、銅貨1枚足りないから、7個じゃ」

「いえ、8個よ。大通りにいた、いかついリング売りは美人には弱そうだもの」

その咲夜の言外に自分は美人である、という当たり前の事実を述べたのかのような発言に、老人は破顔する。

「がははは。お前さんは将来大物になりそうじゃの！」

（ひとまず、当面のお金はこのククリナイフを売れば、問題なさそうですね。宿は最悪野宿も検討して……。私物のナイフの方はあまり売りたいはないけど、いよいよお金に困ったときには、最終手段として考えておく必要があるわね）

そうして鑑定が終わわり、ナイフをしまった後も、咲夜と老人がその後も暫く楽しそうに会話を続けていると、扉の方からノックの音が鳴

る。
どうやら新たな訪問者が来たようだ。

第十二話：交渉

咲夜と老人が話していると、盗品蔵の扉がノックされる音がする。「誰か来たようじゃの。お前さん連れか、もしくはフェルトが来たってことかのう？」

老人は訪れた人物を迎えるため扉前まで移動し、先ほどの咲夜と同じように合言葉を投げる。相手もそれを承知していたのか、すぐに返事が返ってくる。

「大ネズミに」

「ホウ酸団子ってどこで売ってんの？ 毒」

「スケルトンに」

「意外と掘るのって労力いるよな。落とし穴」

「我らが貴きドラゴン様に」

「ファンタジー世界だから実際いるんだろうけど、マジ直接対面したらなんにもできないこと請け合い。でもロマンだから会いたいのも事実。そんな曖昧な自分の心に嘘をつくこともできなくて、ところがそんな自分がやっぱり嫌いじゃない。クソったれな気分」

「余計な枕詞つけんと合言葉も言えんのか！ 余計に腹立たしいわ！」

扉から返ってくる合言葉の独特のふざけた言い回しの言葉から、スバルが言っているのだらうと咲夜は苦笑する。

老人はスバルの合言葉の返しに怒鳴り散らしながらも律儀に扉を開き、スバルと口論をしながらも中に迎え入れる。

咲夜の予想通り、老人が明けた扉からはスバルが入ってくる。

しかし、スバルだけでなくフェルトの姿もあった。

どうやらスバルは先にフェルトと合流してから盗品蔵に来たようだった。

「あれ、そのメイド姿は咲夜？」

「先ほどぶりね、スバル」

「どうして咲夜がここに？」

「あなたに聞きたいことがあってね。さっきは聞きそびれてしまった

からあなたを探していたの」

「俺を探して？それにしてもよく俺が盗品蔵に来るって分かったな」

「それはあなたが、銀髪の少女を探していたからよ」

「？」

咲夜がスバルを探し当てた理由が、「エミリアを探していたから」と返事を返されるが、スバルには意味は分からなかった。

咲夜はスバルに近づき、スバルだけに聞こえるよう囁やき、説明する。

咲夜が近くに来てスバルは顔を赤くするも、咲夜の声に耳を傾ける。

「あの後、フェルトって子が銀髪の少女から盗みを働いていたことを思い出したのよ。わたしはその場を見てたから」

「咲夜はその盗難の現場にいたのか……」

勿論、咲夜がエミリアからフェルトが徽章を盗んだ現場を目撃したことは、嘘である。

しかし、誰もその事が嘘と分かる人間もない。

そして、これまでのエミリアやスバルとの会話で、大凡の事情を理解していた咲夜は、知っている事実をさも目撃したように述べることで、咲夜の話に信憑性を持たせていた。

スバルが知る事実とも矛盾しないため、嘘と疑わずに信じたようだった。

「あなたの探している徽章を盗まれた少女は、盗みを働いたフェルトを探すだろうし、調べてみれば盗品は、この盗品蔵に持ち込まれるって話だったから、ここにいればもしかしたら銀髪の女の子にもあなたにも会えるかも、と考えたのよ。わたしの見かけた銀髪の女の子が、あなたの探している少女と人違いだったらダメだったでしょうけど、どうやらここでは銀髪は珍しいようだから」

咲夜はラインハルトに銀髪はいたずらに目立つと忠告されたことを覚えていた。

そして、王都というだけあって、人はたくさん見かけたが、これまで銀髪をした人物は、自分を除けばエミリアくらいしか見かけなかった。

た。

ならば、同一人物である可能性が高い。

咲夜はスバルにそう説明する。もつとも、時間逆行を認識している咲夜は同一人物であることを分かっていたが……。

「すげえな、咲夜。それだけの情報でここまで推理できるなんて……。美人で強くて優しくって頭いいって何それ？完璧美少女？しかもメイドで銀髪だし。俺の世界にはそんな女性はいなかったぜ……。さすが異世界ファンタジー。侮れないな……。そう言えば、咲夜が俺に聞きたいことって？」

「その話は後にしましょう。あなたはここに用事があつて来たんでしよう？」

スバルが咲夜の質問内容を聞こうとするが、咲夜に先に用事を済ませるように言われ、スバルも早く徽章を回収しないとまたエルザがいつ盗品蔵に訪れるか分からない事実を思い出し、用事を優先することにすることにしたようだ。

「さて、爺さん。さつそくだけど本題に入りたい」

「なんじゃ？」

「頼みたいのは鑑定、って感じになるかな。俺の持ってきた『魔法器』に値段をつけて、それをフェルトに対して保障してもらいたい。そんなもつて、それとフェルトが盗んできた徽章と取引を行いたい」

あらかじめ咲夜からスバルが商談に来ると話を聞いていた老人は、スバルの話に真面目な表情をして聞く。

スバルが懐から携帯電話を取り出す。

金属質な見た目で独特な色をしていたそれは、咲夜の目から見ても興味を引くものであった。

少なくとも幻想郷では見かけたことはなかった。

香霖堂に行けば、見つかるかもしれないが……。

「これが魔法器。さしもの儂も見るのは初めてじゃが……」
「変わった形状をしているのね。」

「たぶん世界に一個しかない。あと、わりとデリケートな機械だから扱いには注意。ぶつ壊されるとマジで死ななきやいけないレベル」

スバルの話聞き、スバルから携帯を受け取った老人の手つきがより慎重なものになる。

そして、折り畳み式の携帯を開く。

起動音とともにわずかな光で照らされて画面が表示されたことに、スバル以外の人間は驚いた。

「この絵は……」

「タイミング的にちょうどいいかと思つてな。効果のほどを見せつける意味で、フェルトちゃんの一日を待ち受けにしてみた」

咲夜も携帯を覗き込んでみると、その画面にはフェルトの画像が表示されていた。

「これは驚いた。こんだけ精巧な絵を描けるもんはおらんじやろくな」

「時間を切り取つて、そこに封じ込める魔法器さ。人の手によるもんじゃ、到底できない綺麗さだろ？」

「これは確かに恐れ入ったわい。もしも儂が取り扱うなら、聖金貨で十五……いや、二十枚は下らずにさばいてみせる。それだけの価値はある」

「とまあ、俺の手札はこんな感じだ。宣言通り、聖金貨で二十枚以上の品物。これでお前の徽章との物々交換を申し込みたい」

咲夜は、なるほど上手い表現をするものだと思つた。

咲夜は携帯の存在は知らなかったが、この画像に似たものを知っていた。

ブン屋がよく持ち歩いているカメラという機会ですら写される写真というものだった。

そしてこの機械はそれに似た、もしくは同じ機能を持っているのだろうと推測する。

スバルはその撮影の機能をさも魔法のような道具と思わせて説明し、それは相手により価値あるものだと思わせるだけの効果があった。

咲夜は内心で少しスバルの評価を上改めた。

(会った時は平凡な男かと思つたけど、意外と口は回るようね)

咲夜は、スバルとフェルトたちの交渉に関して、特にスバルに手助けするわけでもなく干渉するつもりもなかった。

いつエルザが訪れるかは分からないとはいえ、前回に来たときは日が暮れてた後だったため、まだ交渉するくらいの時間はあるはずだ。

咲夜はスバルから聞きたいことがあるが、スバルが死ぬとまた逆戻りしてしまう可能性があるため、事の顛末が無事に終わることを優先した。

「ま、それが金になるって保障がついたのは素直に嬉しいさ。聖金貨二十枚つてのも疑わないで済みそーだし。アンタの手札は了解した」「だろ!? んじゃ、交渉成立ってことで。うまく売るのはそっちのやりようだ。ガンバ！ それじゃ俺は急ぐんで、ここらで失礼させてもらおうかと……」

スバルはエルザのことが後を引いているのか、交渉をなるべく早く終えようと焦っていた。

そしてその焦りは交渉ごとにおいて相手に見抜かれると、不利になる可能性があるものだった。

(焦りすぎよ、スバル)

「ちよつと待て。なんでそんなに急いでんだ?」

「急いでるとか、そんなこと別にねえですよ? あ、あとあんま顔、近付けんな」

「なんだよ。女の子の顔が近いと照れちゃうタチか?」

「いやお前、何日か風呂とか入ってねえだろ。目に沁みる刺激臭がする」

スバルはフェルトから顔を下から殴られ、倒れこんだ。

その際に舌を噛んだのか、少しスバルは涙目で抗議する。

「女相手に容赦ねーな!」

「お前もちよつとした軽口に容赦ねえな!?! 早くも流血沙汰だよ!」

「そんな臭うかな……」

「ほら、二人とも話が逸れているわよ。交渉をしていたんじゃないの?」

フェルトは少し傷ついたようで、自分の髪の毛の匂いを嗅ぎ気にしてる

ようだった。

咲夜は、交渉の場に口を挟むつもりはなかったが、話が逸れてきていたので、軌道修正をしてやることにした。

咲夜の指摘に話が変わっていることに2人は気づき、話は戻る。

「……話を戻すけど、兄ちゃんは何でそんなに急ぐんだよ?」

「人生ってのは有限なんだ。一秒一秒を大切に、無駄を極力省くことで……」

「あー、はいはい。そーゆーのはいいんで。つかさ……」

スバルは何とかごまかそうとするが、フェルトはそんなスバルの核心を突くような質問を投げた。

「そもそも、なんで兄さんはこの徽章を欲しがんだよ?」

(はあ。これは少し長引きそうね。……仕方ない、少し助け舟を出してやるか)

咲夜は、交渉において、スバルの旗色が悪くなってきたことを感じると、口を挟むことに決める。

「それは——」

「それはね、わたしのためなのよ。」

スバルが言葉を返そうとしたセリフにかぶせるように、咲夜は言葉をそう発した。

第十三話：プレゼント

「それは——」

「それはね、わたしのためのよ。」

フェルトに問いただされ、返答に窮していたスバルが、ついに正直に理由を話そうとしたが、スバルではない人物から答えが返される。

『え?』

スバルの代わりに返答したのは咲夜だった。

そして、思わぬ方向から、思わぬ理由での返しにフェルトとスバルの両方から疑問の声があがる。

「少し、時間をもらっていいかしら? ちよつとスバルとだけで話したいのだけれども。」

「え? ああ、別に構わないけど……」

「ありがとう。スバルちよつと来なさい」

「ええ!!? ちよ、ちよつと……」

フェルトは驚いている状態からの突然の咲夜の質問に反射的に了承の声を返してしまう。

フェルトから了承の言葉をもらうと、咲夜はすぐに戸惑うスバルの手を引いてフェルトたちから距離を取った。

「焦りすぎよ、スバル。交渉はスキを見せた方が負けよ。」

「あ、ああ。でも、徽章はなるべく早くもらわないと、エル……フェルトの依頼人が来ちゃうから」

「……フェルトに盗みの依頼を出した人がくるかもしれないってことね? 盗みを依頼するような人だからいい人ってことはないでしょうね。依頼人が来て話がややこしくなる前にスバルはその人が来る前に交渉を済ませたいと?」

「そうだ。でもフェルトは俺の魔法器を使って、依頼人の交渉額を吊り上げようとするかもしれない。でもそれは——」

「——こちらとしては都合が悪いってことね」

スバルは咲夜の考える通り、エルザと遭遇する前に交渉を終わらせ徽章を手に入れようと考えていた。

しかし、スバルの提示した魔法器が思わぬ高値の価値を持つことを知ったフェルトは、エルザと競わせることで、さらに取引額を上げようと企らむかもしれない。

スバルは咲夜に説明することで、いかに現状の時点で達成が難しいか、自分でも再認識したのか、顔色を青くする。

「あなたはその交渉相手のこととか、何か情報を持っていないの？向こうは何を条件に支払いを行うのか、とか」

「フェルトは依頼人から聖金貨十枚で依頼されたい。そして依頼人は最大で聖金貨二十枚まで出せる。でも、俺は最低でも聖金貨二十枚以上の価値がある魔法器を持っている」

「なるほど。普通に交渉をすれば、スバルが勝てるわね。でも、あなたは依頼人には会いたくないのよね？なぜ相手の交渉額をあなたが知っているかは知らないけど、それは確かなのね？」

「ああ。それは間違いない」

咲夜は、以前に盗品蔵で起きた経緯については知らないため、スバルから少しでも交渉の材料となる情報を得れば、と思い質問したが、想像以上に色々なことを聞いた。

スバルは盗品蔵で実際に依頼人、つまりエルザと競う形で、交渉の場に着いたのだろう。

そしてエルザが出せる金額をそのときに知った。

そしておそらく、そのとき、スバルは交渉に勝ってしまった。徽章が手に入らないと分かり殺された……そんなところだろう、と咲夜は以前に起きたことの経緯をそう推測する。

「わかったわ。あとはわたしに任せなさい。スバルはわたしの話に合わせるだけでいいから」

「え？だ、大丈夫なのか？金額を吊り上げたいフェルトに交渉人が来る前に取引に応じさせるのは、無理な気がするんだけど・・・」

「安心しなさい。もうわたしは交渉はしないわ」

「え!？」

咲夜の矛盾するような言葉を聞きスバルは驚きの声を上げる。

交渉せずに取引に応じさせることなんて出来るのだろうか、そうス

バルが疑問を抱くが、咲夜はそんなスバルを置いてフェルトたちの近くまで戻る。

スバルは先に行く咲夜に慌てて後ろからついていく。

そしてそんな彼らをフェルトは訝し気な目で見ながら迎えた。

「それで、さっきの発言——何があんたのためなんだよ?」

「勿論、徽章よ」

「どういうことだ?まさかこの兄ちゃんがあんたにプレゼントするためにわざわざこの盗品蔵まで来たっていうのか?」

「あら? 訝えてるじゃない。その通りよ」

「ああ!? マジで? 本当にこの兄ちゃんがそんな理由で?」

フェルトは、咲夜から答えを聞いても信じていないようだった。

当然だ、スバルもそう思った。

しかし、そんなフェルトの様子を見ても咲夜に慌てた様子はなく、言葉が続ける。

「ええ。実はあの徽章は、あなたが白いローブの女性から盗む前は、お店で売っていたものなのよ。そして、わたしがお店に売っている時に見かけた時に、少し欲しそうな目をしたことを彼は覚えていたのよ」
「だから、わざわざこんな小汚い盗品蔵に来てまで?」

「こら、フェルト。わしの盗品蔵を小汚いとはなんじゃ!」

フェルトに自慢の盗品蔵を小汚いと表現された老人は、フェルトに怒鳴った。

しかし、フェルトは悪びれない表情をして、憤る老人を気にせず手元のミルクを手にとって飲む。

「そうだとしても、なんで兄ちゃんがあんたにプレゼントするんだよ?」

「まだ子供のあなたには分からないかもしれないけど……彼、わたしのことが好きなのよ。だから必死にわたしを振り向いてもらえるように、プレゼントを贈るため、こんなところにまで来ちゃったのよ」
「バカにすんなっ!!それくらい分からないほどそんなに子供じゃねーよ!これでもアタシはこれでも十五だ。それにしてもこの兄ちゃんがねえ?……確かに姉ちゃんも美人だけど。兄ちゃん、世の中分不

相応って言葉があつてだな——」

いまだにフェルトは、咲夜に対して半信半疑のようで、咲夜とスバルを見比べては、腑に落ちていない様子だった。

もちろん、実際に嘘なのだから信じがたいのは仕方ないのだが……。

咲夜もフェルトにつられてスバルを見ると、スバルは咲夜の突拍子もない話を聞いて哑然し、口を開けた状態で固まっていた。

隣でフェルトがスバルに対して失礼な言葉を言っているが、この様子だと本人にはおそらく言葉は届いていないだろう。

スバルにしては静かだったと思つたが、どうやら固まっていたからだったようだ。

「まあ、いいか。理由はどうあれ、徽章に対して金になるもんを出してくれるなら文句はねーよ」

「ふふ。そうね。でも、その話はもういいの」

「え？」

「徽章はもういらないうって言ったのよ」

『え!!』

咲夜の取引を辞めるといふ発言は、さすがのスバルにも聞き逃せなかつたらしい。

フェルトと同時に驚きの声を上げ、悠々と構えている咲夜を見開いて凝視する。

——咲夜には確信があつた。

あえてこちらから取引に応じない態度を見せることで、フェルトは取引に乗ってくるくることを。

その確信から、悠然とした構えている咲夜を見て、フェルトとスバルは咲夜が本気で言っていることを理解、いや理解させられる。

「ちよ、ちよつと咲夜——。いっ!!」

「——いいから。話を合わせて。：押してダメなら引かないとね」

スバルは交渉を辞めては困ると、咲夜を止めようと言葉を発しようとしたが、咲夜がするりとスバルの腕をとり、腕に抱き着くような形で、引き留める。

女性に抱き着かれた経験がないスバルは、突然の咲夜の行動に照れてしまい固まる。

そして咲夜は固まったスバルの腕に抱き着いた状態から口を耳元に近づけ、スバルだけに聞こえるよう耳元で小声で話した。

咲夜の押しでダメなら引く、という言葉を聞くと、スバルは、咲夜がまだ交渉を諦めていないようだと分かり、気を落ち着かせる。

そして咲夜はスバルが落ち着いたことが分かると体を離す。

スバルは咲夜が離れたことに対して、少し残念そうな表情をしたが、まだ交渉は終わっていないと顔を引き締めた。

「徽章をいらなくてどういことだよ。欲しかったから交渉をしてたんじゃないのかよ」

「言葉の通りよ。といつても、いきなり言われても分からないでしょうね。徽章に頼る必要がなくなった、てことよ」

「んんん？わかんねえ」

「スバルはもともとわたしを振り向かせるために徽章が欲しかった。でも、ここまでしてくれた彼の姿を見せられて、わたしは絆された。だから徽章はいらなくなったてことよ」

「??」

「ふふ。まだあなたには難しいお話だったかもしれないわね。」

いまだに理解できていないような表情をしているフェルトを見て、咲夜にはフェルトには、男女の機微を理解するのは難しかったか、と考えた。

しかし、ここでこれまで沈黙していた老人がいまだに理解できていないフェルトを見てフォローをする。

「フェルトよ。つまりはこの小僧は、徽章を手に入れずとも、その徽章を手に入れようとする行動から咲夜を振り向かせたてことじゃよ。盗まれた徽章を追い、みごと犯人を突き止め、その徽章のありかまで見つけ、手に入れる算段まで見つけた。その行動や気概を見て、咲夜はこの男に惚れたてことじゃよ」

「ええー!! この目つきの悪い兄ちゃんに、あんた惚れたのかよ!!」

「マジで!? 咲夜たんマジで!?!? 苦節18年にしてやっと俺の春がき

たー！！！」

老人の言葉によろやく理解できたフェルトは、信じられないと叫んだ。

咲夜も事実ではないとはいえ、他人から改めて明言されたことで、少しは恥ずかしかつたようで、顔をやや赤らめる。

皮肉にも、咲夜のそんな表情を見たことで、フェルトと老人にその話の信憑性を持たせ、2人の疑心は完全に消えたようだった。

それと同時に、スバルも何故かそれを信じたようだ。

大きく叫びをあげ、咲夜はすぐにも黙らるための行動に移りたかったが、それはこの盗品蔵から離れてからだ、決意しその場はなんとか抑え、笑顔を貼り付ける。

そして咲夜は未だに何やらいろいろと叫んでいるスバルを連れて、盗品蔵の扉の方へ行こうとする。

「さあ、行くわよ、スバル」

「まずは、何と言ってもご主人様呼びは捨てがた、いつ!? いたい!! 咲夜たん、咲夜たん、耳が、耳が、ちぎれる!!」

「あら、咲夜たんって誰のことかしら?」

「さ、咲夜さん、いや咲夜様! 謝るから! 謝りますから、耳を引っ張るのはやめて!!! 耳なし芳一になっちゃうから!!!」

しかし、咲夜がスバルの耳を引っ張り、そのまま盗品蔵を出ようとすると、フェルトが焦ったように声をかけ、引き留める。

咲夜はフェルトに声をかけられ、スバルから手を放しフェルトには背を向けた状態のまま、「何かしら?」と、足を止める。

「ま、待って!... 本当に徽章はいらぬのかよ? まだ手に入らぬって決まったわけでもないのに、諦めるのかよ?」

「そうよ。確かに本来の取引相手さんを待って、そのまま交渉を続けていけば、もしかしたら手に入るかもしれないわ。けど、これ以上たずらに交渉を伸ばして時間を無駄にするのもバカらしいから」

「ほ、本当にいらぬのかよ?」

フェルトは咲夜をなんとか引き留めようとするが、咲夜はフェルトを素気無く断る。

そして、これが最後の言葉だと咲夜は、立ち去る前にフェルトに次の言葉をかけた。

「ええ。悪いわね。わたしたちもこのあと仕事があるの。すぐに手に入るのなら別だったでしょうけど、徽章は惜しいけど諦めるわ。…でも、あなたも既に買い取ってくれる当てがあるんでしょ？いくらでかは、知らないけどもともとそちらから依頼されたもの。ならいいじゃない。あなたもある程度のお金は入るんでしょ？」

フェルトは、本当に咲夜たちが取引に応じる気をなくした、少なくとも依頼人を待ってまで交渉して取引するつもりはないのだと、察した。

そして、咲夜から依頼人の取引額を示唆するような言葉で、自分が大口の取引を逃しかけている事実を認識させられる。

もともと依頼人の取引額は聖金貨10枚。スバルの魔法器が聖金貨20枚。

スバルたちと競わせることで最低でも聖金貨20枚以上が手に入る算段だったのに、スバルたちがいないと依頼人と交渉して取引額を吊り上げようとするとしても、聖金貨10枚からスタートすることになる。

そしてその場合フェルトが依頼人と交渉しても2倍以上の値段、聖金貨20枚以上いくのは難しいだろう。

ここでスバルたちとの取引を逃すと、最悪、聖金貨10枚以上の損をしてしまうかもしれないと、フェルトは思った。

……思ってしまった。

既にスバルも咲夜の意図することに気付いており、おそらくフェルトが今考えているであろう想像を、予測できた。

自分たちがいたことで、徽章の価値が聖金貨20枚以上のものになったことに気付いたのだろうか。

そしてフェルトがこの後どう行動に移すかも想像できた。

「待ってくれ。ほ、本当にいらないんだな？」

「ええ」

「……もし、もしも今取引に応じると言ったらどうする？」

フェルトの引き留める声を聴いて、咲夜は獲物がかかったと確信する。

しかし、咲夜はかかった獲物にすぐに飛びつくようなことはしなかった。

ゆつくりとフェルトに向き直り、呼び止められたことをさも疑問そうに首を傾げ、フェルトに聞く。

「あら、急にどうしたの?」

「い、いや、わざわざここまで来たんだ。取引に応じてやんねーでもないかと考えを改めてだな……」

フェルトは相手に弱みを見せないように振る舞っているつもりのようなだが、強がっているようにしか見えなかった。

スバルでさえもフェルトの姿はそう見えたようだった。

「あら、別にスバルと取引に応じなくても、あなたには本来の依頼人がいるのでしょうか?」

「あ、いやそうなんだけど。先に来たあんたたちに譲ってやってもいいかなーなんて思ってたな。あんたたちは別に悪いやつに見えないし」「そうね。でもそれはわたしじゃなくてスバルに言うべきでなくて? わたしは取引できる材料はないわよ?」

そう言うと、咲夜はニツコリと笑顔をしていった。

その彼女の笑顔は美しく、男なら誰でも見ほれるような表情をしていた。

フェルトと隣にいたスバルはその表情に見とれる。

老人は、咲夜の思惑には気づいているようだった。

フェルトたちが盗品蔵に来る前に、咲夜とリングガの話をしていきにした時の表情と同じものだったからだ。

しかし、老人は取引に関しては中立な立場にいるらしく、口を挟んでくることはなかった。

「……兄ちゃん、さっきの取引だけど、魔法器でこの徽章を譲ってやつてもいいぜ」

「ほ、本当に?」

「あ、ああ。」

「な、なら交渉成立だぜ！」

スバルは見事に交渉を成立させた咲夜に内心驚きながらも、無事に徽章を取り戻せたことに喜びを隠せないようだった。

そしてスバルがフェルトから徽章と携帯を交換しようと互いに手を伸ばした。

しかし、盗品蔵の扉からノックをする音が、2人の行動を止めた。

「アタシの客かもしれないねー。まだ早い気がするけど」

フェルトは依頼人かとも思い、手を引っ込めて、扉の前に向かう。予定よりも早く来たようだが、せめてスバルたちと交渉が決まる前、あとほんの少し前に来てくれれば、と内心愚痴りながらもフェルトは、扉を開けようとする。

その背中を見つめていて、スバルは急速に込み上げてきた焦燥感に気付く。

咲夜も自分の思惑通りの結果になったことで、気が抜けていたのかフェルトの扉に向かうのを黙ってみていた。

「——開けるな！ 殺されるぞ!!」

スバルの切羽つまったような声で、咲夜もスバルの懸念したことに思い当たり、すぐに盗品蔵の窓から外を見る。

窓からはまだわずかに日が差し込んであり、日が暮れていなかった。

日が暮れるにはまだ早い時間だ。

（エルザが来るのは日が暮れてからだったはず！予定よりも早い！まじいわね……。遭遇することは避けたかったのだけど）

既にフェルトは扉を開けており、咲夜は緊張に身を固くしながら、開いた扉から入ってくる人物を見すえた。

「——殺すとか、そんなおっかないこと、いきなりしないわよ」

そして、入ってきた人物は、仏頂面で唇を尖らせている銀髪の少女——エミリアだった。

第十四話：誤解

「――殺すとか、そんなおつかないこと、いきなりしないわよ」

そう言つて、盗品蔵の扉から現れた人物は、――エミリアだった。

彼女はフェルトをここまで探し出すのにだいぶ苦労しただろうだろうか、少し疲労感を声ににじませながらも表情は、心外だとも言うように不満気だった。

咲夜は、盗品蔵に入ってきた人物がエミリアであるのを見て、エルザで無かったことに安堵の息を漏らすのが、同時に内心面倒なことになったとも思っていた。

折角交渉が纏まり、あとは交換するだけだったのに、その徽章の持ち主が現れてしまったのだから。

前回はエミリアがエルザよりも先に盗品蔵に到着することが無かったので、油断していた。

そして、エミリアが現れたことで都合が悪くなったのは咲夜だけではなかった。

「ホントに、しつっこい女だな、アンタ。それに空気が読めないやつだな、間が悪すぎ。」

「盗人猛々しいとはこのことね。神妙にすれば、痛い思いはしなくて済むわ」

フェルトは、エミリアによって交渉に邪魔が入ったと、苦々し気と言うが、対するエミリアはそんなフェルトが、自分勝手な態度にしか見えなかったようだ。

いや、自分勝手だが……。

「つてことはアレか。俺がいなければこんだけ早く辿り着くつてことか」

スバルは、エミリアが以前よりも盗品蔵に早く着いた理由に思い当たることがあったのか、そう呟やく。

咲夜は知らなかったが、初めてスバルがエミリアに出会った時、スバルはエミリアと一緒に行動し、その時にも盗品蔵に訪れていた。

そして盗品蔵に到着した時刻は、夕方ぐらいだった。

もつともその後、盗品蔵に入った2人は、暗闇に潜んでいたエルザに殺されたのだが……。

その時の経験から、路地裏でのスバルへの治療への時間がなければ、エミリアはこの時間帯に到着できるのだろう。

エミリアは、いつでも魔法が打てるように掌をフェルトへ向けながら、入口を塞ぐ形を維持しながらも数歩足を進め、対照的にフェルトはエミリアが進む分だけ後ずさりする。

「私からの要求はひとつ。——徽章を返して。あれは大切なものの」

エミリアの周りには、生成された八本の氷柱が浮き、4人に対しそれぞれ二本の氷柱の先端が向き、いつでも打ち出せる状態になっていた。

その氷柱は彼女の優しい性格だからだろうが、先端は丸くなっていて、硬そうな氷柱が二本も当たれば、軽くないケガを負うことになるだろうことは見て取れた。

フェルトと先ほど後ろで黙り続けていた老人もその光景を見て、状況が不利と悟ったようだった。

「……ロム爺」

「動けん。厄介事を厄介な相手ごと持ち込んでくれたもんじゃな、フェルト」

あの老人はロム爺と言うのね——咲夜は2人の会話を耳にして老人の名前を初めて知った。

スバルは、エミリアが現れて場が、より複雑な状況になったうえに、自分たちも泥棒仲間に見られている現状に不安に思ったのか、咲夜に声を小さくして話しかける。

「おい、咲夜。この状況不味くないか？なんか俺たちも泥棒仲間に思われているっばいんですけど？」

「今は静かにしてなさい。場の状況が落ち着いたら、誤解を解くわよ。」

「一応聞くけど、あの子があなたの探していた子でいいのよね？」

「ああ。そうだ。俺はあの子に徽章を取り返そうとした。」

咲夜とスバルは、ひとまず様子見に徹し、スキを見てエミリアの誤解を解き、このままフェルトたちからエミリアに徽章が渡れば良しとした。

そこで話を切り、咲夜は再びフェルトたちに目線を戻す。

「ケンカやる前から負けなんて認めんのかよ？折角取引も決まりかけてたのに」

「ただの魔法使い相手なら儂も引いたりせんがな……この相手はマズイ」

フェルトはそんなロム爺の弱気の発言が気に入らなかったのか、強気な発言で返すフェルト。

しかし、ロム爺には何か懸念することでもあるのか、そう返す。

「お嬢ちゃん。……あんた、エルフじやろう」

「正しくは違う。——私がエルフなのは、半分だけだから」

咲夜とスバルは、エミリアの言葉の意味をそのまま受け取ったが、フェルトとロム爺にはその言葉の意味の受け取り方が違ったようだった。

2人は目を大きく見開き、驚きの反応を返す。

「ハーフェルフ……それも、銀髪!? まさか……」

「他人の空似よ! ……私だって、迷惑してる」

どうやらこの世界にとつて『銀髪』と『ハーフェルフ』、この二つの単語の意味するものは大きなものであるらしい。

『ハーフェルフ』ではないが、『銀髪』である咲夜にとって、それ自分は無関係と切り捨てるのは危険と考えた。

また、ラインハルトからも『銀髪』のことを指摘されたことがあったため、咲夜はあとで機会を見つけて調べる必要があるようだ。

咲夜はそこまで考えると、すぐに思考を切り替え、現状の問題の方をどうにかすることにした。

状況からして、エミリアから咲夜とスバルも敵とみなされているらしいので、その誤解を解くことをまずは優先させべきだ。

今はフェルトたちとエミリアが、互いににらみ合い、ちょうど会話が切れ、場が硬直していたので都合が良い。

「フェルト」

「あん？なんだよ、姉ちゃん。この状況を打開できる方法でも思いついたんかよ？」

「いえ、徽章の取引のことだけど、持ち主が来た以上は、取引はなしよ。徽章はいらないわ」

「な、なんでだよ!!？」

「一体何の話をしているの？仲間割れ？」

咲夜とフェルトの会話を理解できなかったエミリアだが、徽章のことを話しているらしく、意見が対立した様子から仲間割れかと思われるようだ。

「まずは、誤解を解いておくけど、わたしとこの男、スバルはあなたの徽章を盗んだ子とは仲間ではないわ。」

「それならなぜ、あなたたちは盗品蔵に？」

「あなたから徽章を盗んだその金髪の少女に、徽章との取引を持ち掛けようとしていたからよ」

「徽章を？悪いけど徽章を譲ることはできないわ。わたしにとってあれは何があっても必要なものだから」

咲夜たちの目的が徽章と聞き、エミリアは咲夜たちを警戒の視線を強める。

スバルはそのエミリアの反応を見て、余計に疑惑を深めたかと思いき焦る。

「待ってくれ。別に俺たちはあんたの徽章を横取りしようとしたわけじゃない！もともと返すつもりだったんだ!!」

「ちよ、ちよつとス」どういうことだよ、兄ちゃん！あんたグルだったのか？」

スバルはよりエミリアの誤解を深めたと思い、焦り、スバルと咲夜の会話に口を挟んでしまう。

しかし、スバルが口を挟んだ言葉により、今度はフェルトに疑念を抱かせることになってしまう。

「フェルト、ごめん！」

「な、なんだよ。謝るってことはやっぱりグルってことかよ？」

「違う！謝ったのは徽章を欲しがった理由に嘘をついてたことに對してだ。俺はもともと持ち主に返すために徽章を手に入れようとしてたんだ。咲夜に對してプレゼントってのは嘘だったんだ」

スバルは、フェルトに徽章を欲していた理由を正直に告白した。フェルトと横で聞いていたロム爺もスバルの徽章の欲しがっていた本当の理由を聞いて驚く。

咲夜は、スバルが嘘を明かしてしまったことに對しては、仕方がないわね、というように内心ため息をついた。

「兄ちゃん……サイテーだな。」

「うっ。確かに嘘をついたことは謝るけど、サイテーは言いすぎじゃねえ!？」

少女のフェルトに言われたことは、スバルには想像以上に耳に痛かったようだった。

フォローを求めるようにロム爺の方に目を向けるが、

「坊主、サイテーじゃな」

「うっ！そ、そんなに責めなくてもいいじゃんかよ!!交渉ごとに嘘やハツタリも時には必要だろ!!」

素気無く、ロム爺にも責められ、スバルは若干涙目に叫ぶ。

咲夜も、サイテーまで言われるほど責められるいわれはないとは内心想った。

思っていたが、面倒なのでフォローするつもりはなかった……。

しかし、フェルトは自分たちのサイテーの意味を取り違えていることに気付いたようで、言葉を付け加える。

「別に交渉に嘘を着いたことに対しては、責めてねーよ。兄ちゃんの言う通り、交渉に嘘も必要だし、騙されたあたしたちが悪いだけだ。謝るのはあたしたちじゃなくて、その姉ちゃんに對してだろーが……」

『へっ?』

しかし、その予想外の理由と自分の名前が出てきたことに驚き、咲夜はスバルと同じ驚きの声をあげてしまう。

なぜそこでわたしの名前が出るのかしら？

「だから……そのメイドの姉ちゃんに粉かけておいて、別の女にプレゼントしようとするなんてサイテーだろうが」

「むしろが責めているのは、坊主がこの盗品蔵に来たことを自分のためと勘違いさせて、そのまま嘘をつき続けたことに対してじゃよ」

察しが悪いスバルに対して呆れたようにフェルトはため息をつきながら、説明する。

そしてさらにそれに補足を付けるようにロム爺がいう。

「つまり、それって……」

咲夜がここまで言われてやっと意味するところに気付く。

フェルトたちが言いたかったのは、こうだ。

スバルは咲夜に気のある行動を見せながらも、別の女、盗品蔵で交渉してまでエミリアに徽章をプレゼントしようとしている。

ただスバルにとって誤算だったことに、咲夜が徽章を自分のためと勘違いし、盗品蔵に来てしまったので、スバルは咲夜のためと、咲夜の勘違いを利用する形で理由をでっち上げた。

しかし、もともとのプレゼント予定だった、女性、エミリアが来てしまい、誤解されたくなくて嘘を明かした、

そんな男に見えたのだろう。

そこまで咲夜は理解に至り、それと同時に自分がこの勘違いによって、勘違い女のように思われていることにも気付く。

勝手に勘違いし、勝手に惚れた女と。

「いやいや、誤解だ！俺は純粹に徽章を返そうと思ったただけだ!!つか、悲しいけど、自慢じゃないが俺様そんなリア充みたいなラブコメ展開、元の世界でも一度も無かつたくらいに幸薄い男だったかんね！ちくしょー!」

スバルも咲夜と同じことに気付いたのだろう、必死に誤解を解こうとする。

「えっと、……複雑な関係なのね?」

「坊主、銀髪フェチとは変わってるの?」

エミリアは話を理解できなかったようだが、それでも咲夜が哀れに思ったのか、フォローになっっていないフォローをする。

咲夜は誤解が解けていない上に、エミリアにまでフォロ―されて少し泣きそうになった。

そしてロム爺のわけの分からないスバルへの感想に殺意を抱く。
禿ジジイっ……。

というか、エミリア、あなたも勘違いの当事者なのよ？分かってい
るのかしら？分かっていないわね、きつと。

「誤解が解けてねえ！それとロム爺さんは、呑気な感想入れないでく
れますかねえ!!いや、銀髪は嫌いじゃないけども。いやむしろ言われ
て俺って実は銀髪フェチじゃないんかと、自分でも思い始めちゃつて
るけども!……ひっ!!」

スバルもエミリアとロム爺の言葉により、どう誤解を解こうかと、
思いつくままに言葉を並べては自爆するような発言を言う。

途中からスバルの横にいた咲夜から黒いオーラののようなものを感じ、
恐怖に声を上げ、早くなんとか誤解を解かねばと、部屋の中を視線を
彷徨わせ、扉の方に目を向けたとき、黒い影がそつと、銀髪の少女の
背後へと忍び寄っていたことに気付く。

「——パック！ 防げ!!」

黒い影は、スルリとエミリアに近づき、その首を手を隠し持っていた
刃物で刎ねようとしていた。

エミリアの綺麗な白い首がそのまま切られるかと思われたが、それ
は失敗に終わる。

刃は首元ギリギリのところで、青い膜のような壁に阻まれていた。
そこには青い膜には魔法陣が描かれていて、どうやら魔法の障壁の
ようなもので防がれたようだった。

「パック……っ」

「間一髪だったね、まさに」

どうやら刃を防いだのは、エミリアに付き添う妖精、パックによる
魔法だった。

エミリアは、すぐに自身の背後から前に飛び、距離を取る。

そして振り向き、自身に起きたことを悟る。

「なかなかどうして、紙一重のタイミングだったね。助かったよ」

「助かったのはこっちだ。あんがとよ。あの空気どうしようかと……」

パックはスバルに突然の強襲を防げたことに対して、感謝し親指を立てる。

対するスバルも親指を立てて、なんとか間に合ったことに安堵し、同時に別の意味で殺伐とした空気から解放されたことに感謝する。

「——精霊、精霊ね。ふふふ、素敵。精霊はまだ、殺したことがなかったから」

エミリアを襲ったのは、ククリナイフを顔の前に持ち上げて、恍惚を浮かべるのは殺人鬼——エルザだった。

エルザの登場に部屋にいた全員は警戒を強める。

そして現れたエルザにフェルトが怒鳴る。

「おい、どーいうことだよ！」

「徽章を買い取るのがアンタの仕事だったはずだ。ここを血の海にしようってんなら、話が違うじゃねーか！」

「盗んだ徽章を、買い取るのがお仕事。持ち主まで持つてこられては商談なんてとてもとても。だから予定を変更することにしたのよ」

「この場にいる、関係者は皆殺し。徽章はその上で回収することにするわ」

怒りに任せて声を荒げていたフェルトだが、エルザの酷薄そうな目をまっすぐに向けられ、恐怖に竦む。

そしてエルザは笑みを浮かべながら、フェルトに告げる。

「——あなたは仕事をまっとうできなかつた。切り捨てられても仕方がない」

「——ッ」

フェルトは、エルザに言われた言葉に表情を歪めた。

しかし、その言葉に対してフェルトではない自分から反論の声が上がった。

「てめえ、ふぎけんなよ——!!こんな小さいガキ、いじめて楽しんでんじゃねえよ! 腸開帳大好きなサディスティック女が!! そもそも現れる時は、ノックぐらいしやがれ!不法侵入だぞ!セコムさんに怒

られるぞ！笑顔と発言がかみ合っていないんだよ!?!いちいち発言が怖えんだよ！すぐにこの場から逃げ出したくなるわ！それは言い過ぎた！」

「……なにを言ってるの、あなた」

「テンションと怒りゲージMAXでなにが言いてえのか自分でもわからなくなってきたんだよ！ そんなお日柄ですが皆様いかがお過ごしでしょうか小説サイトはそのままどうぞ！」

意味不明な言葉の羅列のスバルの怒声に、エルザが呆れる。

しかし、スバルのその頑張りは相手の毒気を抜き、油断させるのに十分だった。

「時間稼ぎ終了——やっちまえ、パツク!!」

「見事な無様さだったね。——ご期待に応えるよ」

気が付くと、エルザは先端を尖らせた氷柱——それが二十本以上に全方位囲まれたいた。

「まだ自己紹介もしてなかったね、お嬢さん。ボクの名前はパツク。

——名前だけでも覚えて逝ってね」

そして、全方位からの氷柱が放たれ、エルザの全身に浴びさせられる。

そして氷柱の勢いはすさまじく、轟音を音を響かせ、叩きつけられる。

かくして、盗品蔵にて戦いが始まる。

「まだ、誤解解いていない……」

そしてその轟音とは別に、ぽつりと咲夜の悲し気な呟きは、誰の耳にも届くことは無かった。

第十五話：覚悟

いくつもの先が鋭く尖った氷柱が剛速球でエルザに対し、叩きつけられる。

その勢いはすさまじく、曲者揃いの幻想郷での弾幕戦で鍛えられた咲夜でさえ、躲すのは簡単では無いだろう。

全ての氷柱が叩きつけられ、部屋にもうもうと白い煙が上がる。

あれだけの数をあれだけのスピードで打ち付けられれば、まず無事ではないはずだ。

しかし、相手は吸血鬼。

ケガを負ったとしても、このまま終わることはないだろうと、咲夜は警戒を緩めなかった。

「やりおったか!？」

「はい、ここでダメなフラグ一丁入りました——!!」

「——備えはしておくものね。重くて嫌いだったけれど、着てきて正解」

煙が晴れ、出てきたエルザは、先ほどと変わらない調子で現れる。

あれほどの攻撃を食らってもまさか無傷であることに、エルザ以外の全員が衝撃を受ける。

「まさか、無傷とはね……」

「別に攻撃が効かなかったわけじゃないわよ。私の外套は一度だけ、魔を払う術式で編まれていたの。それでただ命拾いしただけ」

咲夜の驚きの声に返答し、答えを明かしてくれるエルザ。

相手に情報を簡単に明かすことは愚かではあったが、それは余裕からか……。

「咲夜はますます警戒を強める。」

今度は攻めてきたのはエルザだった。

エルザは姿勢を低くし、手に刃を構えて、一気に距離を詰めてくる。狙っているのはエミリアだった。

エルザの駆けるスピードは早く、一瞬でエミリアに肉薄し、エルザは刃をエミリアに突き立てようとする。しかし、

「精霊術の使い手を舐めないこと。敵に回すと、恐いんだから」

刃は氷によって形成された盾に阻まれ弾かれる。

攻撃を防がれると、すぐさまエルザはその場を後ろに飛びのき、距離を取る。

その直後、先ほどまでエルザがいた場所に、無数の氷柱が突き刺さる。

どうやら、盾を形成したのはエミリアで、先ほど攻撃したのが、パツクによる魔法のようだった。

「アレが精霊使いの厄介なところじゃ。片方が攻撃して、片方が防御。場合によっちゃ片方が簡単な魔法で時間を稼いで、もう片方が大技をぶっ放す……なんてのもできる。『精霊使いに出会ったら、武器と財布を投げて逃げろ』ってのが戦場のお約束じゃな」

エミリアたちが戦い始めると、エミリアとパツク以外の面々は、距離を取り邪魔にならない所へ避難していた。

彼女たちの戦いは、一般人が立ち入れるものではないものになっていったからだ。

そして、そんな面々に説明するようにロム爺が戦いを見て解説を入れる。

あれがこちらの魔法使いの戦い。

幻想郷では見かけない精霊使いの戦いにそう咲夜は感想を抱く。

(もし幻想郷で例えるなら、氷の妖精を従えた魔理沙と戦うものかしら？二人の息の合ったコンビネーションを想像できないわね)

その想像からはあまり脅威を感じれないが、もし息の合ったコンビネーションで戦うことになれば、一人で相対すれば通常の相手にとって脅威だろう。

咲夜がスバルを横目で見れば、彼もロム爺の言葉に感嘆としており、その脅威は伝わっているようだった。

「ところで、爺さんはなにをしようとしてんだ？」

「機を見て、エルフの娘に助太刀をな。まだ向こうの方が話がわかりそうじゃ」

「待て待て待て待て待て待て待て！ やめとけーって！ 絶対、足

引つ張るだけだから！ 右腕と首を切られてやられんのがオチだ、ジツとしてよう！」

「具体的な負け予想するでないわ！ なんでか本当に切られた気がしてくるんじゃない！」

「わたしもスバルの同意見よ。ここは静かに見守りましょう」

「むう。仕方ないのう」

咲夜もスバルの意見に同意する。

むやみに戦いに介入すれば、たちまち足を引つ張り、周りを道ずれにこちらが殺されることになるだろう。

ここは、静観するのが正しい。

スバルのやけに具体的な負け方の想像に、思わず自分の死を想像させられ、嫌そうな表情をしていたロム爺は、咲夜にも諭され、ひとまず静観するという意見を了承する。

そして再び一同は、戦いに目を向ける。

戦いは先ほどと状況が変わらず、エミリアとパツクによる氷柱が打ち出され、それをエルザは巧みに躲し、隙を見て距離を詰め攻撃し、それが防がれ、エルザが距離を取る、その繰り返しだ。

油断できない相手と判断したエミリアとパツクからは、無数に大小形が様々な氷柱が打ち出され、室内一帯にエルザに回避されそのまま壁や床に突き刺さったままの氷の塊が散乱する。

一撃一撃が、必殺のスピードで無数に打ち出すエミリアとパツクの力量も凄まじいが、それを躲し続けるエルザもかなりの強さを持っている。

咲夜が見るに、まだまだ余裕がありそうだ。

「戦い慣れしてるなあ、女の子なのに」

思わず、攻撃をしているパツクから感嘆の声が漏れる。

その言葉にエルザも喜びの表情を出す。

「あら。女の子扱いされるなんてずいぶんと久しぶりなのだけれど」

「ボクから見れば大抵の相手は赤ん坊みたいなものだからね。それにしても、不憫なくらい強いもんだね、君は」

「精霊に褒められるなんて、恐れ多いことだわ」

そしてそんな会話が交わせられるも、戦いは続く。エミリアとパツクが氷柱を撃ちエルザが躲す。

一見エミリア側が優勢に見えるが、状況は膠着していた。そんな状況を見守っていたスバルが、ぽつりと懸念事項を漏らす。

「このままだとMP切れして負けるんじゃないか？」

攻守が入れ替わる展開を思い描き、スバルは長期戦になる不利を訴える。

しかし、そんな不安に首を横に振るのはロム爺だ。

「えむぴーとやらがなにかはわからんが、精霊使いの戦いでマナが切れる心配はいらん」

「マナが切れる心配がないっつーのは……」

「魔法使いと違って、精霊使いが使うのは己の中でなく、外にあるマナじゃからな。世界が枯渇しない限り、精霊使いに弾切れは存在せん」
「無制限に魔法を使用することができるのは、すごいわね」

咲夜とスバルは精霊魔法の強さの一つの理由を知り、驚ろく。

しかし、老人はそれでも油断はできないと、話を続ける。

「ただし、精霊がいつまで顕現できるか、はまた話が別じゃ。精霊抜きじゃと、一気に形勢が傾くかもしれんぞ」

「うげ、そういやそうだ。……そろそろ五時とか回るか!？」

「どういうこと?」

スバルは、既にエミリアとともに行動していた時に知っていたが、精霊は顕現できる時間に制限があることを知らなかった。

そしてそのことをスバルから説明を受けると、咲夜もロム爺が懸念していることを理解する。

「あ、マズイ。ちよつと眠くなってきた。むしろ、今ちよつと寝ながら戦ってた」

「ちよつとパツク! しつかりやってよっ」

「……はっ! 寝てない! 寝てないよ! ボク、全然寝てないよ!」
「なんかすげえ小声で不安になるやり取りしてねえ!？」

懸念していたことが起きてしまいそうなのか、パツクがだいぶ眠そうにし、時折瞼を閉じ駆け、寝そうになる。

エミリアもパックが眠れば不利になると危惧して、焦りが入る。

「楽しくなってきたのに。心ここに非ずなんて、つれないわ」

「もてるオスの辛いところだね。女の子の方が寝かせてくれないんだから。でもほら、夜更かしするとお肌に悪いからさ」

「そろそろ幕引きといこうか。同じ演目も、見飽きたでしよ？」

「――足が」

先ほどまで機敏に動き回っていたエルザが唐突に、転ぶ。エルザの足は氷によって、縫い止められていた。

「無目的にばらまいてたわけじゃ、にやいんだよ？」

「……してやられたってことかしら？」

「年季の違いだと思つて、素直に賞賛してくれていいとも。オヤスミ」
パックはそう言った後、両手を前に構える。その両手には膨大の魔力がかき集められていくのが咲夜には分かった。

そして、そこから青い光のエネルギーが放たれる。

それを見て、色も違い、力とスピードも劣るが、放たれ方が似ていたため、咲夜は魔理沙のマスタースパークのようだと思つた。

パックから放たれた光は、エルザにまっすぐ向かう。このままエルザに当たるかと思われたが、

「嘘、だろ……」

「嘘じゃないわよ。ああ、素敵。死んじやうかと思つたわ」

「……女の子なんだから、そういうのはボク、感心しないなあ」

エルザは、自分の足の底を持つてた刃で？ぐことで、氷の拘束から逃れ、飛んで躲すことに成功させたのだった。

彼女の皮が剥がれた足からは、血が滴り、それが氷の上に落ちることで温度差から湯気を出させていた。

その見ているだけで痛々しいケガに一同は顔を顰める。

咲夜は、とつさの判断で、足を削いでまで、躲すエルザの判断に戦慄を感じる。

「早まって切り落とすところだったのだけれど、危ういところだったわ」

「それだけでも相当、痛いだろうに」

「ええ、そうね。痛いわ。素敵。生きてるって感じがするものに……」

心配気なパックの言葉に対して、エルザは恍惚の表情で、その出血する足を傍らの氷塊に足裏を押し付け、血を止血する。

その後、ククリナイフで氷塊の表面を撫で切る。

その強引な止血方法に、咲夜も引く。

「ちよつと動きづらいけど、十分よ」

そしてエルザは愉しそうに笑う。

「パック、いける?」

「ごめん、スゴイ眠い。ちよつと舐めてかかった。マナ切れで消えちゃう」

「あとはこちらでどうにかするから、今は休んで。ありがとね」

「君になにかあれば、ボクは盟約に従う。——いざとなったら、オドを絞り出してでもボクを呼び出すんだよ」

その言葉を最後に、エミリアの方に乗っていたパックの姿が徐々に薄くなっていき、完全に消える。

「——ああ、いなくなってしまうの。それはひどく、残念なことだわ」
パックが消えると、これまでエミリアが一方的に攻撃できた状況は変わる。

咲夜はそう考えるが、そのように考えたのは咲夜だけではなかったようだ。

「そろそろ、ただ見てるだけってわけにはいかんな」

棍棒を握りしめて、ロム爺が立ち上がる。

「加勢なしの勝算はもうわからん。なら黙って見とるのも機を逃すだけじゃ。……わかつとるじゃろ、フェルト」

「わかつてるつつーの。逃げるにせよ、そろそろ動かねーといけねーってな」

そしてロム爺は、他にこちらの勝算を上げるものはないかと、スバルに目を向けるが、

「坊主……、ハア、お前さんはそこにじっとしておれ」

「そのため息はなに!? 確かに俺は役には立てないけどさー!!」

ため息を尽き、特に期待もしていないのかそう声をかける。

そしてスバルは自身がどう判断されたのか、分かっているながらも不満の声を上げる。

ロム爺はスバルを相手せず、今度は咲夜に声をかける。

「嬢ちゃんは戦えるかの?」

「あら、か弱い女性を戦わせるの?」

「ふん、こんな状況でいけしやあしやあと。嬢ちゃんは、これまでの戦いも目でちゃんと追えていたじゃろ?それに先ほど鑑定の際にナイフを取り出した時の慣れた手つきから、刃物の扱いの心得はあるのじゃろ?少なくともその小僧よりかは、役にたちそうじゃしの」

思ったよりもこの筋骨隆々とした老人は、周りを見ているようだ。それに見かけ通りよりも頭も回るらしい。

この老人は意外とこのような荒事にも慣れているように思われた。

咲夜は状況から判断して協力するしかないかと判断し、肩をすくめ返事を返す。

「まあ、スバルよりは役に立つでしょうけど、そこまで戦えるわけではないわ」

「今は人手が多い方がいい。実際に何ができるんじゃ?」

「わたしに近接戦を期待しても無駄よ。遠距離から攻撃する方が得意だし。武器はこのナイフね」

咲夜はそう言って、足のホルスターから銀のナイフを一本抜き取り、手に取ってロム爺に見せる。

「ふむ、手投げナイフってところかの。腕前のほどは?」

「36m離れた場所までなら狙った場所に当てられるわ」

その返事を聞き、スバルたちは咲夜のナイフ投げの技量の凄さに驚く。

ロム爺はその頼りになる返事を聞き、笑みを浮かべる。

咲夜の話は、正確には、36メートル先にいる頭上にリングを乗せた妖精メイドの額に当てたことだった……。

「それほどの腕前なら十分じゃろう」

「作戦は?」

「わしがスキを見て攻撃を仕掛けるから、嬢ちゃんは、その援護をしてほしい。」

「援護って言っても、わたしの投げナイフじゃ、狙いは正確でもきつと躲されるわよ。」

「そこは、わしとフェルトで何とかスキを生み出すから、そこを狙って何とかしてほしい」

「何とかって……」

随分いい加減な作戦であったが、現状それ以上に思いつく作戦は無いだろう。

そう考えて咲夜も覚悟を決める。

フェルトは既に、一人となったエミリアとエルザが戦い始めているのを見て、準備を完了させ、覚悟を決めているようだった。

スバルはそんな戦いの準備をし始めている三人を見て、何もできない自分を嘆いているのか、少しうつむく。

そんなスバルを見て、咲夜は声をかける。

「スバル、あなたはそこで戦いを見ていなさい。」

「咲夜……、俺に、俺にも何かできることはないのか？」

スバルは力になれないことを悔しく感じるも、それでも何か出来ることがないか、咲夜に縋るような目をして聞く。

「あなたに何もできることはないわ」

「……っ」

そんなスバルに咲夜は冷たく現実を突きつける。

スバルは咲夜の言葉を受けて、ショックを受け、顔を俯かせる。

「何をしているの、スバル」

「何してるの、って、そりゃ現実を突きつけられて、落ち込んでるんだよ。こんちきしょう！見りゃ、分かるだろう!!」

咲夜の言葉により落ち込み俯いていたスバルは、咲夜にその行動の原因を作った咲夜本人に理由を聞かれ、顔を上げ、怒りの声を上げた。

しかし、スバルの顔を少し赤くし憤っているスバルの顔を真つすぐに見つめながら、

「だから、落ち込んで俯いている暇なんてないわよ」

「は？」

「最初に言ったわよね、わたし。あなたはそこで戦いを見ていなさいって」

「あ、ああ。でも俺には力はないし、見ていることしかできないから……」

「そうね。あなたは力もないし、戦いへの覚悟もない」

咲夜は足を震わせているスバルを見ていう。

スバルは、恐怖に慄き、戦いへの覚悟もないことを咲夜に見透かされていることに、表情を暗くし、また顔を俯かせようとする。

しかし、咲夜の続ける言葉に、顔を上げる。

「だから、考えなさい」

「え？」

「あなたの強みは何？」

「お、俺の強み？引きこもりをやっていた俺に強みなんてどこにも……」

咲夜に唐突に自身の強みを問われたスバルは困惑の表情をする。

スバルはこれまで何もせず、学校へも行かず、両親に甘えて引きこもっていた男だった。

そんな努力もなにもしてこなかったスバルは、自分の強みについて、答えを出せることが出来なかった。

「なら、あなたはどのようにしてここにいるの？」

「それは徽章を取り返したくて……」

「ならここまで来るのに何の苦労も無かったのかしら？ここまで辿り着くのに何の障害も無かったのかしら？」

スバルはこれまでの死に戻り経験を振り返る。

スバルはここまで来るのに4回もこの世界を繰り返していた。

エルザに二回殺され、チンピラに一回殺された。

それでもスバルは、諦めず、明るい未来を信じて、すべて上手く解決できるはずだと信じ、ここまで来たのだ。

「あなたの強さは、その諦めの悪さじゃなかったの？」

咲夜に言われ、スバルはハツとする。

確かにそうだ。

これまで俺は、何度死んでも諦めずにここまで来た。

エミリアの問題からは目を背けて、忘れ関わらなければ、死など簡単に回避できたのだ。

まるでこれまでの頑張りを見てきたことのように咲夜に言われ、スバルは救われたかのような気持ちになり、その目に輝きを戻す。

「そうだな、これまで簡単じゃなかった。苦勞もいっぱいあった。」

「なら、あなたはその苦勞に対して、どうしたの?」

「何か、いい方法が無いか、考えて考えて……」

「なら、考えなさい。この戦いを見て、何かいい方法が無いか、考え続けなさい。それがあなたに出来ることよ」

咲夜はそういうと、もう言うことはないのかスバルに背を向け、戦いにいつでも入れるようにナイフを構える。

そしてロム爺は、咲夜とスバルのやり取りを見ていたのか、茶々を入れる。

「中々にお似合いじやの」

「黙りなさい。あなたも言っていたとおり、今は少しでも人手は欲しいの。少しでも勝ち目が上げようと行動しただけよ」

咲夜は、ロム爺に絶対零度の目を向け、それにロム爺はビビり、慌てて話題を変える。

そして、咲夜は仕方なしに話を合わせる。

「さて、準備はいいかの?」

「ええ。いつでも飛び込んでいいわよ。あなたの腕と首が切られるのを最後まで見届けてあげるから」

「ちよっ!!?なんじゃ、根に持っておらんか?謝るから、機嫌を直してくれんかのう?」

「ロム爺、姉ちゃん!いつまでもくだらないことでふざけてる場合じゃないぞ!」

「こらーフェルト!爺ちゃんの命がかかってるんじゃぞ?くだらないとはなんじゃ!!」

戦いの準備は整った。

後は機を待つだけ。
咲夜たちは気を引き締め、エミリアとエルザの戦いに集中する。

第十六話：良い案

当たればただで済まない勢いで、ただ一点に向かい、魔法によって形成された大小の氷が飛びかかる。

そんな魔法を放つは、エミリア。

そして彼女から放たれた魔法が向かう先は、黒い影のような服のドレスを纏った女、エルザ。

普通の人間であれば、そのまま氷の塊たちによって、たちまち傷だらけになり、致死性の高い傷を負うことになるだろう。

しかし、エルザは襲いかかる氷の弾幕を愉しそうに笑みを浮かべ、ダンスをするように体を揺らして躲し続ける。

そして時折、その手にもつククリナイフの刃を振るうことで、氷を叩き落とす。

エルザは氷の合間を姿勢を低くし、左右に巧みに躲しながらかくぐり、エミリアへの距離を詰める。

そして凶刃をエミリアに叩きこむように一閃。

エミリアによって、張られた氷の盾に自身の刃が弾かれ金属の音が鳴り響く。

パックがいた時にも同様の戦いを繰り返していたが、今はエミリア一人。

同じ繰り返しのように見れても、二人で分担していた役割は全てエミリア一人で担っていた。

一瞬でも気が抜けない状況だった。

咲夜達は、攻守が目まぐるしく入れ替わるような尋常じゃない戦いを繰り返すエルザとエミリアを見る。

先ほどは威勢よく、加勢をすと言っていた面々であったが、この戦いに割って入ることは中々に困難であった。

現状は様子見に徹する他無かった。

しかし、そんな余裕も、猶予もない。

「押され始めたの」

二人の戦いの形勢が変化し始める。

バックとともに二人で相手をするので、攻守の役割分担ができることによつて余裕が生まれていたが、現在はその余裕がない。

一対一であれば、単純な実力差による戦いになる。

いまはまだ互角に見えるが、エルザが徐々に距離を詰め攻撃を行う回数が増えてきており、このままいけば、エルザの振るう刃に血が滴るのも時間の問題に思えた。

ロム爺は、咲夜とフェルトにチラリと視線を向ける。

咲夜とフェルトの二人が準備ができていることを頷きを持って返すと、ロム爺はエルザの方へ向き直り、普通の人間の大人程の大きさがある棍棒を強く握り締め、

「行くぞ——ッ！」

棍棒を振りかぶりエルザに飛びかかる。

「あら、ダンスに横入りなんて無粋じゃないのかしら」

「そんなに踊りたければ最高のダンスを躍らせてやるわ！ そら、きりきり舞え！」

ロム爺は棍棒を片手で、右から左からと縦にエルザに向かって振るう。

その振るわれる棍棒からは、グオンと獣の唸り声のような大きな風切り音を鳴らし続ける。

しかし、エルザは自分よりも二回りも大きい巨人から唸るような音を鳴らして襲い掛かってくる棍棒を前に焦りの表情も見せない。

右から、左からと縦に振るわれる棍棒を体を左右に揺らして躲す。

むしろ、棍棒に纏つて放たれる風を、まるでそよ風に吹かれて気持ちいいかのように、その風によつて彼女の髪が靡かせながら楽しそうに笑みを浮かべる。

エミリアは、老人が介入してくれた間に一呼吸を付く。

「これでどうじゃ!!」

突如、縦の線で振るわれていた棍棒が、針で突き刺すように、点で振るわれる。攻撃の流れを変化させ、相手の意表を突いたと思われる攻撃は、そのままエルザの喉元に突き進む。しかし、

「なん、じゃそらああ!!」

「あなたが力持ちだから、こんなこともできたのよ」

まるでエルザは曲芸の技を披露するかのようになり、突き出された棍棒の先端につま先で乗っていた。

そして、突き出された棍棒とエルザの重みが絶妙なバランスで、均衡を保っていたが、すぐにエルザの重みをその棍棒に感じ、下に引つ張られる。

棍棒を握っているロム爺はそれにつられ体制を崩してしまふ。

その生まれた隙をエルザは逃さない。

「じゃあね、巨人さん。短い間だけどあなたと踊るダンスは愉しかったわよ」

体制を崩したロム爺の喉元を狙い、エルザの右手に持つ凶刃が迫る。

「させつかーっ！」

フェルトは、エルザの刃目がけて小型のナイフを投げる。

エルザはフェルトの声に反応し、自分の振るうナイフ目がけて、小型のナイフが飛んできていることに気付く。

しかし、飛んでいたナイフはそれだけではなかった。

小型ナイフよりも少し遅れ、自身の顔目掛け、銀のナイフが一本、音もなく、放たれていることに遅れて気付く。

「……つく」

エルザは咄嗟に振るっていた右手のナイフを手放す。

手放したナイフが小型のナイフに弾かれるのに構うことなく、エルザは体を背後に反らし、首をさらに傾けることで、銀のナイフを紙一重で躲す。

しかし、エルザはその体を反らした勢いを利用し、そのまま体を回転させ、スルリと左手で新たにククリナイフを懐から取り出し、回転の勢いのままにロム爺に刃を放つ。

ロム爺は、体制を崩していたが、エルザから再度放たれた攻撃に気が付き、すんでのところ、棍棒を縦にすることで防御する。

しかし、体制を崩した状態で、防御の姿勢を取ったせいか、踏ん張りが効かず、そのまま弾かれ、巨漢の老人は後ろに吹き飛ばされる。

「ぐあっ!!」

盗品蔵に置いてあった、数々の品だろうか、それとも蔵の主の趣味だろうか、鎧や壺まで様々な品が置かれた場所に頭から突っ込む。

巨体の老人がぶつかり、様々なものが——壺が、鎧が、辺りに落ち、碎ける音が響き渡る。

「ロム爺っ!!」

「ぐうっ……」

フェルトは、老人を心配し声を張り上げるが、老人からは呻く声を一つ上げただけで、それ以上の反応は返ってこない。

先ほどの一撃の勢いに押されて、そのまま頭部をぶつけたことで、気を失ったらしい。

エルザに切られたわけではないので、死に至ることはないだろうが、ぶつかった衝撃で頭を切ったのか、老人の頭から血が一筋流れるのが見える。

「外れたか……」

銀のナイフを投擲したのは咲夜だった。

ロム爺に気を取られているところに、フェルトからの小型ナイフ。

そして、フェルトのナイフからあえて一拍遅らせて、時間差で音を立てずにナイフを投げることで相手の不意を突こうとしたが、相手も一筋縄ではいかになく、躲された。

咲夜は、スキを突いた攻撃でもかわされる結果になってしまったが、元々相手が簡単に倒すことができない強者であることは、予想できていた。

故に結果を冷静に受け止めた。

しかし、それでも想像以上に相手が手強いことも分かり、首筋に少し、冷汗をかく。

フェルトは死んではないだろうが、ロム爺が気を失ってしまったことに少なからず動揺しているようで、エミリアもこちらの戦力が少なくなってしまう、より状況が悪化したことに、焦りを感じているようだった。

何か手が無いかと、考えを巡らせる咲夜だが、ふと先ほどからいつ

までたつてもエルザから反応が返ってこないことに気付く。

いや、よく見れば、彼女の方がわずかに震えていることに気付く。

そしてその震えは徐々に大きくなり、それと同時に嗟い声も大きくなって聞こえ始める。

「……ふふふ。いいわあ。先ほどの攻撃、痺れてしまったわ」

エルザは、首だけをこちらに振り向く。その表情は恍惚としており、目も少し潤んでいた。

その表情を見て、エルザ以外の面々背筋に寒気を感じる。

その彼女の纏う狂気的な感情に恐れを抱いたのだった。

そしてエルザは倒れているロム爺に構うことはせず、咲夜たちの方へと体を向き直る。

エルザの顔には一筋の小さな傷があった。

躲されたと思った咲夜の攻撃は、彼女の顔にわずかなかすり傷を負わせていた。

「それにしてもメイドさん、女性の顔に攻撃してくるなんて、容赦がないのね」

「あいにく、相手を気遣ってあげられるほど余裕はないのよ」

「ふふふ、あなたいいわあ。素敵よ。あなたの腸を裂くのが楽しみだわ。きつと綺麗に違うわ」

「……趣味悪いわね、あなた」

エルザは、咲夜しか視界に入っていないのか、体を完全に咲夜の方へ向ける。

視線はまっすぐ咲夜に向けており、完全に標的が自分になっていることに気付き、ため息が漏れる。

そしてフェルトやスバルたちから少し離れるよう前に出る。

「スバル、フェルト、ここからはわたしとエミリアで時間を稼ぐわ。だから何か良い案でも考えなさい」

「随分な難題押し付けてくん、姉ちゃん……」

「良い案って……。こんな状況で何が出来るんだよ？」

「こんな状況だからよ。不本意だけど任せたわよ」

咲夜は、左手に銀のナイフを、そして右手にはいつぞやのチンピラ

から奪った、ククリナイフを構える。

使い慣れた銀のナイフも良かったが、相手が格上であり、なおかつこちらの持つ銀のナイフよりもリーチのある武器を相手が持っている。

せめて同じリーチの武器を使う方が、少しはましだろうと判断しての構えだった。

「第二ラウンド開始よ!!」

咲夜が構えて準備が整ったことを確認するとエルザは飛び出す。

しかし、横から無数の氷の刃がエルザを襲う。

「こっちも忘れてもらっては困るわ」

エミリアは、エルザの横から畳みかけるように氷の刃を放つ。

エルザは、後ろに飛び、躲すが、その後もエミリアから氷の塊が放たれ続け、手に持つククリナイフで、叩き切る。

そして咲夜も、銀のナイフをエルザに放つ。

エルザは、氷の刃とは別の方向から飛んでくる咲夜のナイフを姿勢を低くすることで躲し、その低い姿勢を維持したまま、エミリアに接近し、ククリナイフで攻撃を仕掛ける。

ククリナイフの攻撃は、先ほどまでと同じように氷の盾に阻まれる。

エルザはエミリアの盾を周りこみ横からさらに攻撃。

しかし、エミリアもエルザの動きの合わせて盾を移動させ対応。

エルザがエミリアの周りを駆け回り、隙を見て攻撃し、エミリアがそれを盾で防ぐ。

咲夜は、エルザがエミリアの近くにいるために、うかつにナイフが投げれず、見ていることしかできなかつた。

そのまま、エルザが攻撃を続け、エミリアがそれを防ぎ続ける攻防が継続されると誰もが思ったが、エルザは突如、向きを変え、咲夜に一直線に突撃してくる。

先ほど不意を突いた咲夜が、今度は不意を突かれることになった。

エルザは、咲夜の傍まで近づき、そのままククリナイフで左から横に切りつけてくる。

「……っぐ!!」

カインつと、金属同士が衝突する音が鳴る。

咲夜は、とつさに左手に持つ銀のナイフを縦に構えることで、エルザの刃を防ぐことに成功する。

咲夜は、右手に持っていたククリナイフを右から切り付ける。

エルザはしやがみ込んで避け、避けるともに地を這う低空の蹴りを放ち、咲夜の足を狙う。

咲夜は、後ろに飛び、そのままバク転する形で回避。

「空中に逃げたのは下策ね。」

エルザは、バク転している途中の咲夜が落ちてくる位置を予測して、丁度顔の位置が来るであろう場所をナイフで突く。

そのまま重力に引つ張られ、落ちてくる咲夜の顔をエルザのナイフによって、酷い有様になるであろうと思われるが、突如落ちてくる咲夜の体が空中で停止したため、エルザの攻撃が外れる。

「……なっ!!」

そして空中に浮かんでいる、咲夜の目線は、エルザをとらえ、いつの間にか咲夜は、持っていたククリナイフの柄を口で咥え、空いた右手と左手には、それぞれの指の間に銀のナイフを挟み、4本ずつのナイフを持って構えていた。

驚きに一瞬体を硬直させたエルザの隙を見逃さず、咲夜は両腕を振り、その両手に持つナイフを全てエルザに向かって放つ。

エルザは、向かってくるナイフの群を避けようと、後ろに飛ぶが、初動が遅れた為、2本ほどナイフが脇腹に刺さる。そしてナイフが刺さった個所から、彼女の血が滴る。

「……っぐ!!」

エルザは刺さった瞬間、苦悶の表情を一瞬見せるが、すぐにいつものように笑みを取り戻し、やがて恍惚の表情に変わる。

「……ああ、痛い、痛いわあ。でもこの痛みがわたしに生を感じさせてくれるの」

咲夜は、空中から降り、直地して息を吐く。

「はあっ……はあっ……っ!」

咲夜は、一瞬の攻防ではあったが、長距離を全力で走ったかのよう
な疲労に襲われる。

息は切れ、顔には少し汗が浮かんでいた。

そして生死のやり取りに緊張していたのか、息を止めて戦っていた
ため、肺が酸素を求め、呼吸しようとするが、疲労からなかなか喉
に空気が入っていかない。

対するエルザは、すぐに咲夜を責め立てず、自分の体に刺さるナイ
フを一本一本ゆつくりと抜いていき、床に捨てると、先ほどの咲夜の
空中での奇妙な動きが気になったのか、咲夜に話しかける。

「あなた、加護持ちだったのかしら？」

「……」

エルザに問われるが、咲夜はエルザが言った加護の意味が分からな
かった。

咲夜は勝手に警戒してくれるならそのまま警戒させておく方がい
いだろうと、沈黙で返す。

エルザは、沈黙が咲夜にとって凶星によるものだろうと、自分の攻
撃を躲した理由を、加護によるものと結論付ける。

「まさか、そんな隠し玉を持っているとはね。少し驚いたわ。でも種
が分かれば、次は対応できる。今度は、もっと別のことをしないと、躲
せないわよ。次は何を見せてくれるのかしら？」

エルザは咲夜が想像以上に楽しませてくれることを喜び、そしてさ
らなる驚きを期待する。

そんな戦闘狂のようなエルザは、まるで鬼のようだな、と幻想郷で
戦い好きな彼女らを思い出す。

鬼と違ってエルザの方がかなり悪趣味ではあるが。

咲夜は、エルザのまだまだ余裕そうな様子を見て、焦る。エミリア
と二人で戦ってはいるが、もともと二人とも遠距離タイプであるた
め、エルザがどちらかの近くにいたり、どちらかは味方を攻撃してし
まうことを恐れ攻撃を仕掛けることができない。

そのため、実質一対一と変わらない状況だった。

そして咲夜とエミリアはエルザを挟む形で直線上の位置にいたた

め、互いに援護も難しい。

「最悪の状況ね……」

状況の悪さに、さすがの咲夜も、愚痴が思わず、零れる。

そしてエルザが再度、咲夜に攻撃をしかけようとするが、そこで待ったの聲がかかる。

「こっちを向けー！ー！エルザー！ー！」

大声でエルザの名前を呼んだのはスバルであった。

その声に反応しエルザ、そして咲夜とエミリアもスバルを見る。

スバルの手には、あの魔法器、携帯が握られていた。

「スバル、フェルト、ここからはわたしとエミリアで時間を稼ぐわ。だから何か良い案でも考えなさい」

咲夜はスバルとフェルトにそう声をかけると、エルザの方に向き直り、スバルたちから距離を取ってしまう。

「何か良い案って、言われてもな……。フェルト何か良い案あるか？」

「おい、いきなり他人任せとか、情けねえな、兄ちゃん……」

「仕方ねえだろ！何も思いつかねえんだから！」

スバルとフェルトが考えている間も、エミリアたちは戦っている。

エルザは強敵で、なんとか二人が凌いでいる状況だが、長くは持たないだろう。

早く何か案を考え出さないと、そう考えスバルは焦りながらも必死に頭を捻るが、何も頭に思い浮かばない。

周りに何かいいものでもないかと思渡すが、ここは盗品蔵であると同時に酒場も兼ねているのか、酒瓶があるばかり。

酒瓶を投げても大した援護にもならないだろうと、スバルはため息をつく。

そして咲夜たちはどうしただろうか、とスバルは目を向けるが、今はエミリアとエルザが戦っているのか、エルザの攻撃をエミリアは氷の盾を形成して防いでいた。

エルザの攻撃をギリギリ防いでいるエミリアを見てハラハラし、目が離せなくなりそうな光景であったが、そうしている暇もない。

「くそっ！こんな時こそ主人公の力が目覚める時だろうが!!俺の秘められし力よ今こそ出でよ！」

スバルはそう叫んでみるも、何も起こらない。

「兄ちゃん……真面目に考えろよ」

フェルトにも冷たい目をして怒られ、スバルはわあっているよと、返し再び考える。

「無いものねだりをしても仕方がない……。現状あるもので何かできないか、考えろ。」

スバルは、考えていることをそのまま口に出しながら考え続ける。

そして自分のポケットをまさぐり、そこに人類の文明の利器、携帯を見つめる。

そのままポケットから携帯を取り出す。

「そのミーティアで何とかできないのかよ？何かすごい機能とか持っていないのかよ？」

携帯を見たフェルトが、魔法器なら何か、逆転の目をだせるんじゃないかと、スバルに問う。

あいにくただの携帯。

携帯で人は撃退できない。

「携帯にそんな機能はねーよ。現代なら警察とか呼んで撃退とかできなくもないけど、電話がつながらないこの世界では——」

そこまで言いかけてスバルは気づく。

「そうか、人を、助けを呼べばいい!!この世界だって衛兵くらいはいるはずだ。でも、エルザを倒せるような強いやつなんてそう都合よくいるのか？いやいる。アイツなら……きつと。」

スバルは、フェルトの言葉をきっかけにどんどん考えを巡らせ、ぶつぶつと呟きながら案を纏めていく。

「あとはどうやって、エルザの目を盗んで抜け出すかだが……」

スバルはふと手に持つ携帯を見る。

そこには、盗品蔵に着く前に、フェルトを撮影した一枚が待ち受け

画像として表示されていた。

「おい、兄ちゃん、さつきからブツブツと何を——」

「フェルト、俺の作戦を聞いてくれ」

フェルトは、急にブツブツと一人で呟き出した、スバルを心配し声をかけようとしたが、逆にスバルに肩を掴まれ、声をかけられる。スバルが何か閃いたようだ。

「こっちを向け——！エルザ——！」

突如、横から大声がし、咲夜は声の主に目を向けると、そこにはスバルがいた。

声に反応しエルザとエミリアもスバルを見る。

スバルの手には、あの魔法器、携帯が握られていた。

「くらえ!!連続、菜月フラッシュユ!!」

携帯から連続して眩い光が連続して放たれる。

エルザが来た時には既に日が暮れ始めており、盗品蔵の中は電気もついていない状態であったため、今や部屋の中はかなり暗くなっていた。

夜目に慣れた咲夜たちでなければ、中の様子は見えない状態だったろう。

そこにスバルによって、照らされる光。

咲夜たちも含め、エルザの目を光で目を眩ませるのに十分な条件であった。

そして、スバルが思いもよらなかったが、エルザは吸血鬼で、夜には通常の人間よりも暗闇の中でも見えやすいことも、より大きな効果を生んだ。

「ああっ!!!」

「うっー！」

「眩しいっ!!!」

エルザ、咲夜、エミリアと光の眩しさに目が眩む。エルザは特に目

が眩んだようで、体を思わずふらつかせた程だった。

「今だ、フェルト！行け！」

スバルからあらかじめ、目を瞑っているよう言われていたフェルトは、スバルの合図で目を開け、盗品蔵の扉に走る。

目が眩んでいたエルザは、フェルトの姿を目でとらえることができない。

しかし、エルザは音で判断したのか、持っていたククリナイフをフェルトの方へ正確に投擲してくる。

スバルは傍の棚に置いてあった酒瓶を投げつけ、見事ナイフにぶつけることに成功する。

酒瓶は割れ、中から液体が飛び出し、酒の匂いが辺りに充満する。

ククリナイフは、酒瓶がぶつけられたことで進行方向を変え、フェルトから外れる。

「おおー、自分でやったことだけど、俺ってすげー!!まぐれでもやってみるもんだな!!」

フェルトはその間に、扉にたどり着き、外へ出る。

「よっしやああ！」

スバルは、上手くフェルトを逃がせたことに、歓声を上げる。

助けを呼ぶために逃がすなら、自分よりも幼い少女を助けるべきだ。

フェルトはこのあたりの土地勘もあるし、自分よりも素早く動けるため、逃げられる可能性も、助けを呼べる可能性も自分よりも高いはず。

スバルは、そう考え、携帯による目くらまし作戦をフェルトに提案したのだった。

それがうまく成功したことで、スバルは安堵の息を吐く。

「まさか、何も役に立たないと思っていたお兄さんしてやられるとは思っていなかったわ」

「俺もまさか、半ば博打のような作戦が完璧に成功するとは思ってなかったぜ！ざまあ、みやがれ！」

スバルは自分自身でも驚いたような発言をしながらも相手を煽る。

簡単な挑発に乗る相手では無いが、

「ふふ、威勢が良いのね。でも楽しんでいたところに水を差されて、わたしも少しイラっとしてしまったわ!」

「ぶはっ……」

そう言うと同時にエルザはスバルの近くまで一気に駆け寄り、回蹴りをする。

スバルはエルザの速さに反応できず、横顔を蹴られ、部屋の壁まで吹き飛ばされる。

エルザは、その後、咲夜に近づこうとするが、そこで背後から氷柱が迫ることに気付き、横に飛ぶことで回避。

しかし、回避した後も、氷の柱の雨による攻撃は止まらず、エルザは部屋を駆け回ること回避し続ける。

咲夜は、エミリアが攻撃している間に、エルザから距離を取り、回り込むように移動することで、エミリアの近くまで行く。

咲夜が近くまで来たことを確認すると、エミリアは一旦攻撃を止める。

「さすがに、素手で魔法使いの相手をするのは骨が折れるわね」

「そう思うなら、手を引いてくれないかしら?」

さすがのエルザも武器が無い状態では、少しばかり避けるのに苦労するのか、何本かの氷柱がかすったのか、ところどころ、服が破れ、そこから肌が露出している。

しかし、あれほどの攻撃をされても大した傷を負ってもいないようだった。

咲夜は、諦めてくれないだろうと思いつつも、手を引いてくれないかと、期待してしまう。

「残念。仕事の依頼だから個人の都合では決められないの。それにこんな楽しい戦い、そうそう味わえるものでもないもの。手を引くわけにはいかないわ」

エルザは、素手の状態でも戦う気を一切衰えることがなく、こちらに走り出せるように体制を低くする。

対するこちら油断なく、エミリアはいつでも魔法を出せるよう、

掌を前に構え、咲夜もククリナイフを構える。

スバルも吹き飛ばされていたが、足をふらつかせながらも立ちあがり、拳を構える。

しかし、エルザが前に飛び出そうとしたとき、盗品蔵の天井をぶち破ってきたものがいた。

「そこまでだ！」

凜とした声とともに、ぶち抜かれた屋根から降り立ったのは、燃えるような赤い髪をしたラインハルトだった。

第十七話：剣聖の戦い

「そこまでだー！」

突如、盗品蔵の屋根がぶち抜かれ、上から降り注いでくる瓦礫とともに、一人の男が降り立ってくる。

現れた人物は、燃えるような赤い髪をしたラインハルトだった。

彼は数メートルもの屋根の高さから飛び降りてきたというのに、まるで羽毛の布団に着地したかのように、音もなく着地し、悠然と立ち上がる。

彼から感じられる圧倒的な存在感から盗品蔵にいた全員が、突如起きた事態に驚嘆し、威圧される。

エルザは、ラインハルトの只者でない気配を感じたのか警戒し、まだ武器を隠し持っていたのか、懐からククリナイフを取り出し、いつでも動けるように油断なく構える。

咲夜たちを相手していた時にはあつた余裕の笑みは、ラインハルトを前にして消えている。

「危ないところだったようだけど、間に合っただけだ。さあ、舞台の幕を引くときだろうか！」

しかし、ラインハルトは周りの驚いた反応をよそに、凜とした声で、戦いの幕引きを宣言する。

彼の落ち着いた、そしてどこか安心感を感じさせる声に、先ほどまでエルザと対峙し、命の危機から緊張感に襲われていた面々は、思わず安堵の息を吐いてしまう。

「……ラインハルト、か？」

「そうだよ、スバル。さっきぶりだね。遅れてすまない。咲夜もいるとは思わなかったけど、二人とも無事なようで良かった」

「安心するには早いわよ」

「そうだった。ここからは僕に任せて、君たちはそこに倒れている老人を見ていてくれ」

ラインハルトは、スバルと咲夜に声をかけ、無事を確かめ、咲夜の忠告され、同意した彼は、自分に唯一敵意をぶつけてくる存在に向き

直る。

そして、目を向けた先の相手、黒のドレスで妖艶な雰囲気醸す女を見て、相手の正体に思い起こさせるものでもあったのか、ラインハルトは目を細め、少し警戒感を感じさせるような、声を低くして問う。「黒髪に黒い装束。そしてくの字に折れた北国特有の刀剣——それだけ特徴があれば見間違えたりはしない。君は『腸狩り』だね?」

「なんだその超物騒な異名……」

「その殺し方の特徴的などころからついた異名だよ。危険人物として、王都でも名前が上がっている有名人だ。ただの傭兵という話ではあるけど」

エルザの物騒な通り名に、思わずスバルが突っ込んでしまうが、ラインハルトは嫌な顔せず、律儀に解説する。

こんな事態になっても彼の誠実な態度を見て、咲夜はとんだお人よしだな、と思うと同時にラインハルトの説明にあった、エルザとのこれまでの行動を鑑みれば、彼女がそのような物騒な通り名で呼ばれていることに納得もできる。

ここはラインハルトに任せるべきだろう、と咲夜もそう思ったのか、この場の誰もが反対の意を唱えず、スバルたちとともにラインハルトとエルザから距離を取る。

咲夜は、ラインハルトたちから距離を取る際、そういえばと、ロム爺を見ると、ロム爺はスバルが運ぶらしい。

スバルは、ロム爺の両足をそれぞれ片手で掴み、引きずって運ぼうとしていた。

……スバル、人を運ぶときは、足を引っ張って運んではだめよ。頭が地面に擦れて、はげ……いや、もう禿てるか。

咲夜は頭を下にして、地面に擦らせながらも運んでいるスバルを見て、そう思ったが、まあ、別にいいかとも思ったのか、内心で注意しただけで、口に出してまで注意はしなかった。

先ほどロム爺に揶揄されたことを地味に根に持っていた咲夜だった。

そしてロム爺が、頭が擦れて痛いのか、何度か表情が少し苦痛に歪

ませながらも、スバルたちが距離を取り終えたところで、エルザがラインハルトに声をかける。

「ラインハルト——そう、騎士の中の騎士。『劍聖』の家系、ね。すごいわ、こんなに楽しい相手ばかりだなんて。雇い主には感謝しなくてはいけないいわね」

「色々と聞き出したいこともある。投降をお勧めしますが」

「血の滴るような最高のステークを前に、飢えた肉食獣が我慢できるとても？」

いつもの余裕そうな気配は消えているエルザではあるが、やはり彼女は戦闘好きであるのか、ラインハルトを警戒しているながらも、劍聖と謳われるほどの強者と戦えることに喜悦の表情を浮かべる。

そんなエルザに視線を向けられたラインハルトは苦笑し、戦いにならざるを得ないと判断したのか、エルザの方へと歩いて近づく。

彼が持っている剣を手にもせず、無手でエルザに近づくことにその場の誰もが驚く。

エルザでさえ、ラインハルトの行動に怪訝の表情をする。

そして、嘗められていると思つたのか、エルザはそのラインハルトの愚かな行動を後悔させてやると、手にしていた刃をラインハルトの首めがけて、一閃する。しかし、

「女性相手に、あまり乱暴はしたくないんですが……失礼」

そうラインハルトは口にする、踏み込みで床が破裂し、衝撃波が発生するほどの蹴りで、エルザを吹き飛ばす。

吹き飛ばされ、そのまま壁に叩き付けられるかと思われたエルザだが、空中で体制を整え、壁を足場にして上手く勢いを殺したようで、そのまま床に静かに降り立つ。

しかし、エルザも自分が吹き飛ばされたことに衝撃だったのか、驚いた顔をラインハルトに向ける。

「……なっ」

「いやいやいやマジかよ……なんじゃ、そら」

咲夜とスバルはその光景を見て、愕然とする。

ラインハルトが強いことは予想できていたが、まさか剣も使わずに

エルザを軽々と吹き飛ばしてしまうほどの蹴りを放つことは思っていなかった。

以前にラインハルトを敵に回したこともあった咲夜だが、その時に隙を見て逃げようと考えていたが失敗に終わっていただろうと考える。

今回は、敵対することなく、顔見知りになれたのは、幸運だったと思わざるを得なかった。

「噂通り……いえ、噂以上の存在なのね、あなたは」

「ご期待に添えるかどうか」

「その腰の剣は使わないのかしら。伝説の切れ味、味わってみたいのだけれど」

「この剣は抜くべきとき以外は抜けないようになってる。鞘から刀身が出ていないということは、そのときではないということです」

「安く見られてしまったものだけ」

「僕個人としては困らされる判断ですよ。ですから——」

ラインハルトは、発言の途中で何かを探すように辺りに視線を彷徨わせ、先ほどまで咲夜たちとエルザたちの戦闘によりあちこち散乱して落ちている物の中に、古びた両手剣を見つけ拾う。

「こちらでお相手させてもらいます。ご不満ですか？」

「——いいえ。ああ、素敵。素敵だわ。楽しませてちょうだい、ね！」

そう言うと、エルザはラインハルトに投げナイフを4本投擲。

ラインハルトが本来持っている剣ではなく、おんぼろの剣を持っているとはいえ、真正面から戦うのは不利とエルザは判断したのか、牽制にナイフを投げる。

しかし、いずれもラインハルトには当たらず、まるで自らラインハルトを外れるように軌道を変え、誰もいない壁に突き刺さる。

「矢避けの加護——！」

「生まれながらに与えられたものでね……不公平とは思わないでほしい」

牽制に意味はないと理解したエルザは、刃をラインハルトの腹めがけて突く。

しかし、エルザの刃はラインハルトの体にかすりもせず、むなしく虚空を切る。

ラインハルトは、エルザの刃を屈むことで躲していた。そしてその状態から下から上にラインハルトの洗練された技量を持って、剣が振るわれる。

そのラインハルトの振るわれる剣筋は美しく、彼の握っている剣が鈍らの剣であることを微塵も感じさせない。エルザはラインハルトの剣が迫っていることに気付くと、ラインハルトの剣と自分の体の間に持っていたククリナイフを滑り込ませる。

しかし、エルザの持っていたククリナイフの刃は、豆腐のように抵抗もなく、柄だけを残して切り落とされる。

エルザは、目を大きく見開き、驚きながらも体を後ろに飛ばして距離を取ること、ラインハルトの剣を躲す。

「武器を失ったのなら、投降をお勧めします」

エルザは持っていた刃の部分がなくなり、柄だけになった元ククリナイフが武器としての機能を失ったことを理解したのか、床に投げ捨てる。

「圧倒的ね」

「尋常じゃ、ねえな。俺も茶化す気力もわかねえよ」

咲夜とスバルは目の前の光景に、感嘆の声を漏らす。そこへ、エミリアが駆け寄る。

「その人、大丈夫そうなの？」

「え？」

エミリアが聞いたのは、ロム爺のことであった。

ロム爺は、エルザとの戦いにより、意識を失っていた。

盗品蔵のもので切ったのか、頭からも少し血を流していたが、今は血は止まっているようにも見える。

しかし、エミリアは倒れているロム爺のケガの具合を確かめて、「これは治療しないと」と呟き、治癒魔法なのか、彼女の手が青く輝く。

「おいおい、言っとくけどこの爺さん。お前の徽章を盗んだ一味だけ？」

「だからよ。無事に治ってもらって、その恩を逆手に情報を聞き出すの。命の恩人相手なら嘘なんてきつとつかないわ。これも私のための行為よ」

咲夜もスバルと同じ感想を持ったが、徽章を盗んだ直接の犯人であるフェルトを逃がしたスバルが言えたことかしら、と内心呆れる。

そしてロム爺の治療はエミリアに任せ、スバルと咲夜はラインハルトたちに再び視線を戻す。

武器を失い、大人しくなったエルザを見て、抵抗の意思を失ったと思っただのか、ラインハルトは無防備にエルザに歩み寄っていた。

隙を見せるラインハルトにエルザが隠し持っていたククリナイフを抜き、攻撃を仕掛ける。

「二本目があるぞ、ラインハルト！」

しかし、エルザが行動する直前のスバルの叫びにより、エルザのククリナイフは、後ろに下がったラインハルトに躲される。

奇襲を回避されたエルザはその黒瞳をスバルに向けて、苦々しげな表情を一瞬見せたが、

「牙は二本だけではないの。……仕切り直しに付き合っていただけ？」

「全ての武器を切り落とせば、満足してもらえるかな」

「牙がなくなれば爪で。爪がなくなれば歯で。歯がなくなれば骨で。骨がなくなるのなら命で。——それが戦闘狂というものよ」

「それなら、その看板を折らせてもらうとするよ」

そして会話を辞め再び戦闘を始める二人。

最初に仕掛けたのはエルザだった。

エルザはさらにククリナイフをもう一本抜き、二刀流になると、不意にそのエルザが視界から消えた。

その足は地を離れ、驚異的な跳躍を以って宙を舞っていた。

軽々とラインハルトの頭上を飛び越える跳躍を見せ、エルザはラインハルトの背後に着地。

着地と同時にエルザは、二刀を左右から挟み込むように振るう。

ラインハルトは、機敏な動きで振り向き様に下から蹴りを放ち、エ

ルザの左手を蹴り上げることで、右の刃の軌道を反らし、持っていた剣で左からの刃を打ち払うことで防ぐ。

「ちっ」

エルザは防がれたことに彼女に似合わない行動、思わず舌打ちをする。

防がれると今度は、エルザの方から蹴りが放たれる。

地面から唸るようなスピードで迫る足技をラインハルトは体を反らして躲す。

エルザの足は、ラインハルトに当たらず、彼の赤い髪を風で揺らしただけだった。

蹴りを躲したラインハルトは、体を起こし、蹴りを放った直後で硬直状態のエルザに、剣を横に振るう。

エルザは蹴りを放ち、体を支えていた足の方を曲げ、体制を低くすることで高速で放たれるラインハルトの剣は、エルザの頬をかすめ、わずかな血が流れる。

躲したエルザは、曲げた足をあわてて伸ばし、その反動で後ろに飛んで距離を取る。

逃げるエルザをラインハルトは追い、さらに一閃。

エルザは、ククリナイフでラインハルトの剣を打ち払おうとするが、剣が腹をかすめ、血が出る。

しかし、エルザは血が出るのも構わず、ラインハルトの腹を蹴り飛ばし、距離を取る。

「っぐ……」

「粘るね」

再び距離を取り、向かい合う二人。

そして先ほどと同じようにエルザが先に均衡を破って行動に移す。

戦いの方針を変えてきた。エルザは先ほど見せた驚異的な跳躍力で宙を飛び、天井を足場にするように逆さまになり、天井を蹴り、その反動でラインハルトに一気に迫り、刃を一閃。

ラインハルトは、エルザの刃を剣で防ぎ、エルザに反撃を仕掛けようとするが、エルザはすぐ様、あつという間に壁際まで距離を取る。

そしてその壁を蹴り、さらに襲い掛かる。ラインハルトが防ぐと、距離を取り、壁を蹴って攻撃を仕掛けるエルザ。

先ほどまでと状況が異なり、上から横からと縦横無尽に重力を無視したかのようなエルザの移動による攻撃に、ラインハルトは防いでばかりになっていた。

「防戦一方になってきたわね」

「まさかラインハルトですら、決め手に欠けるってんじゃないだろうな……」

「……こつちに、気を遣ってるのよ、彼は」

不意にロム爺を治療していたエミリアが言った言葉に、「え？」とスバルは声を上げる。

咲夜もエミリアの声に反応し、彼女にどういうことだと、と目を向ける。

二人の視線を向けて、エミリアは気まずげに唇を噛み、

「私が精霊術を使ってるから、彼は本気が出せないの。せめて、この人の治療が終わるまでは……」

「どういう因果関係？」

「ラインハルトが本当に戦うつもりになれば、大気中のマナは私にそっぽ向くもの。——そろそろ治療が終わる。合図したら、彼に声をかけて」

「あ、ああ」

疑問を上げるスバルだが、咲夜にもエミリアの言っている意味は分からなかった。

しかし、どうやらエミリアの治療が終われば、ラインハルトは反撃に移れることだけは理解できた。

それから暫くして、血が流れていた頭部の傷は消えてゆき、それに感嘆していたスバルにエミリアが深い息を吐くとともに治療が完了したこと合図をするように、スバルに声をかける。

「お願い」

「お任せ。——ラインハルト！ よくわからんが、やつちまええ！」

スバルの声に反応し、こちらに視線を投げて応えるラインハルト。

「——なにを見せてくれるの？」

「アストレア家の剣撃を——」

——直後、咲夜は、周囲の盗品蔵の中の空間が歪むような不思議な感覚に襲われ、足がふら付き、思わず額に手を当てる。

「はっ。」

しかし、それを感じたのは咲夜だけではなかったようで、スバルもその感覚に困惑しているようだった。

しかし、奇妙な感覚は、徐々に和らぐどころか、強くなり、さらにエミリアの氷結魔法により、低下していた盗品蔵の気温がさらに下がり肌寒ささえ感じてくるほどだった。

思わず起きた身震いにスバルは肩を抱いていた。そして、

「え、あれ、おい」

「ごめんなさい……ちよつと、肩を貸して」

「ちよつと、どうしたのよ」

突然咲夜に体を倒し、寄りかかってきたエミリアを、咲夜は支える。スバルはそれを見て慌て始める。自分の髪と同じ色をした少女は、体がひどく熱くなっており、苦しげに息を吐き、まるで風邪をひいているようだった。

「あなた体調を崩していたの？」

「違うの。マナが……わかるでしょ？」

——わからないわよ。

同じことを考えたのか、咲夜とスバルを目を合わせる。

問いただそうとエミリアに視線を戻すが、息を荒くして苦しそうにしているエミリアを見て、さすがにそんな鬼のような行動には出れなかった。

そしてやる事が無く、ラインハルトに目を向けると、部屋の中央で、ラインハルトが両手剣を上段で構えていた。

これまで、一度も剣を構えようとしていなかった『剣聖』ラインハルトが、初めて剣を構えた。

咲夜はそれを見て、直感的に戦いに決着が付くのだと、悟った。

第十八話：決着

部屋の中央で、ラインハルトが両手剣を構える。

盗品蔵は、そんな彼を中心として、威圧される異様な空気に満ちていた。

そしてそんな彼に向かい合ってエルザが立っている。

『腸狩り』エルザ・グランヒルテ」

「――『剣聖』の家系、ラインハルト・ヴァン・アストレア」

互いに名乗りを上げる。

そしてラインハルトの構えている両手剣は、太陽のような眩い光を徐々に強めつつエルザに向かって振り下ろされる。

「――っ!!」

咲夜は思わず、その光の眩しさに目を瞑る。

目を閉じたと同時に、辺り一帯全てを吹き飛ばすような衝撃と轟音が襲う。

嵐のような風が吹き荒れ、その風の勢いに体が流されかける。

咲夜は倒れまいと、足腰に力を入れ、踏みとどまる。

やがて光が収まり、そろそろと目を開けると、先ほどまで盗品蔵であつた場所は、まるで爆弾で建物を解体させたかのような、辺りに瓦礫しか転がっていない場所になっていた。

あまりに様変わりしてしまった光景に、しばし呆然としてしまう咲夜。

たった一振りでこのような光景を生み出してしまうラインハルトが、もし本来の剣を握った場合にどうなるのか、想像してしまい、思わずゾツとする。

咲夜は、他の者はどうなったかと周りに視線を巡らせると、すぐ近くの場所にスバルとエミリア、ロム爺の姿を確認する。

スバルは体を張って飛んでくる瓦礫から二人を守ろうとしていたのか、二人に体を覆いかぶった体制でいた。

スバルの体では、老人の巨体を覆え切れなかったのか、ロム爺の頭がミルクのような液体で汚れていること以外には問題ないようだった。

た。

スバルも戦いの音が収まったことに気付き、目を開ける。

そして部屋の中心辺りであったであろう位置に立っているラインハルトを見つめる。

「なにが化け物狩りは自分の領分だ。お前のが十分、化け物じゃねえか！」

「そう言われると、さすがに僕も傷付くよ、スバル」

スバルの苦言に、ラインハルトは苦笑を返す。

そして彼の手の中の両手剣は、ラインハルトの一撃に耐えられなかったのか、ボロボロと崩れ、壊れていく。

「無理をさせてしまったね。ゆっくり、おやすみ」

ラインハルトは、悲し気に崩壊していく剣に別れを告げる。

そしてスバルはキョロキョロと辺りを見回し、エルザの姿を探す。

「肉片ひとつも残ってねえな……スプラッタ感が失せて逆によいか」

エルザの姿が見当たらない理由をラインハルトの攻撃によるものだと判断する。

そう考えるのも無理もなく、大抵のものは、あれほどの一撃を正面から受けたら、チリ一つ残らないほどの攻撃だった。

破壊の跡はすさまじく、盗品蔵だけでなく、周囲の建物も巻き込み、余波で崩壊させていた。

幻想郷で屈強な妖怪でもあれほどの攻撃を直撃すれば、ただじゃいられない。

まあ、中には不死身の連中もいるが……。

「でもこれで……」

「終わったわね」

スバルが口にした安堵の言葉を、途中から咲夜が引き継ぎ、終わりを告げる。

外は完全に日が暮れ、夜になっていた。

ようやく終わった。

時間にすれば、たった一日の間であったが、何度も繰り返された時

間により、随分と長く感じてしまう。

咲夜もようやく、緊張を解き、息を吐く。

そしておもむろに、近くにある瓦礫をどかしてみても、そしてやはり無いかと、と呟きため息をつく。

「こんな瓦礫が辺りに散乱していたら、さっきの戦いで使ったナイフを回収するのは無理ね……」

咲夜は、エルザの戦いで、少なくともナイフを使用した。

戦いの後で使用したナイフは全て回収するつもりであったが、こうなってしまうとは、一つ一つの瓦礫をどかして探すしかない。

さらに、中には大きな瓦礫もある中で、ナイフが無事のまま埋まっているとも思えない。

おそらく徒労に終わるだろう、そこまで想像できてしまい、さらのため息を吐いてしまう。

そしてふと自身の右手が握っているものに気付く。

チンピラから奪ったククリナイフだった。

(こんな鈍らだけじゃ、赤字もいいところね。銀のナイフはいざという時の資金源にもなりそうだったのに……)

そして咲夜はさらに幾度かため息を吐いたあと、気を取り直し、顔を上げた。

スバルとラインハルトとで会話をしている。

そして咲夜の耳にも彼らの声が届く。

「そういや、ラインハルト。まだ礼を言ってなかった。マジ助かった。さっきの路地のことといい、俺の心の叫びが聞こえたのかよ、友よ」

「それができたなら僕も胸を張るんだけどね、友達くん」

ラインハルトはスバルの言葉に肯定せず、あいまいに言葉を濁し、目である一点を示す。

咲夜もラインハルトの視線の先を追いかけて、そちらに目を向ける。

「お」

「あれは……」

元盗品蔵の柱であっただろう、場所の陰から、フェルトが顔を覗か

せる。

「なんだ、やっぱりフェルトのお陰か……」

「おや、スバルは彼女が僕を探していたことを知っていたのかい？」

「ああ、俺が呼んでくるよう頼んだからな！」

スバルは威張るように胸を張り、そしてフェルトを見る。

スバルに見られて、フェルトは嫌そうに顔を歪め、柱の陰に隠れるように引っ込む。

ラインハルトは、そんなフェルトに苦笑しながらも説明を続ける。

(なるほど、あの時フェルトを逃がしたのはそういうわけか……)

スバルの話を聞き、咲夜はスバルが危険を冒してまでフェルトを逃がした理由が理解できた。

「彼女が必死で路地を走り回っていたんだ。そして僕に助けを求めた。僕がここにこれたのは彼女のおかげだよ。その後は騎士の務めを果たしただけさ」

「騎士の務めって、ボロボロの廃屋を平たくすること？」

「それって意地悪過ぎやしないかい、スバル」

「なるほどね、スバルも少しは知恵を絞ったのね」

「おおよ！俺はやる時はやる男だぜ!!もつとも、いままでにそれが発揮された機会はほとんど無かったけども！」

咲夜はスバルたちの方へと足を進め、会話に交じる。

声をかけられたスバルは近づいてくる咲夜に気付き、スバルらしい、自慢しているようでどこか自分を卑下するような返事を返す。

そんなスバルを見て、ふと咲夜も相変わらずだと、笑みを零す。

そしてふと、スバルたちの後ろにある瓦礫の陰に潜む存在に気付いてしまった。

陰に潜んでいたエルザに。エルザはククリナイフを構え、今にも陰から飛び出さんとしていた。

——エルザっ!!!

咲夜は、スバルに駆け寄ろうとするが、エルザの方が一拍、早く飛び出す。

ラインハルトもエルザに気付いたようだ。

彼にしては珍しく焦ったような声を出す。

「——スバル！」

ラインハルトの叫びによって、スバルもエルザの陰からの接近に気付く。

「——ッ!!」

エルザは、体を血で染めながらも、重症と思わせないような素早いスピードでスバルに接近する。

エルザは、先端が折れたククリナイフを持っていた。先端がなくともエルザのスピードと常人離れた身体能力なら、人を殺傷するのは簡単だろう。

「てめえ——ッ！」

スバルは、ふと足元に落ちていたロム爺の持っていた棍棒が転がっていることに気づき、足で蹴り上げる。蹴り上げられた棍棒は宙に浮き、スバルはその柄を握ることに成功する。

「おっしやああ!!」

スバルもまさか上手くいくとは思っていなかったようで、少しの驚きが混じった、気合を入れるような声を上げる。

そして、エミリアを庇うように前に出る。

エルザは、前に出てきたスバル目がけて、刃を振るう。

「狙いは腹狙いは腹狙いは腹ああああああつ!!」

スバルはエルザの狙いを腹と決め、エルザの刃を防ぐため、棍棒を縦に構える。

スバルの読み通り、エルザの狙いは腹で、エルザの趣向を理解して読んだスバルが見事、棍棒でエルザの死を誘う凶刃を防ぐかと、思われた。

しかし、

「——ん なつ!!!」

「残念ね、坊や」

スバルは自身の持つ棍棒、否。

棍棒だったものを見て驚愕の声を上げ、エルザは自身の勝ちを確信し微笑む。

スバルの持つ棍棒は、途中で切れ、半分の長さの棒切れになっていた。

まじかよ、と呟くスバルは、自分を死に至らしめんと近づくと刃を、まるで時が止まったかのように感じながら見る。

これが走馬灯つてやつか、と呑気に考え、これまでの戦いを思い出す。

そしてロム爺がエルザとの戦いで、気絶させられる前に、棍棒で一撃を防いだ時のことを思い出し、ああ、その時だったのか、と呑気に考え、そして諦めたかのように目を閉じる――

――咲夜は、スバルに駆け寄ろうとするが、エルザよりも先に辿り付けそうにない。

ラインハルトも咲夜以上にスバルと距離が離れていて、間に合いそうにない。

ここまで来たのに――、咲夜はそう思いながら必死に手を伸ばすが、距離があり届かない。

咲夜はもう無理だと、悟る。

そして、つい最近にも似たような光景がつい最近あったなど、思い出す。

あの時は、必死で能力も使用することも忘れ、とっさに行動してしまったが、何とかパチュリー様を助け出すことはできた。

しかし、自分が逃げるほどの時間はなく、間に合わなかった。

その結果、紅魔館から、お嬢様たちから離れ離れになってしまった。今回は、前とは違って、能力を使用したいと思える程度には冷静だ。

なのに、能力を使用することができず、それが歯がゆく感じてしまう。

こんな目にあったのは、あの黒い女の影のせいだというのにまた、今回もあいつの都合でやり直しに巻き込まれてしまう。

しかし、咲夜は、誇り高い吸血鬼の主を支える忠実なメイドとして

の矜持がそれを許すことが出来なかった。

時間操作というお株を奪われて、いいようにされてたまるか、と。

「つぶさけるな！」

間に合わないと分かりながらも、咲夜は足を止めず、強く地面を踏みつけ、駆ける。

せめてもの抗いだと叫ぶ。

「ま、間に合えー！ー！」

その時、咲夜は自分の体から何かが急速に失われていく感覚を覚える。

それと同時に、とある感覚も感じる。

自分が、自分だけが感じることできる、最も慣れた感覚に似た感覚を。

「これは、——」

ふと遠くでラインハルトが何かを感じ取り、呟いたが、その言葉が言い終わる事は無かった。

エルザの刃は進みを止めていた。

いや、エルザ自身が止まっていた。それだけでなく、盗品蔵にいた人物全ての動きが止まっていた。

時が止まった。これなら——。

咲夜は、好機と見て、さらにスバルの元へと駆ける。

しかし、時が止まったのは数秒の間で、再び時間が進みだす。再び動き出すエルザは、既にスバルのすぐ傍まで迫っていた。

エルザは、咲夜がまるでワープしてきたかのようにすぐ傍まで迫っていたことに目を丸くするが、エルザの腕は既にスバルに向けて伸ばされていた。

咲夜も手に持つククリナイフを突き出す。そして、

キインっ、と耳が少し痛くなるような金属が辺りに響く。

エルザの突き出したククリナイフは、咲夜の突き出された、刃の腹を側面で防がれる。

しかし、真正面からぶつかるように突撃してきたエルザに対し、横から右手に持つククリナイフを突き出された咲夜のククリナイフは、

勢いは殺せず、咲夜の手ごと弾き飛ばされ、その勢いのままスバルの腹にぶつかり、スバルの体を吹き飛ばす。

「ぎゃああああ!!」

スバルは喧しく叫び声を上げながら、隣の隣家の壁まで吹き飛ばされていった。

「この子はまた邪魔を——」

横から現れた咲夜を苦々しく見て、今度は咲夜に襲い掛かろうとするが、

「そこまでだ、エルザ！」

追い付いてきたラインハルトを見て、これ以上の戦闘を続けることは無理と判断し、一足飛びに、広場の方まで跳躍して距離を取る。

「いずれ、この場にいる全員の腹を切り開いてあげる。それまではせいぜい、腸を可愛がっておいて」

そう言葉を言い、エルザは一瞬、咲夜に意味ありげな視線を向けた後、跳躍して家々の屋根を伝って、駆け去ってしまう。

立ち去るエルザを追わず、ラインハルトはエミリアに駆け寄る。

「ご無事ですか——」

「私のことはどうでもいいでしょう!? それより……」

エミリアはふらつきながらも、壁まで飛ばされ、倒れていたスバルに駆け寄る。

咲夜もエミリアに続き、スバルの近くまで寄る。

「ちよつと大丈夫!? 無茶しすぎよっ」

「お、おおお……ら、楽勝楽勝。あそこつてば無茶する場面だべ? 動けんの俺しかいねえし、あいつがとつきに狙う場所もこつそり当てがあったし。まあ、意味はあまり無かったけど……」

心配そうに近づくエミリア、スバルはククリナイフ越しに一撃をもらった腹を、服をめくって確認する。

青よりも黒に近い、痛々しい色の青痣になっている。

「あなた、吹き飛ばされてばかりね、好きなの?」

「ちよつ!俺を変な性的趣向の持ち主にしないでくれる!!?」

咲夜は、先ほども盗品蔵でエルザに蹴り飛ばされていたスバルを思

い出し、呆れる。

「まあ、あなたの強さは、何度蹴り飛ばされても、嬉しそうに立ち上がってくるタフさだものね」

「あ、あれ？前に言っていたことと少し変わってない!!?あの時は、不覚にも感動したのに、なんかありがたみが薄くなっちゃうよ!!?しかも、ナチュラルに特殊性癖の持ち主みたいにさせられてるし!!」

咲夜は、スバルをいじり、その反応のよさにクスクスと笑い、元気に返ってくる反応から大丈夫そうだと判断する。

さすがにこれだけ苦労させられたのに、やり直しさせられては、報われない。

それにこちらは少くない数のナイフも消耗した。

エミリアに心配され、咲夜に一通りからかわれたスバルは、立ち上がり、ラインハルトに聞く。

「今度はもう、完璧にいらなくなったよな?」

「すまない、スバル。さっきのは僕の油断だ。君がいなければ危ないところだった。彼女を傷つけられていたら僕は……」

「タンマタンマタンマタンマ！ そつから先は言及無用だ。こんだけ色々もったいぶったんだから、その部分を他人に委ねちゃ俺が報われん」

謝るラインハルトを止め、スバルはエミリアの方へ向き直る。

そしてスバルは左手を腰に当て、右手を天に向けて伸ばし、スバルは高らかに声を上げようとする。

「俺の名前は「一体、何のポーズよ、ソレ」ちよつといきなり話の腰を折らないでくれますー!!」

咲夜に途中で突っ込まれ、会話を遮られるスバル。

——だって気になったんだもの、仕方がないじゃない。

「ごほん、ごほん。今のは忘れて、Take2!」
スバルはわざとらしい、咳を立て、今のは無かったことにしようとする。

小声でエミリアがTake2?、と疑問の声を上げ、首を傾げているのも無視して会話を続けるスバル。

「ナツキ・スバル！ 色々と言いたいことも聞きたいことも山ほどあるのはわかっちゃいるが、それらはとりあえずうっちゃってまず聞こう！」

「な、なによ……」

「俺つてば、今まさに君を凶刃から守り抜いた命の恩人！ ここまでオーケー!?!」

「わたしはあなたの命の恩人だけどね」

「す、すみません！ お願いしますから少し静かにして頂けませんか?!? お願いします!!!」

「仕方ないわね」

にやにやと笑いながら、茶々を入れる咲夜。

しかし、これ以上は話が進まないと言夜も思い、話が終わるまで静かにすることにする。

「Take3!! 俺つてば、今まさに君を凶刃から守り抜いた命の恩人！ ここまでオーケー!?!」

「おーけー?」

「よろしいですかの意。つてなわけで、オーケー!?!」

エミリアは過剰なスバルのテンションに引きながらも、「お、おーけー」と律儀に応じる。

「俺は命の恩人、そしてそれに助けられたヒロインのお前、そんなら相応の礼があってもいいんじゃないか? ないか!?!」

「……わかってるわよ。私にできることなら、つて条件付きだけど」

「なら、俺の願いはオンリーワン、ただ一個だけだ」

指を一本エミリアに突きつけながらスバルは自身の求めるものを要求する。

「そう、俺の願いは——」

「うん」

「君の名前を覚えてほしい」

エミリアはスバルの願いを聞いて、呆気にとられる。

咲夜のため息が一回聞こえた後、暫く沈黙の空気が続く。

スバルはやっちゃったか、と沈黙の空気に耐え兼ね、少し体がプル

プルと震え始めていたが、必死に、相手の反応を待ち続ける。

そして暫くしてエミリアから笑みが漏れる。

「ふふっ」

楽しげな笑いが漏れたことにほっとするスバル。

「——エミリア。……私の名前はエミリア。ただのエミリアよ。ありがとう、スバル。私を助けてくれて」

エミリアの感謝の笑みにスバルが見惚れる。

咲夜は、そんな二人を見て、これだけのために随分と遠回りしたもののねと、やれやれと肩を竦める。

そして一通り会話が落ち着いた頃を見計らって、ラインハルトがスバルに声をかける。

「それにしてもスバル、よく無事だったね」

「そいつに関しては、咲夜、さまさまだな。咲夜がいなきや、腸をドバドバ飛び出させていたところだ」

「そうね。チンピラもたまには役に立つものね——」

咲夜は、弾き飛ばされ落ちていたチンピラから奪ったククリナイフをすぐ傍で見つけ、拾う。

「あらっ？」

拾い上げられたククリナイフは、刃が真ん中から折れ、地面に金属音の高い音を立てて落ちる。

ゆっくりと、ラインハルトたちがスバルの方を切なげな目で見た。スバルは嫌な予感を感じつつジャージの裾をまくる。

——先ほどまで青あざしかなかったスバルの腹に、横一線に赤い筋が現れた。

「あ、やばい、これは——」

（——ピチュったかしら？）

咲夜がそう考えた瞬間——スバルの腹部が横に裂け、大量に血が噴出される。

「——ちよ、スバル!？」

慌ててエミリアがスバルに駆け寄る。

そして咲夜もスバルの元に足を踏み出そうとするが、不意に両足か

ら力が抜けていく。「え?」と、咲夜もそんな自分に驚きの声を上げるが、足に力が入らず、そのままスバルを見ているエミリアのへと倒れてしまう。

「きやつ!!?」

自分の方へと倒れてきた咲夜の体をエミリアは咄嗟に支える。

ラインハルトも驚いた表情をして、駆け寄る。

「ちよつと、まさかさつき庇った時にケガをしての!?!」

「いや、これは……………」

エミリアが咲夜も実はケガを負っていたのかと、心配の声を上げるが、ラインハルトは心当たりがあったのか、否定する。

「これは、……………マナ切れだね」

「マナ切れ?」

「彼女は大丈夫だ。それよりも先にスバルの方を見てくれないか? 彼女の方が重症だ」

ラインハルトの言葉に疑問の声を上げるエミリアだが、ラインハルトにスバルの容態の方が緊急を要すると急かされ、一瞬、頭に浮かんだ疑問は消える。

エミリアは咲夜の体をゆっくりとその場に倒し、「ごめんね。あなたは後で見てあげるから」と、申し訳なさそうな表情をした後、スバルに向き直り、手に青い魔力を宿して治癒に取り掛かる。

(う……………、一体何が……………)

咲夜は自分の身に起きた事態を理解しようと考えを巡らそうとするが、強烈な眠気に襲われ、徐々に意識が薄れ、やがて意識を失う。

第2章

第一話：最悪の目覚め

そこは闇に包まれた空間だった。

咲夜は、ふと気づくとそこに一人で立っていた。

どちらの方向が上か、下か、自分の向いている方向は正面か、後ろか、分からない、ただただ、闇に包まれていた場所だった。

すると、前から光が差して、ある光景が見えてくる。

そこは盗品蔵の光景だった。

もつともラインハルトの剣圧により、全てが吹き飛ばされ、残骸が散らばった後の場所だったが。

——ここは……、そうか、私は盗品蔵でエルザと戦っていたのよね。確か。

咲夜は、先ほどまでの自分の記憶を思い出し始める。

盗品蔵にてスバルたちとともにエルザと生死を懸けた戦いをしていた。

そこにラインハルトが救援に現れた。

現れたラインハルトの力は凄まじく、あのエルザさえも歯牙にもかけない強さだった。

そしてラインハルトは、剣を振り下ろした。

ここはその後の光景だ。

そこまで咲夜は記憶を思い出す。

すると、その場の光景にラインハルトやスバルたちの姿も見えてくる。

そうだ、私たちは助かったのだ。

でも、何かを忘れているような……。

咲夜は、そう考えていると、瓦礫に隠れているエルザに気付く。

咲夜の体は咄嗟に動いていた。

手にはククリナイフがいつの間にか握られていた。

エルザはエミリア目がけて飛び出している。

スバルがエミリアを庇って体を前に出す。

咲夜はそれを見て必死に駆ける。

しかし、足をいくら前に出しても間に合わない。

咲夜の手が届く前にエルザがスバルをククリナイフで突き刺す。

「あ……」と、咲夜は思うも、エルザは刺したククリナイフを体から引き抜く。

咲夜は目の前で、刺された箇所から対象に血を流しながら倒れていくスバルを呆然と見る。

スバルの体がこちらの方に倒れ、咲夜は咄嗟に体を抱きこむように支える。

——そう、間に合わなかったのね。またやり直し。

でも、スバルには死に戻りがあるから、またやり直せば、いい。

咲夜はスバルが苦し気に死んでいくのを、どこか他人事のように見ている。やり直せばいい、と頭で考えて。

「そう、今度も間に合わなかったのね」

咲夜は、ふと、声をかけられる。

それは女性の声をしていた。

そして、その声はすぐ目の前からした。

咲夜は、倒れ、支えたスバルの体だったはずのものが、スバルの体ではなくなっていることに気付く。

そしてそれは良く見慣れた人物のものだった。

服と同じ紫色をした図書館の魔女。

己の抱えている体はパチュリーになっていた。

そしてパチュリーは顔を咲夜に向け、目の部分が空洞になっている状態で、咲夜を見つめ、口から血を流しながら言った。

「また、間に合わなかったのね」と。

「ああああっ!!?」

咲夜は叫びをあげ、体を起こした。ハア、ハア、と息を荒げなげる。体はぐっしよりと嫌な汗をかいていた。

そこに横から声をかけられる。

「大丈夫!!?」

「ひっ!?!」

咲夜はすぐ横からかけられた声に驚き、思わず怯えの声を上げてしまいが、声をかけた人物の髪色が銀色であることに気付く。

「落ち着いて。もう大丈夫だから」

また、声がかけられる。

先ほどとは異なり、相手を落ち着かせるようなゆつくりとした口調で言われる。

そこでようやく、咲夜は横にいる人物がエミリアであることに気付く。

それと同時に自分がベットにいることも。

どうやら自分は夢を見ていたようだ。

そのことが分かると同時に、他人に恥ずかしい姿を見せてしまった事実思わず赤面してしまう。

「恥ずかしい姿を見せたわね……もう大丈夫」そして消え入るような小さな声で、彼女に謝罪する。

エミリアは、咲夜の落ち着いた姿を見て安堵する。そして、ベッド横のテーブルに置いてあったグラスのコップに、水を注ぎ、咲夜に差し出す。

「喉乾いたでしょう?…これでも飲んで」

「ありがとう」

咲夜は、羞恥心がまだあるのか、顔を赤らませながらも素直にエミリアからコップを受け取り、水を飲む。冷たい水により、喉が潤う。冷たい水の温度は、咲夜の火照った体を冷まし、また思考もハッキリと覚ます。咲夜はコップに注がれた水を全て飲み干し、「もう大丈夫」と、コップをテーブルの上に戻す。

「えっと、まずは自己紹介からね。わたしの名前は十六夜咲夜。あなたは、……エミリアと言ったわね」

「あ、うん。わたしはエミリア。盗品蔵のことは覚えている?」
「ええ、覚えているわ」

咲夜は、既に盗品蔵であったことを完全に思い出ししていた。

あの後、夢とは違い、咲夜は間に合った。

咲夜はエルザの攻撃を防ぎ、スバルは助かった。

その後、攻撃に失敗したエルザはそのまま逃走。

全員が無事であることを確かめ、談笑していた。

そしてそのとき、スバルが――。

「スバルは、スバルはどうなったの!？」

思わず、咲夜は体を乗り出してエミリアに問う。

これ程までに苦労したのだ。

他人に恥ずかしい姿も見せてしまったのだ。

無事でいなきや、ただじや済まさないわよ。と咲夜は、スバルに対し、若干の逆恨みのも交え恨みの念を贈る。

この時、冷静に考えることができれば、時間の巻き戻りが起きていないことでスバルの無事、少なくとも死んでいないことに気付けただろうが、寝起きや動揺していたこともあり、咲夜はそこまで頭が回らなかった。

「大丈夫。無事だよ」

そこに中性的な声で返事が返ってくる。

エミリアの長い髪に隠れるようにして出てきた、

妖精、パツクによるものだった。

彼は、咲夜の様子を楽しし気に見ながら、現れる。

「そう、なら良かった」

咲夜はホッと息を吐く。

その様子を見てエミリアもクスッと、笑う。

笑われ、思わず「なによっ」という、視線を咲夜がエミリアに向けると、エミリアは「ごめんなさい」と謝罪し、理由を話してくれる。

「お似合いだな、と思つて」

「な、何が……?」

お似合い、つい最近も聞いたことのあるフレーズに咲夜は嫌な予感を感じながら、エミリアに恐る恐る聞く。

エミリアはそんな咲夜の姿に安心させるように「大したことじゃない

いの」と、前置きして説明する。

盗品蔵で咲夜が気絶した後の話だった。

あの後、スバルと咲夜をどうするか、ラインハルトと話し合ったらしい。

ラインハルトはスバルと自分も含め、客人として保護する、と申し出たのだが、スバルに関しては、エミリアが、自分のせいで迷惑をかけたから、と引き取ることにしたらしい。

ならば、咲夜だけでもとラインハルトは考えたらしいが、そこでフェルトから「姉ちゃんは、その兄ちゃんの彼女らしいぞ」と、一言があつたので、恋人同士を引き離すのはどうかと、言う話になり、咲夜もエミリアに引き取られることになつたらしい。

その顛末を聞き、咲夜は思わず絶句するも、エミリアは話を続ける。「でね、咲夜さんはすごく美人でしょう？スバルはあんな人だし、正直どうかな？」と思つていただけれど……」

「君のスバルを心配する姿を見たらね……」
エミリアの言葉の続きを引き継ぐようにパツクが言い、エミリアが最後を締める。

「すごくお似合いだな、と思つたの」
「ラブラブだね。可愛い女の子にあんなに想われているなんて、僕も思わず羨ましいと思つてしまったよ」

咲夜は顔を赤くし、俯く。
傍から見てそれは照れているように見えたが、果たしてそれは本当に照れているためか、それとも怒りによるものか。

スバルもどうやらここにいららしい。
咲夜は、スバルと会話しなければならぬことが一つ増えたと、忘れないよう心のメモ帳に書き殴る。

そして咲夜は、俯いていた顔を上げる。
顔からは赤みが消え、ただ一つ笑顔があつた。
まずは、誤解を解くことが優先だ。

かくして、咲夜の迎えた目覚めは、二人の誤解から解くことから始まつた。

第二話：鼻息荒さ

咲夜は、エミリアとパックに事情を話すことで誤解を解くことに成功した。

しかし、簡単にはいかなかった。

エミリアは彼女の純粋さもあって、素直に話を信じてくれるが、パックはニヤニヤと笑みを浮かべ、「本当に〜」と、言って中々話を信じようとせず、こちらがムキになれば、「照れ隠しじゃないの?」と言いつつ、エミリアも「そうなの!?!」と信じそうになる。

最終的にパックがさも仕方なさそうに、「そこまで言うなら信じるよ。」とため息を付きながら折れる。

些か納得しかねる終わりであり、咲夜は「あの猫、絶対分かっててやってたわね……。」と悔しがった。

誤解が解くことに咲夜が苦労し、話がひと段落したところで、エミリアは「あつ!」と、何かを思い出したように声を上げる。

「咲夜が目覚めたら、レムを呼びに行かなきゃいけないんだっ!ちよつと待っててね、咲夜」

言葉を多く交わしたことで、すっかり打ち解けた様子のエミリアは、咲夜のことを既に名前で呼んでいた。

そしてエミリアがワタワタと慌てた様子で部屋を出て行き、それをパックは微笑ましく見届ける。

「レムって?」

「ここロズワール邸で働くメイドだよ」

「そう。……ところであなたは何をしているのかしら?」

「う〜ん、診断中」

パックはフワフワと浮いた状態で、体を起こした咲夜の額に彼の額をくっつけていた。

目を閉じて何かを探っている様子を見て、咲夜は熱でも測っているのだろうか、と疑問に思う。

そして、「うん、悪い子では無いみたい」と何か納得したのか、パックは体を離し、咲夜の膝の上あたりのベッドのシーツの上に着地し、

体を丸め、眠そうにあくびを一つする。

「ここはロズワールって人の屋敷なのね。そういえば、あれからどのくらいの時間が経ったの？」

「う〜ん、結構な時間が経ったよ。……今は、朝の陽日六時を過ぎたところかな」

また知らない言葉だ。

陽日《ようひ》、音の響きから日が出ている時間だろうか。

咲夜は窓から入る日の光を見てそう思った。

こちらの世界では、時々意味が分からない言葉を耳にする。

やはりこちらの文化や常識も知ることも必要ね、とその思いを一層強くした咲夜。

ちなみに、後で調べて分かったことだが、こちらの世界の一日の間は、二十四時間でほぼ元の世界と同一。朝の六時から夕方六時までを陽日、夜の六時から翌朝の六時までを冥日と呼ぶらしい。

「失礼します」

掛け声とともに部屋の扉がノックされ、メイド姿をした髪の青い少女と、エミリアが部屋に入ってくる。

青い髪をしたメイドは、咲夜のベッドに近づいてくる。

そして咲夜の表情や体の状態を暫く確認する。

「大分回復したようで、もう大丈夫そうですね。でもまだ体が少し重く感じるかもしれません。その点は注意してください」

「ありがとうございます。それで、わたしは一体どうして倒れたのかしら？」

「mana切れですね」

「mana切れ？」

「mana切れとは、体内にあるmanaが少なくなつて欠乏してしまつた時に起こる症状です。その際、体が動かせなくなつたり、気絶してしまつたりします。今は、眠っている間に大分回復したようですが、体を激しく動かすようなことは今日一日控えてください。では、わたしはこれで」

「うん。レム、咲夜を見てくれてありがとう」

診察されたのは咲夜だというのに、律儀なエミリアはレムに礼を言

う。

『mana切れ』について、丁寧に淡々と説明した青髪をしたメイドは、説明が終わると、こちらに一度会釈し、部屋を退室していく。

しかし、先ほどの説明だけでは咲夜の疑問が全て解消されたわけではなかった。

「なんでわたしはmana切れに？」

「それはもちろん、魔法を使ったからだよ」

咲夜の疑問に、パックが答える。

しかし、咲夜はそもそも魔法が使えない。

幻想郷では魔法を扱えるものは魔法使いだけだ。

そんな彼女がmanaがを使用する機会なんてない。

パックは咲夜の疑問を見透かしたように、言葉が続けた。

「咲夜って今まで魔法を使ったことが無いでしょ？それに珍しいことに、ゲートが今までに開かれた形跡も無かった。今回の件で、ゲートを無理やり開いて魔法を使った。初めての出来事だから、加減が効かず、manaを使いすぎてしまったんだろうね」

「ゲート？」

「ゲートは全ての生命に備わっている、自分の体の中と外にmanaを通す門のことだよ。ゲートを通じてmanaを取り込み、ゲートを通じてmanaを放出する。使うにしても溜めるにしても、必要不可欠なもの。でも、ゲートって普通の人は最初から開いているものなんだけどね」

パックの説明を聞き、なるほどと頷く咲夜。

「どうやら幻想郷とこちらの世界とでは、魔法という概念は異なっているらしい。」

「こちらの世界に来たことで、咲夜にもゲートという存在を経て魔法を使用することができたらしい。しかし、

「それならわたしは一体いつ魔法を使用したの？」

「ありや、覚えがない？リアは分からない？」

「えっと、あの時はわたしも混乱してたし、でもたぶん、あのこわーい、黒づくめの女性が最後に切りかかってきた時だと思う。その後に咲夜は倒れたし。咲夜は覚えていないの？」

エミリアの答えに咲夜もあの時の状況を思い出してみる。

そして、確かあの時、体から力が抜けていく感覚を感じたことを思い出す。

もしかして、あの時を止めたのは……。

「残念ながら覚えはないわ」

「……そう、残念」

しかし、咲夜は本当のことは言わなかった。

言えば、どんな魔法を使用したか聞かれるだろう。

時を止める能力は強力だが、強力故に、あまり人に知られない方がいい。

知られていない、ということが最大の強みになるのだから。

それにまだ、エミリアたちを含め、このロズワール邸にいる人間たちがどういう人物か分かっていないのだからうかつに話すことは控えるべきだ、咲夜はそう考え、嘘を付いた。

「スバルは、いまどこにいるの？」

「スバルは、この部屋の隣。今は寝ていると思う。一度起きたんだけどね。ベティがね……」

咲夜は話題を変え、スバルのことを尋ねる。それにパックは苦笑しながら、何かを含むような答えを返す。

咲夜には意味は良く分からなかったが、一度様子を見に行ってみるのもいいだろう。

「じゃあ、スバルの様子だけでも見に行つていいかしら？」

「うん、いいよ。僕たちも一緒にいこうか、リア」

「そうね」

一同は、一度スバルの元へ向かうことにする。

そして咲夜がベッドから出た時にあることに気付く。

咲夜の着ている服がいつものメイド服ではなく、患者衣のような服になっていたことを。

パックは咲夜の視線から着ている服のことに思い当たったことを察すると、経緯を説明する。

「メイド姿で寝かすのもつてことで、その服に着替えさせてもらった

んだ。あ、着替えはラムっという女性のメイドがやったから大丈夫だよ」

咲夜は着替えさせられたことに気付くと、サッと顔を青くする。

自分のメイド服のポケットにはあの黒い本が入っていた。

魔女教徒が何かは分からないが、人に見られれば、あまり良くないだろう。

すぐに服を回収しなければ。咲夜は自分の服がどこにあるのか、内心の動揺を抑え、エミリアに聞く。

「わたしの着ていた服はどこに？」

「服なら、ベッド横のテーブルの上にあるわよ」

咲夜がテーブルを見ると、確かにそこには丁寧に折りたたまれた咲夜のメイド服があった。

まずは自分の服があったことにホッとすると、エミリアの方を見て、

「スバルの部屋に行く前に着替えたいから、先に行っててくれるかしら？」

「うん、わかった。部屋は左隣だから」

エミリアは咲夜に部屋の場所を伝えて、バックを肩に乗せ出て行く。

咲夜はエミリアが部屋から出て、扉を閉めたことを確認すると、すぐにテーブルの上を確認する。

テーブルの上にはメイド服だけでなく、空になったナイフホルダーも置いてあった。

盗品蔵の戦いでナイフホルダーにあったナイフは全て使用し、元々空であったので問題はない。

そして、咲夜はメイド服のポケットを確認する。

黒い本は……あった。

空間を広げて入っていた銀のナイフも何本かあることを確認する。どうやら、服の中のものに関しては、手を触れなかったようだ。

不用心ではあるが、今回はその不用心に救われた。

そのことを理解すると、今度こそ咲夜はふーと、大きなため息を吐

く。

そもそも黒い本が見つかったいたら、客人扱いで綺麗なベッドに寝かされていることもないだろう。

咲夜はようやく、安心すると、手に取っていたメイド服を一度テーブルの上に戻し、着ている患者衣のボタンを外していく。

ボタンが外れ、咲夜のその服の下に隠されていた白磁のような美しい肌が見える。

ボタンが一つ外れるのに比例してその露出される肌の面積が増え、やがて――。

着替えが終わった咲夜は部屋の扉を開け、廊下に出る。

「スバルの部屋は左ね」

咲夜はエミリアに言われた場所を思い出し、出て左に、少し離れた位置にある扉を見つける。

そして歩いてそこまで行こうとするが、ある違和感に気付き、足を止める。

「この辺り、空間が歪んでいる？」

咲夜は『時を操る程度の能力』の持ち主であるが、能力の応用で、紅魔館の空間を空間を操ることもできる。

その彼女の能力により、些細な空間の歪みに気付くこともできたのだった。

「この扉はもとの位置の扉に繋がっているわね。なら……」

咲夜は、踵を返し、自分が出てきた位置の扉を開く。部屋の中には、エミリアたちがいた。

「どうやら、当たりのようね」

「あ、咲夜も来たのね」

「ええ」

「ちようど良かった。スバルも目覚めたようなの」

咲夜が部屋を見渡すと、そこには青とピンク色の髪をした双子のメイドと、スバルもいた。

スバルに視線を向ければ、「よう」と、手を挙げてくる。

「元氣そうね」

「ああ、目覚めの朝を美少女たちに囲まれているからな。ああ母さん、理想郷はここにあったんだね」

「大変ですわ。今、お客様の頭の中で卑猥な辱めを受けています、レム以外が」

「大変だわ。今、お客様の頭の中で恥辱の限りを受けているのよ。ラム以外が」

「全然麗しくないな、この姉妹愛！何気に他人も巻き込んでるし！それと咲夜さん、見惚れちゃうぐらいちよー素敵な笑顔してるけど、その手に持っているナイフはしまつて！お願いしまつて！一体どこから取り出したのさー！」

スバルに言われて咲夜は、「冗談よ」と、持っていたナイフをポケットにしまう。

スバルはナイフが小さなポケットに吸い込まれていくように入っていくのを見て、「なにそれ、某タヌキ型ロボットのポケット？」と呟く。

「それで体の調子は大丈夫？ どこか変だったりしない？」

エミリアが眉を寄せて、心配そうにスバルに問いかける。

「ん、ああ。全快だぜ。むしろ、逆に寝過ぎてちよつとだるいくらい」
「そう。スバルはジャージを着ているけど、これから何かするつもりだったの？」

「これからエミリアさんの朝の日課とやらの付き添いさ」

咲夜がスバルが患者衣のような服ではなく、ジャージを着ているのに対して疑問に思い尋ねたが、エミリアの用事への付き添いだっただうだ。

既にスバルとエミリアでその話をしていたらしい。

「日課？」

「屋敷の庭を借りて、朝は少し精霊とお話を。それが私にとって、誓約のひとつでもあるから」

「精霊とね。わたしも付いて行ってもいいかしらっ？」

「勿論、いいわよ」

精霊との誓約、この世界を知るためにも知らないことには少しでも首を突っ込んで行くべきだろう。

そう咲夜は判断し、エミリアに同行を願い出る。

エミリアも断る理由も無いため、快諾する。

「じゃあ、いこうぜ」

「ちよつと待って。スバルだけは残って」

「ちよ、何ですよ!」

スバルの促しに、エミリアは頷き、部屋を移動しようとするが、そこに咲夜の静止の声がかかる。

「その前に少しスバルと話があるの。エミリアは先に行つててくれる?」

「え?なら話が終わるまでわたしも待ってるわ」

「ごめんなさい。少し二人だけで話したいの」

「そうなんだ……」

咲夜に断られ、少し寂しそうにシユンとするエミリア。

そこに先ほどまで静かにエミリアの肩に乗っていたパックが、エミリアに何かを耳打ちする。

すると、エミリアは納得した表情をし、先ほどの悲し気な表情は消え、「じゃあ、先に行つているわ」と、部屋を出て行く。

パックはこちらに親指を立てて、「頑張つて」とニヤニヤしながらウインクを一つ。

……何か勘違いされてるわね。

エミリアとパックが部屋を出て行き、スバルに向き直り、咲夜は話を切り出そうとする。するが、

「……」

「……」

「……」

「……」

「ねえ、あなた達も出て行ってもらえるかしら?」

「レム、あなたは部屋を出て行けって言われているわよ」

「姉さま、姉さまは部屋を退出して欲しいそうです」

ピンクと青の髪色をした双子のメイドが、部屋に残っていたので咲夜は部屋を出るように言うが、ステレオちつくな声で麗しい姉妹愛を見せつけてくる。

そして双子のメイドは互いを退出させるような発言に顔を見合わせ、咲夜に向き直り、一言。

『どうぞ、お気になさらないで（ください）』

「気になるから言っているのよー！」

「……俺よりも個性が強い姉妹だな」

——そうして、双子のメイドも部屋を退出したのを確認して、今度こそ、とスバルに向き直り話をしようとする咲夜。

スバルは鼻息荒く、こちらを見ていた。

「どうして、あなたは鼻息が荒いのかしら？何かの病気？」

「い、いや。べ、別に？俺は鼻息、荒くないよ？ちよつと、緊張、し、してるだけだし。お俺も、ようやく春が来たのかと、むしろ気合入れているだけだし？」

「気合？」

「き、気にしないでくれ。さあ、話をプリーズ！さあ、何でも話してくれ。俺はどんと構えているから！」

「そ、そう？なら——」

咲夜はスバルの鼻息荒いテンションに若干引きながらも、話を切り出す。

質問はもちろん、咲夜がスバルにずっとしようと思っていた質問だ。

即ち、スバルの発言『異世界』やら『召喚』についての話だ。

何か、元に世界に戻るようなヒント、手がかりが得られるのを期待して——。

第三話：同郷の者

双子のメイドも部屋出て行き、部屋には咲夜と、微妙に興奮している様子のスバルが残った。

咲夜はこれまでのスバルの発言から、スバルが自分と同じく異世界から来た人間か確かめようとしていた。

「部屋に残ってもらった理由だけど、スバルに聞きたいことがあったからよ」

「……え!? き、聞きたいこと?……もしかして、咲夜は俺に何か聞きたいことがあって、呼び止めたの?」

「ええ、そうよ。それ以外に何があると言うの?」

スバルは呼び止められた理由に、がつくりと、残念そうに肩を下げる。

しかし、咲夜にとっては重要なことであった。

咲夜がスバルと関わりうと思つた理由でもある。

召喚魔法の事故によって異世界に来了た咲夜としては、同じく異世界、さらに日本と思われる世界から来たと思われるスバルからの情報は少しでも得ておきたい。

咲夜とスバルとで、異世界に来了た原因が異なる可能性はあるが、それでも時間の逆行や黒い女の影などを考えると、咲夜とスバルの共通項も多いため、決して無関係ではないはずだ。

「あなたの着ている服だけどこどこじゃ見かけない服よね。あなたどこから来たのかしら?」

「えっと、どこからって聞かれると困るんだが……。そうだな、ずっとずっと遠い東の方から来た、とか?」

「東……。曖昧ね。国の名前とかは?」

「えくと、その……」

スバルは視線をあちこちに移動させながら、なんて言葉を返そうか困っている様子だった。

そこで咲夜は、こちらから答えを切り出すことにした。

「当てるあげましょうか?」

「あ〜と、たぶん無理じゃないかな？下手したら地図上に載っていないような辺鄙の場所だし？ほら、この服も変わっているだろ？俺の世界じゃ流行りの服な「日本」なんだ……え？」

スバルの言葉に割り込んで咲夜がある国の名前を言う。

咲夜の言葉を聞き、スバルは目を見開いて驚く。

「えっと、咲夜たん？今、なんて？」

「……日本、そう言ったのよ」

スバルの言葉、「たん」に反応してピクリと眉を少し上げた咲夜だが、ひとまず、話の方を優先させる。

「えっと、お箸の本数のお話ではなく？」

「それは二本、まあ、音は一緒だけど、今は国の話でしよう？」

「ほ、本当の本当に？」

「しつこいわね。本当の本当よ」

スバルの信じがたい気持ちも分からなくもないが、いい加減に納得してほしい。

咲夜はそこで、さらに彼が信じやすくなるような言葉を言う。

「十六夜咲夜いぎよいさくや」

「？」

「十六の夜に咲く夜と書くわ」

「!?やっぱり、初めて名前を聞いたときにも思ったけど、もしかして？」

「わたしのことはどうでもいいのよ。それよりも、あなた日本から来たのね？」

「いやいや、俺にとって咲夜たんのことは超重要なことですけどね!?! ……えっと、質問に答えると、咲夜たんの予想通り、俺は日本から来た、純粹、ピュアな日本人だぜ！咲夜たんも日本から？」

「そうよ」

咲夜が同郷のものだと分かるとスバルは笑顔になり、「おお!!」と、声を上げ、両腕を上には伸ばして喜びを表現する。

そしてまじか、まじか……!と、眩きながら、全身で喜びを表わす。

異世界で同じ同郷の者を見つけ、喜びを感じるのも無理はない。

しかし、咲夜の話の本題はそこではない。

わざわざ同郷の者だと告白するために呼び止めたわけではない。

「話はこれで終わりじゃないわよ」

「え？ そうなの？ っていうか、咲夜たんあまり驚かなくね？

……もしかして、ずっと前から知ってた？」

「まあ、大分前から予測はついていたわね」

「マジかよ!? なんで教えてくれなかったの？」

「確証がなかったし、あなた人の話を聞く前にどっか行っちゃうじゃない」

「う……そうかも。エミリアたんを追いかけるのに夢中だったからな」

スバルも自分のこれまでの言動を顧みて、思い当たる節があったのか、咲夜の言い分を認める。

「やっぱリストーカーなんじゃ……」と咲夜が言うと、「それだけは否定させてくれ！」とスバルが懇願してくる。

「話を戻すわよ。貴方は日本人だとして、どうやってこの世界に来たのかしら？」

「えっと、俺は直前までコンビニにいたんだ。コンビニで買い物をして、その後、店を出たら気が付いたらこの世界にいたんだ」

「そう。気が付いたら異世界にね。前触れは無かったの？ 何か違和感とか」

「ん……特には。あ、でも少し視界が歪んだような気がしたな。あの時はゲームのし過ぎで目が疲れていただけかと思ってたけど」

「それが異世界召喚の前触れだったと？」

「今にして思えばな」

「そう。それと、……コンビニって何かしら？」

「え!? 咲夜たんコンビニを知らないの？ マジで!? 今時どんな田舎でもコンビニの一つはあるだろ!」

「……すごく閉鎖的な田舎だったのよ」

「閉鎖的な場所で、仮にコンビニが近くにないとしても、知らないって人はそういないと思うけど。咲夜たんって、一体どこに住んでたの

？」

現代の日本に住む日本人で、コンビニを知らない人はいないだろう。

仮に見たことが無いとしても、知らない、と言うのは、ありえない。

「……それは言えないわ。」

「なんでよ？」

スバルの質問に答えを窮す咲夜。

どう答えを返すべきか悩むが、ふと名案を思い付く。

「わたしはある屋敷の主の元で住み込みで働いているの。その主は普通の人とは少し違ってね、一日にあまり触れることを好まないのよ。だから、場所は言えない。日本であるのは認めるけどね」

咲夜は、前回のループで盗品蔵で、自分の主が吸血鬼であることをエルザに話した。

その時、スバルもその話を聞いていた。

吸血鬼なら人にあまり見られない場所に住んでいても不思議ではない。

スバルもその事を思い出し、言えない理由に納得の態度を示す。

「そっか。主の意向なら仕方ないよな。ごめんな。なんか突っ込んだこと聞いちまって」

「まったくよ。女性の住んでる場所を無理やり聞こうとするなんて。ストーリーに教えられるわけじゃないじゃない」

「ええ!? まだその疑い晴れて無かったの!？」

「まあ、良いわ。貴方は今後どうするつもりなの?」

「今後?」

咲夜は異世界召喚について、何か情報をスバルから得ようとしたが、やはりスバルの方でも原因はよく分かかっていないらしい。

一番聞きたかったことは確認できたので、今後の話に話題を変える咲夜。

「エミリアさんの日課を見に行くじゃねーの?」

「違うわよ。そんな短期的な話ではなくて、もっと長期的な話よ。意図せずに異世界に来ちゃったんだから、普通、元の世界に戻ろうとす

るでしょ。その為にどうするか、何か考えはないか聞いているのよ。もちろん、異世界で暫くの間過ごすことになるだろうし、お金や泊まる場所とか、そう言うのも考えなきゃいけないわね」

「げげ!!?確かにそうだった。何にも考えてねー!どうしよう、咲夜たん。俺一文無しだよ!……いざとなったら体売ってでも」

「……貴方を誰が買うのよ」

まさか、何にも考えてなかったとは。

この男は何も考えずに人助けをしていたのか、と呆れる咲夜。

「そうね。現状だと、エミリアに相談するのが一番良いかもね。この屋敷は大きいし持ち主はお金持ちでしょう。そこに住むエミリアなら、何か融通を利かせてくれるかもしれないわ」

「なるほど」

「じゃあ、話も終わったしエミリアのところに行きましようか。エミリアはどこに行ったの?」

「おう、庭園に行ったらしい。俺たちも早く合流しようぜ」

部屋を出るために、咲夜は部屋の扉を開ける。

『きゃっ!』

「ん?」

部屋を出ると、仲良く可愛らしい声を上げながら、双子のメイドが倒れる。

どうやら扉の前で聞き耳を立てていたらしい。

咲夜が扉を開けたことで、倒れた、というところだろうか。

「油断も何もねーな、このメイド達」

「お客さま、誤解です。レムたちは部屋が汚れた時のために待機していただけです」

「お客さま、誤解です。ラムたちは部屋の染みの汚れがついたベッドのシーツを取り換えるために待機していただけよ」

「いらねーお世話だよ!後、お姉さまの方は表現が具体的過ぎて生々しいわー!」

「まあ、お客さま、生でした、だなんて嫌らしいわ」

「言ってねえし、してねえよ!」

このロズワール邸で働くメイドとやらは、幻想郷の連中に負けないくらい、強い個性を持っているらしい。

こういう手合いは、あんまり真面目に付き合おうと疲れるだけだ。

「ほら、いつまでもじゃれ合っていないで、エミリアの所に行きましよう」

「お、おう」

「お客さま、案内します」

咲夜の言葉に、すぐに青い髪をしたメイド、レムとやらが前に出て案内人を務める。

そして先頭をレム、咲夜が歩き、少し遅れてスバルとラムが続き、一行は庭園までの道を進む。

「お客様、これをどうぞ」

「何、これ？」

「精力剤よ。お客様はあまり女性を喜ばせられるような技術は持っていないようなので。次からは、これでもっと廊下にも声が響くくらい、相手を悦ばせるよう頑張ってくださいな」

「臆面無く下な発言したよこのメイド！余計なお世話だし、悲しいけど何も無かったし、まだ俺は童貞でピユアなままだ！どうせ技術なんか持つてねーよ！それとさり気に、聞き耳立ててたことを認める発言したよ、このメイド！」

「そう言いながらも受け取るのね」

「いつか、機会があるかもしれないし……」

ラムがスバルを気遣い？をして、咲夜たちに聞こえないよう、静かに何かの粉末が入った瓶を差し出す。

どうやらそれは精力剤のようらしく、余計なお世話だと言いながらも、折角なので、言葉とは裏腹に受け取るスバル。

正直、どっちもどっちなひどいやり取りが、庭園に着くまでに、咲夜たちの後方で行われたが、先を歩く咲夜とレムは気づくことはなかったのであった。

第四話：真の従者とは

レムの案内の元、一行は庭園に到着する。

レムとラムはまだ他に仕事があるらしく、そこで別れる。咲夜とスバルは庭園の中心で、座りながら目を瞑り、顔の前で手を組んで祈っている様子のエミリアを見つける。

エミリアの周りには淡い光輝く存在が周囲にあった。

可憐な少女とその幻想的な風景に見とれ、二人は息を呑む。

そして、エミリアは祈りが終わったのか、目を開けて立ち上がる。

そして、淡い光に話しかけているのだろうか、エミリアの言葉に彼女の周りの光は明滅して反応を返している。

これが、エミリアの言っていた日課というものだろうか。

暫くしてそれが終わったのか、彼女の周りの光が散っていき、光が離れ消えていく。

全ての光と別れを告げると、エミリアは咲夜たちに気付き、声をかけてくる。

「来てたのね。日課は終わったわよ」

「お、おう。何が起きていたのか知らねーが、凄いな！エミリアたん何してたの？」

咲夜も抱いた疑問をスバルが質問する。

その質問にエミリアの肩に乗っていたパックが答える。

「精霊との契約の儀式。——誓約の履行だよ」

聞き覚えのない単語に、スバルと咲夜は疑問の表情をする。

パックはその反応を見て説明を付け加える。

「まず、精霊使いは精霊と契約しないと精霊術が使えない。で、契約内容は精霊によって異なる」

「金貸しによって利息とか担保が違うってわけだな。オーケー」

「嫌な例えね」

「だね。失礼しちゃうよね。精霊が求めるものは個々で違うんだけど、相手がああいった微精霊みたいな子たちだと、術者本人のmanaを

介した触れ合いで、わりと簡単に協力を取り付けられるんだよ」

「お手軽な感じなんだな。つっても、今の言い方だとちゃんとした精霊は別なんだろ？ そこんとこどうなんですか、精霊さん」

「賢い子は話が早くて助かるよ。……変に頭が回るから、余計な脱線して話が進まないって感じもするんだけど」

「そうよね。一言も二言も多いのよね」

咲夜とパツクの言葉に何故か、いやあ、と照れて頭を掻くスバル。そんなスバルにパツクは生温かい視線を、咲夜は冷たい目を向ける。

「スバルの言った通り、ボクを始めとした意思ある精霊はもうちよつと要求内容が厳しい。その分、術者に貢献するつもりだけどね。ボクはこれでもそれなりに力のある精霊だから、リアに付けてる誓約は厳しいよ」

「さつきから気になってたけど、そのリアって呼び方可愛いな」

「君のエミリアたんには負けるよー。ボクも今度からそうしようかな」

「——お願いだから、絶対にやめて」

どうやら彼女も色々と苦勞しているらしい。

エミリアの切実そうな願いを見て、咲夜は思わず、エミリアに少し共感を抱いてしまう。

「そういうえば、まだ二人にはお礼を言っていないかったね。危うくリアを失うところだった。感謝してもし足りないよ。なにかして欲しいこととかあれば言ってくれば、大抵のことは叶えてあげるよ」

「んじや、好きなききにモフらせてくれ」

スバルの即断の返事の速さとその内容に、三人は驚く。

「ちよ、もうちよつと考えて決めてもいいんじゃない？」

「いや、一流のモフリリストからしたら、これは巨万の富と引き換えても余りある対価だぜ」

言いながら権利を履行して、スバルはパツクに顔をこすり付け、思う存分にモフリ続ける。

「ふーむ、スバルのすごいところは本気で言ってるそこだね。うすば

んやりと心が読めるからわかるんだけど」

手指で自由に弄ばれながら、パックは愉快げにそう言った。

戯れる二人の様子にエミリアははつきりと呆れのため息をついて、「なんだかもう、スバルを理解しようとするのって疲れるわね」

「わたしは理解することを放棄したわ。バカはいつだって常人の理解を超えてくるもの」

「咲夜たん辛辣だな。でも諦めんのよくないぜ。人生物事、対人関係は相互理解の精神から成り立ってくもんだ」

スバルはそう言つて、こちらにウインクを投げるが、エミリアの「それ、すごーく、不愉快かも」と、彼女の綺麗な顔を歪め、咲夜も思わず一歩足を下げて引く、そんな二人の反応に傷つくスバル。

「スバルが変わり者と理解できたけど、咲夜は僕にどんなことをして欲しい？遠慮せずに言つてごらん」

「そうね。その前に少し質問しても？」

「いいよ」

「ここの屋敷の持ち主のロズワールって人はこんな大きい屋敷を持っていることから随分とお金持ちなのだろうけど、どういう人物なのかしら」

「おや、知らないのかい？こころグニカでは結構有名だと思つてたけど」

「俺も知らねーな」

「結構な特殊な田舎の場所から来たから、知らないことが多いのよ」

「そうみたいだね。ゲートもついでこの間まで開いていなかったみたいだし、スバルは今なお開いてないみたいだね。二人とも普通の場所で過ごしていなかったみたいだね」

咲夜は、既にその話を聞いていたが、スバルの方は初耳だったようで、「ゲートって何？」と疑問を上げるが、質問からどんどん話が話が逸れるため、咲夜は「それは後でエミリアにでも聞いて」と遮る。

「えっと、ロズワールのことだったね。ロズワールはここ王国の筆頭宮廷魔術師だよ」

「すげえ、大物だった！」

「この主は、そんな凄い人だったのね」

咲夜とスバルは、屋敷の主が予想以上に、凄い人物だったことに驚く。

しかし、それは咲夜にとって好都合だった。

咲夜は「ここからがお願いの話になるんだけど」と前置きして、
「実は、恥ずかしい話だけど、わたしは今お金を全然持っていないのよ。パツクじゃなくてエミリアの方へのお願いになるかもだけど、そのロズワールの人に王都の方で働き口とか紹介してもらえよう、お願いしてもらえないかしら？」

「スバルと違って随分と現実的なお願いが来たね」

「咲夜はスバルと違ってしっかりしてるもの」

「うう、エミリアさんの咲夜さんと俺の信頼の差が、俺に突き刺さって胸が痛い」

「どうかしら？」

「うん、それはたぶん、僕やエミリアの方からお願いしなくても、きつとロズワールは聞いてくれると思うよ。だからそれとは別にお願いを聞いてあげるよ。勿論、ロズワールの方に咲夜のお願いを聞いてもらえるよう僕の方からも頼んでみるよ」

「ありがとう、助かるわ」

「どうやら、パツクの言葉を信じるなら、ロズワールという人からも、お願いを聞いてもらえるらしい。」

エミリアたちとどういう関係の人物かは分からないが、それなりに関係が深いのだろうか。

ひとまず、パツクがそれとは別にお願いを聞いてくれるならありがたい。

「そう思い咲夜は、願いを口にしようとしたとき、「エミリアさま」と声を聞こえた。」

そこには、いつの間にか来たのだろうか、双子のメイドがいた。

「当主、ロズワール様がお戻りになりました。どうかお屋敷へ」

「そう。ロズワールが。……じゃ、迎えに行かないとね」

「はい。それからお客様も。目が覚めているなら、ご一緒するように」

と」

そして、メイドたちに連れられて、咲夜たちも庭から屋敷に戻る。

「どんな人なんだろうな、噂の宮廷魔術師殿とやらは」

「きつと、随分と個性的な人物ね」

「え!?!うそ、咲夜なんで分かったの?」

これから会うことになるロズワールという人物の人となりについて、疑問を上げたスバルに咲夜が推測し、その推測が当たっていることにスバルを除き、声を上げたエミリアを含めた全員が驚く。

「主の意向に沿って動く、主に真の忠誠を誓っている従者。真の従者は主の性質を映す鏡のようなもの。そっくりとまではいかないだろうけど、どこかその在り方は似るものよ。メイドらしくないメイドときたら、貴族らしくない貴族だろうな、と思ってるね」

咲夜はそう言い、双子のメイドたちを見る。

スバルやエミリア、パックも双子を見て納得する。

確かに、メイドらしくない太々しさを持っているメイドたち。

特に従者も主も変わり者であることを知る、エミリアとパックにとって、納得させられる理由であった。

そして、なにより長年従者として仕えてきたという咲夜の言葉には、説得力が感じさせられた。

「うん、とつても変わってる人よ。スバルと気が合いそうなのが、嫌になりそうなくらい」

第五話：食堂での団欒

「あはあ、エミリア様が連れてきたお客さんは、なーかなーかに興味深い人たちだーあね」

レムの案内の元、咲夜たちが出迎えた主は非常に個性の強い人物だった。

細身で180センチ以上はあるだろう身長な、両目は左右で色が異なり、黄色と青のオッドアイ。それだけでも特徴的な見た目をしていたが、何よりも――

「ピエロじゃねえか!? つか、顔ちけえ!」

スバルが驚嘆するのも無理はなかった。

幻想郷でもあそこまで奇抜な格好をした人物はいないだろう。

顔は白く、左目には何かのマークだろうか、紫色のメイクが施され、まるで道化師のようだ。

どうやらそのピエロ男がここ、ロズワール邸とやらの主、ロズワール氏らしい。

ロズワール氏はスバルと唇が触れそうなほど顔を近づけ、興味深々と目を輝かせて見つめており、相手が誰だろうと、慣れ慣れしくコミュニケーションを取りに行くスバルですら、第一印象が強烈すぎたのか、戦慄させていた。

「この世界には普通の人はいないのかしら?」

「ぎ、咲夜たん、見てないで! た、助けて! ヘルプ、ミー!!」

「ははあ、元気が良い子はきらいじゃないよ」

咲夜が大人しく、他人事、否。関わりたくない距離から眺めていたが、スバルはロズワール氏、もといピエロ男のどンドン近づけてくる顔を両手で掴み、引き離そうと必死になり、咲夜に助けを求めた。

スバルが引いている、やるわね、ロズワール氏。

……じゃない、スバル仮にも相手は屋敷を持つほど、おそらく貴族だろう相手に対して顔を掴むのは良いのだろうか。

いや、顔を掴まないとうなるかは分かっているのだが……。

ちなみに、咲夜がスバルの立場なら確実にナイフを叩き込んでいただろう。

「良かったじゃない。受け入れたら玉の輿よ」

「玉の輿って何さ!? 男性ルートは求めてねーよ!」

「タマノコシ?」

「きつとお団子の事だよ。団子を積み重ねて、神輿のようにするんだ。カララギでそう言う言葉があつたはず」

「わ、美味しそう! パックってホント物知りなのね」

聞きなれない言葉にエミリアとパックが、楽し気に意味を推測し始める。

青髪のメイドは、興味なさげに、静かに傍で待機しており、ピンク髪のメイドは、少し羨まし気な、そして少し嫉妬に燃えたような目でスバルを睨みつけていた。

「平和ね……」

今日は雲一つない良い天気です、お嬢様。

お出かけには日傘を差していきましよう。

咲夜は空を見上げ、とりあえず、現実逃避することにした。

——結局、スバルはロズワールの接吻を免れた。

青髪のメイド、レムとやらが話が進まない止めに入ったからだ。

それまで10分もの間、スバルとロズワール氏の攻防は続いていたが……。

その後、食事の時間らしく、食堂を案内される咲夜とスバル。

それ以外の人、ロズワール氏は返ってきたばかりなので、一度着替えに、エミリアも朝の日課でラフな格好をしていたため、同じく着替えに部屋に一度戻っていった。

メイド達は咲夜たちを食堂まで案内すると料理の準備があると、厨房の方へと去ってしまった。

「随分と変わった客を招いたのかしら」

食堂には初めて見る少女がいた。

年齢は十二歳ほどだろうか、藍色のドレスを着た少女が既に食堂にあるテーブルの席に腰かけ、こちらを気怠げな表情で見ている。

「会って早々、失礼なやつだなこのロリは」

「なにかしらその単語。聞いたことないのに、不快な感覚だけはするのよ」

「攻略対象外に幼いつて意味だ。俺、年下属性あんまりないし」

「……先ほどと言いつ、ベティーにここまで無礼な口を効く奴も、珍しいかしら」

「先ほど？スバルはこの少女を知っているの？」

「ん？ああ、咲夜はまだ会ってないのか。このロリーな少女はベアトリス。俺は一度目覚めた時に会ったんだよ。エライ目にあつたけど」

「ふん、ベティーに対して失礼な態度を取つたお前が悪いのよ」

スバルはどうやらこの少女とは既に会つたことがあるらしい。

あまり中は良さそうではない。おそらくスバルが何かしたのでらう。

「何？あなたこんな幼い少女に対しても悪戯したの？」

「今の会話だけ聞いて、初めに出てくるその発言で、俺が咲夜さんに普段どう思われているかが伺える発言ですね……」

「今更ね」

「うぐつ！それでも俺みたいな純情、ピュアな少年は傷つくんだぞ。泣いちゃうぞ？」

スバルは変に体にしなを作り、目を潤ませ咲夜を見上げてくる。

「どこの席に座ればいいのかしら？」

「スルー!?俺様渾身の演技をして、スルーですか!？」

しかし、スバルを無視して、どこに座ろうかと考え始める咲夜。

「あはー、随分と楽し気なお客さんだーあね」

「スバルはどこ行つても元気なのね」

スバルの声を聴いたのか、食堂の扉を開けて入ってきたロズワール氏とエミリアがそれぞれの対称的、楽し気な、呆れた反応を見せる。

「失礼いたしますわ、ロズワール様、お客様。食事の配膳をいたしま

す」

全員がそろったところで、双子のメイドが台車を押しながら、食堂に入ってくる。

それを見てロズワールを初め、各々が席に着く。スバルは「俺はエミリアたんのとーなり♪」と、言いながら意気揚々と席に着く。

「ちよつと」と、エミリアは若干嫌そうにしていたが。

咲夜はメイドたちを除く全員が席に着いた後に、開いている席に座る。

変態な二人、ロズワール氏とスバルから一番距離が離れている席を選んで。

「それにしても、ベアトリスがいるなんて珍しい。久々に私と食卓を囲む気いになってくれたのかなん？」

「頭が幸せなのはその奴だけで十分なのよ。ベティーはにーちやと食事しに顔を出しただけかしら」

ベアトリスの自信を呼ぶ声に釣られたのか、エミリアの髪の中からパツクが顔を出す。

「や。ベティー、二日ぶり。ちゃんと元気にお淑やかにしてた？」

「にーちやに会えるのを心待ちにしてたのよ。今日はどこにも行く予定はないのかしら？」

「うん、大丈夫だよ。今日は久しぶりにゆっくりしようか」

「わーいなのよ！」

一転してパツクに対して年相応に見える少女らしい振る舞いをするベアトリス。

咲夜は、ベアトリスという少女のことは、会ったばかりでそれほど知らないが、先ほどのスバルへの態度から一転した態度には少し驚かされた。

「驚いたでしょ？」

「ええ」

「ビックリっていうか、なんだよあのロリの態度。猫の前で猫被つてるとか狙いすぎじゃねえ？」

エミリアがベアトリスの反応に驚いた咲夜に話しかける。

咲夜が同意の返事を返すと、スバルも話に参加してくる。

「ふふっ」

「ごめん。ちよつとなに言ってるのかわかんない」

咲夜は猫被るの意味は分かり、スバルの感想に思わず笑いを溢すが、エミリアには意味は伝わらなかつたらしく、首を傾げただけだった。

「それにしても、スバル席が近いわよ」

「いいじゃん、いいいいじゃん。食事は楽しく、賑やかに。楽しければ、食事も一層美味しく感じられる。楽しい食事は人生を豊かにしますぜ」

「それと、わたしとスバルが近いのは関係ない気が……」

「美少女が隣にいれば、なお楽しい！」

「いいじゃない、エミリア様。礼節は大事だけど、身内しかいない場で気にしすぎるのも食事を楽しめない。ああ、彼の言う通りだ」

「さっすが、ロズツち。話が分かる！」

「ひよつとして、それ私のこと？」

「他に誰がなんだよ。ロズツち。いいじゃん、仲良くなるためにも愛称は大切だぜ」

「あはー、ほんとにスバル君は面白いねえ」

「もう、二人とも仕方ないんだがら」

スバルの強引な論理とロズワールの援護射撃に、エミリアも諦めたようだ。

そんなエミリアに同情の声をかける。

「大変ね。この屋敷にはスバルみたいのが既にもう一人いたのね……、由々しき事態だわ」

「本当よ、あんまりスバルがオイタするようならお尻ペンペンの刑なんだから」

「お尻ペンペンとか、きょうび聞かねえな。それと咲夜たん、流石にこのピエロと一緒にされるのは俺も嫌なんだけど……」

そんな会話の間にも、双子のメイドのラムとレムが次々と料理をテーブルの上に乗せていく。

テーブルの上に湯気の立つ食事が並べられていき、朝食の場が整えられていく。

全ての食事を並べ終わると、食堂にいる全員の視線が屋敷の主に向かう。

「では、食事にしよう。——木よ、風よ、星よ、母なる大地よ」

ロズワールが呟き始めると、それに合わせたように、エミリアや双子のメイド、ベアトリスも目をつむって手を合わせ目をつむる。

何事だと咲夜とスバルは意味が分からず目を合わせるが、すぐに食前の祈りだと二人とも気付き、周りの動作を真似して目を閉じる。

どこの世界でも、こういうものはあるものなのね。

「それじゃ、スバルくん、咲夜くん。いただいてみたまえ。こう見えて、レムの料理はちよつとしたものだよ?」

全員の祈りが終わった頃を見計らって、ロズワール氏が食事の開始を告げる。

メニューは一見、様々な色合いの野菜が入ったサラダと、ハムが挟まったトースト。

一般的な洋食でのメニューといったもので、一口トーストを齧ってみれば、確かに美味しい。

しかし、咲夜はこの料理よりも1点気になることがあった。

「む……うまい」

「そうね、美味しいわ」

「そうでしょ。レムの料理ってば美味しいんだから。レムだけじゃなく、ラムも優秀なの。この屋敷だつてレムとラム二人だけでほとんど管理してるの」

スバルと咲夜から良い評価が出ると、エミリアがさも自分が褒められたかのように嬉しそうにレムとラムの有能さを二人に語り出す。

「そうなの。それは、すごいわね。よほど優秀じゃなければ、二人で管理するのは大変だし」

「そうでしょう。種族なんて、っていう人がいるけどそんなの関係ない。優秀な人は優秀なんだから」

この大きな屋敷をたった二人で管理している、この事実咲夜も世

辞抜きで賞賛しないわけにはいかなかった。

お手伝い妖精が沢山いたが、咲夜も紅魔館を実質一人で管理していた。

しかし、それは咲夜の時止めの能力があつてのもの。

能力も使用せずに、館を管理する大変さは誰よりも理解しているつもりだ。

それなのに他の使用人がいない。

そこには何か理由があるのだろうか。

そこまで推測するが、わざわざその事情を聴いて、深く立ち入る必要はないだろう。

この大きな屋敷にしては人氣が少ないことには咲夜も気が付いていた。

屋敷の庭に出る時、この食堂に来るまで移動したが、今ここにいる人以外に見かけなかったのだから。しかし、咲夜のそんな思惑を裏切る者がいて――

「このどでかい屋敷の管理が二人だけとか馬鹿じゃねえ？ 質にこだわるとか以前に二人が過労死すんぜ。――それとも、『召使いが雇えない』みたいな感じの制限かかるような状況ってこと？」

スバルの問いかけにロズワールは黙り込み、エミリアはビクンと肩を揺らす。

先ほどまで楽し気な雰囲気だった食堂の空気が重いものになる。

咲夜は空気を変えたスバルと見て、今までスバルに対して思い違いをしていたことに気付く。

スバルは、不幸に好かれていると思つてたけど、実は逆だったのだと。

自らトラブルに突っ込んでいる。いわば、わざわざ地雷原で遊ぼうとする子供なのだ。

わざわざ、事情がありそうなところに突っ込んでいくスバルをみて咲夜はそれを悟つたのであつた。

第六話：恋路

「本当に不思議だあね、君は。わざわざルグニカ王国のロズワール・L・メイザースの邸宅まで来て、事情を知らないってえいうんだから。よく、王国の入国審査を通ってこれたもんだーあね？」

「まあ、ある意味、密入国みたいなもんだからな……」
実のところ、咲夜もスバルと状況は似たようなもの。

しかし、あえて自分からバラす意味もないので、咲夜は話に口を出さずにこのまま静かに話を聞くことにする。

恥をかくのはスバルに任せましょう。

「呆れた。私たちがもし管理局に報告したらどうなると思うの？いきなり牢屋に押し込められて、けちよんけちよんにされるんだから」

「けちよんけちよんて、きょうび聞かねえな」

「茶化さないの。ねえ、スバル。ホントに大丈夫？スバルの周りってみんなそうなの？それともスバルだけ特別物知らずなの？咲夜は違うわよね？」

「う……、耳が痛いわね。残念だけど、わたしもスバルとほとんど似たような状況よ。この国の事情も、状況もほとんど知らないわ」

スバルのあまりの無知さからエミリアが心配し、咲夜にも話を振ってきたので、咲夜も申し訳なさげに素直に白状する。

傍観者作戦はいきなり失敗したようだ。

「そんな二人なわけなので、差し支えないなら、ぜひぜひご講釈頂けると幸いに存じまして候」

「言葉使いが滅茶苦茶じゃない……」

そこにすかさずスバルが、フォローを入れるも、咲夜がダメ出しをする。

「スバルと咲夜は今この国——ルグニカ王国がどんな状況にあるのか知ってる？」

「全然まったくこれっぽっちも」

「全然知らないわね」

「そこまで言い切られると清々しいわね。二人とも今までどうやって

生きて生きたの？なんかホントに心配になってきた」

「スバルと一緒にされるのは心外ね」

「いいじゃん、いいじゃん。一緒に。恋人のように一緒に歩みを進めていくのもいいのよ？」

「まだ、そのネタ引つ張るのね……」

「いやー。モテない純情少年からしたら、美少女と恋人と誤解されるだけでも嬉しいものなのよ。男ならみんなこの気持ち分かるはず！本当ならなお良しなだけどね……」

スバルの少し自虐交じりの言葉に、「来世頑張りなさい」と、そう返そうとした咲夜だが、スバルが死に戻り体質だということに気付き、来世は当分来なそうね、と思いつき発言を止める。

「ほんと、スバルはだだをこねる子どもみたいね。えっと、話を戻すけど、今のルグニカは戒厳令が敷かれた状態で、特に他国との出入国に關しては厳密な状態よ」

「戒厳令……穏やかじゃない響きだな」

「あはあ、穏当とはいえないねえ。——なにせ、今のルグニカ王国には『王が不在』なもんだからねえ」

「王が不在……」

王立国家において、王が不在とはいかに、重大な事実を告げられた咲夜とスバルはその意味の大きさに息を呑む。

そんな重大な情報を部外者に知らされた事実には、二人は何か意味があるのかと勘繰って警戒するが、

「心配、御無用！すでに市井にまで知れ渡った厳然たる事実だよん」

「そう。ならいいわ。何か面倒に巻き込まれると思ったじゃない」

「いやー、危うく秘密を知られたからには生かして帰さん。俺と咲夜さんの愛の逃避行の展開になるかと」

「……別の面倒ごととも発生しなくて本当に良かったわ」

咲夜は、知らされた事実が機密なものでないことに安堵するも、スバルの看過できない発言に、別の面倒ごととも発生しなくて済んだことに安堵する。

「逃げる前に埋める必要があつたし」

「咲夜たん！声に出てる、出てる！つか埋めるって何を!？」

「安心なさい。とりあえず、起きないことになったのだから」

「ええ!?それは嬉しいけど、……いや意味が分からないし、分かりたくないからやつぱり喜べない!？」

「もう！スバルつたらすぐに話を脱線させるんだから。大人しくちゃんと椅子に座って静かに話を聞いてなきや、頭にゲンコツしちゃうんだから」

「頭にゲンコツって、きょうび聞かねえなあ。ってか、話の脱線って俺だけが悪いの!?ねえ、俺だけ!？」

「ふう。エミリア、スバルは無視して話の続きをお願い。これじゃあ、いつまでたっても話が進まないわ」

「咲夜たん、しれっと俺だけの責任にして話を終わりにしようとしてる!?!つか、何を言っているのかしら、この男は、って顔でこちらを見てるし!そのわけが分からないわといった済ました顔も可愛いな、チクシヨウ」

話が進まないことにエミリアが「ハア」とため息を一つした後、口ズワールが代わりに話の続きを引き継ぐ。

「戒厳令もその一環だねえ。王不在のこの状況で、他国に対しても、国の中に対しても火種が発生することは避けたいってこおと」

「んん?そういうのって普通、王様の子どもが跡を継ぐんじやねーの?若いようなら摂政とか付けて」

咲夜は王が不在であれば、国を導いていく存在がいなくなるとどうなるのか、具体的な想像はつかなかった。

咲夜は幻想郷の外の知識や、幻想郷で暮らす上で必要な知識以外は持っていないからだ。

話の内容はぼんやりと理解できなくもないが、話の内容を聞いて自分なりの考えを出せるスバルに内心驚いていた。

そのあたりの知識も必要かもしれないわね……。

「ふむ、ついてくるねこの会話に。通例ならその通りになるだろうね。だあけど、事はそう簡単には解決できない。半年前に、城内で蔓延した流行病によって、みーんな王族はお亡くなりになったんだあよ

ねえ」

「じゃ、本気で王様不在じゃねえか。そうなると国ってどうなるんだ？」

「現状の国の運営は賢人会によって行われてるよん。いずれも王国史に名を残す、名家の方々の寄り合いだ。国の政治自体に関しての影響はそこまでじゃあない」

「王様がいなくても大丈夫なら、王様なんていらんんじゃないの？」

咲夜は王不在で国の運営が可能なら、そもそも王はいらぬのでは？、そう考えての発言であったが、

「咲夜くん、その発言はあ、ちよつと問題発言かなあ。場合によっては不敬罪と取られかねない」

ロズワールは、言葉こそ今までの軽い感じで言っているが、その目は真剣で、向かい合っているだけなのに、彼から威圧感を感じてしまう。

これが、彼の本来の、本気になった時の表情なのかもしれない。

咲夜とスバルは、雰囲気ガラリと変えた、ロズワールに対して、息を呑む。

そして、「気持ちちは分かるけどね」と一言前置きを置いて、ロズワールは表情を引き締め、

「——王不在の王国など、あつてはならない」

「そりゃそうだ」

運営に問題がないとしても、頭の存在しない組織など成立しない。

ましてや国ともなれば。

日本だって、どれだけ民意優先ときささやかれても総理大臣というトップが存在する。

幻想郷では国の概念がない。

場所は日本にあるとは言え、日本の総理大臣によって管理されているわけでもない。

幻想郷は自由で、基本的に誰もが平等であった。

咲夜とスバルの生きていた環境によって認識の差異があった。

スバルと異なり未だに納得の言っていない様子の咲夜に対して、ロ

ズワールは、たとえ話をして説明する。

「そうだねえ。咲夜くんはメイドだったよねえ？」

「ええ、そうよ」

「例えばの話だけど、君がある貴族の屋敷で働いているとする。そこ
の当主はあまり有能ではなく、ほとんど屋敷の管理は、部下やメイド
たちで賄っていたとする」

「……」

「しかし、ある時、屋敷の主が病によつて、お亡くなりになられた。そ
の屋敷の管理はどうする？」

「それはもちろん、その主の親族などが後を引き継ぐわ」

「屋敷を管理するのに、主が不要なのに？」

そこで咲夜も気付かさされる。

主がいなくても、屋敷の中は回るかもしれないが、その館の顔役は
必要だ。

屋敷の主は貴族。

なら貴族間での交流もあるだろう。

何も世界はその屋敷の中で回っているわけではない。

外から見られていることも気にしなくてはならない。

体面の問題もある。

雇われているものは仕える相手もいなくなる。

「気付いたようだねえ。そおう、どんな状況でも、どんな国でも主、導
き手は必要。責任の所在もあるし、国なら法律もある。その法律を保
証させているのが、王族。騎士たちも誓いを立てているのも王族。国
民にとつても主は国の象徴でもある。主が決して有能でなくても、部
下が優秀であれば、問題ないかもしてない。でも、いなければそれは
それで問題なんだあーよねえ。外国から見たら、国が纏まっていなく
揺れている国に見える。つけ込む隙があると思われる」

「なるほど。分かったわ」

「よろしい」

咲夜も理解を示したことで、ロズワールも話の本題に入る。

「王不在の王国は新たに王を選ばなきゃならない。でも血族は壊滅。」

なら国の誰もが納得いくような形で、王様を選び出さなければならぬ

「なるほど、読めてきたぜ。つまり、王国は王不在な上に王選出のどたばたで混乱中。他国との関係もプチ鎖国状態。だつてのに現れる謎の異国人俺たち二人——超怪しいな!!」

「さあらに付け加えちゃうと、エミリア様に接触してメイザース家とも関わり合いを持ったわけだしねえ。そんな怪しさ万全な君たちは……」

ロズワールが目を瞑り、首に手刀を当ててギロチンアピール。

「でも、そうはならない」

「ふむ。それはどのような根拠で？」

ロズワールの手刀で表現したギロチンによる処刑、それを咲夜に否定され、ロズワールがその理由を興味深々に尋ねる。

「わざわざ、これから処刑する人に一から分かりやすく説明する意味はないもの」

「なるほど。咲夜くんも知識はないでも状況理解は素晴らしい。君もなーかなかに優秀だーあね」

「もしかして、もしかしてだけど　メイザース家ってのはいい家柄で、ひよつとして賢人会関係かあるいはもつとすごい家柄!？」

「私は賢人会の構成員じゃあないし、さしあたって王国の玉座に関わる立場じゃない。——ねえ、エミリア様」

ロズワールに同意を求められたエミリアは、渋い顔をしながら白状するように応じた。

「騙そうとか、そういうこと考えてたわけじゃないからね」

「——えっと、エミリアたんてばつまり」

「今の私の肩書きは、ルグニカ王国第四十二代目の『王候補』のひとり。そこのロズワール辺境伯の後ろ盾で、ね」

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

——『女王様候補』、その言葉にスバルは内心、ひどく動揺し、心臓

音が外に聞こえるのではないか、というほど、自分の心臓がドキドキしているのを自覚し、黙り込む。

動揺していることはだけはエミリアに悟られたくない。

この世界では一般大衆よりも劣る戸籍不明の外国人、怪しさ満点の自分の立場と比べて、はるか遠い存在に感じてしまう。

自分はエミリアに恋をしている、とつくの前に自覚していた気持ち。

しかし、

「おう、ジーザス、なんてこった。俺の恋路の前途多難さに我ながらビックリだ。ジュリエットを愛するロミオすら俺に同情するぜ」

「騒がしくなったり静かになったり、忙しい奴ね」

自分の恋路の壁の高さと厚さに心が折れそうになっているところに、咲夜の声が聞こえ、目を向ける。

目を向けた先の少女もエミリアと同じ銀髪。

日本人には見られない、美しい銀髪をし、また顔立ちも驚くほど整っており、人形のように。

十六夜咲夜。

実はスバルは、エミリアと同じくらいには彼女のことにも気になっていた。

自分と同じ世界、日本から来た異邦人。

自分と同じ立場で親近感を沸くが、彼女のことをスバルはほとんど知らない。

これまでのループによる経験で吸血鬼という存在に仕えていると聞いたことがあるが、どこまでが本当かは不明。

もつとも自分に近い存在なのに、この食堂にいる誰よりも所在が明らかでない存在。

しかし、それでもスバルは彼女にこれまで何度も助けられてきた。

一番初めにあの通路で助けようとしてくれたのも彼女だし、一番会話をしたのも彼女かもしれない。

通路と盗品蔵でも助けられ、時には体を張って助けてくれもした。彼女には恩が一杯ある。

彼女と会話し、時折こちらをからかい、笑うその笑顔に惹かれている自分があるのも自覚している。

エミリアにも心惹かれているのに。しかし、どちらへの思いが強いかと聞かれると断言できる。

きつと、この気持ちは諦めることはできないだろう。それは――

「――さておき、悪かったな、朝食の邪魔して。さあ、みんな、食事に戻ろう。団欒をやり直して、今のは忘れ……」

「ただの狂言発言に、ずいぶんと仰々しいお題目を並べたもんなのよ」
髪をかき上げて爽やかを気取り、場の空気を勢いで持ち直そうとしたスバルの意図が唐突に崩された。

崩したのは離れた席で、退屈そうにこちらを眺めるベアトリスだ。

「お前、本当に俺の天敵だな……」

第七話：要求

「さて、だいいぶ脇道それちやっただけど、本題に入るとしようかねえ」

「そうね」

ロズワールの言葉に、エミリアは同意しながら懐に手を入れ、あるものを取り出しテーブルに置く。

それは、フェルトによつて一度は盗まれた、そして咲夜がスバルの面倒ごとに巻き込まれた間接的な原因、竜を象った徽章だった。

「この徽章は、王選参加者の資格。これがなきや、王選は始まらない」

「ま、まさか……王選参加資格の徽章をなくしてたのか!？」

「なくしたなんて人間き悪い！ 手癖の悪い子に盗られたの！」

「一緒だ——っ!!」

「うっかり、じゃ済まないような話ね」

「うっ……咲夜まで」

スバルは大声で叫び、食卓を叩きながらスバルは立ち上がる。

しかし、それも無理はない。

なぜそんなにも大事なものを盗まれる事態になったのか、問い詰めたくなるくらいだ。

そのせいでどれほど苦労したのか、咲夜がこれまでに繰り返された時間を思い返され、小言を漏らす。

「……エルザは、誰かに依頼されたって言ってたな。つまり、エミリアたんが王様になるのを邪魔しようって奴がいる?」

「そうだろうねえ。王選から脱落させるのに、一番簡単な方法だねーえ」

「つまり、わたしとスバルは、王選の争いに巻き込まれた、そういう事になるのね」

たった一つの徽章の盗品の話が、随分と大きな話になってきたものだ。

「っていうことは俺ってば、エミリアさんの王選脱落を防いだ、超良い働きしたんじゃない!? これはもう、ご褒美を期待しちゃってもいいん

じゃないでしようかねーえ?」

「そのロズワールの口調の真似、すつごく不愉快なんだけど……でも、スバルの言う通り。感謝してもしきれないくらい之恩があるんだから。何でも言つて。出来る限り叶えるよう一生懸命に頑張るから」

「……え?」

エミリアは沈痛な面もちで、胸に手を当て、スバルを真つすぐな目で見つめる。

傍から見て、エミリアは悲壮感あふれる少女で、対するスバルは弱みを握つたさながら悪役のよう。

スバルはそんな予想外の反応に困惑する。

「さすが、スバル。鬼畜ね」

「ちよつと!?!咲夜たん、追いつちは止めて!」

微妙な空気になってしまったが、咲夜はあることが気になり、楽しそうに成り行きを眺めていたロズワールに質問を投げる。

「ねえ、ロズワールさん、わたしからも質問いいかしら?」

「ふむ?咲夜くんもロズつちと呼んでくれて構わないよん」

「……ロズワールは、どうしてエミリアの支持するの?あなたは彼女にとって何?」

咲夜に問いを投げられたロズワールは、テーブルの上に腕を組み、その上に顎を乗せながら愉しげな笑みを象つた。

「良い質問だよ、咲夜くん。私はエミリア様にとって女王候補として支援する後ろ盾……まあパトロンってえことだよ」

「パトロン、ねえ」

スバルはその得体の知れない、怪しきしか漂つてこないロズワールを見て、

「言い難いんだけどさ……エミリアたん、もつと人を選んだ方がよくね?」

「仕方なかったの。王都で頼れる人なんて私にはいないし、そもそも私に協力してくれるなんて物好きはロズワールぐらいしか……」

「なーる、消去法なのね」

「なら、仕方ないわね」

「本人を前にして、三人とも恐いもの知らずもいとこだねえ」

ロズワールは明け助けな物言いをする三人に思わず、苦笑を漏らす。

それでも、怒らないとは、見かけによらず、意外と器が大きいのだろうか。

「ロズつちがエミリアさんのパトロンってのはわかった。でも、そもそも事の発端となったエミリアさんだけど、女王様候補が一人でブラブラするのはちよつと不用心じゃねえ？」

「そうだねえ……本当は、ラムが傍に付いていたはずなんだけど」

ロズワールの言葉に、ピンク髪のメイドに視線が集中するも、視線を向けられた当事者は、髪分け目をひっくり返して青髪に扮した体で平然としている。

髪の色が違うから丸わかりなのだが。

「その自信満々に『誤魔化せたぞ、しめしめ』みたいな顔がムカつくな」

「姉様、姉様、お客さまったらあんなこと言っていますわ」

「レム、レム、お客様ったら頭空っぽなこと言っているわ」

「メイドさん、メイドさん、頭が空っぽな発言じゃなくて、事実頭が空っぽなのよ」

「口悪いからそれでも判別つくけどな！つか、咲夜さんも悪ノリしない！」

スバルは各々の強い個性を発散させている三人のメイドたちに怒鳴り立てるが、エミリアがスバルにおずおずと声を上げる。

「スバル。あまりラムを責めないであげて。その、私が……ちよつと、ちよつとだけよ？好奇心に負けちゃって、ふらふらしている内に、ラムからはぐれちゃったの。だから本当はわたしが悪いの」

「……なんか、その時の情景が目浮かぶように想像できるな。でも、原因はそこにあるかもしれないけど、与えられた使命は、主人の傍にすることなんだろう？それが守れなかったのはやっぱり不手際じゃねーの？」

「まあ、そうよね。わたしも傍に仕えているときは、お嬢様から目を離さないわ」

——それこそ24時間。命令されなかつたとしてもだ。

メイドとして主の期待に応えるの当然といった感じで、スバルの言葉に、咲夜も同意をする。

……内心では少し過剰すぎる言葉が付け加えられていたが、声に出していないので誰も察することはできなかったが。

「まあ、お二人の言う通りかもね。部下の不始末は上司の責任。でも、それはそれとして君はなにを言いたいのかなあ？」

「簡単な話だよ。エミリアさんが一人でいる時に徽章を盗まれ、俺たちも巻き込む一連の出来事が発生！でも、それはそもそも徽章が盗まれたから。でも、もしその場に付き人がいれば？」

「つまり、君が言いたいのは、盗まれたのは付き人が仕事をしていなかったせい。ひいては、それは上司のせい。ならば、君の働きに正當な対価を払うべきはわたしってことかーあな？」

「その通り！」

ロズワールはいち早く話を理解し、少し関心したようにスバルを見て、他の人にも理解できるよう、スバルに成否を確かめるように話す。

そして、それを聞いてようやくその場の全員が、スバルの言いたいことを話を理解すると同時にその場の全員の表情も一変する。

申し訳なさそうにする者もいれば、敵意を滲ませる者もいる。

スバルに対して呆れた表情や、我関せずで食事を行っている者も中にはいたが……。

「認めよう、事実だからねえ。で、君は何を求めるとかーあな？」

「話が早くて助かるぜ。男に二言はねえな？」

「スゴイ言葉だねえ。なるほど。男は言い訳しないべきだ。二言はない」

スバルは、ロズワールの即断の了承に頷き、そして少し間を開け、その望みを言う。

「——じゃ、俺を屋敷で雇ってくれ」

スバルの申し出に、啞然とする女性陣。

双子はその表情の変化の少ない面差しに困惑を浮かべ、ベアトリスはこれまた本気で嫌そうに顔をしかめる。

咲夜は心底呆れた表情。

中でもエミリアは、

「わ、私が言うことじゃないけど、ちよつとそれは……」

「あなた、バカね。エミリアはそう言いたいそうよ」

「ちよ、咲夜！そんなハツキリと……!」

「ええ!?!エミリアたん、そこは否定じゃないの!?!」

「ち、違うの。似たようなことを考えてたかもしれないけど、そこまで酷い言葉なんて思ってたなんか……?」

「……ミリアたんのフォローになつてない、フォローありがとう」

「えつと……どういたしました?」

スバルの皮肉に、そのまま感謝の意味として言葉を受け取る天然なエミリア。

「つてそんなことはどうでも良いのよ!スバル本当にそんなお願いでいいの?」

「エミリアたんはわかつてねえよ。俺は本気で心の底から、そのときそのときの本当に欲しいもんを望んでるんだぜ?」

「——え?」

「正直、俺つてば今のところは徹頭徹尾の一文無し!そこんところは咲夜たんに指摘されて気付いたけど。今後の生活も考えりや、それに、超可愛い超好みの超美少女とひとつ屋根の下で暮らせる、実に合理的。ベストな選択だぜ?」

「……別に屋敷にいたいのであれば、食客とかで良かったんじゃ?」

「エミリア。言っちゃだめよ。スバルは頭が空っぽなんだから、気付かなくても仕方ないの」

「——その手があったか!?! ロズワール!?!」

エミリアの食客の発言に対して、咲夜が諭すように、スバルの残念さを語るが、スバルはその発想には気づかなかつたと少し、涙声で一縷の望みをかけてロズワールを見るが、

「最初の要求が有効です。男に二言はないからねえ」

「うおおーい!そうだよね!男は二言とかしないもんね!?!」

さつきの誰かの発言が跳ね返っていて泣く泣く却下。

さすがご引き下がるスバルは今後の就労生活に思いを馳せながら。「さて、スバルくんの望みは聞いた。両者の間で快く合意もできた。なら、スバルくんと同じく功労者の咲夜くんの望みも聞かないわけにはいかないよーおね？」

ロズワールが、スバルの話に關してはここで終わりと、話を締め、今度は咲夜にも同様に話を振る。

咲夜も当然の流れと、予想できたことなので、願いは既に考えていた。

咲夜もスバルと同様にお金の持ち合わせがない。

そして何としても幻想郷に戻らなければならぬ。

ともすれば、願いは絞られる。

咲夜は、口を開いてその願いを言う。

「わたしの願いは——」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

余談だが、スバルの「好みの女の子」と言う少し告白じみたスバルの発言に対して、エミリアは眉を潜ませ、考え込みながら小さい声でぼつりと呟く。

「女の子と一緒にの職場がいいなんて、不純よ。……咲夜とラムとレム、誰がスバルの好みだったんだろ？もしかしてベアトリス？」

唇に指を当てて、まったくの見当違いな想像に胸を膨らませるエミリアだった。

咲夜はたまたまその声が聞こえて思わず、嘖き出してしまったとか何とか。

第八話：部下の不始末は上司の責任

ロズワール邸の近くにあるアーラム村、そこに咲夜とスバル、レムはいた。

ある用事のために村を訪れた三人だが、その用事を済ませるまでに少し時間があった為、屋敷に足りない調味料の買い物をしていた。

「おーい、まだ買うのか……?」

「当然です。本日分だけでなく、備蓄分も買わないといけないんですから」

商品はレムが選定して買い、スバルが荷物持ちを行っていた。

咲夜は、それを眺めている。

「重そうね。ご苦労様」

「咲夜たんもそう思うなら、手伝ってください……」

「嫌よ。わたしは屋敷のメイドでも何でもないので。それにわたしも荷物持っているでしょ?」

「うー……。それは自分の荷物でしよう?」

荷物の重さにひいひい言いながら運ぶスバルが、少しの助力を咲夜にお願いするも断られ、恨めし気な視線を咲夜に向ける。

咲夜は鞆を一つ持っていた。

屋敷を出る前に饞別としてロズワールから貰ったもので、中には咲夜がロズワールに頼んだものや、気を使っけてくれたのだろうか昼食の弁当が入っていた。

「咲夜たん、本当にダメなのか?」

「だから手伝わないって言ったでしょ?」

「違う、そっちじゃない」

咲夜は荷物持ちを再度お願いされたと思ったが、スバルが言いたいことはどうやら違う様子。

そして、咲夜はスバルの言わんとすることを察すると、

「……あなたもしつこいわね。屋敷でも散々その事は話し合っただしょ?」

「……でも、それは「スバルー!!!」」

スバルは言いかけるが、こちらに向かつて大声の叫び声で、それはかき消される。

咲夜とスバル、レムが声が聞こえた方を見ると、村の子供たちが少し離れた場所でごつちに向かつて、手を振っている。

「どうやら声の主は彼ららしい。」

「ほら、お呼びよ」

「いや、でも、話は「スバルー！ほら、早くー！！」

またしてもスバルの言葉は遮られ、彼も諦めたのか、抱えていた荷物をその場に置き、レムに「頼む、少し見ててくれ」と言い荷物を任せると、子供たちの方へと向き直ると「こらー！年長者は敬えよ！名前を呼捨てすんなー！」と叫び、子供たちの方へと駆け寄っていく。

スバルが駆け寄って来るのを見るや、子供たちはキャッキャッと楽し気に嗤いながら、スバルから逃げていく。

「どうやら鬼ごっこがそのまま始まったようだ。」

スバルが必死に子供たちを捕まえようとしている。

「スバルくんは随分と子供に懐かれていますね」

「精神年齢が近いからじゃないかしら？」

「ふふ、かもしれませぬね」

「それよりも、買物物は良いの？」

「買わなきゃいけないものは残り少ないですし、スバルくんも頑張ってくれましたから、多少の休憩は良いでしょう」

「そう、なら良いけどね」

その後、暫く咲夜とレムは子供たちに纏わりつかれ、ウザったそうにしているスバルを見物していた。

子供たちはスバルに対しては遠慮がないのか、元々わんぱくなのか、スバルに対して容赦なく殴る、蹴る、服や髪を引っ張る、鼻水を付けるなどを繰り返していた。

文面だけで見るとリンチされているように聞こえるが、実際は子供のやることなので、スバルの表情を見る限り嫌そうにはしているが、痛がつてる様子もないので、対して痛みはなさそうだ。

「おーい！二人とも見てないでこっち来いよ！」

子供と一緒に遊んでいたスバルが、突如、こっちに振り向いて、呼びかける。

咲夜とレムは何事かと目を合わせる。

「レムは荷物を見ているので、咲夜様は行ってください。」

「良いの？」

「ええ。構いません。」

「確認して面白そうだったら、あなたも見に来なさい。その間荷物番はスバルにやらせるから」

「ええ。ありがとうございます。その時はお願いしますね」

咲夜がスバルと子供たちの元へと近づく。

彼らの視線は一点へと注がれていた。

視線の先は、青い髪の色をした少女が抱えていた、少し薄汚れた黒い犬だった。

「咲夜たん、来たんだな。あれ、レムは？」

「誰かが荷物を見ていないとダメでしょ？レムは残ったわ」

「あ、やべ！荷物忘れてた」

「後でレムと荷物番交代してきなさい。レムにも話しておいたから」

「咲夜たん、サンキュー」

スバルとそんな会話を交わしながら、咲夜は黒い犬に目を向ける。

こちらの世界の犬は、咲夜の世界と見た目は変わらないらしく、「この世界にも犬はいるのね……」と咲夜は心の中で思う。

子供たちも咲夜に気付いたようで、「あ、メイドのお姉さんだ！こんにちはは！」とみんな元気よく挨拶してくる。

咲夜は、スバルが後ろで「俺に対する態度と違う……」と呟いているのを無視して「こんにちは」と笑顔で返す。

「はあ、やっぱり動物はキュートだな。クソ生意気な餓鬼どもと違って癒されるぜ」

「あなた、動物好きなのね」

「そりゃ、そうだ！これでも一流のモフリストを自称してるからな。ここにエミリアたんも居れば、チョー癒しの空間が出来たのに。でも

まあ、咲夜たんがいるから、美少女と愛らしい小動物のツーショットで、良い目の保養になるけどな！」

「はいはい。しゃべってばかりいないで、撫でてあげたら？一流のモフリストなんでしょ？」

「俺様は超紳士だからな。レディーファーストで」

「そんなことで紳士ぶられてもね……」

スバルは自分的には紳士的行動をしたつもりなのか、こちらにウインクをして、手を伸ばして「どうぞ、お先に」と言ってくる。

咲夜は相変わらずのスバルの空回りな態度に呆れた表情をしてため息を吐いた後、犬に向き直る。

そして犬の頭に撫でるため、手を伸ばす。

咲夜の手が犬の頭に触れそうな距離まで来た時、「咲夜様！」と咲夜の後ろからレムに呼ばれる声があったため、伸ばした手を引っ込めて、振り返る。

「竜車が来ましたー！」

「わかったわー！ありがとう！」

少し離れたところにいるレムに聞こえるような声を張り上げて返事をする。咲夜は踵を返し、子犬から離れる。

「ごめんなさい。もう行かなきゃ」

「えー……」

「もう竜車が来ちゃったのか……。しゃあねえ、俺も行かねえと」

「え、スバルもどっか行っちゃうの？」

スバルの竜車の元へ行く、という発言に竜車でどこか遠くに行ってしまうのではないかと、心配そうな声で赤混じりの茶色い髪をした可愛らしい少女がおずおずと声をかける。

「いや、俺はどこへも行かねえよ。見送り」

「え？」

スバルは少女に返事をする、先に行ってしまった咲夜に遅れないよう、彼女の後を追いかけてその場を離れる。

「なあ、本当に行っちゃうのか？」

「はあ、何度もしつこいわね。あなたとわたしでは目的が違った。そ

ういうことでしょ？」

「そうだけど……」

「別にもう会えないというわけではないし、機会があればこの先も会うかもしれないでしょ？」

「そうかもしれないけど。俺はまだ咲夜さんに助けってもらってばかりで何も返せてない……」

スバルは散々咲夜に助けられてばかりいた事について、気にしていたらしい。

そんなスバルの殊勝な考えに咲夜は少し驚く。

「なら、この先何かあったら、頼らせてもらおうわ。それでいいでしょ？」

「……分かった」

少し納得がいかないような表情をしながらも、ようやくスバルは了承する。

「咲夜様とスバルくんも戻ってきたようですね」

話しているうちに竜車の元にいたレムの傍まで来ていたようだ。

咲夜とスバルが竜車の元に着くと、レムが話しかけてくる。

「それでは、咲夜様。ロズワール様が本日業務によりお見送りに出られないため、レムが代理として申し訳ありませんが、改めて、エミリア様の件について感謝を述べます。竜車の御者には既にお伝えしていますので、この竜車に乗っていれば、王都に行けます」

「ありがとうございます。あなたにもお世話になったわね。ロズワールとエミリアにもお礼を言つといてちょうだい。ラムにもね」

「かしこまりました。お伝え致します」

「スバルも一応、元気でね」

「一応って……、まあ俺はエミリアさんと元気に一つ屋根の下の生活を満喫するとするさ。咲夜たんとも過ごせないのは残念だけどさ。気をつけてな」

咲夜はスバルとレムに手を振って、竜車の客室に乗り込む。

流石は大貴族の竜車なのか、中は広々として一人で乗るには随分とゆつたりとしたスペースがあった。

咲夜が乗り込んだ事を御者は確認すると、竜車を走らせる。竜車のスピードは中々に速く、後ろの窓から見える光景はすぐに小さくなっていく。

スバルとレム、そして村の子供たちが村の出口で手を振っており、咲夜も竜車の横の窓から顔を出して小さく手を振り返してやる。

やがて、スバルたちの姿が完全に見えない距離になると、咲夜も体を竜車の客室に戻す。

「ふう、まったくスバルはしつこかったわね」

咲夜は口でそう愚痴る。

「竜車の行き先は王都だ。」

王都に着くまで大分時間はあるだろう。

なぜ、咲夜が竜車に乗って王都に行くのか、そのきっかけとなる食堂での一件について、咲夜は振り返る。

ロズワール邸の食堂には、住民が全て一堂に集まっていた。

ロズワールは徽章の盗難の一件について、褒美を要求したスバルの願いを聞き届ける。

スバルへの褒美の話が終わると、当然食堂の視線は一人に向かう。今回の同じく功労者である咲夜へ。

「さて、スバルさんの望みは聞いた。両者間で快く合意もできた。なら、スバルさんと同じく功労者の咲夜さんの望みも聞かないわけにはいかないよーおね？」

ロズワールは、テーブルの上に両肘をついて、手を組んだ上に顔を寄せ、楽し気な表情をしながら咲夜へ望みを聞く。

咲夜もその質問を予測していたので、指を三本立てて、淀みなく答える。

「わたしの願いは、全部で3個あるわ」

「ふむ、3個か……」

「ダメかしら？」

「スバルくんからのお願いは1個だったかーあらね。それだとす

「こーおしばかり不公平になっちゃうよーおね」

スバルのからの願いは一つ。流石に3つも願いを素直に聞いてくれるのは難しかったか……、咲夜がそう考え願いを絞ろうと考えた時、

「ロズワール、咲夜のお願い聞いてもらってあげられないかな？」

「おや、大精霊様が珍しいことをおっしゃいますね。貴方がエミリア様以外の肩を持つなんて」

普段はエミリア以外の人には自分から干渉をしないパックが咲夜の味方をする発言をしたことにその場の全員が驚く。

「いやいや、咲夜とは約束したからね」

パックは咲夜に向かってウインクを一つする。

「どうやらパックは庭での咲夜のお願いを守ってくれたようだ。」

「ふーむ、しかし大精霊様の願いとは言え、咲夜くんにだけと言うのは……」

「スバルは既に、僕がお願いを聞いているからね」

「ほう？ 大精霊様直々に？ それは興味深い」

「僕を好きな時にモフることができる権利が欲しいんだってさ」

「な!? なんて羨ま……、厚かましい奴なのかしら！ さっさと屋敷から追い出すべきなのよ！」

それまで静かに、退屈そうな顔で話を聞いていたベアトリスが、パックからの羨ましい願いをスバルが要求したことに騒ぎ出す。

「分かりました。大精霊様からもお願いされたとなると聞かないわけにはいきませんね。良いでしょう」

珍しいパックからのお願いにより、ロズワールから何とか了承をもらえ、咲夜は願いを聞いてもらえそうなことに安堵するが、

「たーだし、2つまあーでだよ」

ロズワールから3つじゃない、と釘を刺される。

「エミリア様の徽章についての件、大精霊様からのお願い、これで2つ分。3つ目のお願いを聞くにはまあーだ理由が足りないかーあな」

「理由……」

「そう、理由。それがあれば聞いてあげないこともないかもね」

ロズワールは口では否定しながらも、咲夜が何か面白いことを言いださないかと期待するような目をしている。

この分だと、本当にロズワールの興が乗るような理由があれば、願いを聞いてくれそうだ。

理由……。

納得させることのできる理由を思いつこうと咲夜は何かないかと考えを巡らせるが、中々思いつかない。

咲夜は何かないかと辺りに視線を彷徨わせ、ある人物に目を止める。

「ふむ、理由はないようだね。なら、願いは「理由ならあるわ」に……」

暫くしても言葉が返ってこない咲夜に対して、ロズワールが少し期待が外れたような表情をして話を次に進めようとするが、それは咲夜に止められる。

「ほう。ではそれを教えていただいてーえも?」

ロズワールは興味深々と目を輝かせて咲夜を見る。

食堂にいた他の人物たちも果たして咲夜の口からどんな理由が出てくるのかと、視線を向けてくる。

「理由を言う前に、一つ確認してもいいかしら?」

「勿論、かまわあないとも」

「スバルもそうだけど、今回貴方から、褒章をもらう理由として、今回の一件が、あなたのメイドの不始末だったから、それは良いかしら?」

「あーあ。合っているね」

咲夜の言葉にロズワールの後ろでラムは少し嫌そうな顔をするが、ロズワールは同意を示す。

「なら、良いわ。それが理由よ」

咲夜はそう、簡単に三つ目の理由を告げる。

「……えつと、どういうことだ?」

スバルは理由が分からず、思わず口を出してしまう。

しかし、それは咲夜以外のその場の全員が同じ思いを抱いていたらしく、誰もがスバルの言葉を否定しない。

「分からなかったかしら? なら、もう一度言うわ。わたしはロズ

ワールにとって大切な関係者を救った。それが理由よ」

「……もしかして咲夜くんはエミリア様の命を救った。それが3つ目の理由、そう言いたいってことかーあな？」

ロズワールは3つ目の理由がエミリアの命を救ったことで、徽章の件とは別としてカウントしている、と考えたらしい。

ロズワールはその考えに至ると、ひどく残念そうに、

「申し訳ないけど、エミリア様の身に危険があつたことに関して助けて頂いたことには感謝しているけど、エミリア様の徽章の件のきつかけ、つまり引いてはわたしのメイドの不手際からなる一連の出来事と考えているから、3つ目の理由としてはカウントできないかーあな」
ロズワールの言葉を聞いて、周りもようやく話を理解したのか、納得の表情を見せると同時に、それじゃあ、理由としては……とロズワールと同じような否定の空気が流れる。

しかし、

「残念だけど、それが理由じゃないわよ」

咲夜の否定の言葉に一同が驚いて目を見開く。

咲夜は、ロズワールと同じようにテーブルに両肘を着き、手を組んだ上に顔を乗せる。

「わたしが救ったのは――」

咲夜はそういうと、ある人物の方へと視線を向ける。

周りもそれに釣られて、咲夜の視線の先に目を向ける。

「お、俺!？」

食堂の全員に視線を向けられたスバルが動揺して声を上げる。

「そうよ。ロズワール邸で雇われているナツキスバル、それがわたしが救った相手よ」

「なるほど。確かに、スバルくんは既にうちの使用人だね。でも、それは今日か「部下の不始末は、上司の責任。男に二言はない、とも言つたかしらね?わたしの記憶違いだったかしら?」

「……」

「……この食堂にいる全員が証人よ。ねえ、パツク?」

「……! そうだね!僕はロズワールがそう言っていたことを記憶し

ているよ！」

咲夜に水を向けられて、パツクも咲夜の言いたいことを察したのか、話に乗ってくる。

「……、あはあー。大精霊様に保証されてしまったては、認めないわけにはいかなあーいよねえ」

口では渋々認めるような発言ではあるが、ロズワールの表情は笑みだった。

「どうやら合格をもらえたらしい。

「いやはや、やはり他人との会話はいいものだーあね。それに初めて会った相手だと、いい刺激になる。咲夜くんは随分と機転が利くようだーあね」

「お褒めに与かり、恐縮でございます」

咲夜はそう言うと、胸の前で片腕を折り曲げ、優雅に礼をする。

「さて、願いを聞くのに長々としてしまったね。勝ち取った願いを、3つとも言つてごらん。あれだけ咲夜くんも頑張ってくれたんだ。私も期待に応えようとも」

ロズワールの言葉に、先ほどまで少し張りつめていた食堂の空気が和らぐ。

みな、どことなく緊張していたようだ。

咲夜はロズワールの言葉を受け、願いを告げる。

「まず、一つ目だけど……お金ね」

「ふむ。スバルくんと異なり、随分と世俗的な願い、現実的な願いが来たね」

「わたしもスバルと同様、お金が心もとないからね。金額的には一週間、宿で過ごせる程度でいいわ」

「いいんだね？もつとお金を出してもいいのだーあけど」

「構わないわ。他にも要求もあるしね」

ロズワールは一つ目の要求に関してすぐに了承する。

そしてロズワールは静かに、咲夜に次の要求を目で促す。

「二つ目だけど、それは王都までの足ね」

「足？どういう意味か、尋ねても？」

「つまり、王都まで楽に行けるように手筈を整えてほしいの。貴族様なら、馬車か何か乗り物でもあるのでしょう？」

「なるほど、理解した。それも構わないよ。最高級の竜車ををご用意しようじゃないか」

「ありがとう」

続けて2つ目の願いに対してもロズワールから了承をもらう。

そして残りの一つが肝心なのだが、それは――

*

「お客さん、着いたよー」

御者の声に、意識を戻される。

どうやら、思い返している間に少し寝ていたらしい。

咲夜は、御者に礼を言つて竜車から降りる。

竜車から出た咲夜の前には大きな屋敷があった。

その屋敷には大きな門があったが、お客を迎えるため、今は開かれている。

そして、開かれた門の先には一人の人物が立っていて、咲夜を出迎える。

「やあ、咲夜。二日ぶりだね。また、すぐに会えて嬉しいよ」

燃えるような赤い髪をしたラインハルトは、咲夜を歓迎する。

「ようこそ。アストレア家へ。本邸でなくて申し訳ないけど、王都には別邸しかなくてね。歓迎するよ」

3つ目の願いは、アストレア家との橋渡しをしてもらうことだった。

第九話：アストレア家

ロズワール邸。

その屋敷にある一室、屋敷上階中央にある高価そうな革張りの椅子にロズワールは座っていた。

ロズワールは机の上にある書類に対して、ふと部屋の窓を見て、そこから見える日の高さから、少しお昼を過ぎた頃と悟る。

「そろそろ、咲夜くんが無事に到着した頃じゃな―あいかな」

「本当に行かせて宜しかったのでしょうか？」

「ふむ、確かに咲夜くんはな―かなかに、楽しませてくれる逸材だ―あったね。そのままお別れってえのも、す―しばかり、残念だねえ」

ロズワールの座る椅子の傍から話しかけたピンク色の髪をしたメイド、ラムからの問いに、ロズワールは昨日の食堂のやり取りを思い出したのか、楽しそうにくつくつと笑いながら答える。

しかし、ラムの問いは、別の意図があったようで、

「……私が言いたいのはその言うことではなくて、――」

「彼女が福音書を持っていたことかあね？」

「はい、あの女は魔女教徒です。早々に始末してしまった方が良かったのでは？それを見逃すようなことをして……」

ラムの語気には、魔女教徒に対しての並々ならぬ憎しみが込められていた。

「た―あ―しかに、彼女は福音書を持っていた。でも、福音書を持っているからと言って彼女がそうである、という保証にはならないんじゃないかな？」

意識を失った咲夜とスバルがこの屋敷に運び込まれたとき、ラムは屋敷を預かる以上、身元の不明な相手をそのまま受けいるわけにはいかない、と最初はエミリアに突っぱねた。

しかし、エミリアが持ち前の頑固さで譲らなかつたため、また怪我人を放置するわけにもいかず、パツクのエミリアへの味方が後押しになり、渋々許可をした形だ。

せめてもの妥協点として、客人として咲夜とスバルの服を着替えさせる際に、咲夜はラムが、スバルはレムとエミリアが持ち物のチェックを行った。

その際にラムは福音書の存在に気付いたのだった。

「わざわざあんな得体の知れない本を持ち歩く一般人はいません。それこそ魔女教徒でない限り。あのメイドの着替えを行ったのがラムの方で良かったでした。レムが行っていたら……」

「感情的な彼女のことだ。その場で殺してただらうね」

「……」

ラムとレムの故郷の村は、魔女教徒の襲撃に合い、全て失われてしまった。

残ったのはラムと唯一、血が繋がった妹だけ。

それだけに二人の魔女教徒への恨みの思いは強い。

咲夜が福音書を持っていることに気付いた時、ロズワールが戻るまで自制が出来たのは、彼女の冷静な性格が故にだろう。

レムであれば、きつと悲惨な結果になつていたに違いない。

「魔女教徒は、存在は広く知れ渡っているけど、その実、実態はあまり分かっていないことは少ない。もし、彼女が本当に魔女教徒であったのなら、それはそれで何か情報を得ることができるかも、と思っただけ。食堂ではどおんな要求が飛んでくるのだろうか、期待したのだけどその点については期待外れ、と言ったところかな」

「なるほど、あえて泳がせていたと。だから、ロズワール様は三つも願いを叶えることを認めたのですね」

「ふふ、あれはわたしを予想外に楽しませてくれたことも理由にはあーるけどね」

「なら、屋敷を出ることが決まった時点でわざわざ素直に願いを聞いてやる必要は無かったのでは？」

泳がせるために手出しをしなかったのなら、屋敷を出ることが決まれば、その必要はなくなる。

ロズワールは咲夜の願いを承知すると、いきなり咲夜を連れて行くわけにもいかないので、アストレア家にまず使者を出した。

アストレア家から快く認める事が書かれた旨の返事が返ってきたのは、その日の夕方。

使者のやり取りで時間がかかるのは分かっていたため、咲夜にはその日はロズワール邸で宿泊をした。

その間、咲夜を始末する時間は沢山あったはずだ。

「ラムに命じて頂ければ、すぐにでも実行をしたのですが……」

「この屋敷にいるのは咲夜くんだけではない。エミリア様たちもいるし、それにお客様であるスバルくんもいる。ここで変に気取られるようなりスクを冒してまでするべきではなあっていよ。スバルくんとはこれから仲良くやっていくことになあーるかもしれないんだから」「バルスとですか……」

「まあ、咲夜くんはよそに行ってしまったわあーけだし。王都にあるアストレア家、それも剣聖のところに行くのだから、仮に魔女教徒であつても下手な真似はできなあーいんじやいかな？　今回は、咲夜くんとは縁がなかった、ということだあーろうね」

ロズワールはそう言うのと、休憩はこれで終わり、というかのようになり再び書類と格闘し始める。

ラムも話の終わりを気取り、一礼をした後に部屋から退出していく。

この後、今日もまた一日、何も出来ないスバルの執事としての教育の時間が始まる……。

「さて、残ったスバルくんはこの屋敷に一体何をもちたしてくれるのか、期待だーあね」

アストレア家。

咲夜はアーラム村から馬車でラインハルトのいるこの別邸の元に訪れていた。

ラインハルトは断りのため、使者を出したとは言え、急な訪問に対

して嫌な顔せず、快く迎え入れてくれる。

咲夜は、現在はそのラインハルトに屋敷の中を案内されていた。

「随分と使用人が少ないような気がするのだけど……」

「咲夜の言う通り、アストレア家、とくにこの別邸の方は使用人がほとんどいない。いるのは今君の隣にいる婆やと、その旦那さんの爺やくらいさ」

ラインハルトが言った「彼女」とは、案内のため、先を歩くラインハルトに続く咲夜の、少し後ろを歩いている老婆の女性を指していた。

咲夜が視線を送ると、老婆は人の良さそうな笑顔でこちらを見る。

咲夜はそんな視線を向けられ、少し居心地悪そうに眼を反らす。

「ロズワール邸もそうだけど、以外と貴族様は使用人をそんなに雇わないのかしら？」

「他所の貴族の屋敷のことは知らないけど、普通の貴族は咲夜の想像通り、たくさんの使用人を雇うものだよ。うちは特殊な家系だし、なによりも恥ずかしながら家庭の事情という理由もあってね……」

ラインハルトはそこで、少し言葉を濁す。

彼はどこか沈痛な表情を見せる。

しかし、それは一瞬で、すぐに笑顔に切り替える。

「咲夜の部屋はここだよ。この屋敷の客室で一番良い部屋を選んだつもりだから、もし部屋が気に入らなくても申し訳ないけどこれ以上の部屋はないからここで我慢してほしい」

ラインハルトは部屋の扉を開けながら、少し申し訳なさそうな表情で言う。

開けられた扉から、中を覗くと、毎日掃除がされているのか、清潔感あふれる部屋が見える。

部屋も広く、家具も高級品と分かるような品で揃えられ、バルコニーもある。

ロズワール邸の部屋よりもいい部屋だ。

バルコニーには階段があり、案内された部屋は三階の部屋だが、その上の四階にも続いているらしい。

「部屋に関しては、十分過ぎるほどよ。喜んでここの部屋を使わせてもらおうわ」

「部屋を気に入ってくれたようで良かった。もうお昼を過ぎて大分たっているけど、食事は済ませている？」

「お気遣いありがとう。ロズワール邸から出発前に、弁当を貰っていたから、竜車の中で食べたわ」

「なら良かった。ここまで来るのに疲れているだろうから、部屋でゆっくりしていきな。夕食の時間になったら使用人の彼女が呼びに行くから。夕食の後でゆっくり話そう。君にも会わせたい人がいるから……」

「分かったわ。言葉の通り、部屋でゆっくりさせてもらおうわ」

ロズワールと使用人は部屋の前から立ち去り、咲夜は部屋に入り、扉を閉じる。

大きなキングサイズのベッドの上に唯一の荷物だったカバンを置き、腕の上に垂直に伸ばし、「うーん」と、言いながら、少し伸びをする。

ずっと竜車に乗っていて長時間同じ姿勢だったため、気持ちいい。「さて、夕食までの時間、どうしようかしら？ 竜車で途中寝ていたら、眠気はないし。屋敷の探検をするのも良いけど、それは夕食後にした方が良さそうね」

咲夜は部屋の中の物を見回す。

ベッドだけでなく、テーブルや椅子、コートハンガーなどそれなりに必要と思われるものは一式揃っているらしい。

金庫まである。

鍵がすぐそばにあるので、それを使用すれば開けられそうだ。

家具は全て品の良い色で、部屋の空気を損なわないような色で整えられている。

客室だけあってお客を持って成すための部屋というだけあって、オシャレだった。

「まあ、特に部屋に変なものがあるわけでもないわね。異世界だから変わったもの一つでもあるかと期待したけど」

咲夜は部屋の調度品を調べるのを止め、ベッドの上のカバンを開け、中から本を一冊取り出す。

これも餞別としてロズワール邸で貰った本だ。

咲夜はこちらの世界の言葉が読めないため、その学習のためだ。

こちらの文字は、「イ」文字、「ロ」文字、「ハ」文字があるらしい。

それを知った時、咲夜は絶対に過去にこちらの世界に来た日本人が伝えたのだらうと、思った。

ともあれ、咲夜はそれぞれの文字ごとの学習本、計三冊を譲ってもらった。

初めは「イ」文字から習得した方がいいということなので、まずはその本を開く。

一つ一つの文字の横に絵と注釈が付いている。

勿論、音、読み方も分からないと学習の仕様がないので、事前にレムから聞いて、一通りの文字の読み方について、日本語でメモをしている。

咲夜はそのメモを開いた本の横に置き、文字の学習に時間を費やしていく――。

「うりゃー！」

風が勢い良く、駆けていく。

駆ける速度は、凄まじく、常人では認識できず、近くに人がいれば、いきなり突風が吹いたと思うだろう。

その風は一人の老人の元へと一直線に向かっていき、そのまま老人を吹き飛ばすかと思われた。しかし、――

「……っいー！」

老人は風とそのまま衝突するかと思われた直前で姿を消す。

老人が消えたと同時に風から、少女の戸惑いの声が漏れる。

直後、風の勢いは止まり、その場には少女が立っていた。

金髪で整った自顔立ちと色白の肌、意思の強そうな瞳は美貌の片鱗

をにじませており、将来の有望さを予感させる。

彼女の名前はフェルト――

――あの盗品蔵の騒動から、ラインハルトに何故か拉致同然で連れ去られ、気が付けば、大きな豪邸の屋敷の中。

そんな状況に戸惑う彼女に、ラインハルトは彼女に様々な教育を施そうとする。

当然反発する彼女。

運命だとか、王選だとか、王族だとか、そんなの知らねー、と言い、彼女は昨日から屋敷から脱走を何度も挑戦していた。

挑戦するが、彼女のそれが一度も叶ったことは無い。

しかし、それでも持ち前前の意思の強さから彼女は諦めない。

そして、現在も脱走を図っている真っ最中。

一番面倒な相手、ラインハルトがお客様を迎えるところまで正門へ出迎えに行く。

大人しくするように言われたが、それを素直に聞き分ける性格ではなく、むしろチャンスだと思ったフェルトは、すぐに脱走を企む。屋敷の裏庭から外に出られる裏門まであと少しという所で、この屋敷の使用人の老人が現れ、――

「うわっ!?!」

フェルトは突如、足を何かに払われ、コケる。

「なんだ?」と思い、倒れた状態で視線を上に向けると、そこにはフェルトの視界から消えた老人だった。

どうやら足を払ったのは彼らしい。

フェルトは恨めし気にその老人を睨むが、対する老人は笑顔のまま何も言わずにフェルトを見つめてくる。

暫く無言の視線の飛ばし合いを繰り返していたが、やがてフェルトが折れる。

「だー! チクショウ! 分かった、分かったよ、爺ちゃん。あたしの負けだ!」

フェルトは、渋々と自分の負けを認める。

フェルトがこの屋敷を未だに抜け出せない理由にこの老人の存在がいる。

一番の障害はラインハルトだが、彼は普段仕事で屋敷を留守にすることが多く、チャンスは殊の外、沢山あった。

しかし、その間はこの老人が立ちふさがる。

彼はフェルトが抜け出そうとすると、どこからともなく現れ、こうして妨害をしてくるのだ。

老人ながら動きは読めず、いつも気が付いたら一瞬で倒されている。

「……ん」

老人は少ししわがれた聞き取りにくい声でフェルトに声をかけると、倒れているフェルトに向かって手を伸ばす。

フェルトは素直にその手を取り、老人に引つ張られ、立ち上がる。

フェルトは服に着いた土を払うと、老人とともに屋敷に戻っていく。

「やっぱ爺ちゃんはつえーな。どうやったらそんなに強くなれんだ？」

フェルトは隣を歩く老人に尋ねる。

老人はポケットから紙を取り出し、文字を書いてフェルトに見せる。

紙には「経験の差」とだけ書かれていた。

老人は昔は騎士として、国に仕えていた。

特に亜人戦争の際、現賢人会の一人であるボルドーは、かつては直属の上司であり、あの剣鬼とともに一緒の隊員として戦場を駆け抜けたこともあったとのこと。

その戦争は苛烈で、魔女スピックスの策略によって、戦傷を喉に負ったことで口が利けなくなり、以来、普段は無口で返事は紙に書いてするようになったらしい。

この話は老婆に爺ちゃんの強さについて、同じように質問した時にされた話だ。

その結果、爺ちゃんとの馴れ初め話にまで発展し、長時間拘束され

る羽目になったが……。

「フェルト様、やはり部屋を抜け出していましたか」

「うげっ！」

フェルトと老人が屋敷の廊下を歩いていると、ラインハルトが声をかけてくる。

ラインハルトは咲夜を部屋に案内した後、フェルトの部屋に戻ったが、彼女が部屋を抜け出したことに気付き、探し回っていたらしい。

「やっぱり、爺やが捕まえてくれたんだね。助かったよ」

フェルトの隣にいる老人を見て、大体の事情を把握したラインハルト。

既に何度も繰り返されている事だけに察するのも早い。

老人はラインハルトの感謝に笑顔とともに礼で返す。

老人とはそこで別れ、フェルトはラインハルトにそのまま連行されていく。

途中、フェルトの服が汚れていることに気付き、フェルトは風呂に入るように言われる。

「女性として身だしなみはしっかりとしないとね」と、ラインハルトのキザったらしい言葉にフェルトは表情をゆがめるも、今回は敗北を認めていたため、素直に従がう。

その後、風呂から上がり、着替えたフェルトを外で待ち構えていたラインハルトに連行され、再びフェルトの勉強会が夕食まで再開される。

咲夜が文字の勉強を行っていると、扉がノックされる。

「咲夜様、お食事の準備が整いましたので、ご同行をお願いしても宜しいでしょうか？」

咲夜は本から視線を離すと、部屋に備え付けられた時計を見やる。

いつの間にか随分と時間が経っていたらしい。

気付けば、少し空腹も感じる。

「ええ、分かりました。すぐに部屋を出ます」

咲夜は本を閉じ、机の上に置くと、部屋を出る。

扉を開けると先ほどラインハルトと一緒にいた老婆がいる。

そしてその老婆の案内により食堂まで連れていかれる咲夜。

中に入ると既にラインハルトが食堂にいる。

既に食堂のテーブルには食事が並べられ、美味しそうな匂いを立てている。

咲夜は席に案内され、丁度ラインハルトの目の前の席に座る。

「やあ、咲夜。ゆつくり出来たかい？」

「ええ。お陰様で」

「それは良かった。咲夜も来たし、早速食事を始めたいところだけど、実はもう一人いてね。もうすぐ来るはずだからそれまで待つて貰えるかな？」

「ええ。構わないわ。今回はこっちが無理言つて押しかけたようなものだしね」

「そう言つてもらえると助かる。咲夜がこの屋敷に訪れた理由についても、後で話合おう」

「ええ」

咲夜とラインハルトが会話をしていると、食堂の扉が開く音がする。

「どうやら、待ち人が来たようだ。」

咲夜は視線を向けると、そこには小奇麗な服を着たフェルトがいた。

フェルトは何も言わず、いつもラインハルトの席の位置を確認して、一番離れた席に着く。

「驚いたわ。まさかフェルトがこんなところにいるなんて」

「うわ!? 盗品蔵にいた姉ちゃん!? いたのかよ!」

咲夜がフェルトの存在に驚き声を上げると、フェルトは自分の名前を呼ばれたことに反応し、そこでようやく咲夜の存在に気付く。

先ほどはラインハルトに意識を集中し過ぎてこちらに気付かなかったらしい。

「なんで貴方がここに居るのかしら？」

「そりゃ、こつちのセリフだ！ ハーフエルフの姉ちゃんの所に兄ちゃんと一緒に行ったって聞いたぞ！」

咲夜とフェルトは共にお互いの存在に驚き、顔を見合わせる。

「ふふ、驚いたようだね。二人とも僕にとっても共通の友人だからね。再会できたら喜ぶと思つて黙つていたんだ」

咲夜とフェルトがラインハルトを見ると、彼はいたずらが成功したような表情で笑つていた。

どうやら、彼は敢えて黙つていたらしい。

友人……、咲夜とフェルトは再び互いに視線を交じわせる。

二人の関係は友人と言えるのだろうか？

盗品蔵の件で共闘はしたけれども、元々は徽章の盗人とそれを買うとした客の関係。

二人とも微妙な顔をする。

「まあ、ともあれこうして無事に再会できたことは良かったことだよ。話たいことは互いに沢山あるかもしれないけど、今は夕食を楽しもう！ 婆や作る料理は絶品だ。冷めては勿体ないよ」

「はあー、仕方ねえな。確かにお前の言う通り、婆ちゃんの料理を冷ますのは勿体ない」

ラインハルトの言葉に先にフェルトが従い、フォークとナイフを手取る。

「フェルト様」

「わあつてるよ！ マナーだろ、食事のマナー！」

フェルトは拙いながらも、習つたテーブルマナーを実践して食事を始める。

咲夜も色々と聞きたいことはあつたが、今は自分も食事を優先し、完璧なテーブルマナーで食事を開始するのだった。

「美味しい……」

咲夜が食事を口にすると、その料理の美味しさに思わず、感想が零れる。

それを聞いて老婆はラインハルトと視線を交わし、老婆はウインク

をする。

ラインハルトはそれに対し、笑顔を返し、咲夜とフェルトの二人が食事を開始したことを確認すると、自分も食事に口を付け始めたのだった。

第十話：剣聖は伊達ではない

「本当にいいんじゃない？」

「ああ、いいんだ。兄や妻が知れば反対されるのは目に見えている。どうやら自分の傍で二人の男が話しているらしい。

自分の体は動かない。

ああ、これは夢か。

そう理解する。

小さい頃から何度も見ている夢。

夢の中でいつも自分は赤ん坊で、籠の中に入れられている。

「お主らには借りがあからな、やろう」

「助かるよ」

「こつちのことは気にするな。気にかける相手が違うじやろうが」

「……そうだな」

ふと、誰か自分の顔を覗き込む。

暗い部屋のせいか、顔はよく分からないが、その男が金髪の髪と赤い瞳をしているのは分かった。

「……あとのことは任せるよ」

男はそう言い、自分を抱き上げ、正面に立っている男に引き渡す。受け取る手は大きくてこつこつしており、乱雑だった。

「人間なんぞに手を貸すとは、この儂も落ちぶれたもんじやな」

自分を受け取った男から嫌悪と侮蔑の声がする。

赤子を渡した男は最後に「君を愛している。ずっと、ずっとだ」そう言っ立ち去る……。

自分はその声の人物に離れてほしくなくて、しかし何もできず――

「――フェルト様、フェルト様」

自分名を呼ぶ、優しい気な声が遠くから聞こえる。

自分の意識が夢から離れていく感覚がする。

ああ、目覚めるのか……。

「フェルト様、ようやく起きましたね」

体を起こし、目をこする自分に隣から女性の声がかかる。

「婆ちゃん？」

「あら、わたしはそう言われるほど、そんなに年はとっていないわよ」
ようやく頭がはつきりし、目を開けると声をかけた人物を見る。

ああ、そうか。

「なんだ、姉ちゃんか」

「なんだ、とは随分なご挨拶ですね。さあ、起きてください。朝食の準備が出来ていますよ」

「……」

「どうしたのですか？ 固まって」

「いや、その言葉使い。なんか慣れねーな、と思っただけ」

「仕方じゃないですか、今は仮にも仕える身ですから」

「はあ」

「ため息を付くと幸せが逃げるわよ」

「そんな言葉、聞いたことねーよ」

「なら、ますます勉強が必要ですね」

フェルトは自分の前でニツコリと笑顔を見せている銀髪の女性に目を向ける。

絶対に自分が苦しむ姿が見たいだけだろう。

目が笑っているのだから。

フェルトが連れ去られてからは、規則正しい生活を送らされている。

朝は早く目覚め、綺麗な服に身支度をさせられた後、朝食をとる。

その後昼まで勉強だ。

昼食を取ったら、軽い運動をしてその後また勉強。

ほとんど一日が勉強の毎日。

そんなうんざりした一日にフェルトは何度も逃げ出そうとするが、大抵屋敷の誰かに止められる。

そして、昨日からその屋敷の住人が一人増えたのだ。

フェルトは昨日の食堂での出来事について、後悔する。

なぜ自分はあそこで止められなかったのかと……。

美味しい夕食の時間を堪能して全員の食事が終わり、その後老婆の入れた紅茶で一息着いたところで、ラインハルトが話を切り出す。

「さて、全員が食べ終わった頃だし、丁度屋敷の全員が揃っていることだし、二人を咲夜に紹介するよ」

その言葉とともに、ラインハルトの席の後ろに控えていた老人と老婆は前に少し前に出る。

ラインハルトは老婆の方へと視線を向けると、老婆は頷き返し、咲夜に向き直り挨拶をする。

「わたしはキャロルと申します。そしてこちらがわたしの夫、グリム。夫婦共々、このアストレア家の別邸の管理をさせて頂いております」

グリムと紹介された男性は、咲夜に礼をするだけで何か口に出して語ることはない。

咲夜はその老人の喉元に古い傷跡を見つける。

老婆は咲夜の疑問を読み取ったのか続けて、

「わたしの夫、グリムは昔、亜人戦争の折に喉に戦傷を負いまして、口が利けません。どうか、無作法をお許しくださいませ」

「別に構わないわよ。仕様のないことだし、こちらも気にしないわ」
「そう仰ってくださいると幸いですわ」

咲夜の言葉にキャロルとグリムは笑顔見せる。

夫婦そろって人が好きそうな笑みを見せるのだな、と咲夜は思う。

ラインハルトが二人から呼ぶ際の愛称からも察することが出来るが、二人に対し信頼を寄せているのが分かる。

長年仕えている使用人なのだろう。

二人の使用人は挨拶が済むと、他の仕事があるため、食堂から去る。

「さて、二人の自己紹介は済んだし、早速本題に入ろうか。咲夜は我がアストレア家への訪問の理由を聞かせて頂きたい」

「ロズワール辺境伯からはどのように聞いているのかしら？」

咲夜は流石にロズワールを他の貴族の前では呼捨てせず、爵位で呼ぶ。

スバルと違ってそこは弁えているつもりだ。

「ロズワール様からはただ単に咲夜がお願い事があるらしいから聞いてやってほしい、としか言われてないよ」

「……まさか、それだけを聞いて了承したの、貴方は？」

「友人が困っていたら、手を貸すのは当然さ」

「ありえねー。どんなお人よしだよ」

ラインハルトは咲夜に対して、さも当たりまえのように答える。

正義感が強いと言うべきか、はたまた博愛主義と呼ばれば良いのか、どちらにせよ彼らしい回答だと呆れる。

フェルトも、先ほどキャロルが入れた熱い紅茶とふーふーして冷ましてはちびちびと飲みながらも、咲夜と同様に呆れていた表情をしていた。

特に深く理由も聞かず、たった一日だけ関わった人間を友人と認め、そのための協力を惜しまない、そんな態度は美徳ではあるかもしれないが、どこか危うさを感じる。

まあ、こちらにはその態度はありがたいのだけでも……。

「まあ、いいわ。わたしが貴方をお願いしたいのは、仕事の紹介よ」

「仕事の紹介？」

「そう。暫くの間、王都に滞在したくてね。その為にもお金は入用になるから」

「なるほど。でも咲夜は見たところ、どこかの貴族に仕えているメイドのように見えるけど、それは違うのかい？」

ラインハルトは咲夜の服装から、既にどこかに仕えている身であれば仕事は不要ではないのか、そう言外に聞く。

当然の疑問に、咲夜もどう答えるべきか、少し考え、

「確かにわたしはとある貴族に仕えるメイドよ。ただ、暫くの間お暇をもらって、このルグニカに来ているの」

「このルグニカに？ 旅行かな？」

「まあ、そのようなものね。知りたいことがあってね」

「物好きだなあ、姉ちゃん。わざわざそんなことに金を使うなんて」

理由を尋ねられ、咲夜は少し内容をぼかしながらも正直に答える。

フェルトは貧民街暮らしだったせいか、お金は生きるために使うのであって、娯楽の為に、それも旅行という目的でお金を浪費するという考えが理解できないらしく、彼女らしい意見だ。

「まあ、わたしにとっては大事なことなのよ」

「わたしなら金が有ったら、上手い飯に使うけどな」

「フェルト様、確かにそのようなお金の使い方が一般的でしょう。ですが、お金の使い方は人それぞれ。その辺りも今後勉強していかないとダメですよ?」

「うげっ!? 藪蛇だったかあ。他人の金の使い方なんて知ってどうすんだよ!」

フェルトは自分の言葉によってラインハルトから小言をもらうと、嫌そうに年頃の少女らしくない声を上げる。

彼女はどうかやらラインハルトから色々教育を受けているらしい。

「国民の求めていることや普段の生活についても知ることも大事です。国を治めるなら尚更……」

「国を治める?」

「おっと、すまない。話が逸れたね。咲夜はどんなことを調べようとしているのか、聞いても良いかい?」

「この国の歴史や、文化、魔法など。まあ、この国について色々知りたいのよ」

咲夜は一番知りたい情報のことは教えず、目下、必要な知識を上げる。

黒い本について調べることも大事だが、こちらの世界の知識も知らなければならぬことも確か。

ここは出来るだけ嘘は避け、正直に答えた方が良く、なんとなく咲夜はそう思った。

「なるほど。それは確かに旅行者みたいな理由だね。と言うことは、咲夜は他所の国から来たんだね」

「ええ。そうよ」

「どこの国から来たんだい？北方の『グステコ聖王国』、はたまた西方の『カララギ都市国家』、それとも南方の『ヴァラキア帝国』かい？」
どれも咲夜にとつて聞いたことのない国が上がる。

しかし、咲夜がいた国は当然、どれでもない。

この世界には存在しない国なのだから。

「残念ながらどれでも無いわ」

「うくん、ここルグニカ王国を含めた四大国家出身でもないど、どこかの小国か……。僕が知っている国かな？」

「たぶん知らないと思うわ。名前は日本。ここの国の貨幣をあまり持っていないから、お金を稼ぐ必要があつてね」

「本当に知らない国だね。事情は理解したよ。仕事か……。何か希望はあるかい？」

「メイドとして働いているから炊事など家事の類は得意よ。料理も出来るけど、国の違いもあるから自信持つて得意とは言えないかしらね」

ラインハルトは顎に手をあてて考え始める。

ラインハルトは咲夜が出来そうな能力から判断して仕事を考えてくれているようだ。

そちらの方が咲夜にとつてもありがたい。

フェルトは自分とは関係ない話に興味がないのか、テーブルにぐつたりと上半身を乗せて寄りかかり、のんびりとしていた。

そう言えば、何故彼女はラインハルトの屋敷にいるのだろうか？

それに、ロム爺はどうしたのか？

咲夜がフェルトに質問するよりも先に、ラインハルトが咲夜の仕事について思い付く。

「咲夜。丁度いい仕事があつたよ」

「あら、それは良かった。どんな仕事なの」

「このアストレア家で働いて欲しいんだ」

「え!？」

ラインハルトの言葉に咲夜とフェルトの驚きの声が重なる。

「この屋敷は使用人が少ないからね。この別邸は特に。爺やと婆やの

二人しかいないしね」

「この屋敷にいる人とは既に全員と顔を合わせているし、ありがたい話ね。わたしは構わないわ」

「ありがたい。助かるよ。爺やと婆やは、咲夜なら歓迎してくれるよ」
「姉ちゃんがこの屋敷で働くのかよ……」

「あら、わたしが働くのが嫌なの？」

「この屋敷から抜け出すのに人の目が増えるからな」

「何ともフェルトらしい言葉に咲夜とラインハルトは目を合わせて、思わず苦笑してしまう。

あつさりと仕事先が見つかり、咲夜は安堵する。

懸念事項が片付いたので、先ほどから疑問に思っていたことをラインハルトに聞く。

「そういえば、何故フェルトはこの屋敷にいるの？」

「ああ。咲夜にはこの屋敷で働いてもらう以上、言わないとね」

ラインハルトのまるで屋敷の関係者にしか教えられない秘密を明かすかのような言葉に、咲夜は嫌な予感がする。

思わず安請負いしてしまったが、それは失敗だっただろうか……。

「咲夜はこの国が、現在王様が不在なことは知っているかな？」

「ええ。だから現在、王様候補から選ばうとしている、だったかしらね」

「そこまで知っているなら話が早いね。エミリア様、あるいはロズワール様から聞いたのかな？」

「そうね。徽章の盗難騒ぎで無関係とは言えなかつたしね」

「そうだったね。それで、フェルト様んですけど、エミリア様と同じ王選候補者なんだ」

「へえ……つてええ!?!」

思わず驚いてしまった咲夜はラインハルトに「驚いたようだね」と言われ、「そりゃ、大した事でもないようにあつさりと告げられれば驚くわよ」と返す咲夜。

フェルトは咲夜の言葉にうんうんと頷いて同意する。

「徽章は王選候補者が持つと光るんだ。フェルト様がエミリア様に徽

章を返す時に光を放つのを確認してね」

「そのまま拉致られたあたしは大迷惑だけどな」

「ともあれ、これで五人の候補者が揃った。ようやく王選が開始できるよ」

「五人の候補者？」

「おや、それは知らなかったようだね？」

「ええ。ロズワール邸では大まかな概要だけ知らされただけだもの」

「なら、その辺りの話はフェルト様と一緒に教えていかなきゃね。今日はもう遅い。細かい話は明日にしようか」

「さんせー！」

フェルトはラインハルトの声にもろ手を挙げて賛成する。

彼女にとつても、夕食後に予定されていた勉強の時間が流れるのでお開きにするのは歓迎する。

フェルトの一日はラインハルトによって管理されていた。

そのラインハルトの許しが出たことで、彼女は随分とご機嫌になったようだ。

フェルトが早速、食堂から出ようと扉に手をかけたところで、

「ああ、そうだ。咲夜に言い忘れていたことがあった」

「なに？」

「咲夜にはフェルト様のお付きのメイドとして働いてほしいんだ。君の部屋の上の階がちょうどフェルト様の部屋になっているから」

「なっ!? 姉ちゃんが下の部屋に入ったのかよ!!」

フェルトにも寝耳も水だったようで、扉にかけた手を放し、振り返る。

なるほど。

あのバルコニーの部屋の階段はそういうことだったのか。

ということとは、もしかして……。

「もしかして、最初からわたしを雇うつもりだった？」

「そうできたら、良いなどは考えていたよ。咲夜はフェルト様にとつても友人だからね。年の近い女性が傍にいた方がいいと思ってね」

「あなた、良い性格してるわね……」

「元々、屋敷にいる間だけでもフェルト様の話相手になってくれるように頼むつもりだったけど、咲夜が仕事を探していたようで、こつちとしても助かったよ」

フェルトは部屋から逃げ出す時、下の階に降りるのにいつもその階段を使用していた。

彼女にとつてもそこは脱出口の一つ。

しかし、そこに監視の目が入ると、より脱出が困難になることは目に見えている。

そのことを咲夜はラインハルトから耳打ちされ、意外に食えない男だと思った。

その後、その場は解散となり、わめくフェルトをラインハルトが抱えて食堂を出て行き、咲夜はその日は浴場に入った後、自室で就寝することになったのだった。

フェルトを起こした後、キャロルの作った朝食を済ませ、勉強の間になる。

教師はラインハルト。

生徒はフェルトと咲夜だった。

咲夜はこの世界のことを知るには好都合だと思い、ラインハルトと一緒に勉強に参加できるよう頼んだのだ。

ラインハルトは「フェルト様にとつても一緒に勉強する相手がいた方がいいだろうね」と、快く承諾してくれる。

「教師がラインハルトとは意外ね。てつきり誰かを雇うのかと思ったわ」

「こう見えて、『教育の加護』を持っていてね」

「何でもありなのね、貴方……」

「さて、今日の授業は王選候補者の話をしようか」

「それ、連れ去られたときに、一度説明されてねー?」

「フェルト様、そうかもしれないかもしれませんが、細かい部分については

まだ説明していないところもあります。今回は咲夜もいるので、重複した部分は復習だと思つて勉強してくださいと助かります」

「仕方ねーな」

流石のフェルトも自分に直接関係がある王選の事となると、大人しく話を聞く姿勢を見せる。

二人の生徒に視線を向けられたラインハルトは王選について説明を始める。

王選とは、王族が崩御したため、竜歴石に書かれていた五人の候補者を集め、次代の国王を決めること。

竜歴石とは、王国の命運を左右する事態に呼応して文字を刻む預言板で、かつてルグニカ王族と神龍ボルカニカとの間の盟約の証として賜った秘蹟の一つであること。以来、ルグニカ王国は龍の庇護の二元、大いに繁栄したとのこと。

現在、報告されている候補者は、クルシュ、プリシラ、アナスタシア、エミリアであること。

期限はあと三年と少しで、龍との盟約の確認が行われる儀式——神龍儀の一ヶ月前で、選出は竜殊の輝きによって、神龍ボルカニカの前にて決定することのこと。

ラインハルトから次々と説明される王選について、語られたことを咲夜は忘れないようにメモをしていく。

「ねえ、神龍ボルカニカと盟約を結んだのは今は無き、王族の人達でしよう？　なら、王選で国王を選んでも今後は竜の庇護とやらを一切、受けなくなるってことなのかしら？」

「言い質問だね。咲夜の疑問については賢人会でも度々議題に上がっているよ。ただ、竜との盟約の証、竜歴石にそうしろと刻まれているから大丈夫だ、という意見が強いね」

「人間誰しもいい方向に考えたいものよね」

咲夜の身も蓋もない言葉にラインハルトは苦笑いを返す。

「なあ、さつきから出てきている賢人会ってのどんな奴らなんだ？」

「賢人会は、ルグニカ王国における国政の大部分を担う上級貴族で構成されていて、知識、家柄、王国への貢献度など、生まれから現在に

至るまでの行いと、総合的な能力を評価して選出される役職のことだね。彼らがいることで国王不在な今でも、何とか国政が成っている」「つけ！ 貴族のお偉いさんかよ」

フェルトは貴族に対してあまりいい印象を持っていないようだ。鼻を鳴らす様子にラインハルトも少し困ったような表情をする。

「ねえ、竜の話だけど、一体どんな存在なの？」

「神龍ボルカニカについてかい？」

「ええ。その龍は現在どうしているのかしら？」

「大瀑布の彼方よりルグニカ王国を見守っているとされているね」

「大瀑布？」

「東の果てのことをそう呼んでいるんだよ。大陸の端からいきなり滝になっついてその先がどうなっているかは誰も知らない」

質問をすれば淀みなくラインハルトから答えが返ってくる。

彼は博識なのだろうか？

少なくとも頭が悪いということではなさそうだ。

これなら、前にあの黒い本を見せた時に言われた言葉、『魔女教徒』についても色々と話を聞けるかもしれない。

「ねえ、魔女教徒についてはどんな存在か知っているの？」

「……魔女教徒か。彼らは『嫉妬の魔女』を崇める信者だよ」

「信者？」

「ああ。彼らは嫉妬の魔女を復活させようとしていると言われていて。彼は皆、福音書、見かけはただの黒い本だけどね、それを持っている。騎士団には即時滅殺の掟があるくらいだ。それはどこの国でも一緒だろうね」

「黒い本……。その本には何が書かれているの？」

「そこは分かっているないんだ。何せ、本の所持者しか読み取めないらしい」

咲夜は知りたかった黒い本の正体をやっと掴めたことに、内心喜んでいた。

しかし、それを顔に出さず、冷静に質問を続ける。

「嫉妬の魔女はどんな存在なの？」

「知らないのかい？ 本当に？」

「ええ。知らないわ」

ラインハルトはその質問に驚く。

「どうやら嫉妬の魔女については常識中の常識だったらしい。」

勿論、先ほどの話から察するに悪い意味で有名なのだろうが。

「四百年前、世界の半分を滅ぼしかけた魔女のことをそう呼ばれている」

「半分!? それは凄いわね。どうやって倒したの？」

流石にそこまで大きな影響を与えた人物だとは思っていないく咲夜も驚く。

「当時の初代剣聖レイドと、賢者シャウラ、神龍ボルカニカが封印したんだ」

「ここでもボルカニカが登場するのね。それに剣聖。なるほど、あなたの家系が特殊とはそう言うことだったのね」

「アストレア家は、剣聖の家系とも呼ばれてね。生まれ持っている加護とは異なり、うちの家系の誰かに、剣聖の加護が引き継がれるんだ。だから、必ず剣聖の加護を持つ人物は一人しかいない。まあ、初代剣聖は加護を持っていなかったと記録が残っているけどね」

「貴方が凄い理由が分かった気がするわ」

加護なくして、世界の半分以上を滅ぼす存在と戦える存在、その人物の子孫ならこんなにも強いことに納得せざるを得ない。

「ところで、良いのかしら？」

「何がだい？」

「勿論、フェルトのことよ。部屋からいなくなっているけど？」

「ああ、そうだね」

「ああ、そうだねって貴方……」

ラインハルトはどうやらフェルトが部屋を抜け出していることにとっくに気付いていたようだ。

「実はね、昨晚フェルト様があまりに駄々を、失礼。あまりにもわがままを言うものだからね」

「意味、変わってないわよ」

フェルトを黙って見逃した事情をラインハルトは明かす。

咲夜が下の部屋になったことで、ますます脱出が困難になりかけたフェルトが、文句を言い続けるので、フェルトとある約束をしたらしい。その約束は――

『わたしと、キャロルさんとグリムさんの目を盗んで屋敷を脱出できれば、追わない』ですって!？」

「そうだよ。それでようやくフェルト様から了承を貰えてね。約束だから僕は手を出せない」

「だから黙認したのね。って、わたしは追いかけないとダメじゃない！ 今、グリムさんはどうしているの？」

「爺やは買い出しに行っているね。庭の土いじりは彼の趣味でね。そのため肥料とか買い物に行っているんだ」

呑気なラインハルトの回答に咲夜は焦る。

ラインハルトがいたから、安心して授業に熱中し過ぎた。

咲夜はすぐに部屋を出て行こうとするが、

「婆やが屋敷にいるから大丈夫だよ」

「キャロルさんがいるからって、彼女じゃフェルトを止めるなんて――」

その時、部屋がノックされ「失礼します」との声とともにキャロルが入ってくる。

白目をむいたフェルトを負ぶさって。

「……えっと、フェルトは大丈夫なのかしら？」

慌てて探そうとしたフェルトが何故、キャロルに負ぶさられているのか、という疑問よりも先に、思わずフェルトの身を心配してしまう。

「あら、いけない」

キャロルはフェルトが白目を向いていることに気付くと、フェルトの臉を閉じさせる。

そして、「フェルト様はお疲れの様子なので、部屋で寝かしてきますね」とそう言うとそのままフェルトを負ぶって部屋を出て行く。

「婆やは、僕や爺やよりも容赦がないからね」

ラインハルトの言葉に咲夜は、「就職先間違ったかしら」そう思わず

に
い
ら
れ
な
か
っ
た
。

第十一話：魔法の適性

「フェルトは気絶しちゃったみたいだけど、勉強会はどうする?」

「午前中の講義を逃げ出したフェルトは、キャロルによって気絶させられたのち、無事? 捕縛されたようで、今は自室で寝かされていた。」

「肝心のフェルトがいない状態で、このまま講義を続けるのか、咲夜はラインハルトに聞く。」

咲夜としてはこのまま続けてくれた方がありがたいが……。

「お昼までまだ時間があるし、もう少し続けても構わないけど、咲夜は何か聞きたいでもことあるかい?」

「魔法について知りたいわ」

咲夜は元々魔法が使えない体質だった。

しかし、こちらの世界ではどうやら咲夜は魔法を使用することが出来るようだ。

あの盗品蔵でエルザに襲われるスバルを助けたように。

なら、魔法の知識を得るのも無駄ではない。

もしかしたら、魔法を使うことであの時のように時を止めることが出来るようになるかもしれない。

「魔法か。僕も専門家ではないから、そこまで深く知識を持っていないから基本的なことしか教えられないけどそれでもいいかい?」

「別にそれでも構わないわ。わたしとしてもいきなり専門的な話をされても分からないだろうから。そちらの方がかえって助かるわ」

「それは良かった。魔法とは——」

そこからラインハルトは魔法についての講義を始め、そして咲夜は新しく知った情報をメモしていく。

以下は、その話を聞いて咲夜がメモをしたことである——

魔法には基本となる四つのマナ属性、火・水・風・地の四つのマナ属性があること。

熱量関係の火のマナ。

生命と癒しを司る水のマナ。

生き物の体の外に加護に関わる風のマナ。

体の内の加護に関わる地のマナ。

大凡はその四つに大別され、魔法使えるものは大抵はその内のひとつを適性を持つ。

2つ以上を扱えるものは希少。

また、上記以外にも陽と陰の属性もあるが、該当者はほとんどいない。

咲夜が魔法の属性について、メモしたところでラインハルトが実際に複数の属性を扱える魔法使いを、例に挙げる。

「複数の属性を扱えるものは少ない。ただ、いないわけじゃない。例えば、咲夜も知っているロズワール様もそうだね。彼の場合は中でも特別で、いずれの魔法も万全に扱うことができる『魔導の加護』を持っていて、六つの属性を全て扱える」

ロズワールは宮廷魔術師、それも筆頭だけあって魔法に関しては才能は周りと格が違うらしい。

「見た目と言動はアレだけど、やっぱり凄い人物だったのね」

咲夜のロズワール評について、ラインハルトは苦笑しながらも説明を続ける。

「ロズワール様は王国から特別な称号を示す色の称号、『赤』、『緑』、『黄』を与えられているほどだよ」

「へえ。それぞれ色がそのマナの属性を表しているのね。『赤』が火、『緑』が風、『黄』が地ってところかしら。他の属性については称号を持っていないということはロズワール以外にも称号持ちがいるってこと？」

「『青』の称号持ちは、近衛騎士団所属の騎士がいるけど、実は『白』と『黒』は欠番なんだ」

「ふーん。必ずしも誰かしら称号持ちになってるってわけでもないのね。あなたはどなの？ ラインハルト」

「恥ずかしい話だけど、僕は魔法の方の才能は全くなってね。魔法を使用できないんだ」

以外にも完璧超人と思われたラインハルトにも苦手なものがあったようだ。とは言っても、魔法が扱えずとも十二分に強いのだが。

「魔法と言えば、咲夜は盗品蔵で使用した魔法は一体何だったんだい？」

ふと、ラインハルトが盗品蔵での出来事を思い出し、咲夜が使用した魔法について問われて、咲夜はギクリと、背に冷汗を流す。

……誤魔化すべきか、それともここは正直に話すべきか。

咲夜は判断に迷うが、咲夜としても自身の魔法の正体を掴んでおきたい。

この先何かに役に立つ機会があるかもしれない。

あまり人に知られたくない事だが、ラインハルトもそこは承知してははず。

この男ならいたずらに言いふらすことはしないだろう。

咲夜は正直に話すことにする。

「実はわたしも良く分かっていないのよ。あの時は無我夢中だったし、気が付いたら、って感じだったわ。魔法も初めて使用したし」

咲夜の初めて使用した、という言葉にラインハルトは驚く。

「そうだったのか。きつと、初めての魔法の行使にゲートが驚いて、マナが過剰出力してしまっただろう。マナの大量消費と、エルザを退けて気が抜けたこと、疲労も重なって気を失ってしまったんだろうね」

「そうね。あの時はわたしも意識して魔法を使用したわけじゃないから、どんな魔法を使ったのか分かっていないの」

「あの時の咲夜は、僕にはエルザの元に一瞬で距離を詰めたかのように見えた。素早く移動したのではなく、初めからその場に居たかのように。何か咲夜の方で魔法を使用した時に感じたことは無いかい？そこからどんな魔法か導き出す手掛かりがあるかもしれない」

「そうね……あの時はまるで周りの時が止まったかのように感じたわ」

ラインハルトの観察眼には驚かされる。

やはり、ラインハルトに話して正解だったか。

もしかしたらこのまま、魔法の正体を掴めるかもしれない。

「時が止まる……」

咲夜の言葉に何か思い当たることがあったのか、ラインハルトが考え込む。

咲夜はラインハルトが答えを出すのを静かに待つ。
暫くして、ラインハルトが咲夜に向き直り口を開く。

「咲夜の魔法の適性は『陰』かもしれないね」

「『陰』？ それは何故かしら？」

「『陰』魔法は、相手の視界を塞いだり、音を遮断したりなど、妨害・能力低下系の効能が多いんだ」

「確かに、時を止める、という能力は相手に働きかける能力に括れないわけでもないわね……」

「それに、『陰』魔法には相手の動きを遅くする魔法も存在する。咲夜のように完全に相手の動きを止める効果は無くても、似た系統とも言えなくもない。『陰』魔法は中でも四大属性と比べてその希少性もあることもあって、失伝してしまった魔法が多いから、咲夜の魔法はその失われた魔法なのかもしれないしね」

「どちらにせよ、大凡の当たりが付けられたのは吉報ね。魔法を使うにはどうすればいいのかしら？」

魔法の系統も大切な情報ではあるが、咲夜にとってはむしろ使えるようになることが優先。

以前のように暴走せずに扱えることが出来るようになれば、それは新たな武器になる。

「魔法を扱うにはイメージが大切と言われているね」

「イメージ？」

「そう。魔法を行使にするにあたって、詠唱を行うのが一般的だけど、それはイメージを固めるためなんだ。熟練の魔法使いなら詠唱も無しに魔法を行使することも可能だ。とは言っても、魔法は抽象的なものが多いからピッタリくるようなイメージをすることは難しいだろうね。咲夜の時を止めるような魔法は尚更」

「そう。それは残念ね。練習が必要になるわね……」

「こればかりは、努力や経験が必要だろうね」

咲夜は口ではそう言いながらも、自分ならあの時に使った魔法を詠

唱無しでイメージ出来ると確信していた。

幻想郷では数えきれないほど、時を止めることを繰り返していたのだ。

イメージなら容易い。ポケットに手を入れ懐中時計があることを確かめる。

もし、イメージをするならこの懐中時計の針を止めるイメージすれば恐らく大丈夫だろう。

「ありがとう。とても役に立つ情報が手に入ったわ」

「役に立てたなら嬉しいよ。そろそろお昼時だね。ここらで終わりにしようか」

ラインハルトが言い終わると同時に扉をノックされ、それと同時にキャロルがお昼の準備が出来たと声がかかり、勉強会はお開きとなったのだった。

昼食の時間が終わり、午後になると、咲夜は屋敷の仕事をキャロルから教わりながら、一緒に仕事を行っていく。

フェルトのお付きの仕事だけでなく、屋敷の仕事もしなければならぬからだ。

しかし、世界が異なるとは言っても、人が暮らしていく上でやらなければならぬ作業に大きな違いはなく、紅魔館でメイドとして働いてきた経験もあって、咲夜はすぐに仕事を身につけていった。

筋が良いとキャロルも褒めていたほどだった。

炊事の仕事では、マナで働きかけないと火が起こせなかったり、道具を使うのにマナを使用する必要があるものには、咲夜も難儀させられたが、キャロルが丁寧に指導してくれたため、夕食の下ごしらえが終わる頃には問題なく自分の意思で自由にマナの出力の調整が可能になっていた。

そんなこんなで、夕食の時間になり、食堂に屋敷の住人たちが集まり、食事が開始される。午後の時間の勉強で疲れ果てたのか、フェルトはあまり元気がなさそうだったが、食事が始まると美味しそうに食べ始める。

そんなフェルトの姿を見て咲夜は、ふと紅魔館のスカレット姉妹

を思い出す。

丁度同じぐらいの背をして、赤い瞳が彼女たちを思い起こさせる――

そして夕食も終わり、咲夜は夕食後の食器の片付けを手伝う。

それが終わると、ようやくメイドの仕事が終わりを迎える。

咲夜は部屋に戻り、貰った部屋着に着替える。

そして一時間ほど言葉の勉強を行った後、布団に入る。

夕食のフェルトの姿を見たことで、咲夜は紅魔館にいるレミリアたちを思い出していた。

今頃、お嬢様たちはどうしているのだろうか？

ちやんと屋敷の管理は出来ているだろうか？

自分がいない間、美鈴は代わりを出来ているだろうか？

色々と心配事を思い浮かび、咲夜は中々眠りに入ることが出来なかった。

そんなとき、部屋の外から物音がかすかにする。

「？」

音はどうかやら、バルコニーの方からするようだ。

咲夜はバルコニーの階段の方を眺めていると、そこに小柄な人影が降りてくる。

影の形を見るに、どうかやらフェルトらしい。

おそらく屋敷から脱走を企てているのだろう。

咲夜はそっとベッドを抜け出す。

「よし、部屋の明かりが消えている。姉ちゃんはもう寝たようだな」

「何が良しなのよ」

「うわあああ!!……姉ちゃん、起きてたのかよ」

咲夜はベランダの窓を開ける。

「まあね。ほら、見つかったのだから、今日は大人しく部屋に戻りなさい。明日も朝は勉強会でしょ？」

「うええ」

フェルトは咲夜の言葉に苦手な時間を思い出し、嫌そうな声を出しながら、しかめっ面をする。

咲夜はそれを見てクスリと笑いを漏らし、フェルトは咲夜を恨めしそうに睨む。

「それにしても何でこんな時間まで起きてるんだよ、姉ちゃん。今日は初めてのメイドの仕事で、ぐっすり寝ていると思っていたのに……」

「意外と考えているのね、貴方。でも、そうね。あまり寝付けなかったものだから」

「ふーん、まあ、気持ちは分からねーでもねえけどな。あたしもまだすぐに寝付けねーし。ベッドはふかふかで寝心地はいーんだけど、なんか貧民街にいた頃よりも寝付きがわりーんだよな……。こんなことしてる場合じゃねーのに。早くロム爺を見つけてやらねーと」

咲夜は後半にフェルトの口から小さく零れた弱音の言葉を聞き取り、意外と寂しがり屋なのねと、思った。

そんなフェルトを見て咲夜はあることを思いつく。

「フェルトもあまり寝付けないのよね？」

「え？ あ、……ああ」

「なら一緒に寝ましょう」

「は？」

「我ながらいい考えだわ。そうと決まれば……」

咲夜はフェルトの脇下に腕を通して抱き上げ、窓を閉じ、部屋に戻る。

「ちよっ!?? 何すんだよ！姉ちゃん」

「さあ、フェルト様、一緒に寝ましょうね」

「はああああ!? ちよっ！やめっ!!」

咲夜はフェルトの抗議を無視して、一緒にベッドに入り、フェルトをしつかり抱きしめて眠る。

うん、今度はきちんと寝付けそうだな。

良い抱き枕もあるし。

咲夜の腕の中にいたフェルトも最初は咲夜の腕の拘束から抜け出そうと足掻く。

しかし、ガツチリと捕まれ、抜け出せないことを悟り、素直に眠り

に着く。

そうして咲夜、そして以外にもフェルトもその日はぐっすりと寝ることが出来たのだった。

翌日、中々起きてこない二人を起こしに来たキャロルが、二人の微笑ましい気な様子を見て、起床の時間を少し遅らせるよう配慮したほどだった。

第十二話：咲夜さんの相談教室

その日の朝は、真面目な咲夜にしては珍しく、少し遅めの起床だった。

こちらの世界に来てからまだ二日しか経っていないが、何度も時間逆行があつたせいとか、久方ぶりに睡眠をとれたように感じてしまう。どうやら思つた以上に疲れを感じていたらしい。

フェルトを両腕で抱いて寝ていた咲夜は、フェルトを起こさないようにベッドから抜け出し、すぐに起床する。

その後、身支度をすませ、厨房に向かい、そこで既に朝食の準備を始めていたキャロルと合流する。

「キャロルさん、遅れてしまい申し訳ありません」

「あら、咲夜さん。どうやらぐっすりと眠れたようで良かったわ」

咲夜はすぐに謝罪をするも、キャロルには咲夜が遅刻した事に怒つた様子は見受けられず、彼女は咲夜に対して楽し気に微笑み返す。

予想とは違った態度で返されたのか、咲夜の戸惑う様子を見て、キャロルは笑みをさらに深める。

「そんなに気にしなくても良いのよ。咲夜さんもこちらに来たばかりで疲れも溜まっていたでしょうし」

「ですが……」

「それに、咲夜さんはフェルト様のお傍付きが一番大切な仕事ですもの。本当はわたしも起こしに行つただけで、フェルト様と一緒に仲良く眠っている様子があまりにも微笑ましい光景だったから、あえて起こさなかったの。だからそんなに気にしなくてもいいのよ」

どうやらキャロルには、フェルトと一緒に寝ている姿を見られたようだ。

咲夜は他人に無防備な姿を見られたことに、羞恥し頬を赤らめる。

幻想郷ではいくらでも時間停止が使えたため、休憩時間は思うがままにとれた。

しかし、こちらの世界ではそうはいかない。

体調管理にも気を付けないと……。

咲夜は自分を戒める。

「分かりました。しかし、それでも寝坊したことは良くないことです。今日は、申し訳ありませんでした。以後、同じことが無いよう気を付けます」

「ふふふ、咲夜さんは真面目なのね」

キャロルは笑って許してくれたが、やはり咲夜はメイドとして仕事に誇りを持っている。

改めてキャロルに謝罪を行い、失態を犯した自分に次が無いよう気持ちを引き締める。

そうして、謝罪を済ませた咲夜とキャロルによって、朝食の準備が整われ、残りの住人が食堂に集められ、朝食を取る。

全員の朝食が済むと、咲夜は午前中のフェルトたちの勉強会に参加する。

基本的に咲夜は仕事のスケジュールは朝食後、午前中はフェルトに付き添い、勉強会に参加。

午後はメイドとして屋敷の仕事を行うことになっていた。
ラインハルトと事前にそう決めていたのだ。

そして今日の勉強会のテーマは、『王としての在り方』だった。
宮廷でのマナーや言葉使い、王としての資質、などフェルトに足りないものは多い。

貧民街暮らしだったこともあり、他の候補者よりも一歩どころか、二歩、三歩以上と大きく遅れている。

彼女が学ばなくてはならないことはたくさんあるだろう。

咲夜は、テーブルの上に積み重なっている様々なタイトルの本から一冊を手にとって開いてみる。

「む、……読めないわね」

本の中身は最近学び始めた『イ』文字だけでなく、当然『ロ』文字や『ハ』文字で構成された文章だったため、咲夜にはほとんど読み取れなかった。

咲夜は数ページほど目を通し、読むのを諦め、本を閉じてテーブルの上に戻す。

「あー、なんでこんなしち面倒くせえーこと勉強しなきゃいけないだよー！」

「フェルト様は、いずれ王になられる方。ならば、周りに示しを付けるためにも、それ相応の振る舞いを身に付けなければいけません」

本を読み始めて数分でフェルトは、読む行為が飽きたようだ。

フェルトは手に持っていた本を後ろに投げ捨て、愚痴り始める。

フェルトの後方で本の説明を行っていたラインハルトは、不意に後ろに投げられた本を容易く掴み取りながら、フェルトを諫めようとする。

「折角、読み書きが出来ても、こんなくそ面白くねー本ばつか読んで何になるんだよ。もつと面白いことに読み書きを使おうと思わねーのかよ」

「本は、知識を得るためのものでしょう。フェルト様が読み書きを学ばれたのも……」

「アタシはロム爺に、役に立って叩き込まれただけだ。実際、店の看板や手紙の類が読めるようになったのは収穫だったぜ。報酬を誤魔化されないように数字の計算も学んだ。けど、それは生きるために必要だったからだ」

「――」

「お前が勉強したのは、生きるためなんて切羽詰まった理由じゃねーだろ。だから、なんかお前の考えはなんか気持ちわりーんだよ。ここにある本もお前が欲しがった本とかじゃないだろ。ぜーんぶ他人から与えられたもんだろ？」

フェルトの言葉にすぐに反論の言葉が思いつかないのか、黙り込むラインハルト。

咲夜は、そんな二人の様子を静かに窺う。

二人の生まれ育った環境は大きく違う。

ラインハルトはフェルトに対してどう言葉を返すのかだろうか？

「……今はフェルト様に返す言葉が僕の中にはありませんでした。いずれ、ちゃんとした答えをお返しします」

「あつそ。まあ、いいや。ほら、勉強すんだろ？ 始めるぞ」

少しの間があつて、出されたラインハルトの返事に、フェルトは興味を失い、愚痴を言つて少し気が晴れたのか勉強を始める。

主従関係がこれでは先が思いやられるわね……。

やはり、理想はわたしとお嬢様の関係ね。

「ラインハルト」

「あ、……なんだい。咲夜」

フェルトに言われたことに対して少し考え込んでいたのか、ラインハルトから一拍遅れて返事が来る。

「実は、わたしは文字がほとんど読めないのよ。だからここにある本もきつと読めない。文字の勉強に使える本とかは無いかしら？」

咲夜が文字を読めないことを知り、驚いた顔をするラインハルトとフェルト。

咲夜の良いところで育つたような気品を漂わせていたことから、文字が読めると思われていたようだ。

「何だよ、姉ちゃん文字読めねーのかよ。意外だな」

「ええ。最近、イ文字を勉強し始めたばかりよ」

「分かった。イ文字で書かれた本になるとすると、童話とか子供向けの本になつてしまうけど良いかい？ フェルト様のために用意した本がどこかにあつたはずだ」

「ええ、それで構わないわ。ありがとう」

「おい、アタシのためつてどういうことだ！ アタシはガキか！」

この部屋にはその本は無いのか、ラインハルトは部屋を出ていく。子供扱いされたフェルトが憤っている様子に、咲夜はくすくすと笑う。

フェルトは笑う咲夜を睨むが、それでも笑いを止めない咲夜を見て、ため息を付き、睨むのを止める。

そしてフェルトは真面目な表情に切り替え、咲夜に顔を寄せて、小声で話しかけてくる。

「なあ、姉ちゃん。ちよつと相談が有んだけどよ……」

「相談？ 何かしら？」

フェルトの真剣な顔に、昨夜も笑いを止めてフェルトの話に耳を傾

ける。

「午後にこの屋敷から脱走するの、手伝ってくれ」

「姉ちゃんは金が必要なんだろう？ 脱出出来たらアタシの今まで貯めた金はやる。足りなかつたら、ロム爺からも出させっからさ」

「わたしはラインハルトに雇われているのよ？ それに仮に手伝ったとして、わたしは王選候補者の誘拐者扱い。しかも、剣聖に睨まれることになるなんて、……悪夢ね」

「頼む！ どうしてもこの屋敷から出たいんだ！ だか「興味深い話をしているね」ら、……え？」

ラインハルトは既に部屋に戻ってきていた。

手には本を二冊ほど持っている。

「どうやら目的の本は見つかったようだ。」

しかし、いきなり現れるのは止めて欲しい。心臓に悪い。

「いつの間に!? 戻んのはやくねーか？」

「隣の部屋に本はあったからね。場所も大体検討が付いていたから、すぐに見つけられたよ」

「……まあ、いいや。咲夜、話の続きだけど」

「あのフェルト様？ 僕の前で脱走計画を企てるのはいかがなものかと？」

「いいだろ、別に。約束じゃ、お前は手出しできねーんだから」

「まあ、そうですか」

「認めるのね、貴方……」

「勉強ばかりじゃ、大変だろうからね。フェルト様もたまには気晴らしも必要だろう」

「わがままな妹に甘過ぎるダメな兄を見ているような気分だわ……」

「咲夜も、今日の午後は屋敷の仕事をしなくていいから息抜きしてくると良いよ。そもそも咲夜はこのルグニカ王国の観光に来たのだしね。もし、脱走が成功したらフェルト様と一緒にこの王都を見て回るのもいいんじゃないかな？」

そうして、ラインハルト本人から許可をもらったフェルトは楽しそ

うに脱走計画を咲夜に話し出す。

ラインハルトも興味深げに話を聞いている。

それでいいのか、剣聖……。

「幸いにしてアストレア家に仕えるものは、みな優秀だからね。爺やと婆やをそう簡単に出し抜くことが出来るかな？」

咲夜のもの言いたげな表情を見て、ラインハルトがそう答える。

信頼の置く部下がいれば、上司も安心していられる。

いい関係だ。

それがフェルトとの間にも適用されれば、なお良いのだが。

「決行の時間は昼食後だ」

「随分と明るいうちからね」

「昼食後、何気ないように装って、堂々と正面玄関から屋敷を出る」

「それじゃあ、バレバレじゃないの……」

「午後は、爺ちゃんは買い出しに行っているからな。婆ちゃんにだけ気を付ければいい。その婆ちゃんは昼食後は片付けをしている。それに咲夜がアタシの傍にいと分かれば、注意が薄まるはず」

「意外と考えてるのね」

フェルトが計画を話終えると、部屋の扉がノックされキャロルから昼食の準備が出来たと、声がかかる。

もう昼食の時間か、そう思うも今日はそもそも朝食が遅かったことを思い出す。

「よし！ 飯だ！ あ、ラインハルト、てめーチクんじゃねーぞ」

「ええ。分かっています」

フェルトはラインハルトが了承すると、扉を開けて部屋を出て行ってしまふ。

食事に関しては本当に楽しみにしているようだ。

「本当にいいの？ ラインハルト。もし、脱出に成功したら……」

「その時は、咲夜にフェルト様をお願いするよ。ところで、咲夜。君は文字を勉強していると言ったね。読み書きを勉強したら何に使うのか聞いても良いかい？」

「……」

先ほどのフェルトとの会話をラインハルトは気にしていたらしい。どうやらラインハルトはまだフェルトへの答えが見つかっていないらしい。

「決まっているじゃない。『生きるため』よ」

咲夜から返された答えにラインハルトは目を丸くして驚く。

「本を読むためじゃないのかい？」

「勿論、本を読むためよ。でもそれは手段であって最終的な目的ではないわ。本を読むにも理由があるでしょ？」

「本を読む理由？」

「例えば、この本。これはマナーについて書かれた本かしら？」

咲夜はテーブルの上に置かれた本を一冊手に取り、開く。

人が頭を下げ、お辞儀している絵が描かれている。

分かりやすく絵も交えて説明している本なのだろう。

文字が読めない咲夜でも何の本か、推察できた。

「貴方がマナーについて学んだのは、何のため？」

「それは……必要だったから」

「どうして必要だったのかしら？」

「それは……」

「貴族として『生きる』に必要な知識だから、でしょ？ あるいは剣

聖としても。人が知識を得る時は何かしら目的があるわ。大抵は最

最終的に『生きる』ために繋がっているわ。わたしもこの世界で『生き

る』ため、ひいては知識を得て、やがて故郷で主の元でメイドとして

『生きる』ため。貴方も最初は、与えられたもの」

「なるほど。なら、フェルト様には生きるための知識として必要であ

ることを説明してあげれば良かったんだね。王として生きるために

必要な知識だと」

ラインハルトは、咲夜の話に納得したようだ。しかし、

「フェルトは納得しないでしょうね」

「どうしてだい？」

咲夜自身が話した先ほどの話とは真逆の答えにラインハルトは、理解できず質問する。

「それは勿論、フェルトにとって生きるために必要な知識ではないからよ」

「王として生きるのに必要な知識なのでは？」

「フェルト自身が王としての生きること望んでいないからよ」

「っ！」

ラインハルトは咲夜の言葉に衝撃を受けたような顔をして驚く。

「……なるほど。フェルト様が王として生きる、王選候補者として認められた時、初めて学ぶ必要がある知識になるんだね」

「ええ。そうなるわね」

「…ありがとう。咲夜。疑問が氷解したよ」

ラインハルトは長年悩まされた問題がやっと解けたような、晴れ晴れとした表情で咲夜に礼を言う。

咲夜はフェルトが言った言葉の意味を全て説明したわけではなかった。

フェルトがラインハルトのことを気持ち悪いと言った意味を説明していなかった。

ラインハルトからは自分の意思が、欲望が感じられないのだろう。他人からこうあれと求められるままに生きている彼が、ただひたすら自分が生きるためだけに生きていたフェルトには理解できない。

しかし、わざわざそこまで咲夜がいちいち教える義理はない。彼女はそこまで優しくは無かった。

それにラインハルトは既にやりたいことを見つけている。

彼自身がそれに自覚を持っていないだけだ。

なら、後は、彼自身の問題。

「ほら、早く行くわよ。いつまでも待たせているとフェルトにまた怒られるわよ」

「そうだね。僕たちも食堂に行こうか」

ふと二人が部屋の開いたままになっていた扉に目を向けると、キャロルがそこに立っていてこちらをニコニコしながら見ている。

「さあさあ、ラインハルト様、咲夜さん、フェルト様が食堂で先にお待ちになっていますよ」

咲夜はラインハルトと目を合わせ、苦笑し、キャロルを先頭にして食堂に向かうのであった。

「姉ちゃん、いくぞ」

現在、咲夜とフェルトは計画通り正門の方へ向かうため、屋敷の扉の前にいた。

ここを開けたら、後は真っ直ぐ進めばすぐに正門にたどり着く。

昼食中、特にキャロルやグリムに感づかれた様子は無かった。

フェルトが楽しそうに食事をしているのをニコニコして二人が見ていただけだった。

食事後、グリムが屋敷を出て行くのを見届けた後、行動を開始した。

昼食が終わってからまだそんなに時間が経っていない。

まだキャロルは厨房にいるだろう。

今頃食器を洗っているところだろうか。

フェルトは、扉に手をかけ、開ける。

開かれた扉からは日の光が差し込む。

フェルトは眩しそうに一瞬目を細めるも、すぐに扉から外へ出て行き、咲夜も後に続く。

「やはり、いらっしやいましたね」

「ば、婆ちゃん!？」

扉を開けると、正門前にキャロルが一人立っていた。どうやら先回りされたらしい。

「もしかしてラインハルトの奴が!？」

「いえ、ラインハルト様は違いますよ」

「昼食では特に気付かれた気配も無かったけど、キャロルさんはどうして分かったのかしら?」

「昼食後、フェルト様は午後は勉強の予定でした。なのに昼食が終わっても楽し気にしていましたから。いつもなら、渋い顔をしてラインハルト様を睨め付けていますのに。それでこれは午後には何かあるな、と思ひまして」

「待ち伏せていたってわけね」

なるほど。普段のフェルトの様子と異なったために気付かれたわけだ。

とはいえ、フェルトがこの屋敷に来てからまだ僅かだというのに、そこまでフェルトの事を分析しているとは……。

「それで、バレちゃったけど、どうするの？ フェルト」

「こうなりや、強行突破しかねー」

「つまり、作戦は無いと……」

「二手に分かれて正門まで行くのは？」

「そしたらフェルトだけが捕まって終わりじゃない？」

「何でだよ？」

「だって、キャロルさんにわたしを捕まえる理由は無いでしょ？」

「……じゃあ、どうするんだよ？」

「わたしがキャロルさんを止めているうちにフェルトが門を越えるとか？」

フェルトが門を越えて外に脱出するには、現状一番それが可能性があるだろう。

別に咲夜はそこまでして外に行く理由はない。

今日でなくともいつでも外に出る機会はあるだろう。

「ダメだ。また盗品蔵みてーに、アタシだけしっぽ撒いて逃げろってのかよ。それに誰かを犠牲にしてってのも自分の性分に合わねーしな」

フェルトは咲夜の提案を断る。

咲夜はフェルトにとって最も成功確率が高そうな提案を却下したことに関心する。

「貴方って甘いよね」

「って、そういうしながら人の頭撫でんなよ！ やめろって！ アタシをバカにしてんのかぁ！」

「褒めてんのよ」

咲夜は、フェルトを頭を撫でる。フェルトは文句を言うが、本気で嫌がっている様子は無かった。

「そろそろ作戦は決まりました?」

「ええ、キャロルさん。待たせてしまつてごめんなさいね」

「つちよ、姉ちゃん。まだ作戦は決まつて……つわ!」

咲夜はフェルトを抱き上げる。

フェルトの気概を見せたのだ。

仮初であるが、臣下として役に立つてみせようじゃないか。

「姉ちゃんっ!? 何すんだよ! ……えっ?」

「あらあら……」

フェルトとキャロルから驚きの声上がる。

フェルトは宙に浮き、そのまま上昇していったからだ。

いや、正確にはフェルトを抱いたまま咲夜が宙に浮いているのだ。

咲夜は上昇し続け、キャロルから完全に手の届かない位置まで離れる。

ここまで高く上がれば、たとえキャロルが魔法を使えたとしても大丈夫だろう。

「さ、行くわよ」

「ね、姉ちゃん、空飛べたのかよ?」

「まあね。これで安全に門を抜けられるでしょ?」

咲夜はフェルトを抱えたまま空を飛び、門の上を通過する。

「咲夜さん!」

キャロルから咲夜に呼び抱える声が届き、咲夜とフェルトは振り返る。

すると、キャロルは手を振りながら

「夕食までは戻ってきて下さいね!」

「分かりました!」

「姉ちゃん!? 何で戻るって返事してるんだよ!」

「そりや戻るでしょう」

「何でだよ! アタシは脱出出来ただろ! 婆ちゃんと爺ちゃんに捕まらずに!」

「でも、わたしには捕まっているじゃない」

「な、何で姉ちゃんが出てくるんだよ」

「ラインハルトとの約束の条件は使用人に捕まらなかつたら、でしよ？ わたしも使用人だからね」

「なっ！ 約束した時はまだアタシは姉ちゃんを使用人として認めていなかっただろ！」

「でも、ラインハルトは認めていたんだから、彼の使用人という言葉には勿論わたしも含まれていると思うわよ。ラインハルトが朝、フェルトの脱出計画を黙認していたのだから、わたしが一緒に付いていくことを条件にしていたからよ、きつと」

「う」

「う?」

「うがー!! 騙されたー!」

「さて、王都の案内よろしく頼むわよ」

咲夜は屋敷から大分離れたところで、地上に着地し、笑顔でそう言った。

第十三話：フェルトの思い

無事、アストレア家を脱出した咲夜とフェルトは、王都の街並みを散策していた。

咲夜は折角、王都に来れたのだからと、欲しいものを売っている店の場所をフェルトから聞き、案内をさせ、買い物をしていく。

お金は勿論、ロズワールから貰った資金からだ。

フェルトは小さい頃から王都に住んでいることもあって、咲夜にとって道案内人として最適だった。

咲夜から欲しいものを聞くと、すぐにそれが売っている店に案内してくれた。

裏通りの近道まで知っているの、王都の道について、大分詳しくなることも出来た。

「色々と助かったわ。フェルト」

「姉ちゃんには借りがあるからな。あの屋敷から抜け出すのにも協力してもらったし」

フェルトは咲夜の礼に恥ずかし気に言い、顔を背け、途中、厳つい男のリング売りの店で咲夜に買ってもらったリングをかじる。

そんな素直でない少女の態度に、咲夜は思わず笑ってしまう。

それに対してフェルトは睨みつけるが、咲夜は気にせず笑いを止めない。

やがてフェルトは笑いを止めない咲夜を見て諦めたのか、視線を離し、今度は落ち着きなく辺りに視線をあちこちに移し始める。

王都を散策中、これまでもフェルトは時折、何度か何かを探すようにあちこちを見回している様子があることに咲夜は気づいていた。

それを疑問に思った咲夜がフェルトに問う。

「さつきから何度もそんなにキョロキョロしてどうしたの？ 別に王都が珍しいわけでもないでしょう？」

「いや、ロム爺が見つかんねーかな、と思ってさ」

「ああ、あの体が大きい貴方のお爺さんね」

咲夜は盗品蔵で会った、年齢の割にやたら筋肉質で体の大きな老人

を思い出す。

フェルトは盗品蔵の騒ぎ以降、出会っていないロム爺を心配していた。

フェルトは幼い頃からずっと一緒にいた家族と会えない日が続ぎ、少し心細く感じていた。

「その人に会いたいなら、こんな繁華街の通りより貧民街の方へと行った方がいいんじゃない?」

「そうだけど……良いのかよ?」

「何が?」

「ロム爺を探すのはアタシの都合だろ? 姉ちゃんはこの王都を見て回りたいんじゃないのかよ?」

「そうだけど、もう十分道案内されたからね。盗品蔵で消耗したナイフの代わりも購入できたし。貧民街の方で探したいなら付き合うわよ」

咲夜はそう言って、先ほどの店で、愛用の銀のナイフと似た意匠がされているナイフをポケットから取り出して見せる。

王都を歩いている途中で、ナイフを売っている店を見つけ、そこで買ったものだ。

それだけで王都の散策に来たかいがあった。

「……ありがとう」

フェルトは照れくさそうにして顔を背けて、小さな声で礼を言う。

咲夜はそんな可愛らしいフェルトの態度に微笑み、彼女の頭を撫でる。

「だから、頭を撫でるのは止めろ!」

「お礼よ」

「何で撫でるのが、お礼になるんだよ! おい! 止めろって!」

フェルトはそう叫んで抗議の声を上げるも、咲夜は聞き入れず、声だけが空しく辺りに響き渡るだけで、その後も暫くフェルトは撫で続けられるのであった。

そこは、人通りが少なくさびれた雰囲気の場所、貧民街ではどこでもありふれたそんな場所だ。

そんな場所にも比較的広い通りを三人の男達が駆けていく姿があった。

走る男たちはしきりに後ろを気にしながら走っていた。

「クソ!! 腹いてえ」

「しつかり走れ! 追いつかれんぞ!」

「でっけえ声出すな。位置がバレるぞ」

男たちは以前、スバルに絡んだチンピラ達だった。

大柄な体格をした男がガストン。

スバルにナイフを突きつけたことのある、中肉中背の男がラチン
ス。

キノコのような頭の髪型をした小男が、カンバリ。

三人は、フェルトと同じように貧民街の住人で、日々、路地裏に迷い込んだ人間の金品を襲って奪ったり、盗みを働いて小金を稼いで生きていた。

貧民街の住人では決して珍しくない、うだつの上がない生活を送っていた。

そんな三人は、現在進行形で、誰かから逃げるように走り続けた。

「その狭い路地に入れ!……よし、ここまで来れば撒いただろ。ふう」

「ハアつ、ハアつ……どうするんだよ?これから」

「ゼえつ、……ゼえつ……どうするって言ってもな」

三人は建物と建物の狭い路地に入り込み、体を潜ませ、辺りをラチンスが窺い誰も来なそうなことを確認し、安堵に息を付く。

カンバリとガストンは、散々走り回ったため息を切らし、言葉を紡ぐのにも辛そうだった。

しかし、今後の方針をどうするか、考え出す必要があった。

「何とかしないと、……あ」

「どうした? カンバリ?……ああ!」

「ん？ な!？」

隠れるために入った細い通りに誰かいることに最初に気付いたのはカンバリだった。

彼は自分たちが入り込んだ路地の先の人影に気付き、声を上げる。カンバリの声に反応しラチンスとガストンも道の先に視線を向けると、そこにはなんとも面倒な連中に会ってしまった、というような表情をこちらに向けている咲夜とフェルトがいたのだった。

貧民街に入った咲夜とフェルトは、まず今は瓦礫しかないだろうが、盗品蔵があった場所に向かうことにした。

もしかしたら、数多くの盗品蔵で保管されていた商品のうち、瓦礫の中から何か無事のまま発掘できないかと、ロム爺が発掘作業をしているかもしれないとフェルトが考えたからだ。

咲夜もフェルトの意見に反対する理由もなく、二人で盗品蔵の方向へと向かっていた。

「ここは相変わらずだな……」

貧民街には表の華やかな道とは違い、活気がない。

そこにいる住民は皆、目に力がなく日々生きていくことだけで精一杯な、そんな人間しかない。

フェルトはそんな貧民街の連中が好きでなかった。

日々の食べ物に困る生活をしながら、その日をただ飢えを凌ぐためだけに生きる。

そんなみすぼらしい負け犬のような生活から、脱出することを諦めているような目をした連中が嫌いだった。

そんな胸中で複雑な思いを抱いているフェルトを知らずに、咲夜は探している人物がどんな人物なのか、フェルトに質問する。

「貴方のお爺さんって、盗品蔵の主だったみたいだけど、貧民街では具体的にどのような立ち位置だったの？」

「……ロム爺は、持ち込まれた品物を買って、それをある筋のルートで売りさばっていたんだ。買い取る品物は盗品でも買い取るし、貧

民街の奴らは、大抵盗んだものはロム爺に買い取ってもらって生計を立ててやがった。だから、貧民街の奴らは皆、ロム爺の酒場を盗品蔵って呼んでやがんだ」

「ふーん」

咲夜の疑問にフェルトは答えるも、視線だけはロム爺を探すことは止めなかった。

その後、会話は止まり、暫く咲夜とフェルトは無言で道を歩いていた。

すると、人がほとんどいなく閑散とした静かな道の先の向こう側から誰かが走ってくる人影が見え始める。

咲夜たちとは大分距離が離れていて、それがどんな人物か認識できなかったが、見える人影からして3人いるようだった。

「ん？……あれは」

「知り合い？」

「つげ！ ラチンス達だ。めんどくせー」

「どうするの？」

「ちよつとそこの路地裏に入ってやり過そう。絡まれると面倒だ」

「分かったわ」

咲夜よりもフェルトの方が目が良かったのか、先に相手を判別出来たフェルトによると、どうやらこのまま体面すると面倒な相手らしい。

フェルトの隠れてやり過す判断に咲夜は従い、二人は路地裏の道に入っていく。

隠れた後もそのまま道を走り続ける人影はそのまま、フェルト達が隠れた路地裏の入口の場所の横を通り過ぎていくかと思われたが、彼らはなんと、フェルト達が隠れた道に入ってきた。

「そこの狭い路地に入れ！……よし、ここまで来れば撒いただろ。ふう」

「ハアっ、ハアっ……どうするんだよ？これから」

「ゼえっ、……ゼえっ……どうするって言ってもな」

咲夜は自分達のいる路地裏の道に入ってきた三人組に見覚えがあった。

以前の王都でのスバルのループに巻き込まれていた時に、散々スバルに絡んでいたチンピラ達だった。

「何とかしないと、……あ」

「どうした？ カンバリ？……ああ!？」

「ん？ な!？」

「どうやら、チンピラ達もこちらの存在に気付いたようだ。」

「あちらの様子からして、咲夜たちがいる道を意図して入ってきたようではないようだ。」

「……何だ、フェルトか。一瞬追手かと思ってビビったじゃねえか」

「隣にいる女も見覚えあるぜ」

「ああ、あの剣聖に会った時に一緒にいた女か」

「同じ貧民街の住人であるフェルトとは知り合いだった。」

「さらには、チンピラたちは咲夜の事も覚えていたらしい。」

「僅か数日前の出来事なのだから、当然と言えば、当然だが。」

「何だ？ 咲夜も知り合いか？」

「知り合いつて言う間柄じゃないけど、まあ、ちよつとね……」

「チンピラ達は、入ってきた道に誰かいた事にひどく驚いたようだが、そこにいた人物が咲夜達だということに気付くと、態度を落ち着かせる。」

「そして、何やら三人は一瞬視線を交わすと、こちらに顔を向け、嫌らしい笑みを浮かべる。」

「まあ、何でフェルトと一緒にいるのか分かんねえけど、丁度いい。てめえら金出しな。有り金全部だ!」

「はあ!? 何でアタシがてめえら何かに金を恵んでやんなきゃいけねーんだよ」

「フェルトならそう言うと思ってたけどよ。なら、実力行使だ!」

「なあ、なあ、ラチンス……」

「ああ!? なんだよ。カンバリ」

「あのメイドって以前ナイフを投げてきた奴だよな。実力行使で勝て

るかな?」

「なあにビビッてるんだよ。こっちは三人だ! 一斉に襲いかかれば問題ねえよ!」

ラチンス達は、各々武器を取り出し、身構え始める。

フェルトと咲夜もそれを見て身構える。

「姉ちゃん、どうする? 戦うか?」

フェルトは人数的な不利から少し心配気な表情で咲夜にどうするか聞いてくるが、咲夜は寧ろこの状況を好都合とさえ思っていた。

盗品蔵でやったように、あの時止めの魔法を試してみようと思ったのだった。

ぶつつけ本番ではあるが、以前のようにすぐに倒れることはないだろう。

一応保険もある。そ

う咲夜が思った時、ラチンス達の後ろに人影があることを確認する。

咲夜はその人影を認識すると肩から力を抜き、構えを解く。

「どうやら、わたしたちの出番はないようね」

「どういうことだよ? 姉ちゃん」

「わたしたちの勝ちつてことよ」

咲夜はラチンス達の後ろにいたのが知っている人物だったからだ。

「そっちの作戦会議は終わったか?」

「大人しく金出すか、それとも実力行使されてーか、決めな!」

「へへ、メイドの姉ちゃんは、その後も一緒に遊んでや」そこまでだ!」

突如、会話に割って入ってきた声に全員がその方向を向くと、そこには炎のような髪色と瞳をして悠然と佇むラインハルトの姿があった。

「け、剣聖!」

「どうして剣聖の奴がここに!」

「や、やべえ! 逃げるぞ!」

チンピラが剣聖を認識してからの行動は早かった。

我先に逃げようと、剣聖がいる場所とは反対方向、つまり咲夜たち

の方向に走り出す。

しかし、ラインハルトはそれを読んでいたようで、一瞬で咲夜たちを庇うように前に移動し、そして、

「ぎゃー!!!」

男たちの三つの絶叫が貧民街に響き渡るのだった。

咲夜とフェルト、そしてラインハルトはアストレア家の門前にいた。

その後、咲夜たちは出会ったラインハルトと共に、そのままアストレア家に戻ってきていた。

屋敷の門は、主を迎え、既に開けられている。

「結局見つからなかったわね、あなたのお爺さん」

「……まあ、いいさ。そのうちどっかで会えるだろうから。ロム爺のことだし、しぶとくどこかで生きているだろうしな。それよりもラインハルト、何でお前があそこにいたんだよー!」

「僕はフェルト様の騎士ですから。フェルト様の身の安全をお守りするの当然です」

「ちげーよ! アタシが聞きたいのはどうしてあの場にてめえが、いたのかってことだよ。もしかしてアタシたちの後を付けていたのかよ」

「はい。ただ、咲夜は気づいていたみたいでしたけどね」

「!? 姉ちゃん、それってホントかよ?」

「ええ、まあ。最初に空を飛んで屋敷を出た時に、上から赤い髪をした人物が後ろから追いかけてくるのが見えたからね。地面に降りてからは、どこにいるかは完全に分からなかったけど、ラインハルトの事だから、付けていると思っていたわ」

屋敷を咲夜がフェルトを抱えて空から脱出するなんて、流石のラインハルトでも想定外だったのだろう。

咲夜はキャロルと会話するために振り向いた際に、慌てて屋敷を飛び出してくる彼の姿が見えた。

その後もラインハルトは、元々後ろからゆっくりと尾行するつもりだったのだろうが、尾行する相手が建物を飛び越えて飛行しているの
で、見失わないことを優先し、少し離れた距離を維持しながら暫く建
物の屋根を飛び渡って追いかけてきた。

いつも余裕そうな彼が少し慌てた姿が滑稽だった。

ラインハルトがそこまでして追いかけてきたのは、騎士の役目とし
てフェルトの安全を見守ることもそうだが、もしかしたら、自分のこ
とを監視する目的もあったかもしれない。

知り合つて数日の人物に大事な主を任せられるのか、本当に信頼出
来る人物なのか、見定める意味もあったのかも。

咲夜はそうも考えていた。

「所で、ラインハルトがいたことは良いとして、ソレについては本当に
良いの？」

未だに文句を言い続けているフェルトをどう諫めようか、困った顔
をしたラインハルトが抱えているソレを指して、咲夜は言った。

「ああ、フェルト様のご命令だからね。僕はその意思を尊重するだけ
さ」

「貴方はそればかりね……」

相変わらずの主至上主義のラインハルトに思わずため息を吐く咲
夜。

咲夜の指摘したものは、ラインルトの抱える3つの荷物だ。

それは人だった。

ラインハルトの右腕でラインハルトよりも大柄の男、そして左腕で
器用に二人の男、計三人ものの男を一人で抱えている。

先ほど、貧民街で襲ってきたラチンスたち、三人組が気絶した状態
でラインハルトに抱えられていたのだった。

貧民街で咲夜たちを襲おうとして、ラインハルトに返り討ちにあ
い、気絶させられたラチンスたち。

本来であればそのまま衛兵に突き出してもいいところ、フェルトが
彼らを連れて行くと言つたのだ。

理由を聞くと、彼らを味方に引き入れると、答えが返ってきた。

王選の味方に引き入れる。今まで散々否定的であった王選への前向きな考えともとれるフェルトの行動に、咲夜とラインハルトが当然疑問を抱くが、フェルトの口から別にそこまで王選への参加に否定的でも無かったことが語られる。

その言葉が切っ掛けだったのか、堰を切ったようにその後も色々取り留めなくフェルトから思いの丈を語られる。

貧民街に居た頃から、このまま貧民街でずっと燻っているつもりもなく、いつかはのし上がっていつていやるつもりだったこと。

流石に国の王様になるなんて大それたことまでは考え無かったが、貧民街出身の自分が王様になってやるのも痛快だと思っていること。

勿論、王選に勝つのは決して楽ではないことも承知していること。王選に勝ち上れるのか、と不安も抱いていること。

ラインハルトは、フェルトが初めて語ってくれた心情の言葉に対して真剣に耳を傾けていた。

咲夜も静かにフェルトの話を聞く。

そして、やがてフェルトは言いたいことを全て出し尽くした後、少しして冷静になったのか、思わず色々と心情を吐露してしまったことを自覚して、羞恥に顔を赤らめ顔を背ける。

「フェルト様」

「……何だよ？」

「フェルト様のお考えを聞かせて頂いて嬉しいです。今後何かあれば、打ち明けてください。主の不安を解消するのも騎士の役目ですので。勿論、僕でなくて咲夜でも構いません」

「……テメーにはぜってえ話さねえ！ くそ、アタシ最大の失敗だ！」
余程恥ずかしかったのか、うがーと叫びながら、フェルトは開かれたアストレア家の門を通って屋敷に一人で走り去ってしまう。

そんなフェルトの後ろ姿を見ながら、咲夜とラインハルトは微笑むのだった。

「ねえ、ラインハルト。明日午前中、出かけても良いかしら？ お昼には戻るから」

「午前中からかい？ 外に用事があるなら、明日は一日休みにしても

いいけど」

「それだと、キャロルさんに悪いわ。今日も朝、迷惑をかけてしまったもの」

「ああ、フェルト様と一緒に寝ていた話かい？ あれは婆やも楽しんでいたくらいだし、別に気にしなくてもいいと思うけど」

「例えそうでも、わたしが気にするのよ」

「分かった。午前中は咲夜は外出しているよ。婆やと爺やにも僕から伝えておくよ」

「ありがとう」

ラインハルトの明日の外出の許可を貰った後、咲夜は屋敷に戻りキャロルと夕食の準備に取り掛かる。

一応、人数が新たに3人も追加されたため、いつもよりも多くの量を作る必要があったが、キャロルはむしろ人数が増えて沢山作れると、終始、楽し気に料理を行い、咲夜はその補助に徹していた。

一刻にした後、彼女らによって作成された料理が食堂のテーブルの上を彩る。

キャロルと咲夜の共同で作られた食事はどれも皆が美味しいと食べてくれたが、夕食の間、結局ラチンス達は気絶から覚めることは無く、彼らが目覚めるのはさらに二時間後だった。

「…っハ!? ここはどこだ?」

「お? ラチンスが起きた」

「カンバリ?」

「おう、起きたか。ラチンス」

ラチンスはベッドに寝かされていた。

ベッドから上半身を起こすと、両隣にあるベッドにそれぞれラチンスと同様に上半身を起こした状態のカンバリとガストンもいた。

また、それだけでなく、部屋にはベッドから少し離れた位置にフェルト、咲夜そしてラインハルトも居ることに気付く。

「フェルト? 俺はどうしてここに? つか、此処はどこだ?」

「まだ、寝ぼけてるのか？　自分が直前まで何をしようとしていたのか、記憶ねーのかよ」

「……あ」

フェルトの言葉にラチンスは直前の出来事を思い出す。

三人は逃げようとしたが、回り込まれたラインハルトにあつという間に、意識を刈り取られて気絶してしまったのだった。

「此処はどこだよ？」

「ここはアストレア家よ」

ラチンスの質問に答えたのはフェルトの後ろに立っていた咲夜だった。

「な、何で、そんな貴族様の屋敷に俺たちがいるんだよ？　お、俺たちに何かするつもりなのか？」

「そ、そうだ！　俺たち、金なんか何も持つてねーぞ！」

「お前ら、大の男が何をそんなに不安がつてんだ。別に取って食おうとして、わざわざお前らを連れて来たわけじゃねーから、安心しろ」

状況が掴めず、また自分たちを赤子のように倒すことが出来る剣聖もいる状態で、彼らは不安を感じ騒ぎ立てるが、フェルトがそんな三人組に呆れる。

「じゃあ、何のために俺たちをここに？」

「アタシはお前らに提案が有って、連れて来たんだよ」

「提案？」

そして、フェルトはラチンス達に自分の置かれた状況を説明し始める。

王選候補者として王選に参加しなければならないこと。

後ろ盾としてアストレア家が付いていること。

自陣には協力者が少ないこと。

そして、ラチンス達を自分たちの協力して欲しいことまで。

「……なんで、俺たちなんだ？」

「ん？」

「別に俺たちなんか仲間にしても意味ねーだろ。……俺たちよりも強い奴や、権力を持った奴なんていくらでもいるだろ？　何でわざわざ

俺たちなんかを……」

「確かに、お前たちを仲間にしたところで大した力にならないかもな」
「……」

「お前らはさ、貧民街で生きていて、どう感じて生きている？ 現在の生活に満足しているか？ 幸せな生活を送れているって胸を張って言えるか？ 現状に不満は無いか？」

「……そりゃ、不満が無いわけないだろうが」

「残りの二人はどうだ？」

フェルトは質問に答えたラチンス以外の2人にも問いかける。

するとカンバリがおずおずとした表情で答える。

「そうだな。仲間とバカやっているのは楽しいけど、幸せかって言われるとそうじゃない気がする」

「……カンバリ」

「お前は？」

ラチンスに続き、カンバリも答え、全員の視線がガストンに集まる。

全員の視線の圧力に負け、ガストンも口を開く。

「俺もだ。もつとうまい飯を毎日たらふく食いてえし、金持ちになりてえ。それに美人な彼女も作りてえ！」

「おお。俺もだ！」

「俺も！俺も！」

「……いや、そこまで聞いてねえけどな。つーか願望ただ漏れじゃねえか」

フェルトは、ガストンたちの欲望の声の勢いに若干引く。

そして、ゴホンと咳をして、「まあ、アタシも似たようなもんで、あんま偉そうなこと言えないんだけどさ」と前置きし、

「アタシはさ、いつか絶対こんな生活から抜け出してやるって思ってた。いつかこんなクソみてえな世界から抜け出して上手いもん沢山食べて、偉くなつて、今まで上でふんぞり返っているお偉いさんにももの見せてやるって思ってた」

「――」
「勿論、それは簡単なことじゃなくて、きつとアタシが考えている以上

に難しいことだつても分かる。でも、それ以上にこの世界を、こんなクソな世界をぶっ壊して、上も下も関係ないそんな世界を作つていきたい。そんな風に考えている。お前らなら、同じ貧民街にいた奴らなら、この思いが分かると思つたからさ。……もう一度聞くけど、お前らは自分の生活に納得いつてんのかよ？　もし、不満に思う気持ちがあつて、変えたいと思うなら、アタシと一緒に変えないか？」

三人は、再びされた同じ質問に今度は押し黙る。

そして暫くの間、部屋は沈黙に包まれるが、

「……………少し、考えさせてくれ」

ラチンスの口からは了承の言葉ではなく、時間が欲しいと言われる。

ガストンとカンバリも同意見のようだった。

「まあ、いきなり言われてもすぐには答えられないだろうからな。返事が決まったら教えてくれ。今日の所は、もう遅いからこの部屋で寝ていけ」

まるでこの屋敷の主のような振る舞いをするフェルトだったが、ラインハルトは特にそれを気にすることはなく、ラチンスたち以外は部屋を出て行く。

フェルト達が部屋を出た後も、誰も口を開かない。

そんな空気に嫌気が差したのか、カンバリがラチンスたちに話を切り出す。

「なあ、ラチンスたちはどう思う？」

「どう思うつて、そりやお前……………」

「……………」

そうして、残された三人は、夜が開けるまで悩み続けたのだった。

「フェルト」

「あん？　なんだよ姉ちゃ……うわっ！」

ラチンスたちのいる部屋を出て、屋敷の廊下の前を歩いているフェルトに咲夜は声をかけると同時にフェルトの両脇から腕を通して抱

き上げる。

「な、何すうんだよ！ 離せ！」

「今日は色々あつて疲れたでしょ？ お疲れ様」

「え？ ああ、確かにバタバタした一日だったけど、部屋に戻るくらい自分で出来るから」

「まあ、そういわずに大人しく、労われなさい」

「……まあ、そう言うならつて、こっちはアタシの部屋の方向じゃないぞ！ もう一つ上の階だ！ おい、聞いてんのか、姉ちゃん！」

フェルトはもがいて咲夜の腕から抜け出そうとするが逃げられない。

フェルトも段々と嫌な予感がして、冷たい汗をかいてくる。

この先の部屋つて……。フェルトが、咲夜の向かう先に気付き、

「ラインハルト、助けてくれー！ ほら、主の危機だから！ ラインハルトー！」

助けを待つ必死の叫びに答える騎士は現れず、フェルトはそのまま咲夜の部屋に連れ込まれ、一夜を過ごすのだった。

そして、廊下の曲がり角からそれを静かに見つめる人影があった。

「元気が有つていいわね、フェルトちゃんは。……今度、わたしも一緒に寝るようお願いしてみようかしら」

「もう遅いし、婆やももう寝た方がいいんじゃない？」

「ラインハルト様、いらっしやったのですか。……そうですね、今日はゆっくりと寝かせてもらいますね。今晚はグリムが起きていますので。それにしても咲夜さんが来てくれて良かったですね」

「そうだね。咲夜がいるお陰で、フェルト様がつまらなそうにしていて時間が減ったような気がするよ」

「さて、わたしももう寝ますね。ラインハルト様も夜更かししないようにしてくださいね。お休みなさいませ」

「ありがとう。僕も今日はすぐ寝るとするよ。お休み」

ラインハルトとキャロルもそれぞれの部屋に戻り、就寝に付く。

……ちなみに咲夜は昨日に引き続き、今日もぐつすり眠れたのは言うまでもなかった。

第十四話：探し人

時刻は、まだ日が昇って間もない午前中の時間。

咲夜は以前、盗品蔵があった場所に来ていた。

今は瓦礫の山だけしかなく、盗品蔵に有った酒瓶や家具などは壊れ、散乱している。

「居ないわね……」

咲夜はロム爺を探しに来ていた。

昨日は、フェルトと一緒に探しに来ていたが、途中で邪魔が入り盗品蔵にまで足を運ぶことが出来なかった。

咲夜は寂しそうな顔をしたフェルトが気になり、ラインハルトに午前中に外出願いを出してまで、探しに来ていたのだった。

日々の安眠のお礼というやつだ。

「時間が早すぎたのか、そもそも盗品蔵には全然来ないのか」

咲夜が一人盗品蔵前で考えに耽っていると、咲夜に近づいて来る者たちがいた。

「なあ、姉ちゃん。女が一人でこんなところにフラフラと出歩いてちゃ、危ねえぞ。へへ」

「俺たちが、安全な場所まで案内してやるよ。ひやははは」

見るからに柄の悪い連中が咲夜を取り囲んでいた。

彼らが咲夜に対して言葉通りに好意的に近づいて来たわけではないことは彼らの態度を見れば明白だった。

「あなた達、ロム爺を知らないかしら？ 体が大きなお爺さんの」

「何だ？ ロム爺さんを探しているのか……さあ？ 知らねえなあ。それよりもいい場所に案内してやるよ」

「そう。知らないのね。残念。ならここにはもう用は無いわね」

「なら、俺たちと一緒に……なっ!？」

「……っ!？ 空を、空を飛んだ!？」

「次は王都の表の通りね」

咲夜は空中に浮かび、貧民街の連中からは手が届かない場所まで浮遊する。

そしてこちらを呆然と見上げるだけの彼らを後目に咲夜は王都の賑やかな表の通りの方へと飛んで行く。

王都の表の通りは相変わらずの賑わいだった。

沢山の人が行き交うこの道で人探しするのは、大分困難な話ではあったが、何も情報が無い状況では地道にやるしか無かった。

朝に屋敷に出る時に見送りに来たラインハルトに、「昼食は一人分多めに作ってもらおうようキャロルさんに伝言をお願い」と、格好付けて言ってしまったY手前もあり、何も成果が無い状態で返るのも恥ずかしい。

正午までは後、三時間しかなかった。

その後も咲夜は王都の通りでロム爺を探す。

時折、通りの人に話しかけ、ロム爺の風貌に似た人物を見てないか聞くが、有益な情報は無い。

似た人物の情報が見つかったと思えば、全く似つかない人物だったり、話かけた咲夜を見てナンパをしてくる男性もいた。

この辺りは、表も裏の人間の男は変わらないらしい。

最も、咲夜が冷たい目をして断れば、諦める素直さはあったが。

こうして咲夜はロム爺が見つからないまま、時間がどんどん過ぎていく。

「もうすぐ正午……不味いわね」

咲夜は時間が徒に過ぎていくことに焦りを感じていた。

一番当てにしていた盗品蔵だが、フェルトがいなくなってから何日も経っている。

いつまでも盗品蔵に居ないのは当然かもしれない。

相手もきつとフェルトを探しているだろうから。

咲夜は、王都の道に立ち並ぶ屋台をなんとなく眺めながら歩いていると、「よう嬢ちゃん」と咲夜に声をかける者がいた。

咲夜はまたナンパかと思ひ、振り返ると、昨日もあつたリング売りの蔵つい男だった。

咲夜は、気が付けばリング売りの屋台の前まで歩いてきていたのだった。

「昨日ぶりだな、嬢ちゃん。今日はフェルトの奴と一緒に居ないみたいだな。どうだ、今日もリングを買っていかないか？」

「あいにく、今日は買いたい物目的じゃないのよ」

「なんだ、そうなのか。そりゃ残念だ」

ふと咲夜はその会話で、何度もスバルの時間逆行のループに巻き込まれている時に、盗品蔵でロム爺で二人した会話を思い出す。

その時にリング売りの話をした。

もし、ロム爺が知っていたのがこのリング売りなら……。

「ねえ、あなたロム爺、フェルトの保護者みたいな存在の大柄な老人だけど、どこにいるか知らないかしら？」

「……まあ、フェルトの知り合いなら言ってもいいだろう。あいつなら数日前に見かけたきりだな。その時にお昼頃になると盗品蔵に行っているって言ってたな」

「盗品蔵？ お昼に？」

「ああ。何でもフェルトを探しているとかで。そういや、まだフェルトと会えてねえのか？ あいつ」

「そうみたいね。助かったわ。貴重な情報ありがとう。リング8個買いわ。銅貨16枚ね」

「おう！ 毎度あり！ へいお釣りの銅貨1枚」

「？ ここはリング1個、銅貨2枚じゃなかったかしら？」

「嬢ちゃんは美人だからな。それにあの爺さんは知らない仲でもないしな。1枚おまけしてやるよ」

「……」

「ん？ どうした、嬢ちゃん？」

「……いえ、何でもないわ。ありがとう。……ふふ」

「？」

咲夜はお釣りとリングを受け取ると、頭を傾げている屋台の男の前から礼を言っ立ち去る。

盗品蔵でのロム爺との会話の中にリング売りで銅貨15枚でいくつ買えるか、そんな話をしたことも思い出して、咲夜はつい可笑しくなってしまう、笑いが零れてしまったのだった。

時刻は丁度お昼頃。

咲夜は、もう一度盗品蔵を訪れると、果たしてロム爺はそこにいた。瓦礫に腰掛け、大きな体をした彼の後ろ姿を確認した咲夜は安堵のため息を漏らす。

「久しぶりね。お爺さん」

咲夜に声をかけられ、ロム爺は振り返る。

振り返った彼は、何者かと訝し気に咲夜を見るが、顔を見ると正体が分かったのか、驚いた顔に変わる。

「何じゃ？ ……嬢ちゃんか。久しぶりと言われると程、そんなに日が経っていないじゃろう。小僧とは仲良くやつとるか？」

「……そのネタはもう良いでしょう？ 別に彼とは付き合っていないわ。あれはあの場での嘘だったのだから」

「そうなんか。以外とお似合いな気がしたのじゃが……」

「そんな話をしに来たんじゃないの。それよりもフェルトのことよ」

「!? お前さん、フェルトがどこにいるか知っておるのか!? どこじゃ、フェルトは!?!」

フェルトの話題になり、ロム爺はフェルトのことを余程心配していたのか、取り乱してフェルトがどこにいるのか聞いてくる。

「落ち着きなさい。今、フェルトはアストレア家にいるわ」

「アストレア家……よりもよつてあの家か」

咲夜からフェルトの居場所を聞いたことで、取り乱したロム爺は落ち着く。

そしてフェルトがいる場所が分かると、過去にアストレア家と何かあったのだろうか、苦々しい表情をする。

「取り合えず、貴方が見つかって良かったわ。わたしは貴方をアストレア家に連れて行くために来たのよ」

「アストレア家に?」

「ええ。フェルが貴方のことをずっと心配していたわよ。早く会ってあげなさい」

「……何故、フェルトがアストレア家に連れて行かれたか、聞いても良いか?」

「屋敷で聞きなさい。もうお昼になっちゃってるから。フェルトがそろそろお腹が空いたと、癪癪起こしてるかもしれないわ」

「仕方あるまい。分かった。連れてけ」

咲夜にロム爺は、付いて貧民街を抜けていく。

途中、貧民街で先ほど咲夜に絡んできた連中も見かけたが、傍にロム爺がいると、悔しそうに歯噛みしながらも引いていく。

盗品蔵が無くなっても、貧民街には未だにロム爺の影響力はそれなりにあるようだ。

「ねえ。貴方はいつもお昼になると盗品蔵に行っていたと聞いたけど、どうして？」

「誰に聞いた？」

「リンガ売りの嚴ついオジサマよ」

「あいつか……確かにあいつには言ったかもしれん。理由は単に、昼になれば腹を空かしたフェルトが来るかもしれない、って思っただけよ」

「……そ、そう」

理由は至って、家族愛溢れる感動的なものだった。

いつまでも帰らない、幼い孫が返ってくるかもしれないと、待つ老人。

第三者がこの話を聞けば、感動的な話だと思いかもしれない。

しかし、実際は待っている老人が、筋肉粒々の大柄の嚴ついジジイ。感動しようにあまり感動出来ない、咲夜だった。

咲夜とロム爺がアストレア家に着くと、ラインハルトが出迎える。

「お疲れ様。用事は無事に済んだようで、良かった」

ラインハルトは咲夜の隣にいる人物を見て、咲夜の午前中の頑張りが徒労に終わらなかった事を喜ぶ。

「まあ、少しお昼には遅れてしまったけどね。もうお昼は始まっているかしら？」

「皆、咲夜の帰りを待っていたから、大丈夫だよ。フェルト様は「姉

「ちゃんはまだかー!」って、焦れているようだけどね」

「……これ以上、機嫌を損ねないうちにさっさと行きましよう」

咲夜たちが門をくぐり、屋敷の中を通ると、庭であるものを目にする。

荷車を押すグリムの姿。そしてその荷車には、三人の若者が仲良く重なられて乗せられていた。

「あれは、何をしているのかしら?」

「ああ。あれはラチンスたちが朝、逃げ出そうとしてね。爺やに見つかってずつと気絶させられていたんだよ」

「わたしが朝出かけた時には見かけなかったけど……」

「表の庭にずつと転がしてるのも見栄えが悪いからって、庭の木々の所に転がしていたって言ってたよ。もうお昼の時間だから、流石にそのままにしなかつたようだけどね」

「ふむ。貧民街で見かけたことのある顔じゃな」

「どうやら咲夜が朝氣付かなかったのは、グリムによって庭の木陰に彼らを隠していたらしい。」

しかし、咲夜は他にも疑問があった。

「別に逃げたきや、逃がしても良かったんじゃないの?」

「確かに逃げるだけなら構わないんだけど、彼らは屋敷の調度品などを持ち逃げしようとしたんだよ」

「納得いったわ」

「そうして、咲夜たちは食堂に向かう。既に食事の並ぶ食堂のテーブルには、フェルトが着席していた。」

「姉ちゃん、おせえぞ!」

「ごめんなさい。少し用事が長引いてしまつてね」

「用事って何だよ?」

「それは、ほら! 入ってきて良いわよ」

咲夜の合図に、ロム爺は扉を開けて食堂に入ってくる。

「フェルト。元気にしてたか?」

「ロム爺!?! な、何でロム爺がここに!?!」

突然のロム爺の登場に、フェルトの目を丸くして驚く。

彼女の疑問に、ラインハルトが答える。

「それは咲夜が連れて来てくれたんだよ」

「姉ちゃんが？」

「ええ。この屋敷で随分と寂しそうにしていたからね。保護者も一緒に居た方が安心するでしょ？」

「べ、別にそんなに心配してねえよ！ ロム爺のことだから、どっかでしぶとく生きているに違いないって思ってたしよ」

「フェルト、わたしは心配していたとは言っていないわよ」

「——っ!!」

「なんじゃ、フェルト。そんなに儂のこと心配してくれておったのか？」

フェルトは口で否定するも、自らボロを出すフェルト。

事実、顔を真っ赤にしながらも、口角はわずかに上がっていていた。嬉しさを隠せていないのは誰の目から見ても明らかだった。

隣に座ったロム爺にフェルトは久しぶりに会えて安心したのか、明るい表情で話始める。

ロム爺もようやくフェルトに会えたフェルトと楽しそうに話している。

二人の会話は、グリムが運んできた白目をむいたラチンスたちを席に座らせ、キャロルも含め、全員が食堂に集まり、食事が始まったも会話は続けられた。

「それにしても、その三人の昨日の態度からして逃げ出さないと思っただけどね」

「どうせ、一晩経ったら考えが変わって逃げ出そうとしたんだろ。んで、逃げる途中で爺ちゃんに見つかってこうなったと」

「なるほど。らしい結論といえばらしいが……想像がついておったのか？」

「こうなるんじゃないかなってのは昨日から思ってたし、婆ちゃんたちにも言っただけもんな」

「ええ、フェルト様から言われておりましたから。お爺さんも頼られたのが嬉しいのか張り切っちゃって」

キャロルの答えに、グリムは肩をすくめる。

口の利けない彼は、紙に言葉を書く、かこうして態度で示すことがほとんどだ。

「それにしても、面白いものですね。ほんの数日前まで一生懸命に逃げ出そうとしていたフェルト様が、今度は別の人たちを逃がさないように釘をお刺しになるんですから」

「あ、婆ちゃんそれ言う?」

「フェルトが一生懸命、逃げ出そうとしていたとな?」

痛いところを突かれた顔のフェルトに、ロム爺が興味深そうな顔をする。

「フェルト様とは、屋敷をお連れして以来、一つ約束をしておいて。僕を除いた爺やたち、この屋敷の住人の目を盗んで屋敷を抜け出すことができれば、フェルト様を追わないと」

「なるほどな。売られた喧嘩をむきになって買ったところが目に浮かぶわい。大方、毎日毎日やり込まれておったんじゃろう?」

「見てきたみてーに言うなよ……あー、だからロム爺には聞かせたくなかったのに」

「その気絶している三人組もそうじゃが、わしはメイドのお嬢ちゃんがいる事の方が驚きじゃがの? お主、元からこの屋敷のメイドじゃったのか?」

「いいえ、違うわよ。わたしの主は別にいるわ。……色々と事情があつて、今は一時的に、このメイドとして働いているけどね」

咲夜がアストレア家にいるのは、あくまでも幻想郷に帰るため。

ここ王都で情報収集するためには、仮の宿が必要。幻想郷のお金が使えない以上、資金も必要。

咲夜にとつてここにいるのは都合が良いからに過ぎない。

「咲夜には、王選でのフェルト様の支えになつて欲しいからね」
「ずっと一緒に居られる保証はないんだけどね……」

「それでも、それまでは一緒にいてあげて欲しいと思つているんだよ」
「王選……」

「ああ、そういや、ロム爺にはまだアタシがこの屋敷に誘拐された理由

を話して無かったな」

そもそもフェルトが貧民街でラインハルトに捕まり、彼の屋敷に軟禁されたのが事の始まり。

以来、逃げようとするが、その計画はことごとく失敗。

そうして逃げ出せずに時間が過ぎ、今日に至っている。

「王選……王位争奪戦か。つたく、とんでもねー話に巻き込んでくれやがって」

フェルトの恨みがましい呟きに、ラインハルトは涼しい顔を崩さない。

「それで、フェルトが何故、この屋敷に連れて行かれたのか、説明してくれんかの？」

「それは僕の口から説明するべきだろうね」

ロム爺の疑問にラインハルトは、そう切り出して説明する。

王選——それはこの親竜王国ルグニカにおける一大事変、その俗称のようなものだ。

半年前に、起きた伝染病により、ルグニカ王国の王族が次々と病死し、現在の王座は空位。

フェルトは次の王位の候補者として祭り上げられた。

自治は過去に誘拐されたい王族の生き残りではないかと疑われて。

フェルトは、具体的に何ができるか、まだ何も分かっていなかった。

それでも、このままではいけない、という確かな熱が彼女の胸の中にあつた。

第十五話：王の資質

昼を過ぎると、庭の芝生の上に転がっている三人のところにフェルトは足を運んだ。

咲夜とロム爺もフェルトに付き添って、一緒に行く。

昼食後、またもや食事を逃した三人は、懲りずに昼にまた逃げ出そうとしたのだ。

そして、こうして再びグリムに倒される結果になったのだが。

気絶していないのは、単にグリムの手加減だろう。

朝にやり過ぎたと、彼も反省したようだった。

「お前ら、やられたばっかだつてのに懲りねーのな」

フェルトは息を切らして大の字の三人に、しゃがみ込んでニヤニヤとしながら声をかける。

その声を聞いて、ラチンスは億劫そうに首を動かして反応する。

「う、うるせーつてんだよ。バカにしやがつて」

「バカにしてなんかいねーつて。むしろちよつと感心した。アタシの時は体が一つしかなかったから、三人でバラけて注意を引くなんて出来なかったもんな」

もつとも、結果は、各個撃破されて終わったが。

「あの爺さん、何者だ？ 掴んだと思つたのに、目の前から消えたぞ」

「オイラにや、ガストンが一人で飛び跳ねて転んだように見えたぞ」

「そんな馬鹿丸出しな真似するわけねーだろ……」

力なく言葉を交わす、ガストンとカンバリー。

「つか、何だよ。お前、俺たちに文句でも言いに来たんじゃねーのかよ？」

「文句？ 何で？」

「……オレら、逃げようとしたんだぞ？」

普段と変わらないフェルトの態度に、不気味そうな顔をするラチンスとガストン。

そんな二人のフェルトは、肩をすくめる。

「お前らが逃げ出そうとするのは、予想通りっっちゃ予想通りだからな。

アタシは学の無い小娘だけど、昨日の話し合いだけでお前らの心がつちり掴めたなんて考えるほどお花畑なつもりもねーし」

昨日の話し合いでは、一旦の納得を示していた三人組。しかし、
「頭が冷えたら、考え方も変わるだろーよ。アタシも貧民街の人間だぜ。あそこで暮らしている奴らの根性は分かかってるって」

「あれ？ ひよつとしてオイラたち、褒められてくない？」

「ひよつとしてなくても褒められてねーよ。ふざけやがって」

不貞腐れる三人に、フェルトはやれやれと首を横に振る。

「どうせ、逃げだろうとしたのも脊髄反射で考えなしだろ？ そもそもお前ら昨日の様子じゃ誰かに追われてるみたいだったじゃねーか」
「ぐ……」

「ど、どうすんだ？」

「どうにかなるとオイラは思ってた」

どうやら彼らにも当てがないようだった。

向こう見ずな態度は実に貧民街の住人らしい。

そのままではいけないと、フェルトですら危機感を抱くほど。

「別に何もかも、アタシの言う通りにする必要なんてねーよ。つていか、そこまで口出しできるほどできるつもりねーし。今は単純に、逃げるための隠れ蓑ぐらいに思ってるって。逃げるだけなら、もうちよい後でも出来る」

「逃げ出さねえように、ボロクソにして転がすくせに言ってくれやがる……」

「そりゃ、お前らが屋敷の物を勝手に持ち出そうとすつからだろ。盗品蔵も無くなったのに、足が付きそうなもんばつかどうすんだよ」

流石のフェルトも三人の考え無しな行動に呆れる。

「ばれてる！ 全部ばれてるぜ、おい！」

「ちよつとお前は黙ってる、カンバリー！」

キノコのような髪型をしたカンバリーが叫び、ラチンスが苛立った顔をする。

「お前の言い分も分かるが、オレらにいくらなんでも都合が良すぎだろ。それで信用しろって言われても、信用なんてできねえよ」

「あれ？ でもオイラ、昨日は信じてもいいかもって聞いたような……」

「いいから、オレと一緒に黙ってる、カンバリー」

静かに様子を見ていた咲夜とロム爺。

しかし、カンバリーたちのやり取りが面白かったのか、咲夜は思わず笑いが零れる。

咲夜に笑われ、恥ずかし気に顔を赤くするラチンスとガストン。

「アタシが何を企んでいるのかは、昨日話した通りだ。嫌いな奴らに吠え面かかせてやるーぜって誘いも変わらねー。それでもお前らが不安だつてのは、アレか。何が出来るか分かんねーからか」

「——っ！」

ラチンスとガストンの顔色が変わり、カンバリーは不思議そうな顔をする。

カンバリーはともかく、二人の躊躇いと不安の原因はわかった。

彼らには自信がないのだ。

考えてみれば当然だった。

誘われた経緯も適当ならば、絶対にお前だと確信をもって誘われたわけでもない。

まして貧民街に燻っていた身。

彼らは誇れるものが何もないことぐらい、誰よりも自覚していたのだった。

「安心しろよ。何が出来るか分かんないなんて、アタシも一緒だからな」

「——あ？」

「いきなりビシバシ働けなんて言わねーって。そんなことが出来るのは、今までちゃんと屋根のある場所で、毎日上手いものを食って、お勉強させてもらってた連中だけだ。その点、アタシもお前らとたいして変わらねーよ」

「じゃ、じゃあどうしようってだよ」

「それをこれから考えようぜって話。勉強は必要だろうし、大変なことばかりかもしれねーけど……少なくとも何も無いじゃなくなるか

もしれないぜ？」

フェルトは八重歯を見せるように笑い、呆然とする三人に頷く。

咲夜は、フェルトの昨日の打ち明けてくれた言葉を思い出す。

自身がなく、不安なのはフェルトも同じなのだろう。

彼女はだからこそ、仲間が欲しいんだと。

「……オイラ、付き合ってもいいな」

以外にも、最初にそう口に出したのはカンバリーだった。

彼はフェルトの前で拳を握りしめる。

「難しいことは分かんねえけど、どっちが分かりやすいかは分かった。こつから逃げたって暮らしは変わらないし、それなら……」

カンバリーが振り返り、まごついている二人の仲間に声をかける。

「やっぱり考え直そうぜ。ラッセルに頭下げて許されても、小間使いで終わるのはかわらないんだし……な？」

「お前に説得されるとか、考えただけでもおつかねえな。なあ、ラチンス？」

「ちっ」

ガストンが頬を掻き、ラチンスが舌打ちする。

しかし、肩の力を抜いた二人の様子からどつちに天秤が傾いたかは明白だった。

咲夜は、自分と同様にフェルトの様子を見守っていたロム爺に小さく声をかけた。

「ねえ？ ラッセルって誰のこと？」

声をかけられたロム爺は、咲夜に小声で答える。

「ラッセル・フェロー。王都の商人組合のまとめ役であり、王都の商業全体の算盤を弾いている中心人物じゃ」

「そんな人物が彼らとどういう繋がり？」

「ま、表向きわな。奴は、貧民街・裏路地の顔役という立場も持っている。物事を損得勘定で判断し、いかに自分が多く利を得るかといった点にしか興味がない男じゃよ。まあ商人らしいっちゃ商人らしいかな。ただ、まあ裏の界限でもそれなりに有名な男じゃ……」

「……随分と危険な相手じゃないの？ 大丈夫？」

「ただの二、三人の小間使いのために、アストレア家を敵に回すほど馬鹿な男じゃない。大丈夫じゃろ」

「ふーん。まあなら良いけどね」

「一般人は、そうそう関わりを持つ相手じゃない。気にせんでもいいじゃろ」

そこで、ロム爺と咲夜は話を切り上げる。

フェルトたちの様子に目を向けると、どうやら先ほどの話で決着は付いていたようだ。

三人組も腹をくくったらしい。

「流石は王選候補者といったところかしらね。資質が全くない、と言ったわけでもないかもね」

「少しの間、会わないうちに随分と、フェルトは成長しておったようじゃな……。三日合わずば刮目して見ろ、とは言ったもんじゃな。本当じゃわい」

ロム爺は先ほどのフェルトの話を聞いてそう感想をつぶやく。

その眩きを咲夜は拾い、

「それって男子に言う言葉じゃないかったかしら？」

咲夜は、ロム爺の言葉にそう突っ込みつつも、フェルトたちのやり取りを見て思うことがあった。

主従揃って、足りないものだらけ。

だからこそ、主従、二人三脚で成長を志す。

何も出来ないからこそ、できるかもしれない何かを求めて、足掻く。

「そんな主従関係もあるものなのね……」

咲夜は、自分とレミリアお嬢様との関係とは異なる新たな主従を結んだ彼らを見てそう思った。

フェルトにはラインハルトもいる。

互いに信頼関係はまだ気づけていないが、これからどうなるのか……。

王選には他にも候補者たちが参加する。

彼らはみな、自分の騎士を従えている。

それぞれが異なる主従関係を結んでいるのだろう。

咲夜は、様々な主従関係があるだろう王選に少し、興味を持ったのだった。

庭での三人組との心温まるやり取りを経て、咲夜はフェルトたちと別れ、部屋に戻って字の勉強をしていた。

そろそろ夕食の準備をしないいけない時間だった。

咲夜は、部屋を出ようと扉を開けようとする、廊下から誰かの話声が聞こえる。

少しだけ扉を開け、様子を窺うと、廊下にはフェルトとロム爺がいた。

ロム爺にフェルトが屋敷の案内をしているのだろう。

ちょうど、咲夜の部屋の扉の近くで話しているようだった。

「これで意外と、お前さんもヤル気になっておるようじゃな」

ロム爺がフェルトに声をかける。

「どーぜ今さら逃げらんねーし、やるならやるで負けたくねーよ。ロム爺はアタシに負け犬根性に従えって育てたか？」

「儂は世間の荒波に揉まれてもへこたれないように育てたつもりじゃが……その点で言えば、フェルトは少しばかり優等生すぎたかもしれないな」

「へへ。優等生なんて、聞いたこともされた覚えもねーよ」

ロム爺の二人に褒められたフェルトは、鼻の下を指でこすり、笑う。しかし、フェルトはそんな表情を変え、真剣な顔をする。

フェルトには確かめなければならぬことが有ったからだ。

「それで、そのさ……アタシは王選に参加する。ラインハルトは気に入らねーけど、姉ちゃんも協力してくれる。あの三人にも話はつけた。やってやるーって大口も叩いた。でも、まだ足りねーんだ」

「ふむ、足りないとはな」

「ホントはさ、アタシのわがままに突き合わせるのはい悪いとは思ってるんだよ。でも、ロム爺がいねーとやっていける自信はないし、一緒

にいないと心配だし、だからさ」

「手、貸してほしいんだ。アタシの、唯一の家族には力になってほしい」

フェルトにとって掛け値なしに信用できる相手は、ロム爺だけだった。

物心ついた頃、貧民街の過酷な環境で育ったフェルトの傍にはいつもロム爺の姿があった。

「ちよつと前までのお前さんなら、わざわざこんなことに口に出したりせんかったぞ。勝手に儂を巻き込んで、それでしれつと舌を出しておったはずじゃ。盗品蔵が吹き飛んだ日のこと、今でも儂は忘れておらんからな」

「う……いや、あんときはアタシも考え無しに上手い話しに飛びつき過ぎたよ……」

「そうじゃな。せめて前もって儂に相談しておったら、あそこまで馬鹿げた話にはならんかったじゃろうに。じゃから……」

反省に肩を落とし、いじけた顔をするフェルトの頭を大きな掌が撫でた。

「傍で見えておらんと、儂の孫娘はまだまだ手がかかる。おちおち、隠居もできんわ」

笑うロム爺の答えにフェルトの表情に光が差す。

「なら、アタシは部屋に戻るからな。これから夕食までの間に本を読んでもおかないと。読めつて言われた本がメチャクチャあんだよなあ。ロム爺はどうする？ アタシの部屋に来るか？」

「いや、勉強の邪魔をするのはいかん。儂も自分の部屋に戻って今日は休むわい」

「そつか。じゃあ、また夕食の時間にな」

フェルトはロム爺にそう言うと、廊下を走り出し、去る。

フェルトが立ち去るのを見届けたロム爺は、大きいため息を吐いた。

咲夜は二人の会話が終わったのを見届けると、ロム爺に声をかけよ

うと扉を開けようとしたが、それを止めた。

ロム爺の背後から声をかける者がいたからだ。

「——随分と、フェルト様に慕われておいでのようですね」

背後からの声にロム爺が振り向くと、そこにはキャロルとグリムの姿があつた。

普段は温和な態度である二人は、いつもと異なり、まるで剣を突きつけているような張りつめた雰囲気を出していた。

「これはぐい挨拶じゃな。食事のマナーが気に障ったかの？」

「よくもまあ口が回るものです。相変わらずの口先で、フェルト様の信頼を勝ち取ったのですか？」

「辛辣な言われようよ。知ったような言い方をしてくれるが、お前さんと儂は面識があつたとは思えんが。いったい、何の話をしておる」

ロム爺が首をひねると、キャロルは目を細める。

二人の視線がぶつかり、自然と空気が張り詰める。

しかし、グリムがその空力に水を差す。

キャロルの肩に手を置く。

キャロルが訴えかけるような目をしたが、グリムは首を振って彼女を下がらせ、彼が代わりに前に出る。

「お前さんも、この儂に言いがかりでもつけようか？」

「……いや」

低く、しゃがれた声でグリムが言う。

ひどく聞き取りにくい声は、戦傷の傷によるもの。

口の利けない男、アストレア家の関係者——ロム爺の脳裏に古い記憶が浮かぶ。

「そうか。……お主らはそういう繋がりか」

ロム爺の納得の声に、キャロルは険しい顔つきになる。

意外とこの夫婦は、落ち着きがあるのは夫の方であつた。

「そのあたりは変わってないようじゃな」

「面識がないと、先に言ったのはそちらの方でしょうに。いったいわたしたちのことをあなたがどれだけ——」

「当時の関係者は、そのほとんどがここに入っておる」

とんとんと指で自分の頭を叩くロム爺に、キャロルは息を呑む。

「ラインハルトもおそらく儂の素性を知っておるじやろうな。……トリアスの若造め。想像した通りに嫌な家柄になりおって」

ロム爺は嘆息する。

盗品蔵が吹き飛んだあの日から、色んなことにケチがつきすぎている。

いつそ忘れられたらと思った、過去がいつぺんに押し寄せてきたようだった。

「過去は過去。そして戦争は戦争。あの結果以外に、儂から言えることは何もない」

「他でもないあなたの口から、それを聞かされて誰が納得するとしても？」

「儂はロム爺。ただの貧民街で盗品を取引し、小金を稼いでいた悪党よ。あの子を……フェルトを利用する気など毛頭ないわ」

掌に乗るほど小さな頃から、その成長を見守り続けてきた少女。

かつての憎悪も、執念も、少女と過ごす間に失われた。

「――誓えるか？」

問いは掠れた声だったが、その眼光はかつての雄姿を思わせる。剣鬼の傍らにあった、盾の戦士の姿を。

「誓えるか、じやと？ とつくのとうに、誓っておる。儂の命はあの子に救われたんじやからな」

そう言って、ロム爺は、夫婦に背を向けて廊下を歩き出す。

ロム爺が立ち去るその背を夫婦は黙って見続けていた。

ロム爺が廊下の角を曲がり、完全に姿を消す頃には、微かに開かれていた扉は閉じられていた。

時刻は夜。

夕食が済み、住人は後は寝るだけと、それぞれが自室に戻っていた。咲夜は自室で文字の勉強をしていた。

「ふう、今日はここまでにするか……。そろそろイ文字の勉強も終わりそうね」

咲夜は勉強のために開いていた本を閉じ、片づける。そして、部屋の明かりを消し、布団に入る。

今日はフェルトと一緒ではない。

フェルトは久しぶりのロム爺と会えて嬉しいのか、ずっとフェルトの部屋で二人で遅くまで会話しているらしい。

「王選か……。エミリアたちは今頃何をしているのかしらね。彼女も王選候補者としてきつと勉強しているのよね」

咲夜はロズワール邸の住人たちを思い出す。

エミリアも王選候補者だ。

この先にはフェルトの競争相手として立ちはだかる人物の一人だ。彼女には悪いが、咲夜はフェルトの味方だ。

咲夜が考えを巡らせているうちに眠気が来る。

そうして咲夜は眠りに付いた。ハズだった……。

「……くや！ さくや！」

自分呼びかける声に、咲夜はハッと意識を覚醒させる。

気が付くと咲夜は、見知らぬ場所に立っていた。

ここはどこだ……。咲夜が考えようとすると、近くから声がする。

「咲夜！ どうしたの？ 大丈夫？」

咲夜は声がる方に振り返ると、こちらを心配そうな表情で見ているエミリアの姿があった。

「……エミリア？」

「ええ。エミリアよ。どうしたの？ まだどこか体調でも悪いの？」

どうしてここにエミリアがいるのか？、そう咲夜が考えた時、咲夜はようやくこの場所がアストレア家の自室ではなく、ロズワール邸であることに気付く。

自分の服を見ると、メイド服でもなく、患者衣を着ていた。

そこでようやく咲夜は自分のいる場所を悟る。

「咲夜。体調が悪いなら、まだベッドで休んでいた方が良いわ。スバルの様子は、わたしが見に行くから」

「……ええ。悪いけど、そうしてくれる？ やっぱり、もう少し部屋で休んでいることにするわ」

「わかった。ゆっくり休んでね」

エミリアはそう言って、部屋を出て行く。

咲夜は、エミリアが部屋を出ると、ベッドに腰を掛ける。

「戻ってきてしまったのね……」

咲夜は嘆息する。

昨日、いや、直前の記憶では、自分はアストレア家の自室のベッドで眠りに付いたはず。

しかし、現在はロズワール邸にいる。

おそらく、咲夜は盗品蔵で気絶してロズワール邸に運び込まれたところなのだろう。

時間が逆行していた。

5日も時が遡ったのだ。

咲夜は時間の逆行を感じ取れなかったのは、おそらく寝ていた間だったから。

突然の覚醒状態に戻され、状況を把握するのに当初は混乱したものの、今は整理が付いていた。

咲夜はスバルの時間逆行に再び巻き込まれたのだった。

第十六話：繰り返される日常

『時間の逆行』。

かつて盗品蔵で起きた事件を解決するまで幾度も繰り返されたスバルの死に戻り。

咲夜が時間の戻りに気付かなかったのは、咲夜が眠りについていながらそれが行われたから。

そして、この時間からスタートしたのはこのタイミングでスバルが目覚めたから。

状況から推測できるのはここまでだった。

盗品蔵の事件前まで戻らなかったのかは謎であるが、そこまで時間が戻らなかったのは助かった。

そう思い、あのエルザとの戦いの努力が徒労にならずに済んだことにホッとしてしまう咲夜。

それにしても、事件の解決とともにもう起きることはないと思っていた時間逆行。

まさか僅か5日目にして再発するとは……。

咲夜がそう思うのも無理は無かった。思わずスバルへの不満の思いを抱きそうになるも、今一番考えるべきことは他にあるため思考を切り替える。

時間の逆行——つまりその状況が示す意味は、スバルが死んだという事。

スバルが死ぬことによつて魔女によつて発動する能力、時間逆行の力。

現状、咲夜一人で考えて分かることはそれだけ。

咲夜にはスバルの死因が何かは分からないし、どうしてこの時間に戻ったのかさえ分からない。

いずれにしても、あの男——スバルの死にやすきは異常だ。

まるで誰かがそう仕組んでいるのかと疑いたくなってくるほどに。

「とりあえず、スバルの様子を見に行こうかしら」

これ以上は考えてもしょうがない、そう判断したところで、扉を

ノックする音が聞こえる。

扉を開けると廊下にはレムが待っていた。

彼女は一礼すると「わたくしはロズワール邸に仕えるレムと申します」と挨拶してくる。

前回の時間軸とは行動が異なるレムに疑念を抱く咲夜だが、彼女から告げられた言葉によつて、その理由は明かされることになる。

「わたしはエミリア様からお客様を診て欲しいとお願いされました。多少の治療術の心得がありますので、もし良ければ診ますが？」

「……お気遣い、ありがとうございます。でももう大丈夫。知らない場所にいたものだから少し混乱してしまっただけよ」

「……分かりました。もし、何かご入用であればレムに申し付けてください」

「そうね……、今からスバル、もう一人運ばれた男の様子を見に行こうと思ってるんだけど、この隣の部屋にいるのよね？」

咲夜は前回通りスバルが隣の部屋に居ることをレムに確認するが、彼女は少し申し訳なさそうな表情をする。

「申し訳ありません。お連れのお客様は目覚めると部屋を飛び出してしまいました……。現在、同じくこの屋敷のメイドであるわたくしの姉とエミリア様が搜索しています。」

「飛び出した……」

「はい。ただ、お連れの方はすぐに見つかると思いますので、どうかそれまではお客様はお部屋でお待ちになってください」

スバルが部屋を飛び出した。

何故飛び出したのか、レムに確認するが彼女も原因は良く分からないらしい。

恐らく、死に戻りした影響だろう。

咲夜が取り乱したようにスバルも何か思うところがあったに違いない。何せ死んだのだから。

それはスバルと同じく何度も時間逆行し、彼の死を見た咲夜だけが予想出来ること。

詳細については分からないが、スバルを探す必要がある。

「スバルの状況は分かった。わたしもスバルを探すわ」

「いえ、お客様にご迷惑をおかけするわけにはいきません。お客様はお部屋で休んでいてください。それに、病み上がりに無理をしては、体調に障ります」

「手は多い方が良いでしょう？ それにわたしも屋敷の外に出て、少し外の空気を吸いたい。事のついでだから気にしなくてもいいわ」
「そこまで、おっしゃるのならば……。ですが、あまり無理をなさらないで下さい」

「ええ。肝に銘じておくわ」

屋敷の庭への出方を教わり、レムと別れた咲夜は部屋に戻り着替えた後、ロズワール邸の表にある庭に出る。

すると、そこでスバルはあつさりと見つかった。

庭には心配そうにスバルを見ているエミリアと、眠たげなような表情で彼女の肩に乗るパツクの姿もあった。

スバルはそこでエミリアに笑顔で話しかけていた。

なんだ。元気そうじゃない……。

想像以上に簡単に見つかり、元気そうな姿をするスバルを見て拍子抜けする咲夜。

「部屋を飛び出したと聞いて心配して探してみたけど……そんな心配は杞憂だったようね」

「あ！ 咲夜はもう大丈夫なの？ まだしっかりと休んでいた方が……」

声をかけた咲夜にエミリアとスバルが気付き、エミリアは咲夜の傍に心配そうな表情をして駆け寄ってくる。

「心配かけて悪かったわね、エミリア。もう大丈夫だから」

「そう？ なら良かった。あまり無理をしちゃだめなんだからね」

「……何か、あったのか？」

本当に問題なさそうだと、先ほどの調子の悪そうな咲夜と違う姿を見て安堵するエミリア。しかし、スバルは少し穏やかでない会話に怪訝そうな表情をして聞いてくる。

「いえ、大した事でないから気にしないで。それより、貴方部屋を飛び

出したんだって?」

「っう……」

痛いところを突かれたというような表情をするスバル。

「体調はもう大丈夫なの?」

「……………」

「どういたのよ?」

「いや、咲夜さんから心配されるとは思わなくて……。てっきりまたそれでイジられるかと」

「……スバルはわたしのことをどう思っているのかしらね?」

「い、いやあ……はは」

スバルは頭に手をあて、困った表情をして苦笑いして誤魔化す。

そんなスバルに咲夜は呆れる。

「元氣そうで良かったわ。殺されたと思って気が動転でもしてたのかしら?」

「……い、いや、実はそうなんだよ。平和にぐーたらな生活を送ってきた俺にはなかなかヘビーな体験だったぜ」

咲夜の言葉にスバルはやや動揺しながらも肯定する。

「え!? そうなの、スバル!? ここなら怖がらなくても大丈夫だから。今はパックもいるし、悪い人が来たらわたしが守ってあげる」

「その言葉は嬉しいけど、女の子に守られるのは素直に喜べない複雑な男心……」

「素直に守ってもらったら?」

「い、いや俺にも男としてのプライドが……」

「そう。なら良いけどね」

一応、死に戻りしたスバルへの咲夜なりの気遣いだったが、スバルなりに矜持もあったようだ。

仮にも虚勢を張れるなら大丈夫だろう。咲夜はスバルの態度からそう判断した。

そこからは、前回と同じ時間の流れを踏襲するかのようには話が進む。

パックをお願いごととしてスバルはモフリ権を貰い、咲夜はロズ

ワールへの咲夜の要望への口浴えをしてもらおうよう約束する。そして、会話が終わる頃にロズワールが到着し、食堂で食事が。食事が終われば、盗品蔵での事件の件の概要を説明され、その事件の功労者の褒美としてスバルが雇ってくれるようお願いし、聞き届けられる。

ここまで、同じようにやり取りが進んだのは、咲夜があまり前回とかけ離れた行動をとらないように心がけたこともあるが、スバルもそれに合わせるように前回の時間軸と同じような行動をとったからだ。

通常、前回と同じ失敗をしないようにするなら、同じ行動は取らないはず。そう考えていた咲夜からすれば、スバルの行動は理解出来なかった。しかし、敢えての行動を取るなら何か理由があるはず。一先ず、咲夜はそう納得し、スバルの思惑に便乗させてもらうことにしたのだった。

そして、スバルの望みを聞いたロズワールから前回と同じように咲夜に対しても要望はないか聞いてきた。

咲夜はそれに対し、前回と同じ3つの願いを告げる。

つまり、それはお金と王都までの竜車とアストレア家訪問への橋渡しであった。

スバルによって死に戻りして時間が戻ってしまった。

勿論、スバルと協力して原因の解明と解決に協力することも考えた。

しかし、咲夜にとって最大の目的は幻想郷へ帰ること。周り道をするつもりもない。

それにわざわざ自分から死の危険があるかもしれないことに首を突っ込むつもりもない。

スバルも馬鹿ではないはず。流石にエルザみたいに理不尽な状況でなければ、そうそう同じ失敗もしない

はず。咲夜はそれなりにスバルのことを評価していたのだ。

だからスバルに対して何か干渉を行うことをしない。咲夜はそう決めていた。

これでいいはず。咲夜は要望を告げた時にスバルが一瞬、見せた寂しそうな表情が頭によぎったが、気のせいだと自分に言い聞かせる。

そして、前と同じように咲夜の3つの願いでひと悶着あり、前回と同じやり方で無事解決する。

その後、その日は屋敷に泊まり翌日は竜車に乗ってアストレア家まで移動。

ラインハルトが出迎えがあり、夕食の時間まで言葉の勉強。

夕食の時間になり食堂でフェルトを含めたアストレア家のメンバーに会う。

ここまでは、前回と一緒。

しかし、それ以降は咲夜は前回と同じ行動を取るつもりは無かった。

「さて、食事も済んだことだし早速本題に入ろうか。咲夜が我がアストレア家へ訪問した理由について聞かせて欲しい」

「わたしが王都での仕事を見つけるまでの宿の提供と、仕事の斡旋をお願いしたいわ」

「宿と仕事の斡旋」

「そう。少しの間、王都で用事があつてね。それを解決するまで暫く時間がかかりそうだから、この王都に滞在したいの。でもお金もそんなに持つていないから……」

「なるほど。それで仕事を」

「ええ」

「なら、いい仕事先があるんだけど——」

「ごめんなさい。実は働き先も希望があるの」

「希望を聞いても？ 咲夜にはフェルト様を助けて貰った恩があるからね。僕の方でも何か力になれば協力するよ」

「ありがとう。わたしの仕事の希望先は、クルシユ・カルステン。カルステン公爵の屋敷よ」

咲夜は前回に関わったこのアストレア家でフェルトたちを見ている間に、改めて主と従者の関係について考えさせられることがあった。

王選には主とその一番の従者として騎士が付き、競っていくことになる。

ならば、王選候補者はみな、従者の存在がある。
となれば、他の候補者たちにも彼らなりの主従の関係があるはず。

咲夜は他の候補者たちに興味が沸いたのだった。正確には主従の
在り方について。

アストレア家では咲夜の考える主従関係とは異なる姿を見た。

今回はフェルトには悪いが、他の候補者と関わっておきたかった。

それにどの候補者の近くにしよう、この王都にいれればいいのだ
から……。

第十七話：カルステン公爵

「ようこそ、ようこそお越しくできました。貴方が十六夜　咲夜様ですね？」

そう問いかけた、咲夜の前にいる人物は、頭が白髪で覆われている一人の老人だった。

しかし、高齢に見える彼は、その見た目の年齢に似合わず、背筋は真っ直ぐに伸びていて、体付きはがっしりとしており、かなり鍛えあげられた肉体をしているのであろうことが容易に窺えた。

その彼から醸し出されている雰囲気はなかなかに迫力があり、現役の頃は相当の歴戦の戦士、いや、今でも現役ではないかと思わせるほどだった。

「はい。本日は、突然の訪問を了承していただきありがとうございます」

「いえ、我が主、クルシユ様も貴方には興味がおありの様でした。推薦した人物が、人物ですので……」

体つきの割には非常に紳士的な態度の彼ではあるが、彼の主は咲夜に興味を持っていることを告げる割には、その理由に彼なりに何か思っているのか、少し含みを持った言い方をし、目を僅かに伏せる。

「アストレア家もそうでしたが、このカルステン公爵様の屋敷も立派な建物ですね」

咲夜は空気を読んで、話題を目の前にある屋敷に変える。カルステン公爵本人ではないとはいえ、お客の出迎えを任される立場の人物に對して心証を良くしておいても損はないだろう、そう思惑あったの行動だったが。老人も咲夜の意を汲んだのだろう、咲夜に少し視線で礼をすると、咲夜の振った話題に合わせて返事を返す。

「その回答は、屋敷に入つてクルシユ様のお部屋に行く途中にでも……。中にどうぞ。クルシユ様もお待ちしております」

老人は咲夜を屋敷に入れ、カルステン公爵がいると思われる部屋まで先導して歩き始める。咲夜は彼の後ろを付いていく。老人は視線を少し後ろに向け、咲夜が後ろについてくるのを確認すると、「先ほど

のお話ですが……」、と前置きし、

「クルシユ様は、若い年齢ながらも公爵の当主の座を継ぎ、賢人会でも中心になるほどの傑物な方です。ここは本邸ではないとはいえ、責任のある立場は、それなりの責任に見合う屋敷を持つものですから」「ええ、おっしゃる通りですね。貴族にとつて屋敷とは権威を表すものの一つですから……。同じ国に住むものに対してだけでなく、他国に対しても。カルステン公爵様ほどの立場になれば、国外の代表の方にもお会いすることになるでしょうし」

老人は咲夜が貴族の屋敷の意味について、少なからず理解があることに少し目を大きくして驚く。そしてふと、笑みを見せる。

「そこまで理解していらつしやるとは……。わたしが貴方と同じくらい若い頃と違って、咲夜様は優秀なのですね」

「いえいえ、わたしなんてまだまだ若輩者です。この屋敷に来たのも勉強のつもりでもありますから……」

「貴方のような若く優秀な方がいると、この老骨にとつては先行きの明るい未来に希望が持てますな。……つと、着きましたね。この部屋にクルシユ様がいらつしやいます」

ヴィルヘルムが一つの部屋の扉の前で足を止め、咲夜も止まる。

案内された部屋は意外と近かった。おそらく客を迎える部屋なので、そこまで奥の部屋に位置していないのだろう。

「ありがとうございます。失礼ですが、貴方のお名前を窺っても？」

「これは失礼。まだ名乗ってはいませんでした。この老骨、名乗るほどのものではありませんが……ヴィルヘルム・トリアスと申します。ヴィルヘルムと、そう呼びください」

「分かりました。ヴィルヘルム様、ここまでの案内ありがとうございます」

「いえいえ、これが仕事ですので。では、お部屋に入りますね」

ヴィルヘルムは、そう言うと、扉に向き直り、ノックをして中から返事が返ってくるのを待つ。すると、中から要件を聞く女性の声でし、ヴィルヘルムが返事をする。そして、中に入るように言われ、ヴィルヘルムが扉を開ける……。

さて、いよいよご対面ね。今まで会った二人の女王様候補は、少々突飛な人物だったけど、今度のは本物の貴族。ヴィルヘルムほどの人物を従えるほどの人物に、咲夜は少し期待に胸を膨らませる。

——何故、咲夜がカルステン公爵の屋敷に来ることになったのか、その経緯を語るには、咲夜がラインハルトに対して、屋敷に来た要件を告げたところまで時を遡ることになる。

咲夜がラインハルトに要望として求めたことは、カルステン公爵で働きたいので、その伝手になってほしいことだった。それを聞いたラインハルトは、少々驚いた顔をしたが、その後二つ返事で了承。すぐに使いを出してくれたのだった。そして、カルステン侯爵から返事が返ってきたのは次の日の午前中。返事は、午後に咲夜に会う時間を作ってくれるとのこと。あまりにも上手く行き過ぎと咲夜でも思ってしまったが、やはり事はそう簡単にはいかなかった。

正式に雇うかどうか、面接を合格し、さらにある程度の試用期間を持つて判断することにする。

そう、返事が返ってきたのだ。しかし、ラインハルトというコネを使ったとはいえ、正直、貴族の中でも位の高い公爵家で働くチャンスがあるだけでも僥倖というもの。それでもチャンスを貰えたのは、アストレア家、そして剣聖であるラインハルトのお願いだから、というのが大きいだろう。咲夜は、メイドとして仕事に対して自信があったため、むしろ望むところと気合が入った。

面会の日付は、咲夜がアストレア家に来た翌日の午後。思った以上に急な話だが、カルステン公爵の都合もあるのだろうが、ラインハルトの計らいも有った結果だろう。

咲夜はまだこの時点では正式にカルステン家に雇われたわけではないので、正式に雇われることが決まるまでは、アストレア家にくれても構わないとラインハルトに言われる。行く当ても無かった咲夜はラインハルトの申し出をありがたく思い、好意に甘えさせて貰

い、咲夜はアストレア家で前回と同じ部屋の自室が与えられていた。

——そんなわけで、咲夜はカルステン公爵家に来ることとなったのだった。そして、今まさにその公爵と会うこととなるのだった。

ヴィルヘルムが扉を開けると、そこは客を出迎える部屋なのか、真ん中に立派なテーブルが一つ。そのテーブルの横に、向かい合うように対称的にソファアーツが一つずつ置いてあった。

部屋の中には二人の女性がいた。向かって右側のソファアーツに座っている男装のような服を着た女性とその傍に仕えているように立っている可愛らしい服装をした女性がいた。

ソファアーツに座っていた人物が、咲夜が入ってきたことを確認するとソファアーツから立ち上がってこちらに向き直り、

「貴殿が十六夜 咲夜殿だな？ わたしの名はクルシユ・カルステン。急な話で申し訳ないが、わたしも忙しい身。時間が空いているのがこの時間しかなくてな。悪く思わないでくれ」

「はい。わたしが十六夜咲夜です。今回のお話は完全にわたしの都合の話。むしろ貴重なお時間をわざわざ割いて頂き感謝しています」

クルシユ・カルステン公爵は、先ほどヴィルヘルムの言っていた通り、若い女性だった。年齢は咲夜と変わらないくらいで、少し年上といったところだろうか。女性の身で有りながら、服装は男装のようなものを着ており、口調も男らしい。

「では、そちらのソファアーツに座ってくれ」

クルシユは、自分の座るソファアーツと対面にあるソファアーツを指して、咲夜に座るよう言う。咲夜はその言葉に素直に従い、ソファアーツに座り、一緒に部屋に入ったヴィルヘルムは、クルシユの側のソファアーツの後ろに立って控える。

「さて、まずは私の従者についてフェリスを紹介しようか……。後ろにいるのは、フェリックス・アーガイルだ。こう見えても王国の騎士団に仕えるものだ」

「フェリックス・アーガイルだよ。フェリスって呼んでね。よろしく

ねん」

クルシユに紹介されたのは、クルシユの後ろに控えていた女性だった。彼女は咲夜を興味深そうな視線で見ながら、こちらにウインクして挨拶してくる。第一印象としては、華奢な体付きで可愛い服を着飾った彼女はとても騎士団に仕えるものとは見えなかった。彼女の細腕で、果たしてクルシユを守れるのだろうか。クルシユの方がよっぽど武人のように見える。咲夜がそう考えていたことが想像できたのか、クルシユが彼女について補足する。

「フェリスは、武人としてではなく、治癒術の腕を買われて騎士団に所属している。その腕は青の称号を認められるほどだ」

「それは、……すごいですね」

『青の称号持ち』。その言葉を聞いて、アストレア家にいたときにラインハルトに教えられたことを思い出す。ラインハルトは、青の称号持ちが騎士団にいると言っていたのを。

前知識があったため、咲夜にも彼女の凄さが少しは想像できた。少なくともこの王国には、二人としないほどの腕の持ち主なのだろう。

ルグニカ王国に二人しかいない色の称号持ちに、こんな短期間で二人とも会えるとは。果たして幸運なのか、そうでないのか、悩むところね。

「っと、話が逸れてしまったな。早速本題に入ろうか。本日こちらにご足労頂いた理由については既に、こちらに通達済みではあるが、今一度確認しておこうか」

「はい」

クルシユは、話の内容が逸れていることに気づき、コホンと咳払いを一つして、軌道修正する。そして姿勢を改めて正し、先ほどの柔らかな視線で見てきた表情を引き締め、こちらを真剣な瞳で見つめてくる。それに対して、自然と咲夜も意識を切り替え、こちらも真剣になる。

「そちらからの信書には貴殿がこの屋敷で働きたがっていることは、剣聖殿からの親書に書いてあった。それに対して、申し訳ないのだ

が、すぐに貴方を雇入れることを了承するわけにはいかない」

「誤解してほしくないのだが、こちらでも貴方を雇いたくない、と言っているのではない。剣聖殿が推薦するほどの人物だ。きつと優秀なのだろう。だが、こちらとしても貴殿が信用に値する人物で、さらに言えば、雇入れるほどに値する人物か、見定めなければ答えは出せない。……理解頂けるか？」

「ええ、勿論です。剣聖様にとっては知り合いでも、そちらとわたしは赤の他人。知らない人物のことであれば、すぐに判断できないのは当然です」

「理解を頂けてありがたい。そこで本日はその見定めとして、面接を行いたい。まずは、我が屋敷で働きたい理由を聞かせていただきたい」

「わたしが、この屋敷で働きたいと思った理由は――」

いよいよ、始まった面接。

咲夜は問われた事にどう答えるべきか、一度、瞳を閉じて思考を整理する。

そして、目を開き、相手を見つめ、口を開いてその思いを告げるのだった。